

奈良県 御所市

巨勢山古墳群 Ⅲ

平成14年（2002年）3月

御所市教育委員会

奈良県 ごぜん 御所市
巨勢山古墳群 III

平成14年（2002年）3月

御所市教育委員会

例　　言

1. 本書は、御所建設株式会社ならびに御所興産株式会社の委託を受け、御所市教育委員会が実施した、巨勢山古墳群の発掘調査報告書である。両社を原因者とする土砂採取に伴う調査は、平成2年（1990年）度から断続的に行っており現在もなお継続中である。
2. この間、御所建設株式会社 代表取締役 西本登美雄氏をはじめ、両社の関係各位には全面的な御理解・御協力をいただいた。記して深謝します。
3. 本書収録分の調査場所、期間、参加者は次の通りである。これらについてはいずれも御所市教育委員会技術職員 篠田和尊が調査を担当し、工程の必要に応じて、木許守（御所市教育委員会技術職員）の参加協力を得た（以下、所属は特に断らない限り当時）。

・室宇西垣内地区（C地区）

平成2年（1990年）4月19日～4月28日

＜巨勢山449号墳＞

尼子奈美枝（嘱託、現・元興寺文化財研究所）、平尾今日子、畠中紀吏子、桜田善太、作業員 地元有志12名

・西寺田字血取および城谷地区（B地区）

平成7年（1995年）12月5日～平成8年（1996年）1月31日

＜巨勢山373、374号墳＞

小野秀平（現・香川県教育委員会）、太田宏明（現・河内長野市教育委員会）、鬼頭彰、渋谷綾子、藤川聰、湊健（関西大学）、作業員 株式会社青葉建設

・西寺田字血取、境谷および測ヶ谷地区（A地区）

第1次調査 平成8年（1996年）4月24日～9月5日

＜巨勢山414～419号墳、770号墳＞

松下修（調査員）、太田宏明、鬼頭彰、赤塚亨、阿部泰之（現・福岡市教育委員会）、荒木幸治（現・赤穂市教育委員会）、渋谷綾子、谷村卓哉、初田弥生、藤川聰、湊健、山本かおり、五十嵐進、小松塙、立見淳哉、田邊直美、中里伸明、布谷依子、東原純平、正岡大実、吉村麻衣（関西大学）、浦南辰浩（龍谷大学）、

作業員 地元有志7名および安西工業株式会社

第2次調査 平成8年（1996年）11月25日～平成9年（1997年）3月31日

＜巨勢山420、421、771号墳＞

松下修（調査員）、太田宏明、海邊博史（現・普通寺市教育委員会）、鬼頭彰、荒木幸治、初田弥生、五十嵐進、湊健、立見淳哉、布谷依子（関西大学）、大谷文子（天理大学）、相見梓（現・樅原考古学研究所嘱託）、風間厚徳、河口拓也（奈良大学）、作業員 安西工業株式会社

・西寺田字境谷地区（D地区）

平成11年（1999年）8月23日～10月13日

＜巨勢山428、429、430地点＞

相見梓・阪本普通（奈良大学）、日置智・巽陽介・東野茂樹・中野咲（関西大学）、廣瀬一郎（龍谷大学）、作業員 安西工業株式会社、地元有志2名

4. 遺物整理・報告書作成には藤田のほか、藤村藤子、尾上昌子、桜原静代、藤井静代、松下修、鬼頭彰、布谷依子、相見梓、阪本普通と、川口菜穂子（関西大学）、廣瀬一郎があたった。
5. 本書の執筆分担は、第1章第1節・第2節および第2章第15節を布谷依子が、第2章第16節を相見梓が、その他を藤田が担当し、編集は藤田が行った。
6. 製図は上器を藤村藤子が、その他は各執筆者が担当し、また造構の撮影は藤田が、遺物の撮影は相見梓、川口菜穂子と藤田が行った。
7. 文中の遺物番号は挿図、図版中の番号とも統一した。出土遺物のうち、土器・埴輪については観察表を用意した。挿図における出土遺物実測図の縮尺は、土器・埴輪については1/4、鉄製品については1/3または1/2に統一した。
8. 参照・引用文献については、「第1章第2節 歴史的環境」についてのみ節末に掲げ、他は刊末に一括した。
9. 占墳の墳丘土層図においては、太線以下は墳丘の残存部分を示し、地山やその他必要な情報はスクリーントーンにより表現した。
10. 古墳の墳丘上層断面図等においては、原則として土層名の表記を割愛した。本としての体裁上、墳丘上層図を分割することなく完結させるか、忠実に上層註記を示すかの選択に迫られ、前者を優先することを試みたからである。大半の層は地山に起源を持つ花崗岩バイラン上で、いずれも黄褐色ないし灰褐色を呈する砂質土である。その分層は微妙で、根柢となる註記情報の全てを掲載することは現実として不可能という事情もある。次善の策として、重要と判断した部分については挿図中のアミや本文中にできる限り表現し、記すことを心掛けたが、それ以上の情報が必要な場合には原図の写しを提供するので、問い合わせに応じることによって対処したい。
11. 調査ならびに本書作成にあたっては、下記の方々から貴重な御指導・御教示や多大なる御配慮・御協力を賜りました。記して深謝します（五十音順、敬称略）。特に鉄淬については北野重・真鍋成史両氏によるところが大きく、真鍋氏の観察表をほぼそのまま記させていただきました。
- 網干善教、尼子奈美枝、石野博信、横田隆司、上田睦、奥田尚、亀田修一、河瀬政利、北野重、北野隆亮、合田茂伸、田中一廣、西川卓志、永井正浩、服部聰志、上生田純之、古川久雄、松尾充晶、真鍋成史、森岡秀人、米田文孝、渡辺邦雄
12. 考察として上田睦、松尾充晶の両氏から玉稿をいただきました。記して感謝します。

本文目次

例言

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 巨勢山古墳群の既往の調査と現状	5

第2章 A地区（西寺田字血取、境谷および測ヶ谷地区）

巨勢山414～421号墳、770・771号墳の調査

第1節 位置と調査方法	17
第2節 巨勢山414号墳	
1. 位置と遺構	18
2. 出土遺物	21
第3節 巨勢山415号墳	
1. 位置と墳丘	25
2. 墳丘下の墓道・柱穴・土坑とその遺物	26
3. 主体部	31
4. 石室攤乱土の出土遺物	32
第4節 巨勢山770号墳	
1. 位置と墳丘	39
2. 出土遺物	39
第5節 墓道1	43
第6節 巨勢山416号墳	45
第7節 巨勢山417号墳	47
第8節 巨勢山418号墳	
1. 位置と墳丘	50
2. 主体部	55
3. 出土遺物	56
第9節 巨勢山419号墳	
1. 位置と墳丘	59
2. 主体部	61

3.	出土遺物	61
4.	築造時期	67
第10節	巨勢山420号墳	
1.	位置と墳丘、および墓道2	68
2.	主体部	74
3.	出土遺物	74
第11節	墓道3、墓道4	80
第12節	巨勢山421号墳	
1.	位置と墳丘	82
2.	主体部	85
3.	遺物の出土状態	86
4.	追葬面の出土遺物	89
5.	初葬面の出土遺物	96
6.	初葬面と追葬面被葬者の関係	97
第13節	巨勢山771号墳	
1.	位置と墳丘	98
2.	出土遺物	103
第14節	弥生時代の遺構と遺物	103
第15節	歴史時代の土坑	107
第16節	炭焼窯	
1.	炭焼窯A	120
2.	炭焼窯B	122

第3章 B地区（西寺田字血取および城谷地区）

巨勢山373・374号墳の調査

第1節	位置と調査方法	125
第2節	巨勢山374号墳	
1.	位置と墳丘	126
2.	主体部	131
3.	出土遺物	131
第3節	巨勢山373号墳	136

第4章 C地区（室字西垣内地区）

巨勢山449号墳の調査

第1節 位置と調査方法	139
第2節 巨勢山449号墳	
1. 墳丘	139
2. 主体部	141
3. 出土遺物	144

第5章 D地区（西寺田字境谷地区）

巨勢山428・429・430地点の調査

第1節 位置と調査方法	147
第2節 428地点 近世墓	147
第3節 429地点 炭焼窯	148
第4節 北地区（430地点含む） 集落跡	150

第6章 古墳時代の遺構・遺物に関するまとめ

第7章 考 察

上 田 雄	巨勢山419号墳の埴輪の特徴とその位置付け	209
松 尾 光 晶	巨勢山421号墳出土の杏葉について	221

挿図目次

図1	巨勢山古墳群(25)と周辺の遺跡	11・12
図2	巨勢山古墳群 調査位置図	13・14
図3	△地区(西寺田字取境谷および測ヶ谷地区)	15・16
図4	巨勢山414・415号墳 墳丘測量図	18
図5	巨勢山414号墳 土層断面図	19・20
図6	巨勢山414号墳 出土遺物	21
図7	巨勢山414号墳 出土鉄滓	22
図8	巨勢山415号墳 土層断面図	23・24
図9	巨勢山414・415号墳 墳丘除去後遺構図 並びに 巨勢山770号墳 検出状況	26
図10	巨勢山415号墳 墳丘下墓道と周辺の遺構・遺物	27・28
図11	巨勢山415号墳 墳丘下墓道ならびに墳丘下土坑出土土器	29
図12	巨勢山415号墳 石室	33・34
図13	巨勢山415号墳 石室擾乱土出土土器 その1	35
図14	巨勢山415号墳 石室擾乱土出土土器 その2	36
図15	巨勢山415号墳 鉄製品と銀製指輪	37
図16	巨勢山415号墳 出土鉄滓	38
図17	巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物	40
図18	巨勢山416～419号墳と周辺測量図	41・42
図19	墓道1 出土遺物	43
図20	巨勢山416号墳 土層断面図	46
図21	巨勢山416号墳(右)・417号墳(左) 石室平面図	47
図22	巨勢山416号墳出土 釘	48
図23	巨勢山417号墳 土層断面図	48
図24	巨勢山417号墳 出土土器	50
図25	巨勢山418号墳 土層断面図	51・52
図26	巨勢山418号墳 石室	53・54
図27	巨勢山418号墳 出土土器	56
図28	巨勢山418号墳 出土鉄製品	56
図29	巨勢山418号墳 出土鉄滓	59
図30	巨勢山419号墳 土層断面図	57・58
図31	巨勢山419号墳 主体部	60

図32	巨勢山419号墳 剣	61
図33	巨勢山419号墳 出土埴輪 その 1	62
図34	巨勢山419号墳 出土埴輪 その 2	63
図35	巨勢山419号墳 出土埴輪 その 3	64
図36	巨勢山419号墳 出土埴輪 その 4	65
図37	巨勢山419号墳に伴ったとみられる各所出土の埴輪	66
図38	巨勢山420・421号墳と周辺測量図	69・70
図39	巨勢山420号墳 縦断面土層図	71・72
図40	巨勢山420号墳 石室	75・76
図41	巨勢山420号墳 出土土器 その 1	77
図42	巨勢山420号墳 出土土器 その 2	78
図43	巨勢山420号墳 出土鉄製品	79
図44	巨勢山420号墳 出土鉄滓	79
図45	幕道 4 出土土器	81
図46	巨勢山421号墳 上層断面図	83・84
図47	巨勢山421号墳 石室	87・88
図48	巨勢山421号墳 追葬面遺物出土状態	89
図49	巨勢山421号墳 追葬面出土土器	90
図50	巨勢山421号墳 追葬面出土鉄鎌	91
図51	巨勢山421号墳 追葬面出土馬具および鉄製品	94
図52	巨勢山421号墳 石室擾乱土中出土土器	95
図53	巨勢山421号墳 初葬面出土馬具および鉄製品	96
図54	巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その 1	99
図55	巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その 2	100
図56	弥生時代の遺構(419号墳墳丘下および周辺)	100・102
図57	ピットの詳細(一部)	104
図58	A地区出土の弥生時代の遺物	105
図59	A地区土坑 堆積状況等 その 1	108
図60	A地区土坑 堆積状況等 その 2	109
図61	土坑 1 遺物出土状態	110
図62	土坑 1 出土遺物	111
図63	土坑 3 遺物出土状態	112
図64	土坑 3 出土遺物	112

図65	土坑4 出土遺物	113
図66	土坑5 遺物出土状態	114
図67	土坑5 出土遺物	114
図68	土坑9 出土遺物	115
図69	土坑13 平面図および立面図	117
図70	土坑13 出土遺物	118
図71	土坑13 宝塔	118
図72	土坑14 出土遺物	119
図73	炭焼窯A	121
図74	炭焼窯B	123
図75	巨勢山373・374号墳 測量図	127
図76	巨勢山374号墳 土層断面図	128
図77	巨勢山374号墳 石室	129・130
図78	巨勢山374号墳 出土土器 その1	132
図79	巨勢山374号墳 出土土器 その2	133
図80	巨勢山374号墳 出土土器 その3	134
図81	巨勢山374号墳 出土宝珠脚金具	134
図82	巨勢山374号墳 出土鉢津	135
図83	巨勢山373号墳 土層断面図	137
図84	巨勢山373号墳 主体部	137
図85	巨勢山449号墳 測量図	140
図86	巨勢山449号墳 墳丘土層断面図	141
図87	巨勢山449号墳 主体部粘土層	142
図88	巨勢山449号墳 主体部粘土層土層断面図	143
図89	巨勢山449号墳 出土遺物	145
図90	宝宮山古墳と巨勢山449号墳	146
図91	428(右)～430(左)地点 測量図	148
図92	429地点 炭焼窯	149
図93	北地区遺構	150
図94	北地区遺構(部分)	151
図95	溝1・土坑1・土坑2 上層断面図	151
図96	北地区出土遺物	152
図97	北地区出土遺物	153

図 版 目 次

- 図版 1 A地区 手前から巨勢山414~419号墳（北東から）
図版 2 A地区 手前から巨勢山415~419号墳（東から）
A地区 手前から巨勢山416~419号墳（真上から）
図版 3 巨勢山414号墳 主体部（北から）
巨勢山415号墳 墳丘下の墓道・柱穴・土坑（西から）
図版 4 巨勢山415号墳 主体部（北から）
図版 5 巨勢山415号墳 主体部（北から）
巨勢山415号墳 主体部（南から）
図版 6 巨勢山415号墳 主体部石材掘え付けの状況（南から）
巨勢山770号墳に伴う415号墳の墳丘内の須恵器
図版 7 巨勢山416号墳 主体部（南から）
巨勢山416号墳 主体部（北から）
図版 8 巨勢山417号墳 主体部（南から）
巨勢山417号墳 主体部（北から）
図版 9 墓道 1 (416号墳北側から西を望む)
墓道 1 (419号墳東側から東を望む)
図版10 墓道 1 (418号墳南側から南を望む)
墓道 1 と 418号墳 (418号墳南側から北西を望む)
図版11 墓道 1 (右) と 418号墳 (左) (西から)
巨勢山418号墳 石室残存部（北から）
図版12 手前から巨勢山419・420・421号墳
図版13 巨勢山419号墳 主体部（東から）
図版14 墓道 3 (北から)
図版15 巨勢山420号墳 主体部（南から）
墓道 2 (北端から)
図版16 墓道 4 堆積状況（南から）
墓道 4 須恵器出土状態
図版17 墓道 4 (南から)
墓道 4 (北から)
図版18 巨勢山421号墳（南から）
巨勢山421号墳 主体部（南から）

- 図版19 巨勢山421号墳 主体部追葬面（南から）
巨勢山421号墳 主体部追葬面 奥壁部遺物出土状態（南から）
- 図版20 巨勢山421号墳 主体部追葬面 奥壁部遺物出土状態（一部取り上げ後）
巨勢山421号墳 主体部追葬面 杏葉出土状態（南から）
- 図版21 巨勢山421号墳 墓丘北側トレンチ（北から）
- 図版22 巨勢山421号墳 東側墓丘盛土状況（南から）
巨勢山771号墳に伴う溝4と溝5（北から）
- 図版23 巨勢山414号墳 出土遺物
墓道1 出土遺物
- 巨勢山415号墳 墓丘下墓道ならびに墳丘下土坑出土土器
- 図版25 巨勢山415号墳 出土遺物 その1
- 図版26 巨勢山415号墳 出土遺物 その2
- 図版27 巨勢山415号墳 出土遺物 その3
- 図版28 巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物 その1
- 図版29 巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物 その2
- 図版30 巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物 その3
巨勢山416号墳出土 鉄
巨勢山417号墳 出土遺物
- 図版31 巨勢山418号墳 出土遺物 その1
- 図版32 巨勢山418号墳 出土遺物 その2
- 図版33 巨勢山419号墳 出土遺物 その1
- 図版34 巨勢山419号墳 出土遺物 その2
- 図版35 巨勢山419号墳 出土遺物 その3
巨勢山419号墳に伴ったとみられる各所出土の埴輪
- 図版36 巨勢山420号墳 出土遺物 その1
- 図版37 巨勢山420号墳 出土遺物 その2
- 図版38 巨勢山420号墳 出土遺物 その3
- 図版39 墓道4 出土土器 その1
- 図版40 墓道4 出土土器 その2
- 図版41 墓道4 出土土器 その3
- 図版42 巨勢山421号墳 奥壁部出土土器 その1
- 図版43 巨勢山421号墳 奥壁部出土土器 その3
- 図版44 巨勢山421号墳 奥壁部出土土器 その2
巨勢山421号墳 追葬面出土 馬具および鉄製品

- 図版45 巨勢山421号墳 追葬面出土 馬具および鉄鏃
- 図版46 巨勢山421号墳 追葬面出土 鉄鏃および漆塗木製品
- 図版47 巨勢山421号墳 石室攢乱土中出土七器
- 図版48 巨勢山421号墳 初葬面出土 馬具・鉄製品
- 清5 出土土器
巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その1
- 図版49 巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その2
- 図版50 巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その3
- 図版51 巨勢山421号墳出土須恵器杯身の自然釉（いずれも底部から）
- 図版52 巨勢山421号墳鉄縄蓋部の「下巻き」
- 図版53 A地区東半墳丘除去後（先端は419地点）（東から）
419地点の弥生時代の遺構
- 図版54 A地区出土の弥生時代の遺物
- 図版55 土坑1（東から）
土坑2（北から）
- 図版56 土坑3（北から）
土坑4（北から）
- 図版57 土坑5（南から）
土坑6（右）十坑7（左）（南から）
- 図版58 土坑8（南から）
土坑9（南から）
- 図版59 土坑10（南から）
土坑11（東から）
- 図版60 土坑12（東から）
土坑13（北から）
- 図版61 土坑14（南から）
土坑15（西から）
- 図版62 土坑出土遺物 その1
- 図版63 土坑出土遺物 その2
- 図版64 土坑出土遺物 その3
- 図版65 土坑13出土 宮塔
- 図版66 炭焼窯A・B 全景（南から）
- 図版67 炭焼窯A 全景（南から）
炭焼窯A 煙道部（南から）

- 図版68 炭焼窯A 煙道部 粘土除去後（南から）
炭焼窯A 煙道部（上から）
- 図版69 炭焼窯B 全景（南から）
炭焼窯B 全景（北から）
- 図版70 炭焼窯B 煙道部 粘土除去後（南から）
炭焼窯B 煙道部（上から）
- 図版71 巨勢山374号墳 墓道等検出状況（東から）
巨勢山374号墳開口部と墓道（北から）
- 図版72 巨勢山374号墳（南から）
巨勢山374号墳 玄室敷石（北から）
- 図版73 巨勢山374号墳 石室残存部（東から）
巨勢山373号墳（北から）
- 図版74 巨勢山374号墳 出土上器 その1
- 図版75 巨勢山374号墳 出土土器 その2
- 図版76 巨勢山374号墳 出土上器 その3
- 図版77 巨勢山449号墳から室宮山古墳前方部を望む（西から）
巨勢山449号墳（南から）
- 図版78 巨勢山449号墳 主体部粘土梆（南から）
- 図版79 巨勢山449号墳 主体部粘土梆（南から）
巨勢山449号墳 主体部粘土梆（北から）
- 図版80 巨勢山449号墳 主体部粘土梆残存部（南から）
巨勢山449号墳 主体部粘土梆残存部（北から）
- 図版81 巨勢山449号墳 主体部粘土梆残存部（西から）
- 図版82 巨勢山449号墳 主体部粘土梆残存部（東から）
- 図版83 巨勢山449号墳 出土遺物
- 図版84 D地区航空写真（上が北）
- 図版85 428地点 炭焼窯（南東から）
煙道の状況
同 被覆土除去後
- 図版86 北地区（430地点含む）の遺構（南東から）
430地点付近の遺構
- 図版87 D地区 北地区（430地点含む）の包含層出土遺物 その1（S ≈ 1/4）
- 図版88 D地区 北地区（430地点含む）の包含層出土遺物 その2（S ≈ 1/4）
- 図版89 D地区 北地区（430地点含む）の各遺構の出土遺物（S ≈ 1/4）

本文

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

御所市は、奈良盆地の西南部に位置する。西部は金剛山・葛城山が並ぶ金剛山地を境にして、大阪府と接している。東南部には竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵が起伏し、それらの南を中央構造線が走って吉野川河谷と境している。北部は低平な奈良盆地の一部を占め、沖積地帯が葛城川・曾我川によって形づくらっている。両河川の上流部は南方に入り、前記の山地の間に渓谷をつくっている。

さて、奈良盆地と吉野川河谷の間にあたる竜門山地は主として花崗岩類より成り、東方より西方に向かうにしたがって高さを減じ幅も狭くなる。本市の東部はちょうど西端付近にあたる丘陵地帯となっている。

金剛山の東方葛城川上流の谷とさらに東側、曾我川の谷の間に巨勢山丘陵がある。曾我川の東側には高取山付近より次第に低くなった山地の端が奉膳山などで終わっている。巨勢山丘陵は西に葛城川の谷、東は曾我川の構造谷で切られてほとんど独立した丘陵となって南北約5kmに細長く伸びている。地質は領家複合岩類の角閃石黒雲母石英閃綠岩となっている。

第2節 歴史的環境

御所市における绳文時代の遺跡には、後期の櫛羅遺跡（1）、玉手遺跡（2）のほか、石器製作を行う場であったと考えられる小林遺跡（3）の存在が知られている。

弥生時代の代表的な遺跡には、鶴都波遺跡（4）がある。鶴都波遺跡は、遺構や遺物の豊富さから、弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる。このほか、前期の遺跡には下手遺跡（2）、中西遺跡（5）、銅鐸と鏡が共伴した事で著名な名柄遺跡（6）などがある。また、中期後葉の小林遺跡（3）では方形周溝墓が確認されている。後期にはいると高地性集落が出現し、巨勢山丘陵中に巨勢山境谷遺跡（7）、巨勢山中谷遺跡（8）、巨勢山八伏遺跡（9）などがあるほか、国見山遺跡（10）が知られている。

古墳時代にはいると、前期の遺跡として猪原遺跡（11）が確認されている。本遺跡では遺構として溝や土坑などが確認されている。遺物では、布留式土器の一括資料を得ている。

そして、中期前葉に室宮山古墳（12）が突如築造される。本墳は巨勢山古墳群の北に位置し、墳長238mの規模を誇る葛城地域最大の前方後円墳である。巨勢山古墳群の群形成は本墳の築造を契機に始まる。本墳では後円部主体の竪穴式石室に長持形石棺を有するほか、副葬品として鏡片、武器類、石製品、埴輪などの遺物が出土している。室宮山古墳の陪塚には、ネコ塚古墳（13）がある。同墳の築造年代は遺物からも主墳に併行すると推定される。また、室宮山古墳には併行する集落跡として中西遺跡（5）が確認されている。

次に、市域に所在する室宮山古墳に後続する盟主墳として位置づけうる古墳に、接上鍔子塚古墳(14)がある。本墳は中期中葉から後葉にかけて築造され、墳長は149mを測る。これに系譜が後続する可能性のあるものとして、新庄村の新庄屋敷山古墳(15)、北花内大塚(飯豊陵)古墳(16)、二塚古墳(17)などがあげられる。

中期中葉以降の遺跡には、広域の空間に居住・生産・祭祀の要素が散在している南郷遺跡群(18)があるほか、中期後葉から後期前葉にかけての時期には、「豪族の居館」とされる名柄遺跡(19)が営まれる。南郷遺跡や名柄遺跡は巨勢山古墳群との関係が推測されている。このほか、中期後葉の遺跡として道路構造が検出された鴨神遺跡(20)が確認されている。

次に、巨勢谷に存在する単独墳として認識する事ができるものに、水泥北古墳(21)、水泥南古墳(22)、樋野権現堂古墳(23)、新宮山古墳(巨勢山708号墳)(24)などが挙げられる。

それでは、主要な群集墳について概観してみる事にする。巨勢山丘陵に位置する巨勢山古墳群(25)は総数700基に達する我が国最大級の群集墳である。本古墳群は6世紀前葉に横穴式石室を採用している支群もあれば、6世紀後葉以降に横穴式石室を採用している支群もある。すでに拆築されているように、各支群ごと多くの集団によって形成された古墳群であると考えられる。

巨勢山古墳群は飛鳥時代に入ても古墳の築造が続き、巨勢山323号墳は埋葬施設に横口式石室を採用する。この支群の形成端緒となったと思われる古墳を破壊して築造され、前代とは異なる集団によってつくられたと考えられる。

一方、葛城山東麓地域には、5世紀から7世紀までの群集墳が集中して存在している。市内では石光山古墳群(26)、石川古墳群(27)、吐田平古墳群(28)などがあげられる。以下に概観する。

石光山古墳群は巨勢山古墳群の北、元町の西の独立丘陵に位置する。約100基で構成される。円墳を中心とするが、前方後圓墳と方墳も含む。5世紀後半から6世紀を通じて築造される。埋葬主体は木棺直葬墳を中心とするが、6世紀後半には横穴式石室を採用する。

石川古墳群は葛城山腹の尾根の稜線上に、1基の前方後圓墳を含む約70基の古墳で構成される。埋葬施設の中心は木棺直葬であるが、横穴式石室も有し、うち1基は横口式石室である。

吐田平古墳群は石川古墳群の南、叶田平と呼ばれる葛城山腹の棚状台地形から派生し、丘陵尾根上に位置する。23基の円墳から構成される。埋葬施設として横穴式石室を早くから導入したようであるが、6世紀代を通じて木棺直葬と併行採用されていたようである。

市外では新庄村城に、寺口和田古墳群(29)、火野谷山古墳群(30)、寺口忍海古墳群(31)、寺口千塚古墳群(32)、笛吹古墳群(33)、山口千塚古墳群(34)などがあげられる。以下に概観する。

寺口和田古墳群は寺口の北側の支尾根に13基で構成される。4世紀末から5世紀初頭に13号墳の築造をもって群形成を開始する。葛城山麓で最も早く築造が始められる群集墳である。埋葬施設は木棺直葬を中心とする。

また、本古墳群の東側にある新池の周囲には約10基の古墳がある。鉄留短甲などが採集されてい

る。これらは寺口千塚・新池支群、寺口新池古墳群などと呼称は様々である。

寺口千塚古墳群は新庄町寺口の北方尾根上に位置し、約170基以上で構成される。6世紀前半から築造が始まる。埋葬施設は、6世紀代を通じて竪穴系横穴式石室の築造を統一している。

火野谷山古墳群は5世紀前半に群形成が始まり、6世紀まで継続する。寺口字岩谷の尾根上に位置し、2基の前方後円墳と10基の円墳とで構成される。埋葬施設の中心は木棺直葬であるが、8号墳では小竪穴式石室を主体部とし、3号墳では木棺直葬の2棺を主体にしつつ、埴丘裾部に小竪穴式石室を有している。

寺口忍海古墳群は、寺口の南方の尾根に位置し188基以上で構成される。埋葬主体は横穴式石室を中心とするが、竪穴系横穴式石室が混在している。注目できる副葬品としては、鐵治具や鉄滓等がある。群の形成は5世紀後半から始まる。6世紀を通じて築造され、7世紀前半には終末をみる。

笛吹古墳群は笛吹神社西方の東西に延びる尾根に位置する。前方後円墳1基と約75基の円墳で構成される。6世紀に群形成の最盛期を迎える。副葬品にミニチュア炊飯具、釘子、鉄滓等がある。中心となる埋葬施設は横穴式石室である。本古墳群の盟主墳といえる古墳に笛吹神社古墳がある。本墳には6世紀前半に比定できる朝抜式家形石棺が安置されている。

山口千塚古墳群は笛吹古墳群の西方、山口集落の西に位置する。円墳を中心とする約40基で構成され、埋葬主体は横穴式石室である。6世紀中葉から群形成の最盛期を迎える。

以上概観してきた葛城地域の群集墳は、従来より（a）中心となる埋葬施設が木棺直葬で、横穴式石室導入以前のあり方を示す石光山古墳群（25）、石川古墳群（26）、寺口和田古墳群（28）、火野谷山古墳群（29）。（b）横穴式石室を中心とする群集墳の典型例を示す寺口忍海古墳群（30）、寺口千塚古墳群（31）、笛吹古墳群（32）、山口千塚古墳群（33）。（c）木棺直葬と横穴式石室を並行して採用する巨勢山古墳群（24）、吐田平古墳群（27）の3つに分類してきた。このような多様なあり方が存在する葛城地域の群集墳の分析は、当時の社会構造を研究する上で注目される。

このほか、飛鳥～奈良時代の寺院としては、御所市内では、巨勢寺跡、朝妻廃寺、高宮廃寺などが知られている。

（1999年12月記）

註1 松井尚大「葛城山麓発見の高文式土器遺跡について」『人和志』第6巻第7分、1938年

2 伊藤勇輔「御所市玉手 玉手遺跡発掘調査報告概報」『奈良県遺跡調査概報1984年度』、1985年

3 1986年 御所市教育委員会調査

4 桐原考古学研究所編「近畿古文化論功」、1962年

網干善教「鶴都波遺跡」『御所山史』、1965年

提賀仁・菅谷文則・吉村雅博・吉田一良「奈良縣御所市鶴都波遺跡出土の石戈」『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年

伊藤勇輔「鶴都波遺跡－調査概報－」1977年、御所市教育委員会

伊藤勇輔「鶴都波遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報1978年度』、1979年

豊岡卓之「御所市鶴都波遺跡第7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1988年度』、1989年

木沢守「鶴都波11次発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第11集、1992年

龍田和尊「鶴都波12次調査」『御所市文化財調査報告書』第12集、1992年

- 藤田和尊・木許守「平成3年度山内遺跡発掘調査」『御所市文化財調査報告書』第13集、1992年
- 5 寺沢薫・林部均「御所市 飛手遺跡2次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1987年度」、1988年
- 6 木許守「奈良縣御所市室 中西遺跡 - 第2次発掘調査報告-」『御所市文化財調査報告』第9集、1990年
- 7 高橋寛吉「南葛城郡名柄発掘の副操と潮流」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第6冊、1919年
- 8 前出註3
- 9 久野邦康「大和巨勢山古墳群(境谷支群) - 昭和48年度発掘調査概報-」1974年、奈良県教育委員会
- 藤田和尊「奈良県御所市室 王勢山塙谷10号墳発掘調査報告」『御所市文化財調査報告』第4集、1985年
- 10 御所市教育委員会「ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」、1989年
- 11 御所市教育委員会「ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」、1990年
- 12 陶川尚功「能活」「奈良県瓦塚山引(山古墳群)」、1980年。五條市教育委員会
- 藤田和尊「位置と環境」(前出註9文献)
- 13 藤田和尊「施振遺跡 I」「御所市文化財調査報告書」第17集、1994年
- 木許守「施振遺跡 II」「御所市文化財調査報告書」第18集、1994年
- 14 梶千吉教「室大墓」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第18冊、1959年
- 泉森峻・河上邦彦「室大墓古墳前方部張出部の調査」『大陸』No.18、1971年
- 陶川尚功「御所市室大墓古墳外堤」「奈良県遺跡調査概報1988年度」、1989年
- 木許守・藤田和尊「室宮山古墳砲頭確認調査報告」「御所市文化財調査報告書」第20集、1996年
- 藤田和尊・木許守「室宮山古墳砲頭による室宮山古墳出土遺物」「御所市文化財調査報告書」第24集、1999年
- 15 木許守「奈良県御所市室 中西遺跡 - 第2次発掘調査報告-」『御所市文化財調査報告』第9集、1990年
- 木許守「奈良県御所市室 中西遺跡 - 第3次発掘調査報告-」『御所市文化財調査報告』第10集、1991年
- 16 梶千吉教「羅子塚古墳」「御所市史」、1965年
- 梅木哲夫「御所市羅子塚 前方部埴生発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1977年度」、1978年
- 南嶺城跡の古墳文化研究会「奈良県御所市池上羅子塚古墳第2次発掘調査報告」「御所市文化財調査報告書」第14集、1992年
- 木許守「河奈良縣御所市柏原坂上羅子塚古墳第2次発掘調査報告」「御所市文化財調査報告書」第14集、1992年
- 17 菅谷文則「新井屋敷山古墳」、1975年。奈良県教育委員会
- 18 河上邦彦「新庄町鹿島隈外堤の調査」「奈良県古墳調査報告書II」「奈良県文化財調査報告書」第30集、1978年
- 土生田純之「池口丘陵外堤の調査」「吉陵郡紀賀」第32号、1980年
- 19 上田宗範・北野轉平・伊達宗宰・森森「大和二塚古墳」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第21冊、1962年
- 20 舟崎靖「南郷遺跡調査」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第69冊、1996年
- 21 藤田和尊「奈良県御所市名柄遺跡の調査」「日本考古学年報」42、1991年
- 22 近江俊秀「鴨神遺跡-2次~4次調査-」「奈良県文化財調査報告書」第66集、1993年
- 23 梶千吉教「水堀越草石塚古墳及び水堀塚穴古墳の調査」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第14冊、1961年
- 24 河上邦彦「水堀塚穴古墳」「奈良県古墳発掘調査報告書II」「奈良県文化財調査報告書」第30集、1978年
- 25 佐藤小吉「稚見堂古墳」「奈良県史跡勝跡地調査会報告書」第3回、1983年
- 26 天沼俊一「補宿の石塚及石都」「奈良県史跡勝跡地調査会報告書」第1回、1913年
- 27 梶千吉教「小藏古墳」「奈良県文化財調査報告(理蔵文化財編)」第3集、1960年
- 梶千吉教御所市小坂第2号墳」「奈良県文化財調査報告(理蔵文化財編)」第4集、1961年
- 久野邦康「大和巨勢山古墳群(境谷支群) - 昭和48年度発掘調査を観る」『大陸』1974年、奈良県教育委員会
- 千賀久・田中一広「室山古墳群(ミヤマ支群) 発掘調査概要」「奈良県遺跡調査概報1982年度」、1983年
- 田中一広「奈良県御所市室山古墳群調査概要」「奈良県遺跡調査概報1983年度」、1984年
- 田中一広「巨勢山古墳群(タケノクチ支群) 発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1983年度」、1984年
- 藤田和尊「奈良県御所市室 室山古墳谷10号墳発掘調査報告」「御所市文化財調査報告」第4集、1985年
- 藤田和尊編「室山古墳群II」「御所市文化財調査報告」第6集、1987年
- 28 白石太一郎・河上邦彦編「葛城・石光山古墳群」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第31冊、1976年
- 29 白石太一郎「御所市石川古墳群」「奈良県の主要古墳」、1974年
- 30 梶千吉教「吐田平古墳群」「奈良県文化財調査報告」第4集、1961年
- 31 伊藤勇輔「寺口和田古墳群発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1979年度」、1980年
- 伊藤勇輔「寺口和田古墳群第2次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1980年度」、1981年
- 32 京森校「新庄町寺口古塚・新施文庫発掘調査報告」「奈良県遺跡調査概報1981年度」、1983年

- 33 関川尚功・生田維道・松田真一『新庄火野谷山古墳群』『奈良県文化財調査報告』第31集、1979年
- 34 収録編『寺口千塚古墳群』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第62冊、1991年
- 35 泉森峻『新庄町史 考古篇』、1984年
- 千賀久編『寺口忍海古墳群』『新庄町埋蔵文化財調査報告』第1集、1988年
- 36 坪井良平『大和開拓吹付社の古墳』『考古学雑誌』第3巻第7号、1921年
- 泉森峻・菅谷文輔『大和葛城の笛吹・山口古墳群の分布』『古代学研究』60、1971年
- 泉森峻『新庄町史 考古篇』、1984年
- 白石太一郎『新庄町笛吹古墳群』『奈良県の主要古墳Ⅱ』、1974年
- 河七邦彦・橋本哲大『新庄町笛吹古墳群試掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年
- 37 萩原貞吉『大和高城郡山口の千塚』『歴史地理』第19巻第3号、1912年
- 泉森峻・菅谷文輔『大和葛城の笛吹・山口古墳群の分布』『古代学研究』60、1971年
- 白石太一郎『新庄町山口千塚古墳群』『奈良県の主要古墳Ⅱ』、1974年

第3節 巨勢山古墳群の既往の調査と現状

巨勢山丘陵は、北は盆地平野部に面し、東は曾我川の構造谷と人口幹で、西は葛城川の谷で、また、南は朝町川その他の小河川による氾濫原により画され、ほぼ独立丘陵状を呈している。

巨勢山古墳群の範囲は、従来、この丘陵のうち特に古墳分布の著しい西北部に限って言われることもあったが、集中度は減じながらも、東または南に連続と続く古墳の分布は現状では限り難い。やはり地形上のまとまりと古墳分布状況を勘案して、現在のところは、巨勢山丘陵と、南西部の古墳が分布する別の丘陵を加えた、東西3.3km、南北3.5kmの図1に示した部分をもって、巨勢山古墳群の範囲とみなす（『巨勢山古墳群Ⅰ』藤田編1987）べきだと考える。

この場合、稻宿所在の新宮山古墳やヒガンド古墳も巨勢山古墳群に含まれることになり、これらを巨勢谷の背長墓系列を構成する古墳であることを強調する立場（筆者も基本的にはそれで良いと考えているが）からの抵抗も予想されるが、古墳群の分布状況と評価とは別のものであるとの立場を堅持し、必要があればこれをいくつかの大別グループに分けることにより対処したいと思う。ただ、無用の混乱を避けるために、それぞれ巨勢山707号墳（ヒガンド古墳）、巨勢山708号墳（新宮山古墳）などと併記する。

また、古墳の名称については、かつては、支群構成を配慮して、小字名などから巨勢山古墳群ミノヤマ支群第1号墳（例えば千賀・田中1983）、巨勢山境谷10号墳（藤田1985）あるいは巨勢山古墳群4支群第16号墳（巨勢山4-16号墳）（田中1984a・b）などと称されたこともある。

しかしながら前報告（藤田編1987）で述べた通り、古墳を乗せる尾根は各所で手の指状に分岐し、主尾根のグループに所属させるのか、分岐した支尾根のグループに所属させるのか、の判断に迷うものも少なくない。

そのため、全面的な発掘調査を経ていない現状では支群への分離は極めて困難なので、筆者らは同書以来、通し番号をもって呼び、巨勢山323号墳などと称している。なお、旧米の名称がある場合には混乱が生じる虞があるので、巨勢山41号墳（ミノヤマ1号墳）などとし、旧米の名称や通称を（ ）に入れて併記することにしたのは、巨勢谷の古墳などと同様である。なお、こうした方式

は、新改定の『奈良県遺跡地図』(奈良県教育委員会1998)でも記載された。

さて、巨勢山古墳群中の個々の古墳の名称となる、その通し番号は、巨勢山古墳群の詳細な分布調査報告書(田中1984b)の「表2 御所市巨勢山古墳群一覧」の左端に添えられたものを基準とし、混乱が生じない程度の改変を加えている場合がある(藤田編1987等)。新規検出墳には新たな番号を付けており、現在のところ、本書所収の770号墳および771号墳が最終の古墳番号となっている。

発掘調査による新規検出墳は巨勢山古墳群中、西半部とおそらく北半部に集中する傾向がある。「巨勢山古墳群II」(藤田編1987)段階での最終古墳番号は764号墳(同書別添図1による)で、その後の増加分7基の内訳は、a. ドットを落とされていながら番号のなかった2基(奈良県教委1998で修正)、b. 発掘調査による新規検出墳で、現地説明会資料(御所市教委1987、1989)記載の2基(767・768号墳)、c. 後期古墳の築造により破壊された、墳丘下から検出の中古墳3基(藤田1987の1基=323号墳下層検出墳を769号墳と新規命名、に加え、本書所収の2基=770・771号墳)となっている。

古墳名	通称	墳形	墳長	内部主体	主な出土遺物	文献等(含略報)
21号墳		円墳	18m	木棺直葬	鉄刀、精尾矢頭、銅鏡、須恵器	御所市教委1990
22号墳		円墳	15m	横穴式石室	銅鏡指輪、耳環、銅鏡、銅鏡	御所市教委1990
29号墳		円墳	9~14m	木棺直葬		御所山教委1990
30号墳		円墳	13~16m	木棺直葬	銅鏡、須恵器	御所市教委1990
31号墳		円墳	9 m	木棺直葬	須恵器、土師器	御所市教委1990
32号墳				木棺直葬	銅鏡、ガラス玉	御所市教委1990
41号墳	ニノヤマ1号墳	円墳	8~11m	木棺直葬	刀子	千賀・田中1983
42号墳	ニノヤマ2号墳	円墳	8~15m	木棺直葬	歩道付金具、馬具、須恵器	千賀・田中1983
43号墳	ニノヤマ3号墳	円墳	7~8 m	木棺直葬	銅鏡、須恵器、土師器	千賀・田中1983
44号墳	ニノヤマ4号墳	円墳	10~16m	木棺直葬	須恵器、管	千賀・田中1983
45号墳	ニノヤマ5号墳	円墳	10m	横穴式石室		千賀・田中1983
47号墳	ニノヤマ7号墳	円墳	15m			千賀・田中1983
48号墳	ニノヤマ8号墳	円墳	20m	木棺直葬		千賀・田中1983
49号墳	ニノヤマ9号墳	円墳	10~15m	木棺直葬		千賀・田中1983
50号墳	ニノヤマ10号墳	円墳	10~15m	木棺直葬	馬具、玉、須恵器	千賀・田中1983
52号墳	ニノヤマ12号墳	円墳	10~15m	横穴式石室		千賀・田中1983
53号墳		円墳	16~18m	木棺直葬	刀子、須恵器	御所市教委1990
71号墳	(4~16)	円墳	15~17m	横穴式石室	銅鏡指輪、馬具、須恵器	山中1984a
74号墳		方墳		木棺直葬	刀子、須恵器	木許・越川2000
75号墳		円墳		横穴式石室	馬具、銅鏡、須恵器、土師器	木許・越川2000
89号墳	ニノヤマ13号墳	円墳	7~10m	木棺直葬	胡蝶金具、銅鏡、銅鏡	千賀・田中1983
90号墳	ニノヤマ14号墳	円墳	10m	木棺直葬	須恵器	千賀・田中1983
145号墳		円墳	15m	木棺直葬②	銅鏡、銅鏡、刀子、土師器	御所市教委1989
146号墳		円墳	18~21m	木棺直葬③	鉄刀、馬具、銅鏡、切子玉	御所市教委1989
147号墳	前方後円墳	32m		木棺直葬④	車軸指輪、小刀、銅鏡、銅鏡	御所市教委1989
149号墳		円墳	15m	十輪墓	瓦質土器	御所市教委1989
150号墳		円墳	15m	横穴式石室?	土師器	御所山教委1989
153号墳		円墳	15~20m	木棺直葬	銅鏡指輪、帶状金具、銅鏡	御所市教委1989
154号墳		円墳	15m	木棺直葬		御所市教委1989
155号墳		円墳	14m	横穴式石室	耳環、銅鏡、銅鏡、須恵器	御所市教委1989
156号墳		円墳	13~15m	横穴式石室	馬具、鉄刀、鉄斧、玉類	御所市教委1989
194号墳		方墳	8 m	横穴式石室	土師器	御所山教委1990

197号墳	円墳	13m	横穴式石室	鉄釘	1991年御所市教委調査	
202号墳	円墳	15m	横穴式石室	土師器	御所市教委1990	
243号墳	方墳	17~18m	木棺直葬	鉄鏃、刀子、須恵器	藤田・木本・尼子1987	
257号墳	円墳	15m	木棺直葬	埴輪	1987年御所市教委調査	
261号墳	円墳	15m	木棺直葬	埴輪、須恵器	御所市教委1987、保存	
282号墳	円墳	12m	木棺直葬	埴輪、須恵器	御所市教委1987	
283号墳	円墳	10~15m	(横穴式石室)	石棺、人骨、須恵器	御所市教委1987	
287号墳	小般2号墳		木棺直葬	鐵斧、須恵器	調査1961	
288号墳	小般1号墳		箱形石棺	須恵器	調査1960	
289号墳	円墳	15m			御所市教委1987	
290号墳	円墳	18~24m		埴輪、須恵器	御所市教委1987	
291号墳	円墳	12m	木棺直葬	須恵器	御所市教委1987	
292号墳	円墳	10~13m	横穴式石室	銀製鏡、馬具、鉄鏃、ガラス玉	御所市教委1987	
321号墳	円墳	7~8m	木棺直葬	須恵器	藤田・尼子1987、保存	
322号墳	方墳	8m	木棺直葬②	上置丸玉、須恵器	尼子・横山1987、保存	
323号墳	方墳	11~15m	横穴式石室	須恵器、土師器	藤田1987、保存	
324号墳	円墳	6~7m		刀子、須恵器	尼子・横山1987、保存	
371号墳	円墳	20m	木棺直葬②	馬具、鉄鏃、鐵錐、刀、須恵器	1998年御所市教委調査	
373号墳	円墳		木棺直葬		本善所収	
374号墳	円墳		横穴式石室	馬具、鉄洋、須恵器	本善所収	
407号墳	円墳		横穴式石室	須恵器、土師器	木崎1998	
408号墳	円墳		横穴式石室	馬具、須恵器、土師器	木崎1998	
409号墳	円墳		木棺直葬②	須恵器	1998年御所市教委調査	
414号墳	円墳	8m	横穴式石室	鉄洋、須恵器	木崎所収	
415号墳	円墳	15m	横穴式石室	馬具、無環、鐵斧、須恵器、土師器	木崎所収	
416号墳	円墳	7m	横穴式石室	劍	本善所収	
417号墳	円墳	15m	横穴式石室		本善所収	
418号墳	円墳	11m	木棺直葬	刀子、鐵鏃、須恵器	木崎所収	
419号墳	方墳	11m	木棺直葬	道輪、劍	木崎所収	
420号墳	円墳	24m	横穴式石室	馬具、鉄洋、刀子、須恵器	本善所収	
421号墳	円墳	20m	横穴式石室	馬具、鉄鏃、鐵錐、須恵器、土師器	木崎所収	
431号墳	境谷8号墳	円墳	12m	横穴式石室	馬具、鉄鏃、須恵器	久野1974
432号墳	境谷9号墳	円墳	14m	横穴式石室	須恵器	久野1974
433号墳	境谷6号墳	円墳	8m	木棺直葬	須恵器	久野1971
434号墳	境谷7号墳	円墳	10m	木棺直葬	鐵鏃、鐵錐、須恵器	久野1974
435号墳	境谷4号墳	円墳	10m	木棺直葬	鐵鏃、鐵錐、鐵斧	久野1974
437号墳	境谷3号墳	円墳	10m	木棺直葬	須恵器	久野1974
438号墳	境谷2号墳	円墳	10~14m	木棺直葬	銅鏡2、劍、勾玉、管状	久野1974
439号墳	境谷1号墳	円墳	15m	横穴式石室	須恵器	久野1974
440号墳		円墳		馬貫、埴輪	本善所収	
456号墳	境谷10号墳	円墳	24~30m	(横穴式石室)	須恵器	藤田1985
565号墳		円墳	15~20m	木棺直葬	須恵器	1991年御所市教委調査
640号墳	条池南古墳	円墳	13~16m	横穴式石室	家形石棺、馬具、須恵器	田中1984b
641号墳	条池北古墳	円墳	13~15m	横穴式石室	馬具、鐵刀、須恵器	田中1984b
718号墳	種宿2号墳	円墳	12m			山田1976
719号墳	種宿3号墳	円墳	17~19m	木棺直葬	埴輪、須恵器	山田1976
745号墳	戸毛向井6号墳	円墳	15m	木棺直葬	埴輪、須恵器	入倉1991
744号墳	戸毛向井7号墳	円墳	13m	木棺直葬	鐵鏃、鐵錐	入倉1991
767号墳	(新規発見古墳に新たに命名)	円墳	8m			御所市教委1987
768号墳	(S-1号塚に新たに命名)	方墳	7m	横穴式石室	須恵器	御所市教委1990
769号墳	(22号塚下層地に新たに命名)	円墳	14m	木棺直葬?	埴輪、鐵鏃、刀子	藤田1987
770号墳		方墳	16m	木棺直葬?	須恵器	本善所収
771号墳						本善所収

表1 巨勢山古墳群の既往発掘調査古墳一覧（2001年12月現在）

このうち、bとcの種類の古墳は、古墳群の西半部および北半部においては、今後の発掘調査の進捗によって、かなりの増加が見込まれる。

一方で、古墳として登録（田中1984b）されていながら、発掘調査の結果、自然の隆起や植林に伴う平坦面でしかなかったことが判明したものも相当数ある。

1988年（昭和63年）から1991年（平成3年）にかけて、ゴルフ場開発に伴う大規模な調査を実施したが、1、2、3、6、7、8、10、11、37、38、106、151、152、157、158、159、162、189、190、191、192、193、201、203、204、206、207、209、211、214号墳として登録されていた30箇所と、念の為に新たに調査対象とした11地点の計41箇所は自然地形であった。これらのうちには古墳以外の遺構を検出し得たものもある（後述）が、古墳番号としては欠番として処理している。こうした例は巨勢山古墳群のうちでも中南部に集中する傾向があり、今後欠番となって減少するであろう古墳数についても一定程度予測が可能で、その数はおそらく70を超えることはないであろう。なお、本書所収の428・429・430地点（号墳を呼び替え、以下同様）では古墳は近世墓や中世集落によって完全に破壊されていた。

以上のような複雑な状況は、巨勢山古墳群の実数の把握を極めて困難にしており、現在のところ、総数700基もしくはそれ以上、との概数を示し得るに過ぎないが、我が国最大規模の群集墳、との評価は描るがない。

さて、巨勢山古墳群の既往発掘調査墳の概要は一覧表に記しておいたので、ここではそれぞれの調査の契機を中心にまとめておく。巨勢山古墳群の発掘調査は、1960年（昭和35年）、古墳群西南部の小殿で、国道24号線開発に伴い、不時発見された、287号墳（小殿2号墳）（網干1961a）、288号墳（小殿1号墳）（網干1960）の2基の古墳を端緒とし、このころから地元業者による土砂採取が丘陵のいたるところで始まる。この時期、調査できたのは431～439号墳（境谷1号墳～9号墳）のわずか9基（久野・中井1974）にとどまり、多くの古墳が未調査のまま破壊された。

続く調査は団体のラグビー場建設に伴うもので、ミノヤマ支群と呼称される41～45、47～50、52、89、90号墳の12基（千賀・田中1983）が調査された。その報告書を『巨勢山古墳群I』として刊行を予定しているが、諸般の事情により、遺憾ながら未刊である。また、71（4～16）号墳（田中1984a）もラグビー場に通じる県道拡幅工事に伴う調査である。

こうして古墳群の破壊が急速に進む中、実態の把握が急務となり、1983年（昭和58年）度には詳細な分布調査が実施された（田中1984b）。640号墳（条池南古墳）は石棺の存在が著名でありながら荒廃が著しかったので、隣接の641号墳（条池北古墳）と併せて、保存を目的としてこの年度に調査された。

保存を目的とした調査は1984年（昭和59年）度にも継続され、458（境谷10号墳）の調査では巨勢山境谷遺跡（弥生時代の高地性集落）の存在が明確になるという成果（藤田1985）も得たが、1985年（昭和60年）以降、御所市の活性化を図るとの目的で、巨勢山丘陵の開発が盛んに行われること

になる。

321～324号墳、769号墳（323号墳下層墳を新規命名）の調査（藤田編1987）では、323号墳が遺存状態の良好な横口式石室であることが判明し、その重要性からこの調査区全域現状保存の英断が下されたが、243号墳（藤田編1987）に次いで、1987年（昭和62年）の工業団地建設に伴う調査では257・289～292・767号墳（新規検出墳に本書で新たに命名）、282・283号墳が調査対象となり、また、急斜面を登る長大な墓道を検出している（御所市教委1987）。この事業に伴っては上記の合計8基が記録保存となった。

さらに1988年（昭和63年）～1991年（平成3年）に実施のゴルフ場建設に伴う事前調査では21、22、29～32、53、145～147、149、150、153～156、194、202、768号墳の19基（御所市教委1989、1990）と、197、565号墳の計21基（148号墳は、前方後円墳147号墳の前方部となつたため欠番とした。）が記録保存となり、このほかさらに30箇所が古墳として登録され、可能性のある11箇所を加えた計41箇所の調査を実施したが、先述の通り、これらについていはいずれも自然地形であった。

ただし、これらの箇所でも古墳以外の遺構を検出し得たところも少なからずあり、実際に古墳であったところも併せて記すと、弥生時代の高地性集落では、155号墳の北から156号墳にかけて巨勢山中谷遺跡（御所市教委1989）、192地点では巨勢山八伏遺跡を検出（御所市教委1990）した。古墳に伴う陪葬墓は156号墳（御所市教委1989）と565号墳のそれぞれ墳丘裾で1基ずつ、563号墳（調査対象外）の南側で1基検出している。

歴史時代の遺構としては、150号墳北側から157・158地点にかけての道（御所市教委1989）があり、また、木棺直葬墓や土坑（確実に墓であるものを含む）は、150号墳北側・157地点（御所市教委1989）、29号墳から32号墳にかけてと、53号墳および192地点の裾（御所市教委1990）のほか、7、8、10地点、565号墳周辺などで、計15基を検出している。

工業団地ならびにゴルフ場建設に伴う調査の整理作業は継続中であるが、ほとんど絶えることのない新規の発掘調査に対応せざるを得ない現状にあって、膨大な資料数を処理しきれておらず、誠に遺憾ながらこの報告書も未刊となっている。共に現地説明会を実施しているが、特にゴルフ場開発に関わる現地説明会資料（御所市教委1989、1990）は、コピーを締じただけのものとはいえ、内容は比較的充実しているので、引用の要があるときには当面の間、同資料に掲られたい、との思いを無念の気持ちと共に記しておく。

一方、地場産業の一つでもある土砂採取に伴う事前の発掘調査は、1990年（平成2年）の449号墳（本書所収）の調査を皮切りに事業者の理解も得られるようになり、ようやく軌道に乗り始める。

74、75号墳（木許・藤田2000）は1993年（平成5年）度の調査で、導入期の横穴式石室や金銅装馬具などの検出で注目される。

その後、1995年（平成7年）度には373、374号墳を、1996年（平成8年）度には414～421号墳の調査を実施し、上記の449号墳の調査成果と合わせ、本書に所収した。なお、土砂採取に伴う発掘調

査は現在も継続中で、1997年（平成9年）度には371号墳と、407・408号墳（木許1998）を、1998年（平成10年）度には409号墳を調査している。これらの報告書も逐次刊行の予定である。本書にはその後の、1999年（平成11年）度に調査の428・429・430地点の調査成果も収録した。

このほか、国道309号線バイパスの建設に伴って、1990年（平成2年）には、744号墳（戸毛向井7号墳）と745号墳（戸毛向井6号墳）の調査（入倉1990）が行われている。

以上、巨勢山古墳群において発掘調査の行われた古墳は85基となり、かつて調査が為されないまま破壊された古墳も含めると、総数700基強のうち、およそ2割が消滅しているものと推測される。

巨勢山丘陵における、市の活性化を目指した直営または半官半民の大規模開発はようやく終息したが、地場産業としての土砂採取は、ゴセ土なる、水捌けが良く良質なために地上げなどに好んで用いられる、いわば土砂のブランド品の産地が、巨勢山古墳群の分布と不幸な対応関係にあるために、このままでは今後も盛んに行われるだろう。

現在、国史跡指定への動きが始めており、早期の実現に向けて努力したい。

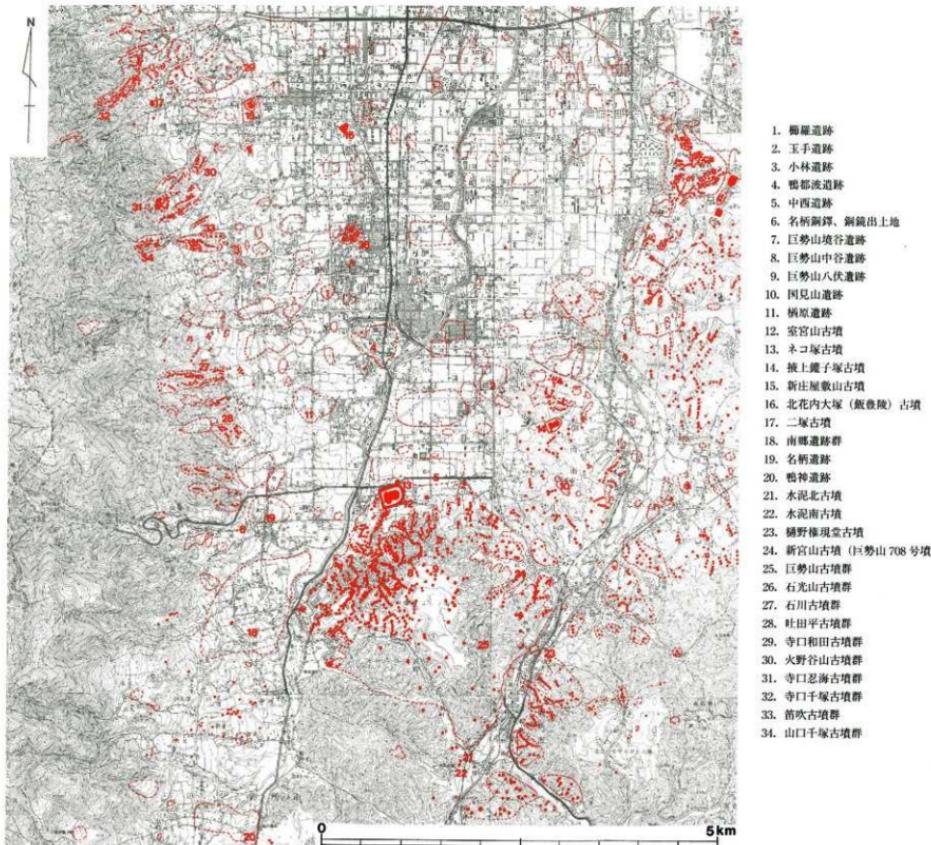


図1 巨勢山古墳群(25)と周辺の遺跡 (S. = 1/50,000)

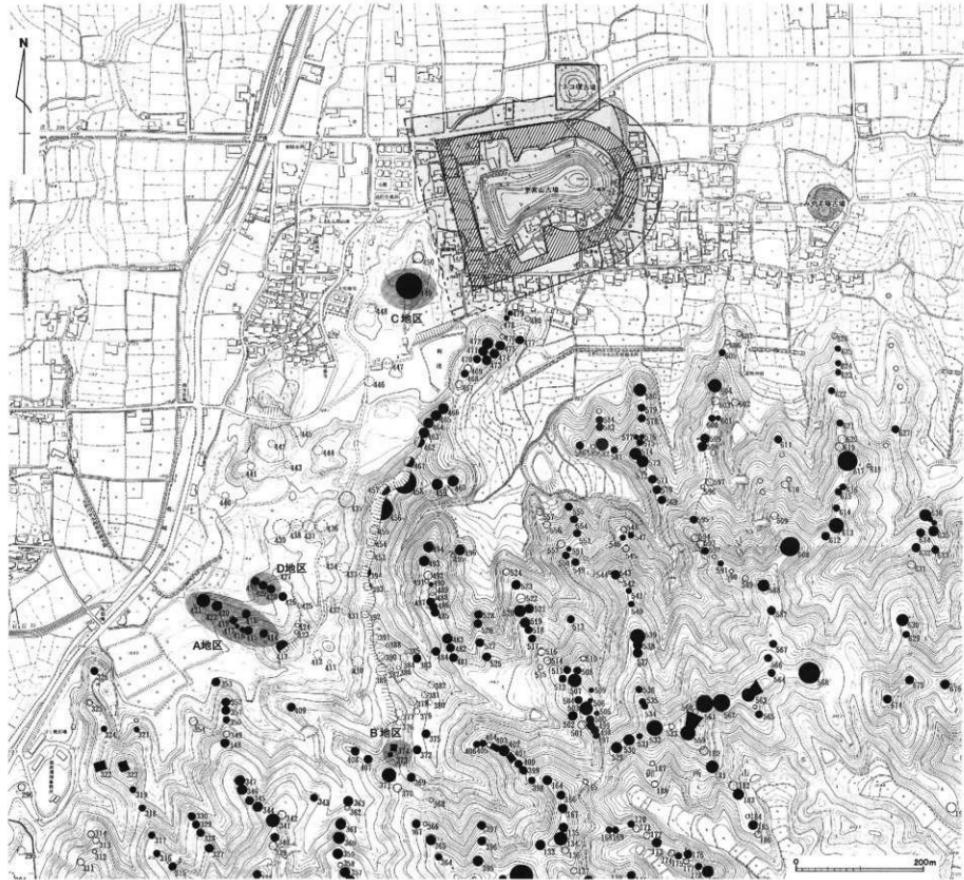


図2 巨勢山古墳群 調査位置図 ($S_r = 1/6,250$)

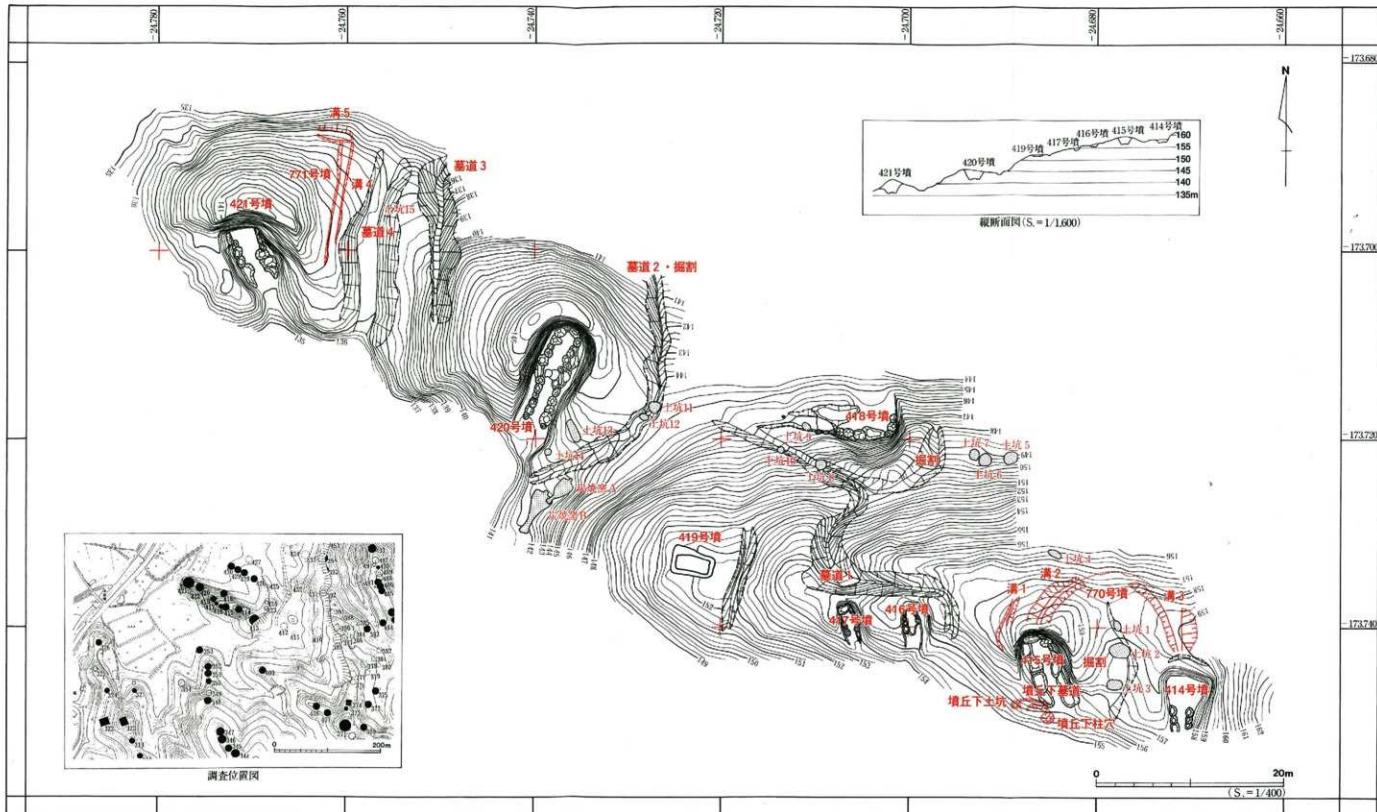


図3 A地区(西寺田字血取、堆谷および澗ヶ谷地区)

第2章 A地区（西寺田字皿取、境谷および渕ヶ谷地区）

巨勢山414～421号墳、770・771号墳の調査

第1節 位置と調査方法

調査地は巨勢山古墳群の西端部に相当する。標高286.3mの朝町山から四方に尾根が派生し、巨勢山丘陵の西半部を形成しているが、うち、室宮山古墳へと至る北へ延びる主尾根（第3章のB地区；巨勢山373・374号墳はこの尾根に乗る。）からさらに北西に向いて派生する一枝尾根上に調査地は位置する。この枝尾根は、早くに主尾根と連なる東側が土砂採取により削り取られており、1983年（昭和58年）度の分布調査（田中1984b）の時点では、残存部東端の413号墳はかろうじて半壊状態で崖面に遺存していたようだが、この度の調査に入った時点では413号墳は既に崩落してしまったらしく、墳丘の痕跡らしきものさえ確認できなかった。

したがって調査対象は、この枝尾根の残存部に占地する414号墳以西の古墳ということになるが、一方、支尾根西南端の422号墳も比較的早くに、支尾根の南側を西流する小河川の浸食により自然崩壊、消滅しており（田中1984b）、つまりところ、ここにA地区として調査対象にできたのは、414～421号墳の8基であった。また、414・415号墳の下層から770号墳、421号墳の下層から771号墳を検出したので、この調査区では合計10基の古墳を調査したことになる。

なお、先述の通り、A地区は土砂採取のために尾根から切り離された状態であったが、これより東の主尾根に続く斜面は急峻になるので、A地区そのものを支群以下の単位のひとつのまとまりを持つた、いわゆる小文群と考える事も可能である。

この支尾根は西に向かって派生するので、尾根上からはどこからでも幽玄な雰囲気を醸し出す金剛山・葛城山の雄大な姿と、その間を河内に抜ける水越峠を眺望することができる。古墳などの立地には優れた場所と言えるだろう。

また、古墳時代の遺構としては他に墓道4本、弥生時代では高地性集落、巨勢山境谷遺跡の一画を検出し、歴史時代の遺構としては土坑14基と炭焼窯2基を検出しており、これらも合せ報告する。これらについても当然眺望や地形が古地の大きな理山になったであろう。

このように古墳以外の遺構の検出も予想できたので、当初よりこの支尾根の全面発掘を計画し、尾根中央に上層観察用のアゼを設定したうえで、地形や古墳の遺存状況を勘案しつつ、それに直交または斜交するアゼのほか、必要に応じて任意にアゼやトレンチを設定して掘り進めた。煩雑になるので、地形測量図（図3など）では必要箇所の位置と方向を示すにとどめている。なお、地形測量業務は株式会社相互技研に委託した。座標を示す場合には第IV系国土座標で、本章で用いる「北」は方眼北である。

第2節 巨勢山414号墳

直径約8mの円墳とみられ、横穴式石室を内部主体とするが、ほとんどその痕跡さえ遺存していない。初葬の時期はTK43ないしTK209型式期で、追葬はTK217型式期まで続いたものと推定する。出土遺物には鉄滓、須恵器などがある。

1. 位置と遺構（図3～4）

既に消滅した413号墳からこの414号墳に至るには直線距離にして約35m、比高差は11m以上あり、非常に急峻な斜面となっている。414号墳はこの急斜面がひとたび途切れでやや平坦となる尾根上の傾斜変換点を利用して尾根の方向に直交して墓壙を穿ち、ほぼ南（主軸N-7度-E）に開口する横穴式石室である。

墳丘はほぼ完全に削平されている（図4）。ただ、墓壙の北約1mに弧を描く段があり、これを墳丘端を画する掘削の名残とみると、直径約8mの円墳と復元できる。主体部の乱掘も著しく、墓壙の埋土さえ全く遺存していない（図5）。石材の抜取痕もわずかに南の数石分を検出し得たのみである。

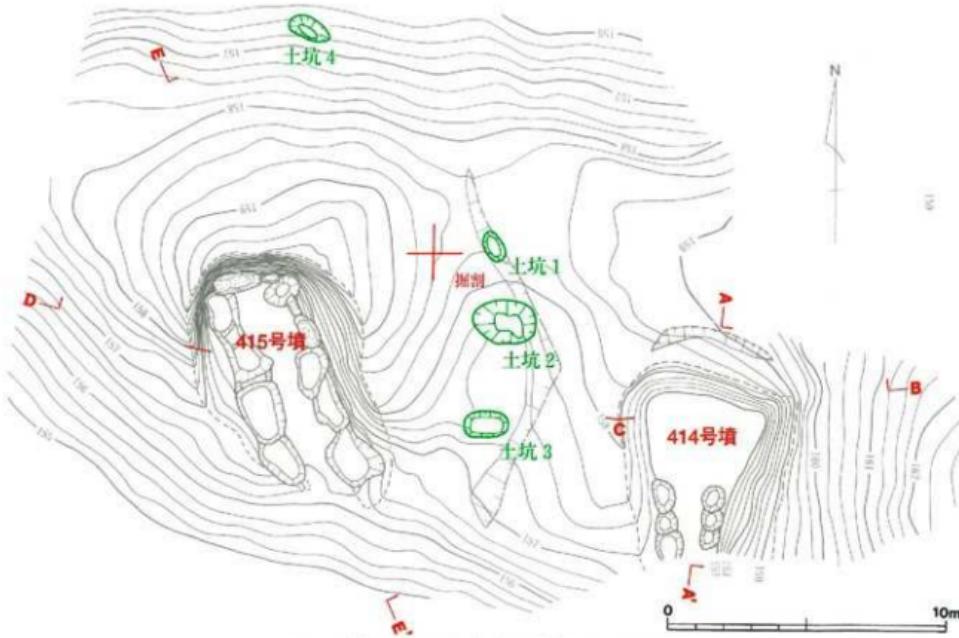


図4 巨勢山414・415号墳 墳丘測量図 (S.=1/200)

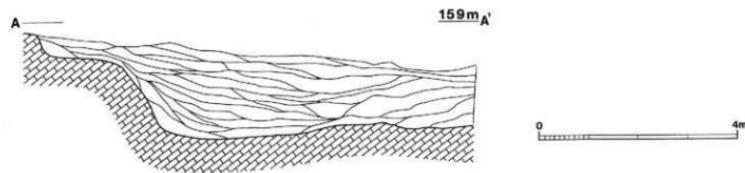
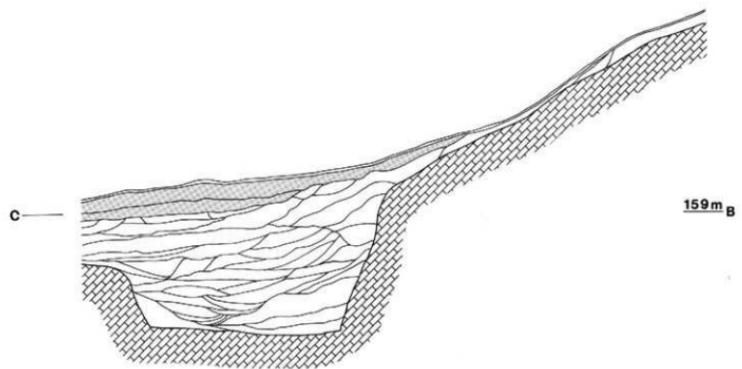


図5 巨勢山414号墳 土層断面図 (S. = 1/80)

2. 出土遺物 (図 6 ~ 7)

主体部附近から検出した遺物は全て414号墳がほぼ完全に破壊された後に堆積した、主体部上位層(図5でアミで示した)から出土したものなので、確実に414号墳に伴うといえる遺物はない。とはいっても、尾根の上方(東側)に位置した413号墳は木棺直葬墳の可能性が高く、盗掘を受けていたにせよ、流出そのものの機会も、流出が想定される遺物の量も少ないものと考えられるのに加え、413号墳と414号墳とは距離が離れており、斜面が急峻なので、413号墳に伴った遺物が414号墳の位置にまで流出してきたとは考え難い。

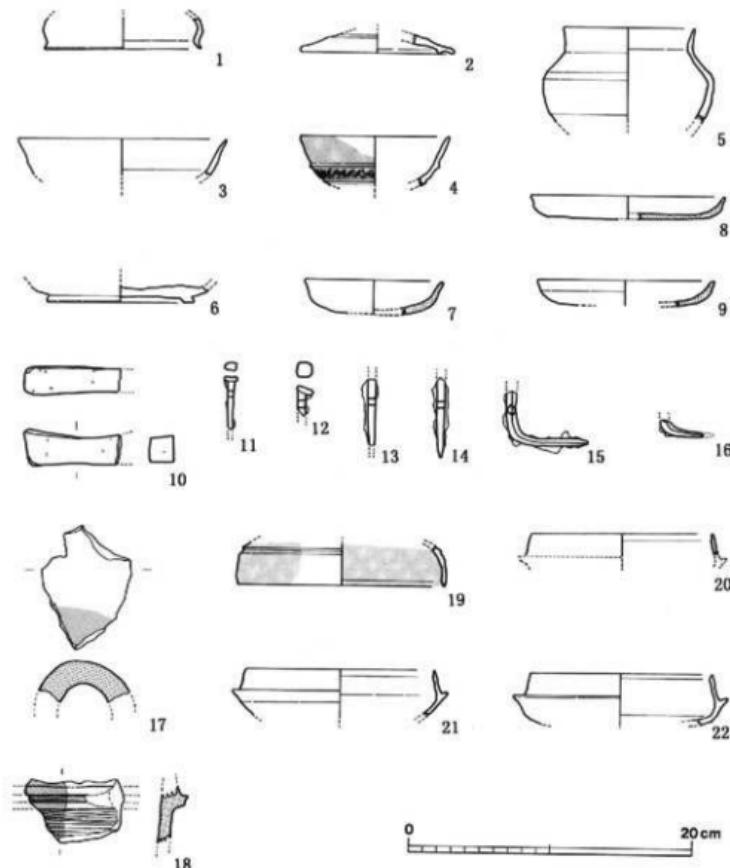


図6 巨勢山414号墳 出土遺物 (S.=1/4)

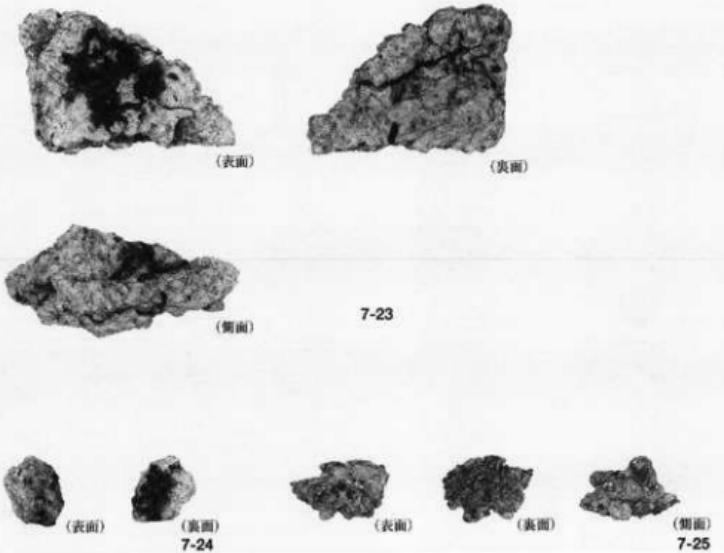
したがって古墳時代後期～飛鳥時代の遺物については414号墳に伴ったものとみなすほかないのが、乱掘後の主体部の上位層にこうした遺物が包含された経緯については、次のように考える。

この主体部上位層はほぼ単一の暗黄褐色砂質土で、それ以下の既乱掘の主体部の埋土がシルトや礫を縞状に挟み、まさに自然堆積の状況を呈するのに対して明らかに様相を異にしており、おそらくは、隣接する415号墳の東側の墳丘の高さに合わせて（図7参照）、植林のための平坦面を形成するため人に為された造成土とみられる。

そうであれば、元々414号墳に伴っていた遺物が乱掘により周囲に散在しており、この造成に伴つて再び414号墳主体部の上位層に包含されるに至った、と考えることも可能である。実際、上位層のうちでも遺物を包含する範囲は図4に示した程度に収まり、414号墳の周囲の、比較的狭い範囲での土の移動を想定させる。

以上から、主体部上位層から出土した図6-1～5の須恵器、6-10の砥石、7-23～25の鉄滓などは、元来、414号墳に副葬されていたものとみられる。

時期を決定できる根拠に乏しいが、6-4は白石編年（白石耕1992）では3b期の高杯Gに近く、3b期はTK43型式とTK209型式（田辺1966）の一部にあてられており。初葬の時期を示すものとみて良いであろう。6-2はTK217型式（田辺1966）および飛鳥II（西1978）の杯G杯蓋、6-6は飛鳥IV（西1978）の杯B杯身で追葬の時期を示すものとみられる。



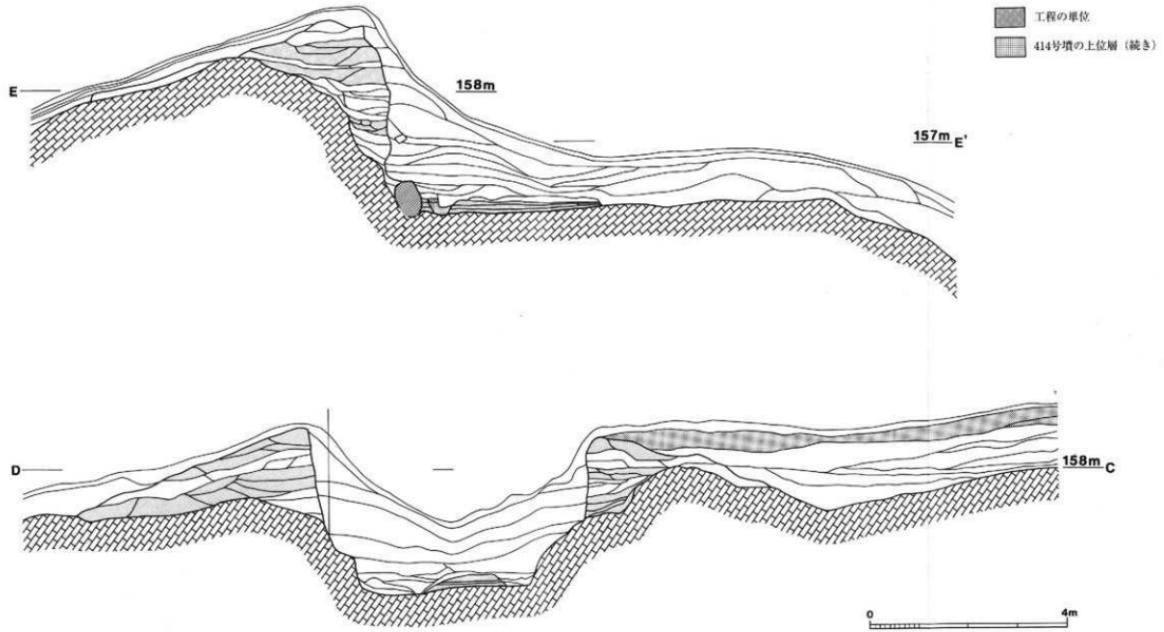


図8 巨勢山415号墳 土層断面図 (S. = 1/80)

磁石 6-10は目が細かい小振りの仕上げ砥で、最も磨かれた中央部で欠損している。4面ともよく使い込まれており、長径6.7cm、重量は49.6gである。奥田尚氏によると、流紋岩で、耳成山・歓勝山・二上山縣岳に産地を求めるといふ。

土師器皿 6-7~9、鉄釘 6-11~16も主体部上位層からの出土で、元は近辺に所在した土坑に帰属したものとみられる。土師器皿はいずれも十六面・榮王寺遺跡（松本・服部1988）にいうB型式である。鉄釘は断面方形で幅0.6cm程度、釘頭は薄く平らである。

6-17~22は後述（第4節）する下層の770号墳に伴ったものとみられる。6-17・18・22は主体部上位層、6-19~21は北側の斜面斜面流出土からの出土である。6-17は縦羽口の可能性がある。6-19~22の須恵器杯身・杯蓋はTK208型式（田辺1966）に相当する。

7-23は含鉄鉄滓で7.8cm×5.2cm×3.2cm、重量は141.1g、磁着度5である。元は直径10cmを越えたであろう大形の滓の1片で、上面は黄褐色を呈し小波状の凹凸を有するがほぼ平坦である。裏面も凹凸はあるがほぼ平坦で木炭の付着がみられる。滓は上下で質が異なり、下層は1cmほどで滓が中心、上層はメタルを含んだ鉄滓層で端により放射状にひび割れる。下面・破面には1cm以下の小さな木炭痕がある。精錬鍛冶滓であろう。7-24は精錬鍛冶系鉄塊で2.6cm×1.4cm×2.0cm、重量11.2g、磁着度5である。表面は黄褐色を呈し5mm前後の木炭痕による凹凸がある。7-25は含鉄鉄滓で、3.5cm×1.9cm×2.3cm、重量9.6g、磁着度4である。表面は灰褐色を呈し凹凸が著しい。裏面には砂礫を付着させ、転倒の跡んだ形状を良くとどめる。

第3節 巨勢山415号墳

長径15.1mの円墳で、両袖式と推定される横穴式石室を内部主体とする。玄室には箱形石棺（初葬棺）、木棺（追葬棺）が並び置かれた。袖部分にも追葬棺を想定できる。初葬はTK209型式期、追葬はTK217型式期までとみられる。初葬棺に伴った遺物に銀環・鉄滓などがあり、ミニチュア埴形土器も出土している。石室開口部には石室工事に伴うとみられる柱があり、また、開口部から続く墳丘下墓道と墳丘下土坑では土器を破碎して祭祀を行っている。

1. 位置と墳丘（図3・4・8）

414号墳の東、やや緩斜面となった尾根上に占地する（図3）、長径（東西）15.1mの円墳である。東側には断面逆台形を原則とする掘削があり、その底は北から南に傾斜する。西の尾根上では158.25mのコンターライン直下に、北西では158.00mのコンターライン直下に墳丘端があるが、北側と南側では自然崩壊のため墳丘端を明らかにできない（図4）。

内部主体は横穴式石室であるが、その場合に通有の、内から外へという墳丘盛土の原則は必ずしも貫徹されない。石室構築の各工程ごとに、盛土の作業（図8）においても一端取りをつけようとする意識が顕著で、アミの有無で示したように、複数の層が一連の工程で盛られている。

北側（図8-E）と西側（図8-D）においては、墳丘端となる盛土は当初から決定されている。特に西側では墳丘端の位置にかすかな掘り込みを行う部分があり、2mばかり円弧を描く。東側（図8-C）では地山を削り出して掘割を造成し、墳丘端としているが、中位から始まる盛土も、比較的早い段階で東端の盛土を行っている。

2. 墳丘下の墓道・柱穴・土坑とその出土遺物（図3・9～11）

墓壇の南西端に接して、墳丘下0.5～0.8mで墳丘下墓道、墳丘下柱穴、墳丘下土坑を検出した（図8、9）。墳丘下墓道は、図示状態での中央部附近はかなり南に崩落しているが、本来は0.8m程度の道幅を有したとみられ、石室開口部から墓壇南西端をかすめて西へ延び、平坦な部分から緩やかなスロープを下りつつ南に向きを変えるが、尾根の南側を流れる小河川のために侵食されて崩落しており、その後の行き先は明らかにはできなかった。ただし後述（第5節）するように、墓道1とは連結していた可能性が高い。

墳丘下墓道上からは、完形の須恵器短頸壺（11-1）と土師器杯（11-2）約1/2、土師器長胴壺

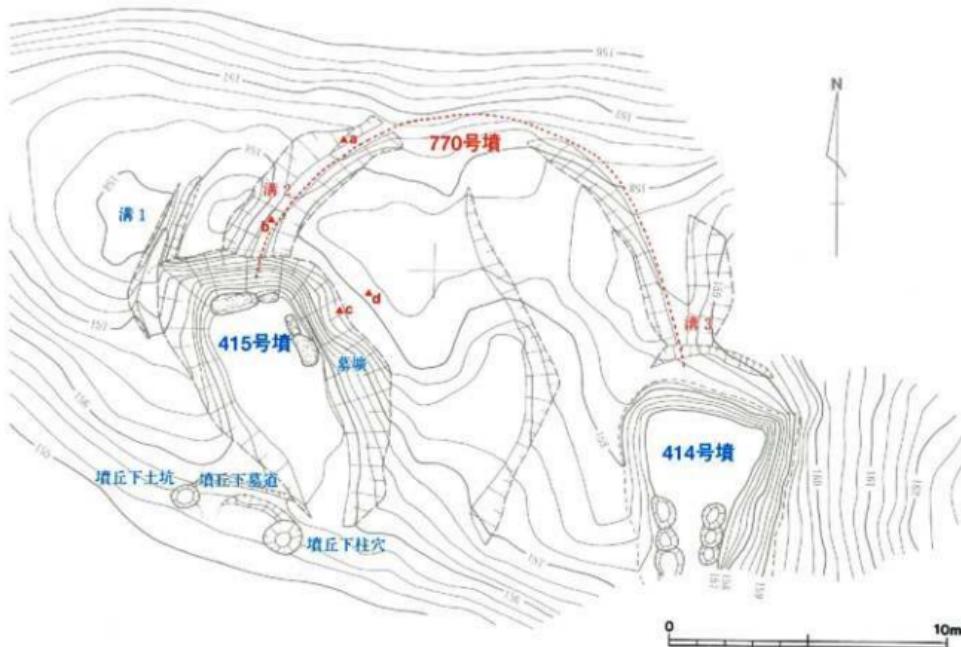


図9 巨勢山414・415号墳 墳丘除去後 道構図並びに巨勢山770号墳 検出状況 (S.=1/200)

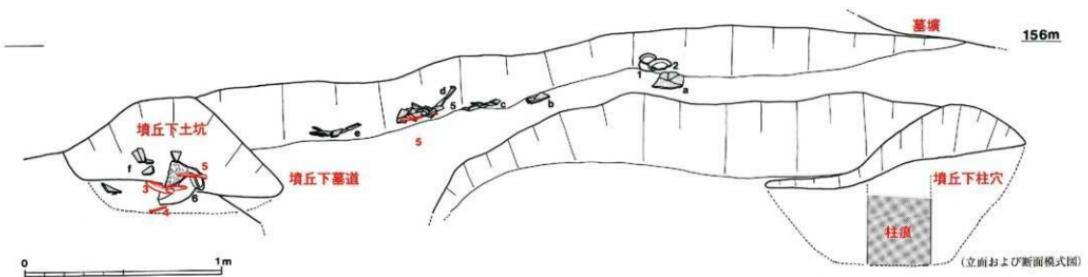
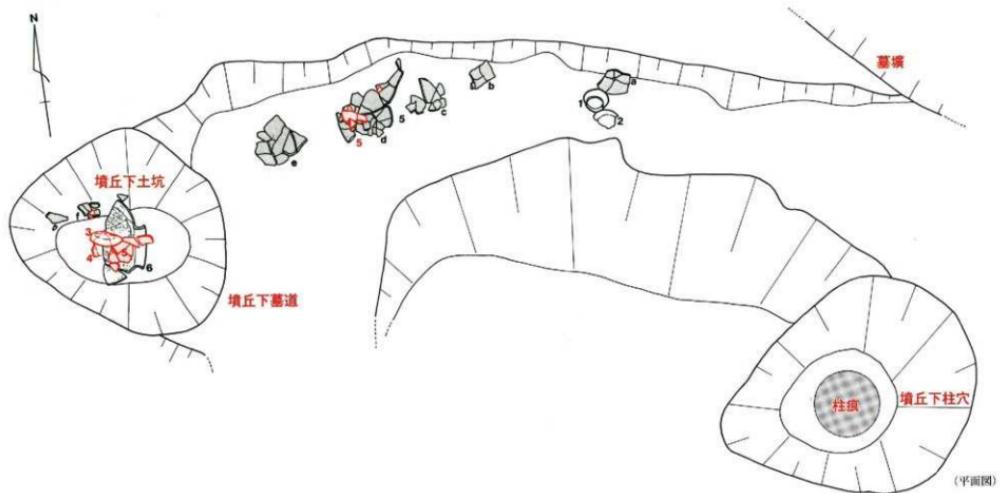


図10 巨勢山415号墳 填丘下墓道と周辺の遺構・遺物 (S. = 1/20)

(11-5) が出土した(図10)。長胴壺(11-5)は破片され、その破片は墳丘下墓道上と後述の墳丘下土坑内のa~fの6つの破片群に分かれて出土した。なお、11-5の復元後の残存状況は、底部を欠損し、口縁部は約30%、体部は約40%を欠損する。

墳丘下柱穴は墓壙の南西にあって、その間を墳丘下墓道が通ることになる。柱穴は長径1.33m、

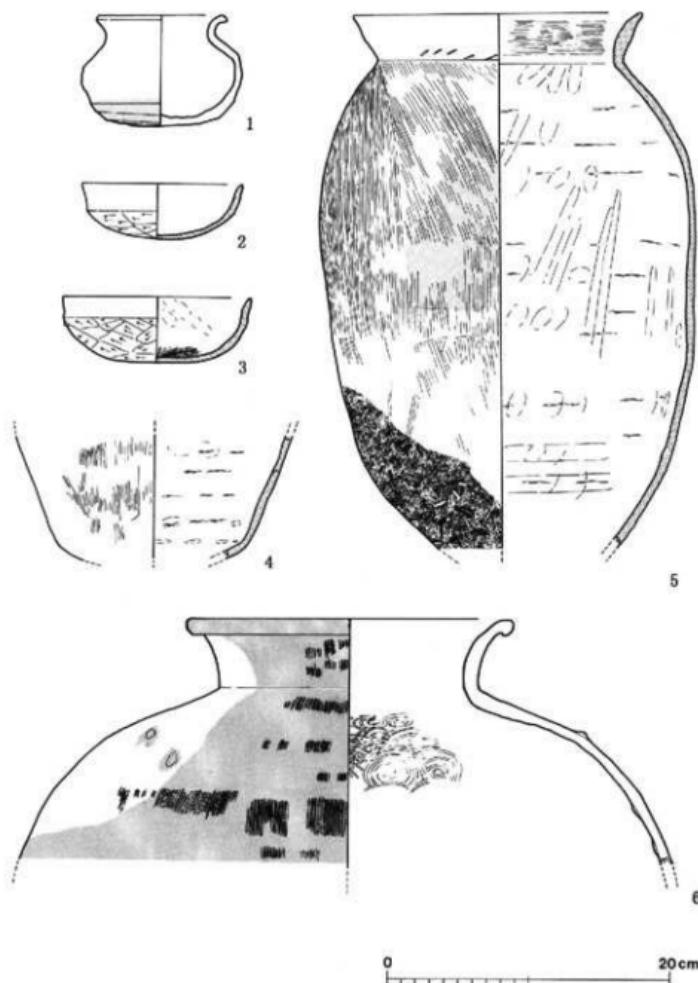


図11 巨勢山415号墳 墳丘下墓道ならびに墳丘下土坑出土土器 (S.=1/4)

直径1.09m、深さは最大で0.81mの大きなもので、中央に直径0.32mの柱痕がある。柱痕は還元されて青灰色の粘質土となり、腐食臭を伴う状態であった。埋土は良く締まっていた。

墳丘下土坑は西に緩やかに下る墳丘下墓道が南に向きを変える位置にあり、長径1.15m、短径1.08m、深さは最大で0.53mを測る。土坑内からは先述の長胴甕(11-5)の破片(f群)の他、復元完形の土師器杯(11-3)、別個体の土師器長胴甕底部(11-4)、須恵器甕(11-6)肩部から上の約1/2が出上している。

これらの遺構は墳丘下に埋没するものである。墳丘下柱穴の直径32cmもの太い柱は、石材の運搬に伴ってロープを巻き、支えとするなどの機能を有したものであろう。この柱が地上に出ていた痕跡はなかったので、用が済んだ後は墳丘下に隠れるように適当な長さに切断されたと考えられる。

墳丘下墓道と墳丘下土坑については、最終の段階で埋められた可能性も考慮したが、南西隅の石室石材抜取痕が墳丘下墓道の上に重なる状態になるので、少なくとも墓道部に関してはそれはありえない。やはり古墳の構築に際して、石室石材の運搬などに用いられたものとみられる。

なお、地山から掘り込まれた墓櫛北西隅に取り付く溝1(図9)は墓櫛と同時に埋められており、415号墳の付帯施設である。幅0.7~1.1m、深さは最大で0.7mで、拳大的花崗岩(黒雲母石英閃緑岩)3石が埋められていた。石室石材の余剰分とみられ、この溝1にも同様の機能を想定して良いと考えられる。次節でも触れる。

さて、墳丘下墓道、墳丘下土坑の遺物の出土状態について詳述する(図10)と、先述の通り、両者では破碎された土師器長胴甕(11-5)の破片が共に出土している。部位ごとの出土位置を、仮にこの長胴甕を左右に分けて記述すると、東寄りのa・bの2群は左右底部附近の破片で構成され、口縁部はdの一郡に集中して出土した。また、このd群とc群の破片は、甕右半の肩部、体部と、左半の肩部、底部附近を含んでいる。その西のe群は左右の肩部と体部の破片で構成され、f群は左半体部と右半底部附近からなる。

破碎した場所については、最も破片の量が多く、部位ごとにまとまりがあり、接合関係が良好であったことから、口縁部が集中して残るd群の位置で行われたと考えられる。

その出土状態は、底部附近が東端の墳丘下土坑(f群)からも出土するなど、必ずしも例外がないわけではないが、口縁部はd群に集中し、底部附近はそれ以東のa・b群に多く、右半、左半の分布にも群ごとの偏りがあるなど、無視できない傾向が認められる。また、破片が群に分かれて出土し、その中には別の個体の破片を含まないことも注意される。

以上の状況は、長胴甕(11-5)をd群の位置で破碎して、おそらくは両手を使って持てるだけの量の破片をそこから移動し、丁寧に他の5箇所に分け置くといった行為の存在を示すものであろう。

墳丘下墓道ならびに墳丘下土坑出土の完形の遺物としては須恵器短頸甕(11-1)と土師器杯(11-3)がある。土師器杯(11-2)も元は完形であった可能性が高く、長胴甕(11-5)もこ

の位置で破碎されるまでは完形であったとみられる。対して、II-5とは別個体の長胴甕底部（II-4）と須恵器甕（II-6）は、この墳丘下土坑の、接合して一片ずつとなる破片以外は周囲に見出すことはできなかった。したがって、II-4とII-6は他の場所、おそらくはさらに下方の墓道の中途で破碎された、それぞれの破片の一部が墳丘下土坑に持ち込まれたものといえる。

墳丘下土坑の遺物出土状態をみると、最下底に長胴甕（II-4）の底部、その上に重ねて須恵器甕（II-6）の破片があり、II-4、II-6の破片を意識的に埋置した状況を看取できる。つまり墳丘下土坑は、他の場所で破碎されたとみられるII-4、II-6の破片の存在を強く意識して、それを埋置するために設けられた土坑ということも可能である。その上に完形の土師器杯（II-3）と長胴甕（II-5）の破片があって、長胴甕（II-5）を通じて墳丘下墓道の遺物と関連を持っている。

こうしたことからすると、尾根の裾から土器を破碎しつつ、その破片を一部持つて匕がって埋置することによって、そこでの続く祭祀に埋付けるという、祭祀の連鎖が意識された可能性がある。

また、この想定が妥当であるとすると、それぞれの器種組成の共通性も見逃せない。下方の祭祀場から墳丘下土坑に持ち込まれたと推測されるのは土師器長胴甕（II-4）と須恵器甕（II-6）のそれぞれ一部である。また、墳丘下土坑ではこれに完形の土師器杯（II-3）が伴う。

一方、墳丘下墓道での祭祀も土師器長胴甕（II-5）に、同じく完形と思しき土師器杯（II-2）が伴うのに加え、液体の容器という意味では須恵器甕（II-6）と共に機能を有し、かつ、より小形の須恵器短頸甕（II-1）が用いられている。こうした器種組成の上での共通性は、同一内容の祭祀の反復を想定させる。

土師器長胴甕（II-5）は破碎され、6箇所にその破片が分け置かれたが、これも反復されるべきものだとすれば、尾根の裾から要所要所で点々と土器の破片が群を成してほど等間隔に墓道上に置かれるといったことを想像することも不可能ではない。

いずれにせよ上記のように、石室構築のおそらく最終に近い段階に、この墳丘下に埋没する墓道で行われた祭祀は、土器を破碎する行為の反復と、それによって生じた土器片を通じての行為地圖の連鎖が重视されたものだったらしい。

この祭祀の最後に用いられた須恵器短頸甕（II-1）は、ここまで完形として記述してきたが、実は口縁部外向の垂下する平坦面を一部、わずか1.9cmほどだが欠いている。意識的なものであるとすれば、この祭祀行為の最後を飾るに相応しい欠損の仕方、といえなくもないだろう。

3. 主体部（図12）

横穴式石室を内部主体とするが乱掘が著しく、基底石さえわずか3石程度しか遺存していない。石室石材は花崗岩（角閃石黒雲母石英閃綠岩）である。

石材の抜取痕により判断すると、墓道部分は東西共に幅を減じるので両袖式の横穴式石室とみら

れる。袖部の石材は他より大きく、掘方も深い場合が多いとの横穴式石室の通則から、石材抜取痕の形状や深さを勘案して図12では玄室長3.40m、玄室幅1.85m、墓道幅1.30mに復元した。石室の主軸はN-15度-Eとなる。大過はないであろう。

玄室には西に偏して、主軸に平行して設置された緑泥片岩の組合式箱形石棺がある。当初から底石は有さない。遺存状態は極めて悪く、石棺材は南小口の一部しか元の位置をとどめていなかったが、黄褐色砂質土を敷き詰めた石室床面から掘り込まれた据え付け穴（図12断面土層図）の状況から、南北の長さは内法でおよそ1.85mの規模を有することが判る。石棺の東長辺はほぼ石室主軸の位置にあるが、わずかに斜行するので北小口の方が幅が広く、北頭位の埋葬とみられる。乱掘のため西辺の両コーナーは残っていないが、石室西壁の推定位置を勘案すると、北小口は1.05m、南小口は0.90m程度の幅を復元できる。

また、玄室の東に偏しては釘を用いた木棺があり、南小口相当部附近には棺台とみられる花崗岩の自然石2石が石室床面に残っていた。初葬と追葬の床面に差があるわけではないが、棺の格差からみて、通則（森岡1993）通り西（右）の箱形石棺が初葬で、東（左）の木棺が追葬であろう。

なお、結果として目的を達することはできなかったが、初葬棺の高さや蓋石の有無を検討するために行った試算の過程を以下に記しておく。本墳の石室撹乱土や埴丘の周囲で採集できた緑泥片岩の合計重量は216.2kgである。わずかに南小口に残存した石棺材の厚さは4～5cm程度で、これを基準に計算をすると、約2.54～2.02m2分の石棺材に相当することになる。必要な棺材の長さの合計はおよそ5.6mなので、平均すると約0.45～0.36mの高さを有することになるが、据え付けに必要な高さ約0.3mを減じる必要があるので、計算上、ほとんど高ささえ残らないことになった。

4. 石室撹乱土の出土遺物（図13～16）

遺物は415号墳に伴うものが大半を占めるが、13-1、2、6、7、11は下層に存在した770号墳（第4節）に伴った遺物である。13-1は有黒漆の家形埴輪の基部と窓の下部で、縁から窓の下辺の上部まで赤色顔料の塗布がみられる。13-2・6・7はTK208型式（田辺1966）併行の須恵器杯盤・杯身、13-11は高杯脚部である。

415号墳の遺物も原位置を保つものはなかったが、玄室には石室石材抜取前の堆積土が比較的良好に残されていた。出土状況から初葬の箱形石棺に伴うとみられる遺物は、石室・石棺床面直上の黄褐色砂質土に包含され、石棺内での位置から人骨片53g、齒1本のほか15-21の銀環と16-1の鉄滓が出土し、また、石棺抜取穴の北東隅からは人骨片若干と16-2の鉄滓のほか須恵器長頸壺口縁部細片が出土した。

この黄褐色砂質土は瓦器や土師器皿・甕の破片を含む。したがって古墳副葬品については2次の移動を当然考慮しなければならないが、石棺は空間として閉ざされているため内容物がそれを越えて移動する可能性は低い。実際、人骨片は石棺内からしか出土しないし、他の多くも棺内からの出

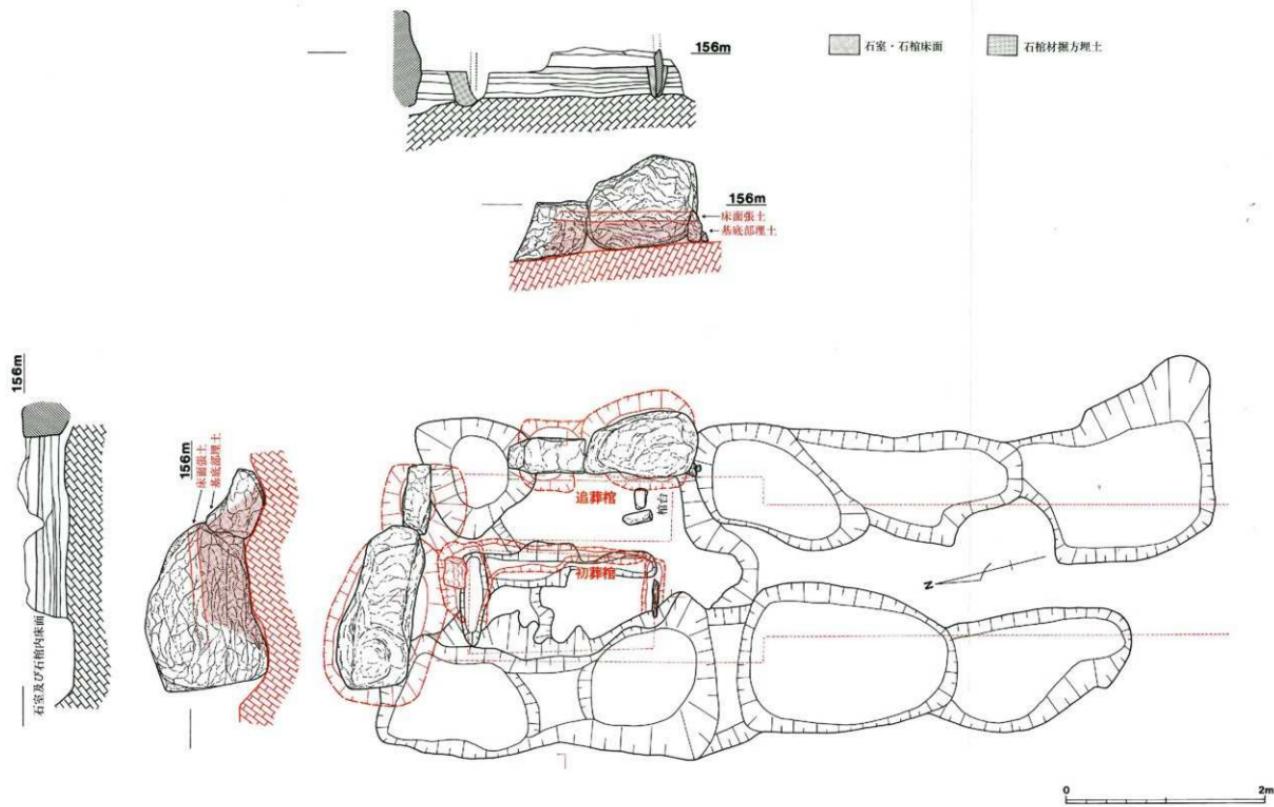


图 12 巨势山 415 号墓 石室 (S. = 1/40)

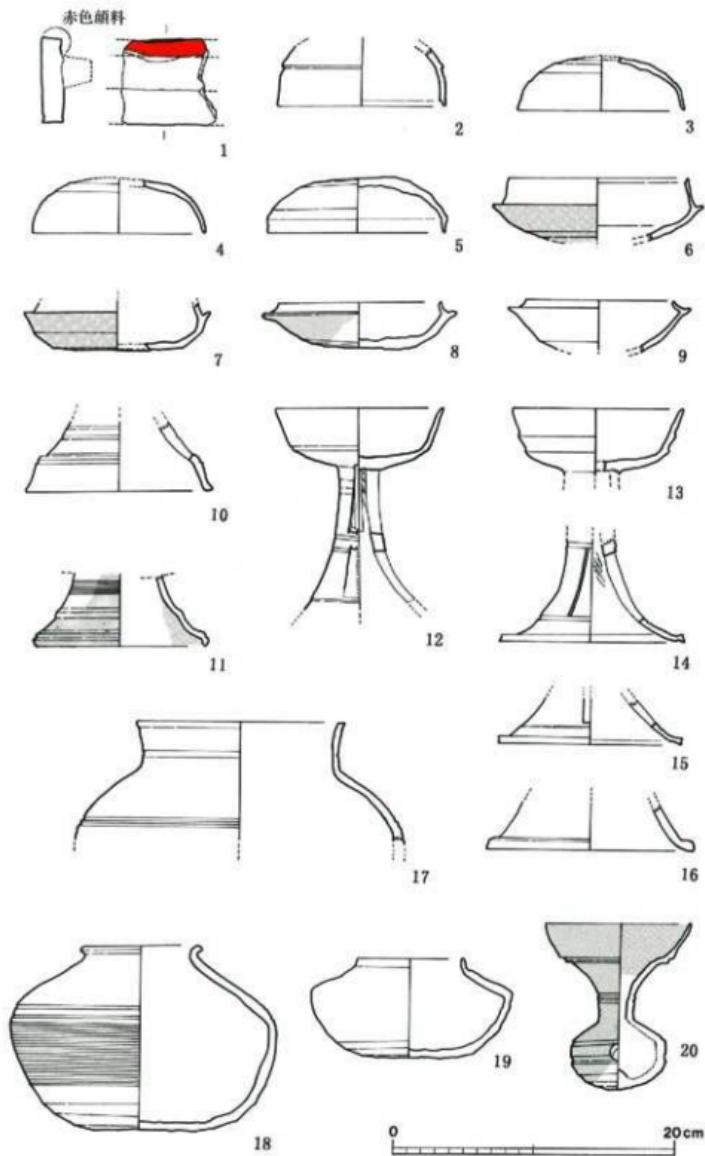


図13 巨勢山415号墳 石室攪乱土中出土土器その1 (S.=1/4)



図14 巨勢山415号墳 石室攪乱土中出土土器その2 (S.=1/4)

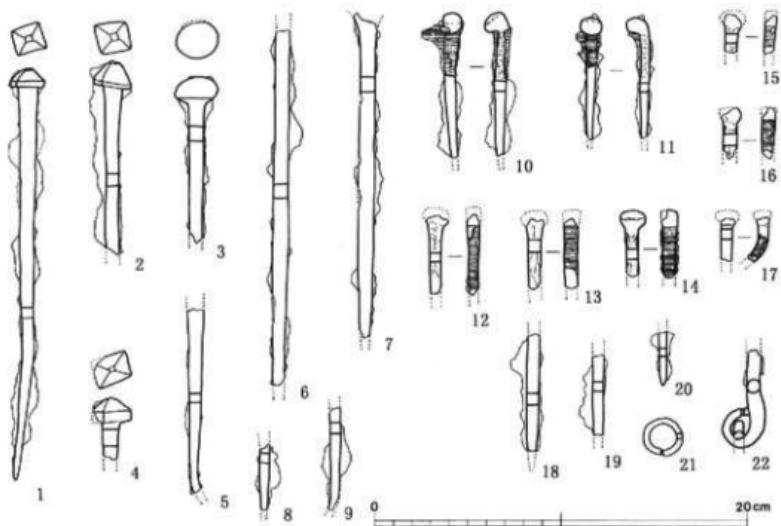


図15 巨勢山415号墳出土 鉄製品と銀製指輪 (S.=2/3)

土なので、配置まではともかく、一定程度は当初の状態をとどめているものと判断する。よって、このことからすれば銀環や鉄滓は棺内副葬品であった可能性が高い。他方、石棺材抜取穴出土の須恵器長頸壺細片は、石室石材抜取穴出土の細片と接合したので、おそらくは棺外副葬品だろう。

一方、玄室の追葬棺に伴ったとみられる遺物には15-10~18の小振りの鉄釘がある。多くは黄褐色砂質土の上層、標高にして156.1m前後の褐色砂質土からの出土で、追葬棺を推定した位置の直上に分布する。この褐色砂質土もブライマリーなものではないが、中世段階に近づから土と一緒に若干掻き上げられた程度の、軽微な移動を想定する。

同層出土の土器では13-5(杯蓋)、13-8(杯身)、14-19(短頸壺)、14-23(壺蓋)の須恵器が完形もしくはそれに近く、いずれも口縁を下にして追葬棺西辺直上の中程附近から14-19、13-8・5と、推定北小口の手前まではば直線に並び、14-23のおよそ半分と15-22の唇の引手は13-5の下に重なって出土するなどの状況が認められる。

これらについても鉄釘15-10~18と同様、大きな移動を想定する必要はないが、うち、最も低いレベルで13-5に重なって出土した14-23の残り半分は北東隅の石室石材抜取穴から検出した。このことから14-23は、石室再利用の時点で半裁されたものとみられ、層序からみてもこれらが2次的移動を被っていることは疑い得ないので、初葬棺の棺外遺物か追葬棺に伴う遺物かなどの微妙な認定是不可能である。

さて、415号墳に伴うとみられる須恵器の型式（田辺1966）には、大半を占めるTK209型式とわずかな量（13-9・14・20など）のTK217型式がある。飛鳥V（西1978）に下るとみられる杯蓋（14-28）1点は墳丘上の土坑に伴った可能性が高い。

土師器の中で注目されるのはミニチュア竈形土器（14-26）で、ミニチュア瓶の把手とみられるもの（14-27）も存在する。このほか14-29は飛鳥IIの杯A（西1978）に、また、再利用に伴う瓦器椀（14-31）や瓦器皿（14-30）は南SE-21下層期（12世紀中葉～後葉）（松本1988）にあてることができよう。

鉄釘には大振りのもの（15-1～9）も存在する。玄室か漢道かは定かにできないが、出土状況からみて、石室袖部分の追葬木棺に伴うものであろう。完形の15-1の長さは21.9cmある。頭部は半球形と四角錐形の2種があり、表面の遺存状態は悪く木質は認められない。いずれもTK209型式のうちに収まる鉄釘の型式とみられ、さきのTK217型式の須恵器は、漢道のさらに入り口に近い位置の追葬棺に伴ったと考えられる。

玄室の追葬棺に伴ったとみられる小振りの鉄釘の頭部には逆L字形のもの（15-10・11）とT字形のもの（15-12～17）がある。逆L字形のものは正面と背面、T字形のものは側面に横方向の木目が残存する。

銀環（15-21）は指輪であろう。長径2.1cm、短径1.9cmを測り、断面は円形で径2.89mm、重さは2.9gである。轡の引手欠け（15-22）は断面円形の棒を鍛接したものに亀裂が入っている。

鉄滓は2点あり、鍛練鍛冶滓とみられる。いずれも鉄棒状の組織を数本含む。16-1は4.7×4.2×2.5cm、重量31.5gの合鉄滓で、凹凸が著しい。0.9×0.8cmの断面方形の棒状組織1、径0.5cmの断面円形の棒状組織3を含み、外皮は黄褐色ないし褐色を呈する。裏面は滑らかだが炉材粘土の付着はみられない。16-2は3.0×2.7×1.9cm、重量16.1gの小塊不整形鉄滓で、凹凸が著しい。径0.4cmの断面円形の鉄棒1本は貫通し、同大の棒状組織は他に2本ある。2点の鉄滓に観察できた鉄棒または棒状組織は、製品を鍛造する過程で切断または欠落した残欠が取り込まれた結果かと思われる。

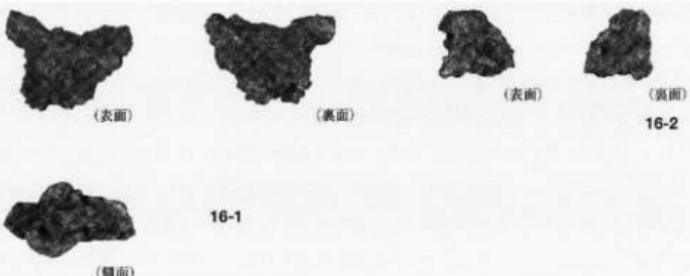


図16 巨勢山415号墳出土 鉄滓414・415・418・420・374 (S.×1/2)

第4節 巨勢山770号墳

後期古墳（414・415号墳）の築造により破壊された中期古墳である。直径14.4mの円墳で、内部主体は木棺直葬とみられる。TK208型式期の築造である。

1. 位置と墳丘（図9）

414・415号墳の墓壙検出などのために墳丘などを掘削していくと、墳丘下から地山を掘削した溝1～3が現れた。溝1と墓壙には切り合い関係はなく、同時の埋没であることは確認できたが、溝2は415号墳の墓壙に先行する遺構である。溝3の位置には414号墳に関わる墳丘盛土などは一切遺存しないが、各種状況から、414号墳と415号墳の墓壙の北を円弧でつなぐ溝2と溝3は、先行して存在した円墳（770号墳）の掘削の名残であると判断する。

770号墳の掘削の幅は、414号墳側は最大で3.2m、415号墳側は2.3～2.5mである。深さは共に最大で0.7mで、770号墳は直径14.4m程度の円墳に復元できる。415号墳の造成は地山まで及んでいたので、770号墳の墳丘や土体部は確認できなかった。

なお、先述したように、415号墳の墓壙北西隅に取り付く溝1は415号墳の付帯施設であるが、出土遺物は本来770号墳に伴つものである。

2. 出土遺物（図17）

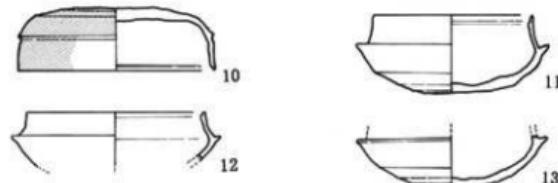
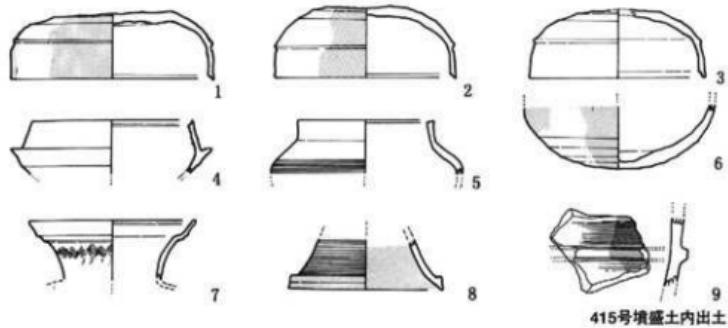
415号墳の墳丘盛土内では、770号墳の遺物が図9のa～dの4箇所で直径1～2mの範囲で一定のまとまりを持って出土している。a地点では17-1・2・6、b地点では17-7・8・18、c地点では17-3・4、d地点では17-5・9が、ときには重なり合って出土しており、何らかの施設の存在を考慮して精査したが、いずれも415号墳の盛土と判断されるものであった。

770号墳の掘削の一部とみられる溝2からも17-10～13の須恵器などが出土しているが、埋土最上層からの出土で、770号墳築造時の原位置を保つものではない。17-17は415号墳墳丘北流出土からの出土である。

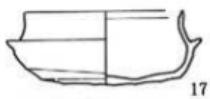
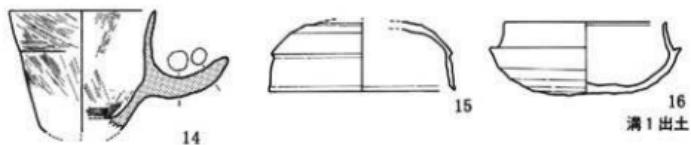
414号墳ならびに415号墳石室攪乱土出土遺物も合わせて図示した個体は、須恵器杯蓋7個体（6-19、13-2、17-1～3・10・15）、須恵器杯身10個体（6-20～22、13-6・7、17-4・11～13・16・17）、須恵器短頭壺（17-5）と壺底部（17-6）、須恵器（17-7）、須恵器高杯脚部（13-11、17-8）、上飾器把手付椀（17-14）、刀子（17-18）、鉄鎌（17-19）と、有黒斑の埴輪（6-17・18、13-11、17-9）である。

須恵器それぞれの同一個体とみられる破片はそれ以外の場所で出土している場合がある。415号墳石室攪乱土出土の13-2杯身は溝2、13-3杯蓋も溝2、13-7杯身も溝2、13-11高杯脚部はc地点と溝2に、溝1出土の杯蓋17-15はc・d地点と溝2に同一個体と思しき破片がある。

また、器種組成を考える上で参考に、確実に別個体と判別できるものの、図示できなかったも



満2出土



415号墳墳丘北流出土



415号墳盛土内出土



図17 巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物

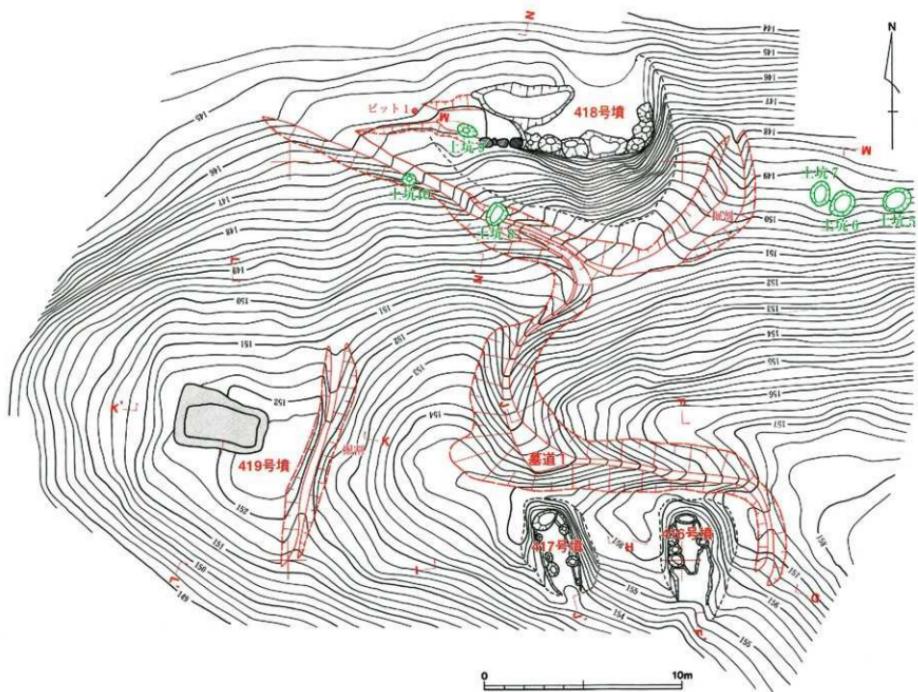


図18 巨勢山416～419号墳と周辺測量図 (S.=1/200)

のを観察表および図版に17-20以下の番号をつけて挙げておく。ここではその器種と数量のみ記すと、高杯1、短頸壺1、甕1、壺2の各須恵器と若干の土師器片がある。

以上、いずれも完形の土器の出土はなく、特に刀子(17-18)および鉄鎌(17-19)残次の出土は、これらの遺物が2次的移動を被っていることを端的に示す。そして石室攪乱土出土のものを除けば、これらの出土地点が415号墳の北東部の盛土に偏っていることは、770号墳の主体部と埴丘を破壊して415号墳の埴丘として盛り上げたことを示すものであり、遺物が一定のまとまりを持って出土することも、このことに起因するとみられる。よって、これらの土器や鉄器の多くは、本来は770号墳のおそらく木棺直葬とみられる主体部に伴ったものとみなすのが妥当だろう。無論、壺などの器種についてはその限りではない。埴輪は、図示した家形(13-1)・脚柱(6-17)の形象埴輪と円筒埴輪(6-18、17-9)以外には、1点の円筒埴輪片が認められるのみである。主体部の直上を中心に、数個体を並べる程度の使用にとどまったものとみられる。

須恵器はいずれもTK208型式(田辺1966)併行とみてよい。須恵器を伴いながら埴輪は有黒斑であることは、この時期の、特に中小規模墳の場合にはままあることである。

第5節 墓道1

(図3・18・19)

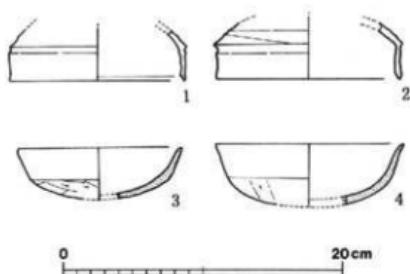


図19 墓道1 出土遺物(S.=1/4)

415号墳の西、標高157mの辺りには、現状での墓道1の東端、そして最高所がある。墓道1はこの位置で南に向きを変え、ひとたび尾根の背からはずれ、南側の斜面をさらに東に登っていくものとみられるが、尾根の南を流れる小河川のため侵食され、その痕跡は既に存在しない。

この位置以西の墓道1は、直角に屈曲して西へ向きを変え、416・417号墳の北側、

尾根の中央を12mばかり下り、再び直角に屈曲して今度は北に向きを変え、S字状に弯曲しながら10mばかり下って418号墳の南に至り、さらに北西方向に屈曲して下って14mばかり先では418号墳の墓道が取り付き、さらに延びる。検出の総延長は44mに及んだ。それ以西はやや平坦な面に出て、植林に伴う造成により削平されているため明らかにできなかったが、延長線上にある墓道2(第10節)は、元々は墓道1と同じ墓道と考えている。

墓道1は地山を掘削して造成され、断面は逆台形を呈し、底辺となる道部分の幅は0.2~0.3mが平均的である。417号墳の北西辺りが最も深く掘削され、道部分まで西の肩で最大1.8m、東の肩で1.0mほどの高さがある。このあたりは調査前にも深い溝状を呈していた。

この位置で須恵器杯蓋（19-1・2）と土師器杯（19-3・4）の破片各2個体分を検出している。上層図の図示は割愛するが、須恵器2点は表土直下の①淡黄褐色砂質土からの出土である。墓道の底からは30~34cmの高さの出土で、ここでは下層に②黄色砂質土、③黄褐色砂質土の間層を挟んで墓道1の底（地山）に至る。この位置での各層の厚みは、落葉・枯れ枝・腐植土を取り除いた後の表土（黒灰色砂質土）が5cm、①は15cm、②は9cm、③は12cmである。

土師器2点は地山直上の③黄褐色砂質土から出土した。その厳密な縦年の位置付けは困難であるが、後期古墳に通有の形態であると言えよう。須恵器出土の①層はその位置から北へ1mほどで途切れ、そこでの②③層の厚みは計58cmに達するが、①~③層はいずれも地山に起源する上で、有機質に起源する土壤の混入は認められない。また、墓道1の中でも最も深く、掘方の急な一面に相当するために、調査中、一度のタ立で一気に20~30cmの土砂が堆積した体験を想起するならば、墓道の造成から①層の堆積までにさほど時間の経過を想定する必要はないと考える。

この辺りの墓道1は極めて深く掘削され、肩まで2m近いところもあるので、この程度の堆積は墓道としての機能に影響を与えるものとは思えず、経験則的に言えば、むしろある程度の堆積土が無ければ滑りやすく、実際、全面地山のこの箇所の墓道の昇降には困難を伴う。

須恵器杯蓋はいずれもTK10型式（田辺1966）併行に比定でき、土師器杯も同時期のものとみて大過ないだろう。上記から①層は墓道1の造成直後に形成されたと考えるので、墓道1はTK10型式（田辺1966）併行の造成と判断する。

なお、須恵器出土位置の高さから表土までわずか数cmしかないことについては、墓道使用中の浸漬行為または使用停止後の自然流出により、①層の厚みはかなり減じられているためと考えたい。同じ場所の急傾斜地でありながら、一方で大量の堆積土の生成、一方で自然流出の可能性を想定するのは、どこかで両者のバランスが取れてほぼ不变となる高さがあって、それが現在の①層の上縁に相当すると理解するからである。

さて、この墓道1と古墳との関係をみておくと、既述の415号墳は、TK209型式（田辺1966）併行の築造とみられる（第3節第4項）ので、墓道1の方が先行して存在する。

415号墳丘下墓道（第3節第2項）は、墓道1の既に消滅したと推測される、現状の東端以東の部分と交差することになり、これに取り付いていた可能性が高い。414号墳もTK43型式（田辺1966）併行とみられ（第2節第2項）、南に開口するので、同様の状況を想定できよう。

770号墳は先行して存在した中期古墳（第4節）なので、当然のことながら墓道1とは関係を有さない。実際、墓道1の東への延長は、770号墳の墳丘復元位置から南に離れて想定され、遺構の状態とも矛盾はない。

416号墳以下の詳細は次節以降で述べるが、ここでは墓道1との関連で必要なことを記しておく。結論から先に述べれば、この調査区内においては、墓道1に併行する古墳は存在せず、後期古墳としては先行するものも存在しない。したがって墓道1は、調査区外の413号墳以東の高所の古墳

の築造に際して設けられた墓道というほかないのだが、無論、その後も墓道としての利用はされており、既述のように414・415号墳もその例であろう。

418号墳（第8節）もまた、横穴式石室の開口部に墓道1から分岐した墓道枝道を設けている。TK209型式（田辺1966）併行築造とみられる本墳の場合、墳丘端を両する掘削を東から南側にかけて巡らせるが、立地の関係で南側の掘削は墓道1と接近せざるを得ない。その掘削は6m近くにわたって20~30cm、所によっては10cm程度にまで墓道1の肩に接近するが、墓道1を侵さない。墓道1の存在が強く意識された結果といえよう。

416号墳（第6節）、417号墳（第7節）の場合には異なった利用の仕方をしている。両墳は共にTK217型式（田辺1966）併行築造とみられ、小形無袖の横穴式石室を内部主体とする。この附近では墓道1は尾根のほぼ中央を下る。416・417号墳は、あたかもこれを避けて造られた感があるが、この時期の古墳は南斜面を選択して築造されることが多く、両墳の場合においても北側の墳丘端を墓道1を利用して両する状況が認められる。つまり両墳は墓道1を墳丘背後の掘削として利用しており、むしろ積極的に選択された立地に並び造られた双墓といってよいだろう。

墓道1に関する調査地内の古墳は以上であるが、隣接する419号墳（第9節）についても触れておく。419号墳は巨勢山古墳群で初めて検出された前期古墳である。したがって墓道1とは何の関わりもなく築造された古墳で、そうであれば当然といえば当然なのだが、墓道1のいずれの位置からも急峻な斜面に阻まれ、419号墳への接近は非常に困難であることを体感することができた。「関係がない」ことにも理由があることを納得させられた次第である。

第6節 巨勢山416号墳

(図18・20~22)

長径6.6m以下の不整形の墳丘を持ち、小形無袖の横穴式石室を内部主体とし、蓋石を有する。TK217型式期の築造であろう。

415号墳の西、標高157mの辺りには、現状での墓道1の東端、そして最高所がある。墓道1はこの位置では南北方向だが、わずかに北へ進むと直角に向きを変え、尾根のほぼ中央を西へ向る。

416号墳はこの変化点を、あたかも自らの墳丘の北東コーナーに見立てたかのような位置に占地するが、この周囲には墳丘盛土は遺存しておらず、判然としない。一方、西に接する417号墳との境界は、不整形なごく浅い溝状を呈する部分もなくないがほぼ平坦で、石室を覆うための土を盛ったに過ぎない、との感が強い。次節で述べる417号墳の状況も勘案して、墳形は特に意識されなかつた、不整形の墳丘を持つ古墳とみておきたい。

墳丘土層断面図(図20)にしたがって述べると、北(F) - 南(F')方向では、墓道1の南の肩から積み上げられた盛土は高さ0.5mほど残存しており、墓道の底から測った見かけ上の墳丘の高さ

は0.8mを越えるものとなる。墓道と接する墳丘の北側においては、いずれの箇所でも墓道を埋めないようにやや控えた位置から墳丘盛土を始めている。

416号墳は墳形を意識していない古墳とみられるので、見かけ上の墳丘の高さを増そうとする意識は稀薄であったものと思われ、墓道を埋めないようにとの配慮は、まさにそのこと自体に主眼があった意識に基づくものであろうと判断される。したがって、416号墳築造後も墓道1を機能させようとする意図の存在した可能性はあるが、從来通り墓道として機能させようとしたのか、あるいは、それ以外の目的や思惑があったのかは定かではない。

東（H）西（G）方向の土層断面からは416号墳と西に接する417号墳との先後関係が判る。416号墳の西の墳丘端は、417号墳の東の墳丘端に乗るかたちで盛土されており、後述の417号墳の方が先行することになる。

416号墳の内部主体（図21）は、抜取痕から小形無袖の横穴式石室とみられるが、石室石材は全く遺存していない。石室幅はおよそ0.85m、石室長約4m、主軸はN-4度-E程度に復元できよう。床面には敷石が比較的良好に遺存した。地山面に灰黄色砂質土を敷いた後、花崗岩（角閃石黒雲母石英閃綠岩）の割石を原則として奥壁側から、多くの場合は割面を下にして置き、黄褐色砂質土で隙間を埋めて敷石面とする。

石室攪乱土からの出土遺物には釘2本（22-1・2）がある。いずれも頭部は半球形で、横方向の木目が遺存する。

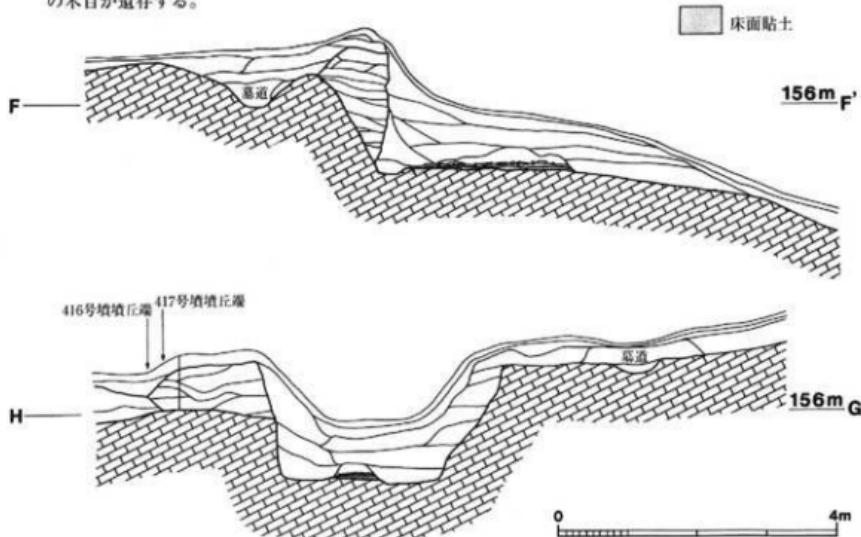


図20 巨勢山416号墳 土層断面図 (S.=1/80)

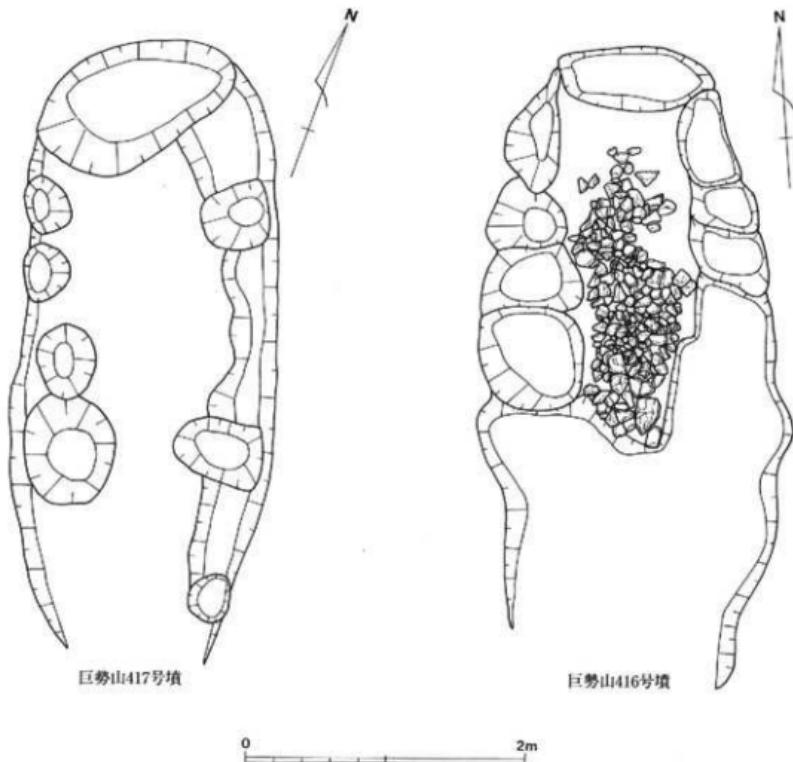


図21 巨勢山416号墳（右）・417号墳（左） 石室平面図（S.=1/40）

第7節 巨勢山417号墳

（図18・21・23～24）

長径8m程度の不整形の墳丘を持ち、小形無袖の横穴式石室を内部主体とする。敷石は有さない。TK217型式期の築造であろう。

417号墳は、416号墳の西、石室間の距離わずか6～7mに東西に並んで築かれている（図18）。前述のように417号墳の墳丘に416号墳の墳丘が乗るかたちとなっており（図20G-H・図23H-I断面）、417号墳の方が先行して築造されている。

417号墳の墳丘端は北、東、西方向（それぞれ図23のJ、H、I方向）ともに地山成形は行われて

いない。ただし北の墳丘端の石室中軸上には、ひとりでは抱えきれないほどの大さな自然石が1石だけ意識的に埋め込まれている（図23）。

墳形については、北側は墓道1に画され、直線的な辺を持つと言えなくもないが、東側は上に

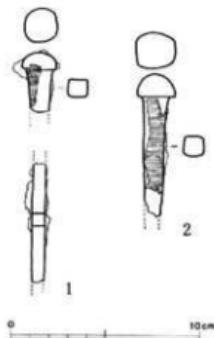


図22 巨勢山416号墳出土
釘 (S.=1/3)

乗った416号墳の墳丘を取り除いても明瞭な辺や円弧を持つものとはならず（図示省略）、西側も自然に標高を減じる尾根に、石室を覆うに足るだけの盛土を行っているに過ぎない。416号墳と同様、墓道1を墳丘背後（北側）を画する掘割に見立てた可能性は否定できないが、ここでは不整形の墳丘を有する古墳として報告しておく。なお、横断面（図23H-I断面）位置での墳丘の盛土の範囲は8.0mである。

図23の北（J）-南（J'）土層断面は墓道1の一画を縦断する。417号墳の北側の墳丘盛土（黄白色砂質土）は堅く締まっており、間層となるべき墓道1の堆積土を経ずに、その下はすぐに地山となっている。墓道1はTK10型式（田辺1966）併行の造成とみられ（第5節）、本墳はTK217型式（田辺1966）併行の築造なので、長期にわ

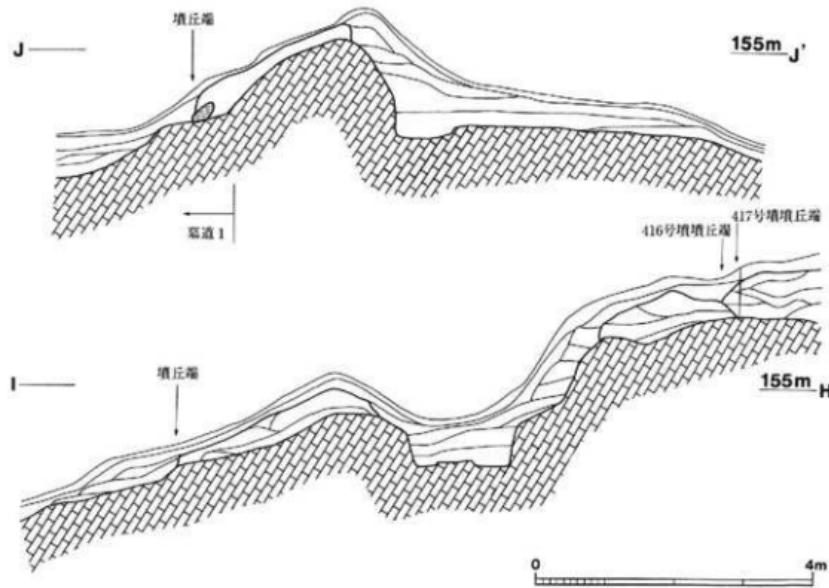


図23 巨勢山417号墳 土層断面図 (S.=1/80)

たって墓道1が使用されたと考えられることは前節で述べた。

ただ416号墳の場合と異なるのは、416号墳では墓道1の南の肩からやや控えて盛土を行い、墓道1を一切埋めないように配慮しているのに対して、417号墳では墓道1の一両を埋めるかたちで北側の墳丘盛土を行っていることである。

417号墳のこうした状況について、築造に際して墓道1の存在が意識されなかった、とは考えない。先述のように、北の墳丘端の石室中軸上には、ひとりでは抱えきれないほどの大きさの自然石が、まさに石室主軸上の墳丘盛土に1石だけ意識的に埋め込まれており、盛土を行うに際しての目安とされたとみられる。加えてこの位置の墳丘盛土は堅く締まっており、崩れるのを避けるために叩き締められた可能性が高い。東西の盛土は不整形でこのような造作はみられないから、北側にだけこうした配慮が為されることは墳丘の造成という観点のみからは理解は困難であり、むしろ墓道1をできる限り埋めない、長さないための配慮と考えるのが妥当であろう。

ただし、墓道1はこの位置で方向をほぼ90度変えて北へ下るためのコーナーを形成しているので、資材運搬の利便を図るためにか、他の箇所よりかなり広くなってしまっており、この程度埋めても支障はない、との意識は働いたかもしれない。

では、417号墳の墳丘北側の盛土は、なぜ敢えて墓道1の一部を埋めるかたちで為されなければならなかつたのだろうか。

図23の北（J）-南（J'）断面で判る通り、417号墳の墓壁は、墓道1の肩に極めて接近した位置から掘り込まれている。そのため、おのずと北側にかけての417号墳の墳丘盛土は、墓道1の北に下る急な斜面に盛されることになるのだが、これは非常に不安定かつ不自然な盛土の仕方である。これを安定させるために、叩き締めるという工程を探らざるを得なかつたものと思われるが、わざわざこうした条件の悪いところに417号墳が築かれなければならなかつた理由こそが問われるべきであろう。

おそらくそれは、417号墳が築造された時点で、既に416号墳の築造が予定されており、416号墳のためにスペースを残す必要があったからではないだろうか。417号墳は墓道1との関係で言えば、より西側の奥まった位置にあって、先行して築造されているにもかかわらず、古墳築造にあたつての悪条件を敢えて甘受している。

417号墳の築造にあたつては、416号墳のためにスペースを残し、かつ、墓道1をできるだけ侵さないという条件を満たす必要があった。そのため、やむをえず墓道1内に墳丘北側の盛土を行うに際しては、墳丘端の目安となる石を置き、墳丘を叩き締めるという作業を行つたと考えられる。

つまり、417号墳と416号墳の両墳は並び造られなければならなかつたのであり、両墳被葬者の間には、いわば双墓を築こうとする意識が存在した可能性が高い。

417号墳の内部主体は、416号墳と同様、小形無袖の横穴式石室である（図21）。やはり遺存状態は極めて悪く床面は一切残っていないが、敷石は有さないとみられる。石室幅約0.8m、石室長約3m、

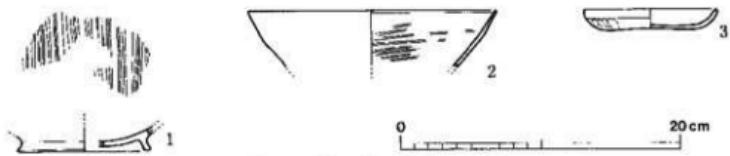


図24 巨勢山417号墳 出土土器 (S. = 1/4)

石室主軸はN-19度-W程度に復元できよう。

416号墳の石室主軸はN-4度-E程度だったので主軸の振りは20度以上あって、417号墳は南面するとは言い難いことになるが、おそらくこれも悪条件の立地の中で、墓道1を侵さずに417号墳を築造するための苦渋の選択の一つであり、本来尾根に直交して構築するべき石室を、所定の長さを満たし、かつ墓道1をできるだけ侵さぬために、石室主軸を西に振った結果とみなしえる。ここにも後に築造されるべき416号墳を強く意識した状況を看取することができよう。

石室攪乱土出土遺物(図24)には、本来417号墳に伴ったとみられる遺物は存在しない。24-1・2は黒色土器碗で、10世紀中葉頃(森下・立石1986)のものとみられる。24-3は土師器皿で灯明芯による煤が付着する。いずれも石室再利用に伴うものであろう。

第8節 巨勢山418号墳

墓道1との連結を主眼として築造されたためか、尾根の斜面という特異な立地を探る。急峻な地形と墓道1に制約されて墳丘は歪であるが、墳丘長径は14.7mを測り、一応、円墳を指向したものとみられる。内部主体は右片袖式の横穴式石室で、この占地を探るために西に開口する異例のものとなっている。緑色片岩片があり、箱形石棺が用いられたらしい。開口部には依代とみられる木柱が立てられた。TK209型式間の築造とみられる。

1. 位置と墳丘(図3、18、25)

416・417号墳から墓道1を経てさらに北側は尾根の北斜面となっており、その傾斜は急峻である。418号墳はその斜面の一画を造成して築造されるが、こうした占地をする古墳は巨勢山古墳群においても異例に属し、結果、内部主体の横穴式石室も西に開口する。

本墳がこうした立地を探った理由としては、先行して存在した墓道1と、自らの内部主体である横穴式石室に続く墓道枝道とを連結させようとする意図にあったとみられるが、地形上の制約に加え、墓道1を侵さないとの原則の制約を受け、墳形は非常に歪なものとなっている。

墳丘端を両する掘削は原則として断面逆台形を呈し、東側から南側にかけて巡る。東側の掘削は円弧を描くので円墳を指向しているらしいが、南側へ巡るにしたがって急峻な地形の制約を受けて円弧は歪になり、墓道1に接近してさらに歪さを増す。ちなみに、東側の掘削の底(墳丘寄りの位

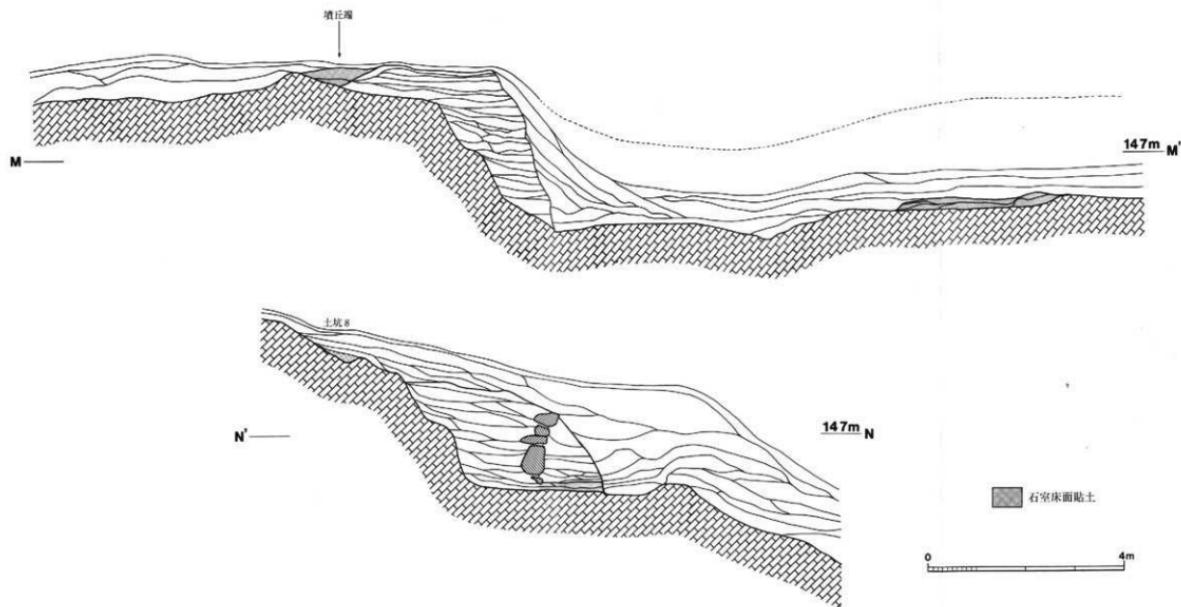


図25 崎勢山418号墳 土層断面図 ($S_{\cdot} = 1/80$)

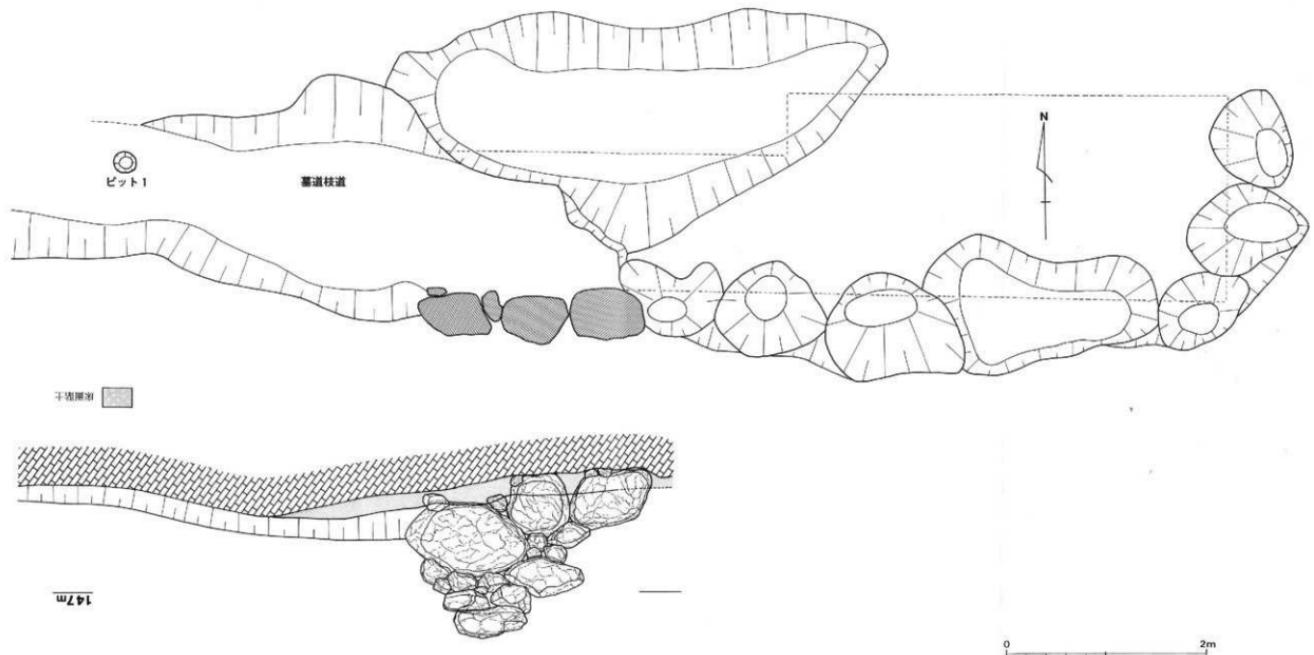


図26 巨勢山418号墳 石室 (S. = 1/40)

置）から石室底邊の端までは12.3m、北側の羨道に取り付くとみられる羨道枝道の西端までは14.7mを測る。墳丘も遺存状態が悪く、羨道枝道の部分には盛土は遺存していないので確言できないが、後者を墳丘長辺として採っておく。

掘削は羨道1を侵さないという原則は貫徹しており、両者が最も接近した箇所では数mにわたってしばは共有されるが、敢えて羨道1を残して掘削を掘削している。ただ、掘削の最も北の端に相当する位置は、羨道1と交差せざるを得ないが、その交差点は、時を経て土砂が堆積した後は、若干の平坦面を形成してたらしく、まさにその位置に後述の土坑8が掘り込まれており、破壊されている。しかしながら状況から判断して、おそらくこの位置で418号墳の掘削は初めて羨道1の肩を侵し、以北の数mは羨道1に掘削の役割を兼ねさせることになるのであろう。

また、こうした地形のため、東側と南側の墓塙は非常に深いものとなっており、墓塙の肩から底まで、南側では最大4.5mもの深さを掘削している。

墳丘上層断面（図25）によると、東（M）-西（M'）、北（N）-南（N'）ともに、墓塙埋土は原則として外から内へ積まれる。墓塙肩の高所から墓塙内へ土砂を投入した結果であろう。対して、墳丘の盛土は内から外への傾向が見られるのは、横穴式石室墳の通例である。

2. 主体部（図26）

石片袖式とみられる横穴式石室を内部主体とする。石材抜取のため、石室は開口部南壁の数石とその位置の床面が遺存するのみである。石室石材抜取痕の形状や深さから、石室全長約8.2m、玄室長約4.4m、玄室幅約2.1m、羨道幅約1.4m、石室主軸はN-92度-Eに復元したが、玄室については北壁がほとんど痕跡を残さないので、幅・長さとももう少し大きくなる可能性がある。

度々述べるように、地形の制約を受け、西（尾根の先端方向）に開口する。また、石片袖式となっているのも地形の制約によるものとみられる。先述の通り、尾根の高所に相当する東側と南側の墓塙は最大4.5mもの深さに掘削されているが、それでも最終的には墓塙底において十分なスペースを確保できず、石室南側には袖を設け得なかったと考えられる。

開口部南壁の石室残存部においては、奥壁側（東側）の基底石2石は地山を成形して楔付け穴を設け、栗石を嵌入して安定を図っているが、開口部最西端の基底石1石は床面の貼土の上に置かれて安定感を欠く。その上に乗る石は小振りで、まさに開口部先端の天井石の構架されない位置の構造といえる。石室石材はいずれも花崗岩（黒雲母角閃石閃緑岩）であるが、搅乱土中から緑泥片岩が計29.4kg分出土しており、おそらく初葬棺として箱形石棺を有したものとみられる。

石室開口部には羨道とは同じ幅の羨道枝道が取り付き、開口部から2.5m西の位置には、中央にピット1がある。直径22cm、深さは現状で18cmあり、直徑14cmの柱痕が遺存した。亡き祖先の依代として木柱を立てた儀礼（上生田1991）の一例といえよう。なお、この羨道枝道は石室開口部から約6.3m西に延びて羨道1と連結する（図18）。

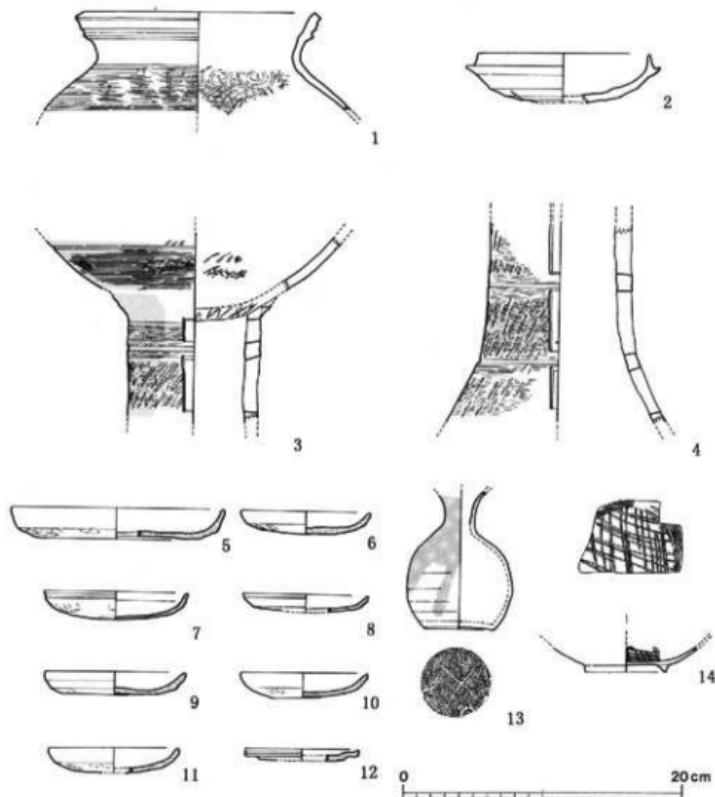


図27 巨勢山418号墳 出土土器 (S.=1/4)

3. 出土遺物 (図27~29)

混乱著しく相対に量も少ないが、本来418号墳に伴ったとみられる遺物には27-1~4の須恵器、28-1・2の刀子、29-1の鉄渟などがある。27-2はTK209型式(田辺1966)併行とみられ、他の須恵器も矛盾はない。器台の27-3と27-4は同一個体の可能性が高い。このほか杯蓋2個体、壺・高杯脚部の須恵器片と若干の土師器片を確認できる。杯蓋のう

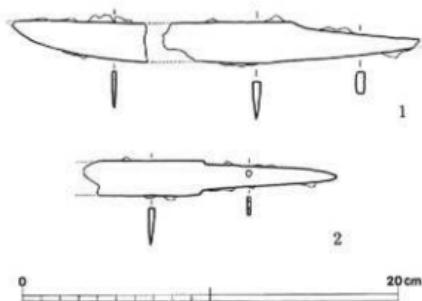


図28 巨勢山418号墳 出土鉄製品 (S.=1/3)

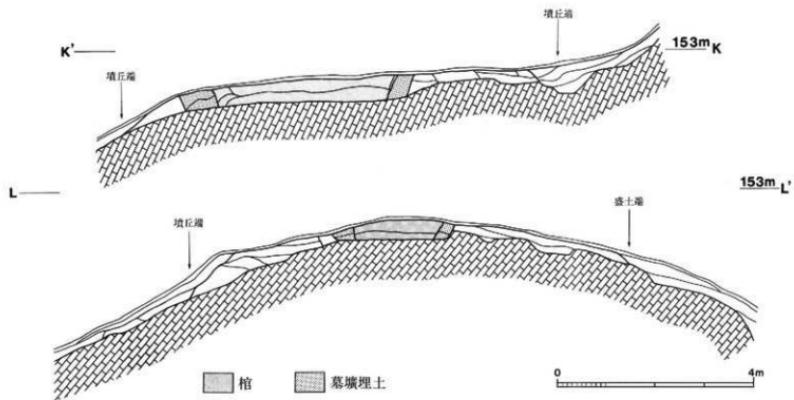


圖 30 日勢山 419 號墳 土層斷面圖 (S. = 1/80)

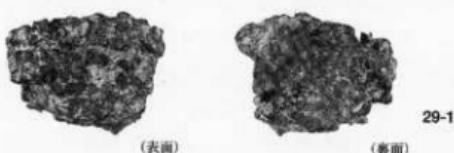


図29 巨勢山418号墳 出土鉄滓 (S. ≈ 1/2)

ものの1点と毫は堅緻ではあるが酸化炎焼成となって内外面とも赤紫色を呈する。

28-1はゆるやかな背間のやや大降りの刀子で刃渡りは約13.5cmと推定できる。28-2は両側で基尻から4.7cmの位置に目釘孔が穿たれている。

29-1は楕形鍛錬鐵治滓とみられ、6.2cm×4.4cm×2.5cm、重量は73.1g、磁着度は2である。表面は褐色を呈し小波状の凹凸を有している。黒色ガラス滓が付着する。裏面は黄褐色を呈し、1cm以下の小さな木炭痕による凹凸がある。また、裏面の一部は下方にさらに1cmほど重ね下がっており、か床が整えられていない状況を示している。

また、墓壙埋土から出土した中に須恵器杯蓋の細片1点(図示不可)がある。天井部と体部の境界に凹線を巡らせ、口縁端部は内傾する段を持ち、端部はやや丸い。TK10型式(田辺1966)併行に比定でき、元は墓道1に伴ったものと思われる。

石室再利用に伴ったとみられる石室櫻乱土出土遺物には「て」字状口縁の土師皿(27-13)と瓦器椀(27-14)がある。共に戸井-39下層期(11世紀後葉)(松本1988)のものであろう。

図27の上記以外の土師器皿(27-5~11)と水瓶(27-13)はいずれも418号墳の掘削または墓道1の上層の流出土から出土したもので、元は複数の土坑に伴った可能性が高い。水瓶(27-13)は10世紀中葉(宇野1984)のものであろう。

第9節 巨勢山419号墳

巨勢山古墳群で初めて検出された前期古墳である。尾根の先端ともいえる位置に占地する方墳で、墳丘の流出は著しいが、一辺の長さは11.3mとした。主体部は舟形木棺の直葬で、棺内に短剣1本のみを副葬する。埴輪には円筒・朝顔・草摺・不明形象形があり、前期後半の築造とみられる。

1. 位置と墳丘(図3、18、30)

この調査地を乗せる東から延びる支尾根は、414号墳から419号墳の位置まで10度前後の傾斜角で西に下った後、急に56度以上に傾斜を強め、かつ、尾根の軸をやや北に振って、再び緩斜面となり、その鞍部に後述の420、421号墳が築かれることになる。

419号墳はこのように、急に傾斜が強くなる直前に占地するので、尾根の先端に位置すると言えなくもなく、墳頂からの視界は東を除き広く開けている。

419号墳は巨勢山古墳群で初めて検出された前期古墳である。尾根の高所側、墳丘東側に直線的に延びる掘削を設ける。北側と西側の盛土は比較的旧状を保っており、掘削と同様、いずれも直線的な方墳である。センター・ライン（図18）では北から西にかけては151.0m辺りに盛土の端が有るが、南西側は崩落している。

図30の断面位置での盛土の規模は、東（K）-西（K')は8.8m、北（L）-南（L')は8.9mを測るが、斜面が急なために、盛土はかなりの流出が見込まれ、地山成形部分も崩れている可能性があるので、墳丘規模としてこのままの数値を用いるのは不適当である。掘削の長さを基準に、一辺11.3mの方墳としておきたい。この規模は東西方向でも矛盾なく適用できる。掘削の底から11.3m西側ではほぼ150.0mのセンター・ラインに合致するが、そこから2mばかりやや緩い斜面が続くので、この位置を地山成形の施された墳丘端とみることが可能である。

153m

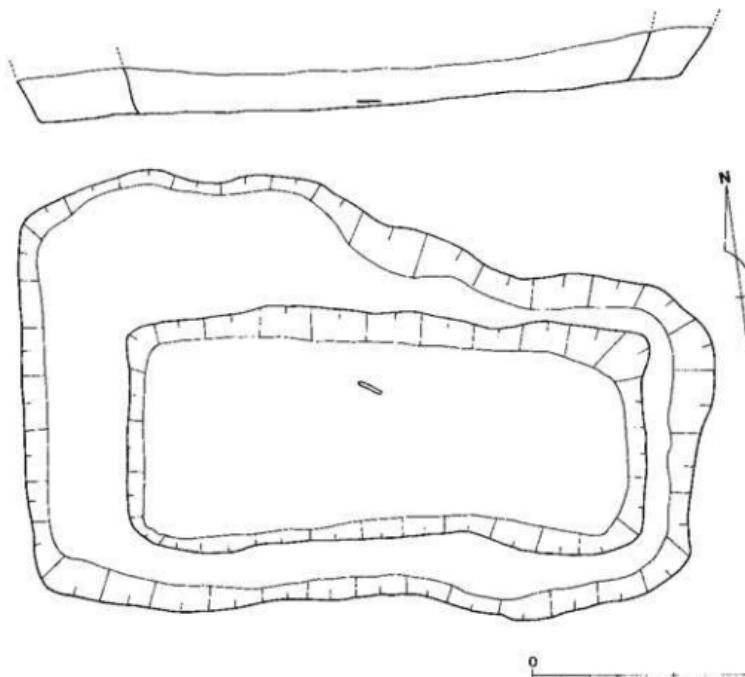


図31 巨勢山419号墳 主体部 (S. = 1/40)

盛土は、北側では外から内に積まれるが、他では逆に内から外へ積まれる傾向がある。おそらくは、北側以外は掘削の掘削によって生じた土を中央に盛って、順次周囲に広げたためとみられ、北側についてはやや傾斜が強いので、他より手をかけた結果であろう。

なお、本墳の位置には先行する弥生時代の遺構があって、図30の南半（L'方向）に一部その断面が、地山を掘削した遺構として示されている。これらについては後に第14節で取り上げる。

2. 主体部（図31）

木棺直葬で、盛土の後、ほぼ墳丘の中央に墓壙を掘削している。墓壙は主軸をほぼ東西に採り、長さは現状の最大で4.92mある。幅は西小口は2.6m、東小口は2.2mであるが、北西コーナーはやや膨らむので最大の幅は3.1mを測る。

中央には木棺が直葬され、各辺はやや傾斜を持つ舟形木棺とみられる。なお、こうした舟形木棺は巨勢山古墳群では通有である。主軸はN-81度-Wにとり、棺底の傾斜はほとんどないが、墓壙の形状からみて頭位は西とみられる。棺底の長さは3.46m、幅は1.40~1.20mで、やはり西の方が若干広い。現状での木棺上辺は長さ3.70m、幅は1.6m前後である。

副葬品としては、鉄劍1本（図32）が棺のほぼ中央、主軸からはやや北寄りに、鉾を東にして出土した。棺底からわずかに浮いた状態だが、棺の厚みによるものであろう。棺の主軸方向からはやすれて出土しているが、これが佩用によって生じたものか、他の原因によるものかについては判然としない。乱掘の影響は見られないが、他に検出できた副葬品はない。

3. 出土遺物（図32~37）

主体部に伴う唯一の副葬品は、棺内出土の鉄劍1本（図32）である。刃部の全長は16.5cmと短く、短剣といってよいだろう。刃部の断面はレンズ形を呈する。鉾はかなり摩滅しており、丸みを帯びる。刃部と茎に木質が遺存しており、鞘と把の痕跡であろう。柄の形状は直角で、茎は途中で折れており、わずか1.6cmしか残存しない。茎は次第に幅を減じるが、元は比較的長かったとみられる。柄から刃部への5mmにかけては、何かを巻き付けた痕跡が認められる。茎が欠失したために、そう

した方法で把に固定したのであろう。

図33~36は419号墳に伴うとみられる各種埴輪であるが、原位置を保つものではなく、多くは419号墳の墳丘斜面の流出土から出土した。いずれも破片なので個体数の認定は困難であるが、原則として別個体と思われるものを図示した。全て有黒斑とみられる。

埴輪について上田睦氏をはじめ、埴輪研

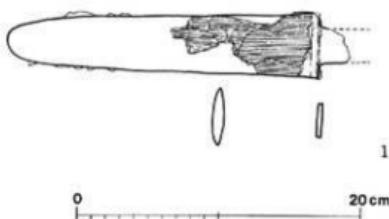


図32 巨勢山419号墳 剣 (S.=1/3)

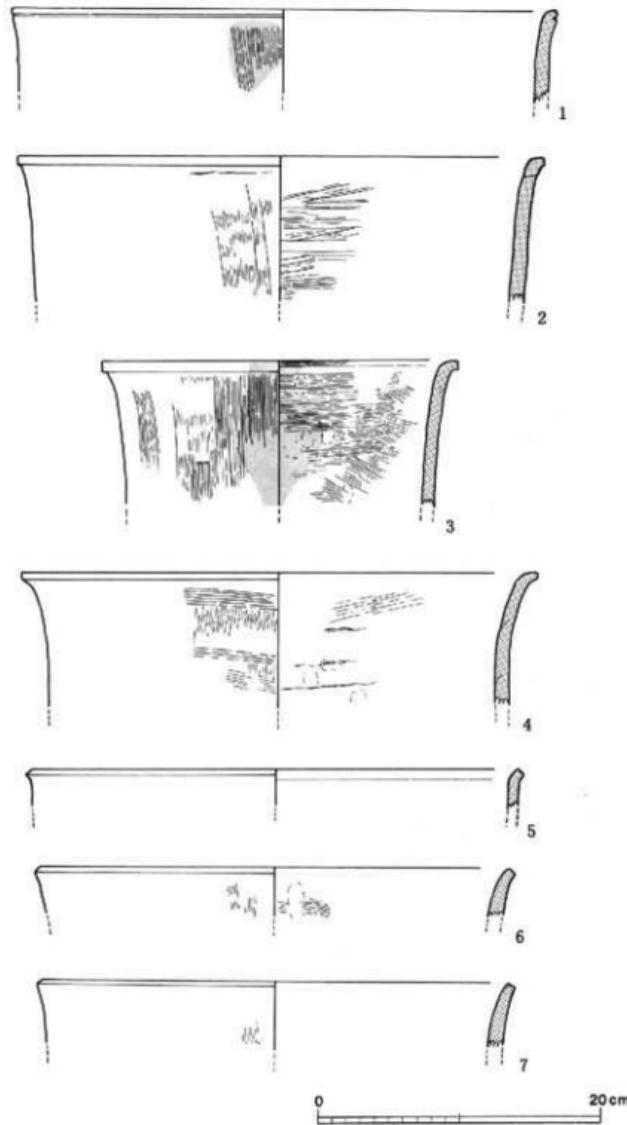


図33 巨勢山419号墳 出土埴輪その1 (S.=1/4)

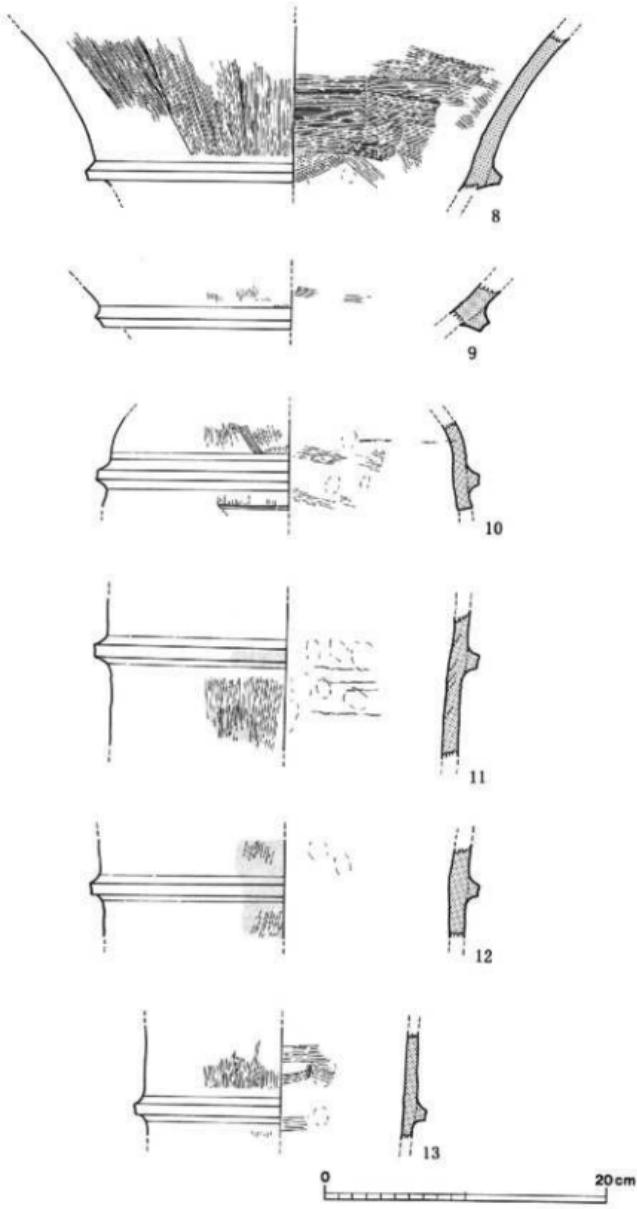
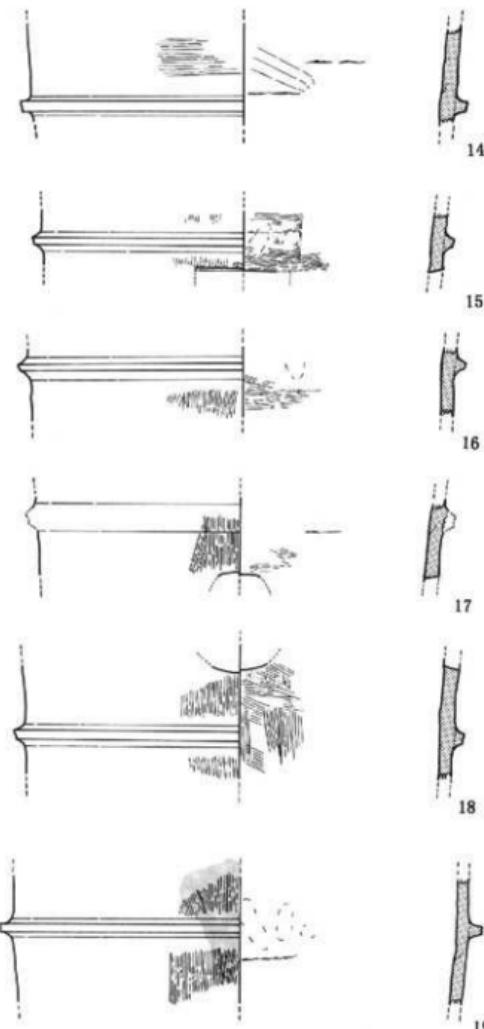


図34 巨勢山419号墳 出土埴輪その2 (S.=1/4)



0 20 cm

図35 巨勢山419号墳 出土埴輪その3 (S.=1/4)

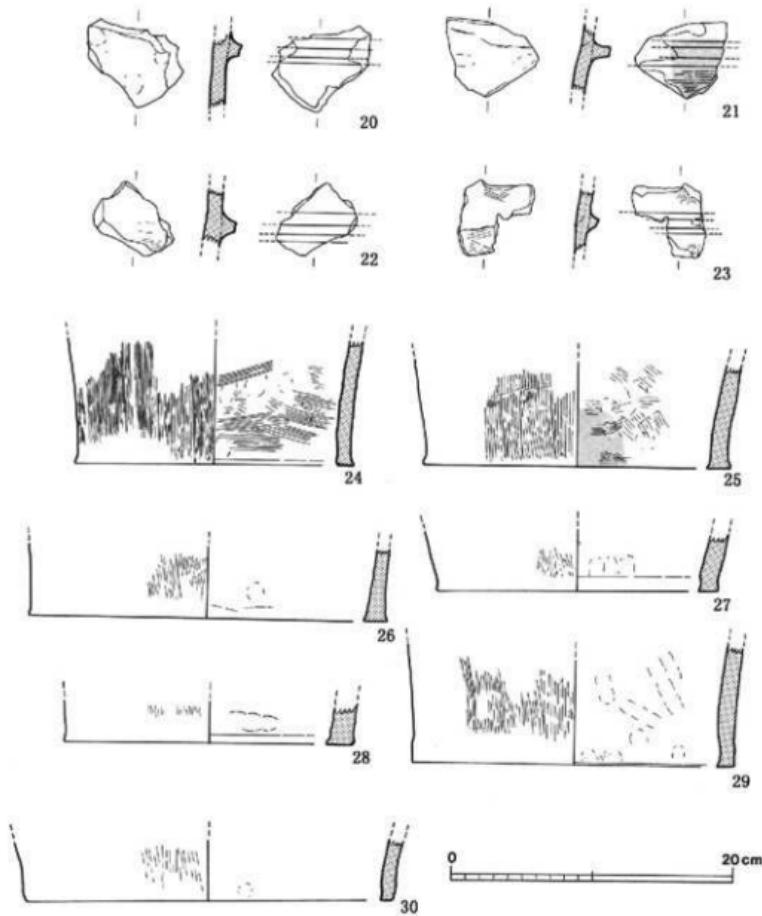


図36 巨勢山419号墳 出土埴輪その4 (S.=1/4)

究会の諸氏から多大なご教示を得、また上田氏からは考察をいただき、第7章に掲載することができた。記して深謝したい。

円筒埴輪と朝顔形埴輪のプロポーションは、破片のために明確ではないものの、逆円錐台形を呈する型式とするには上方への開きが少なく、いずれも正円筒形かそれに近い形状を呈するとみられる。なお、朝顔形埴輪の肩部(33-10、37-6)はわずかに張るが、球形を呈するというほどではない。

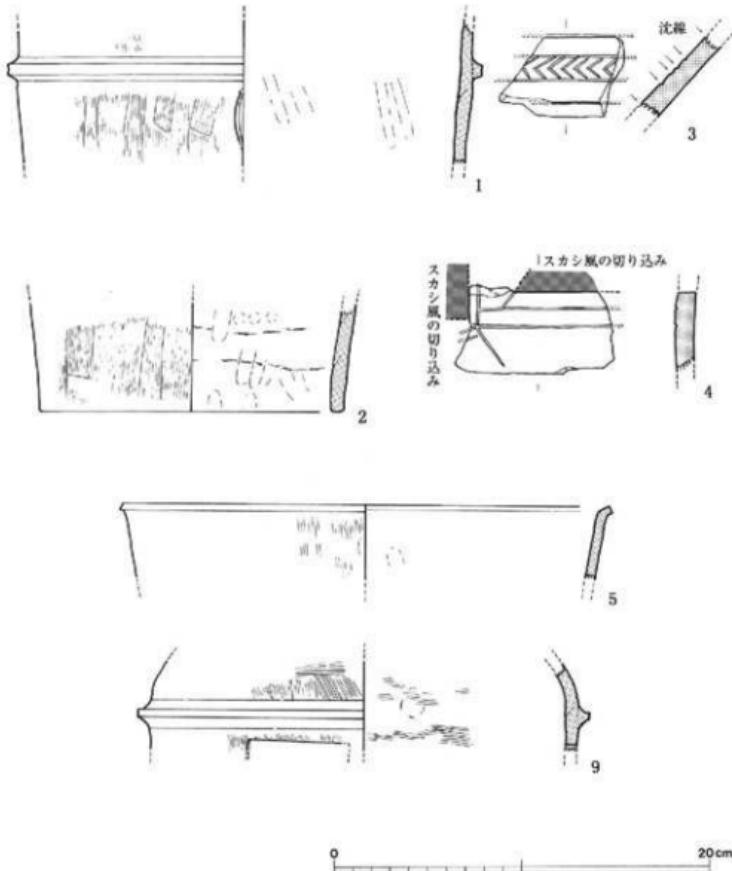


図37 巨勢山419号墳に伴ったとみられる各所出土の埴輪 (S.=1/4)

外面調整は、1次調整のタテハケのみのものが大半を占める。2次調整のヨコハケが一部でも認められるのは33-4、36-21、37-6のみで、内面調整はハケまたはナデおよび両者の併用である。

33-1～7は円筒埴輪の口縁部である。33-1はやや特殊で、口縁直下にやや下から布か革のようなものをあて、斜め上にややえぐり込んだようなかたちで沈線を施すが、他はいずれも外反して端部に面を持ち、33-2～5は下辺を摘まんで調整する。なお、33-5～7は小片のため、角度や径などは必ずしも正確ではないかもしれない。

円筒または朝顔形埴輪のスカシ孔は、全体の形状が判るものは皆無である。直線的な刃を持ち、おそらく長方形とみられるもの 3 点（34-10, 35-15, 37-6）のほか、円形に見えるものも 3 点（35-17・18, 37-1）ある。

ただし、37-1 のスカシ孔では左上にわずかに切れ込みが入っている。砂粒の動きから、円形部分は右廻りに工具が動いてスカシ孔を切っていることが判るので、これを円形スカシの最後に切れた箇所の痕跡とみることはできない。一方で、半円形の場合には複数の回数の工具の動きを想定できるので、おそらく半円形スカシの一部とみられる。ただ、残存部分でひとつ円弧を為し、下方への角度が急に過ぎる様はやや難なつくりといわねばならない。35-17 はタガがはずれているために上ドを特定できないので、35-17・18 のスカシ孔も半円形の一部かもしれない。

タガの形態では、36-21 は、高く断面長方形に突出して上下刃をつまみあげるが、これを除けば、高い断面台形で上刃をつまむものが大半を占める。

形象埴輪には草摺（37-3）と不明のもの（37-4）がある。草摺（37-3）は綾杉文帯と無文帯を繰り返す。37-4 は図示の断面方向にはわずかに曲面を持つが、ほぼ平坦な板状を呈し、線刻にあわせて三角形と四角形のスカシ風の切り込みを有する。家形埴輪の妻に付く飾りかともみられるが定かではない。線刻の底には赤色顔料が遺存しており、外面には全面に赤色顔料が塗布されていたらしい。

4. 塗装時期

本墳の築造期の比定に際しては埴輪が一つの要素となる。円筒埴輪や朝顔形埴輪の編年について、川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」（川西1978）を基礎としつつも、さらなる見直しや細分が図られている。

外面調整については、川西編年ではⅤ期の指標とされた、1 次調整タテハケのみで 2 次調整を行わないものは、小形品の場合、川西編年に換算すれば、おそらくともⅡ期の末葉には存在することが知られる（天野1989）ようになった。本墳出土例も右黒斑なので、こうした例に相当する。

ト勢山419号墳の埴輪は、瓦谷古墳群の埴輪の第 3 群（石井1997）に近いものとみられる。それは、「正円筒形を呈し、口縁部が外反もしくは L 字形の突帯状を呈する。最下段に半円形スカシ穴、その他の段に長方形スカシ穴が施される。突帯の間隔は、比較的均等に割りつけられたものが多い。……」というもので、前期後葉に位置づけられている。また、主体部に伴う副葬品は短剣 1 本と少なく、加えてこの短剣は、鉋が丸みを帯びるほどに使い込まれ、革が折れてもなお工夫して使っている状況は前期的様相といえる。以上から前期後葉に位置づけておきたいと考えた。

しかしながら、近年の埴輪の編年研究の進展には目を見張るものがある。本墳の埴輪について上田恵氏から玉稿を賜り、本書第 7 章に掲載することができた。同稿によると、瓦谷古墳群の埴輪第 3 群は細分が可能であり、本墳の埴輪はその後方に相当するという。上田氏の言う（瓦谷第 3 群後

半)は中期初頭から中期前葉に位置づけられており、さきの前期後葉との見方とは齟齬が生じる。

上田氏の検討の緻密さは高く評価しており、あればこそ玉稿をお願いした次第である。ただ、可塑性の高い粘土を素材とする埴輪において、各箇所の微細な特徴が果たしてどれほど正確に製作の時期を反映しているのか、また、こうした特徴の変化に、例えば畿内という大きな地域を包括し得るほどの普遍性を見出せるのか、などの疑問を、玉稿をお願いしながら誠に失礼なことではあるが、報告者は未だ試しきれないでいる。

従来、中期前葉の室宮山古墳の築造を契機として巨勢山古墳群は群形成を始めると考えられてきたし、現在も大勢としてはそれで良いと考えている。室宮山古墳の円筒埴輪は、ほぼ円形スカシに統一され、B種ヨコハケを多用する個体が少なくない(木許・藤田1996、藤田・木許1999)。また、突帯(タガ)間距離に畿内の他の古墳との間に統一性が見出せる(坂1998)というから、当地においては、室宮山古墳の段階においてこそ、円筒埴輪にも一定の規格が採用されたといつて良い。

本墳(トトロ山419号墳)の埴輪は、室宮山古墳の埴輪製作技術の影響下にはない。併行期にあったとすれば、当地のエポックとなった室宮山古墳の各種影響を受けざるを得ないとみられるから、少なくとも本墳は、室宮山古墳に先行することは疑い得ないと考える。従って、上田氏の言う年代観の幅の内では、中期前葉までは下らないとみみたい。

また、室宮山古墳より先行するからといって、同墳に継続する系譜関係を認めようとするわけではない。あくまでも室宮山古墳に先行して、単独もしくはそれに近い状況で築かれた「前期古墳」とみるのが報告者の立場である。また、上田氏が言うように、実際の年代の上では中期初頭の古墳であるとするならば、この地域においては中期初頭は未だ中期古墳時代には入っておらず、前期古墳時代の遺制を引きずっていたとみることが可能であれば、報告者の理解とかうじて接点を保ち得る。

以上から報告者としては、本墳の築造時期について、前期後葉から中期初頭という幅を持たせて考えておきたい。

第10節 巨勢山420号墳

直径20~24mの、群集墳中のものとしては人形、腰高の円墳で、右片袖式と推定される横穴式石室を内部主体とする。墳丘は、核を形成するかのごとく、中心部を版築状に突き固める。出土の須恵器にはTK43型式併行とTK209型式併行があり、このほか副券品には鉄地金銅張縫糸形杏葉や鉄洋などがある。

墳丘の東側は墓道2を利用して削しているところもあり、また、墓道2は墓道1の延長に本來は相当し、北側斜面へ抜けていくものとみられる。

1. 位置と墳丘、および墓道2(図3、38~39)

414号墳から419号墳に至るまで10度前後の緩斜面で西に下った尾根は、419号墳の西では56度前後

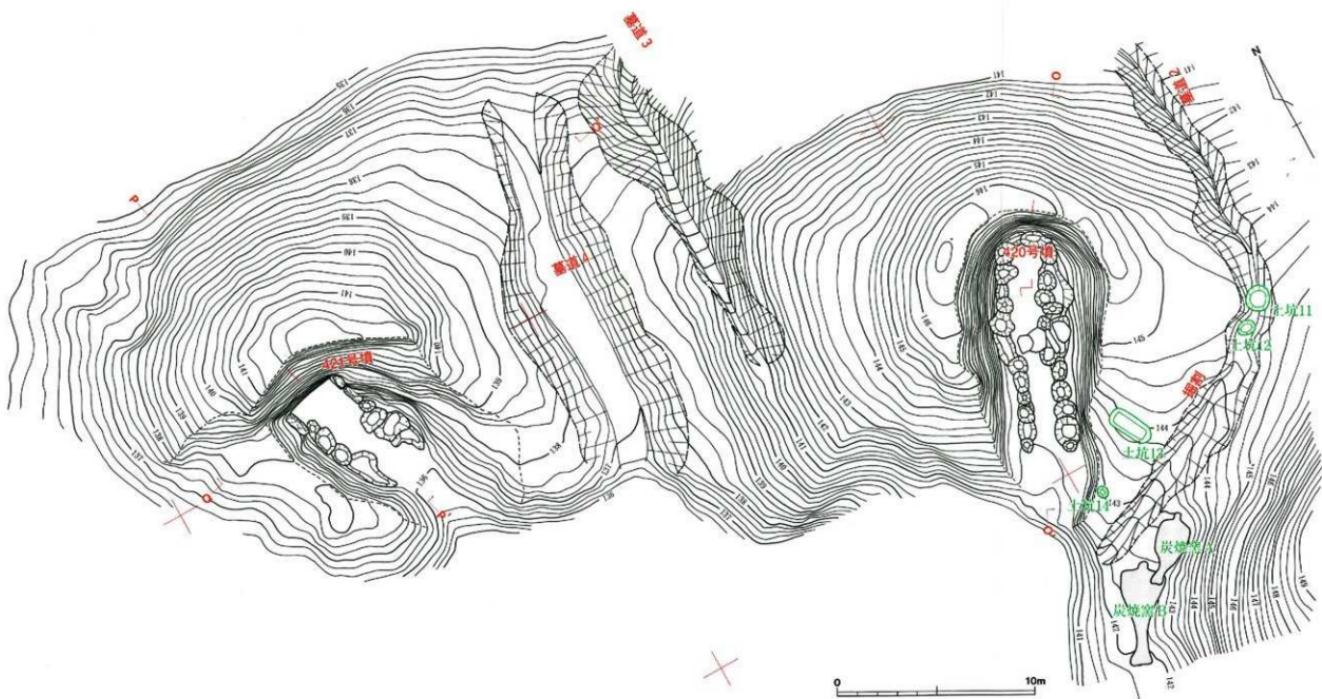
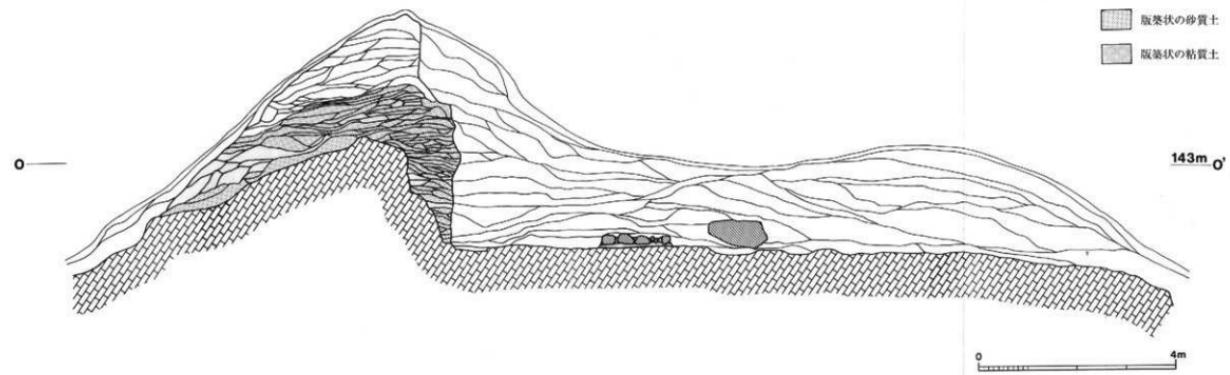


图 38 巨势山 420·421 号墳と周辺測量図 (S. = 1/200)



の急斜面となった後、再び14度前後の比較的緩やかな斜面となり、420・421号墳を乗せる。420号墳は、この傾斜変換線に掘削を設けて墳丘の東側を画するが、この掘削は元々あった墓道2から延長したもので、墓道2は北側に向かうにつれて420号墳の墳丘から離れ、尾根の下方に抜けていく。

420号墳の掘削が墓道2を切り崩し始めた開始点は土坑11の北2mの付近にあると考えられる。これはまず第1に、土坑11との位置関係でいえば約2m北側、墓道2の底部のコンターラインでいえば144.0mの位置で、真南に登ってきた墓道2がやや急に西向きに角度を変え、全体的にも角度の変更が認められること、第2に、墓道2は逆三角形に近い断面形を呈するに対して、掘削の断面は底部の広い逆台形となっており、両者の性格に違いが認められること、などにより判断できる。

なお、先述の墓道1は、418号墳の開口部から続いた墓道の枝道につながり、それ以西はやや平坦な面に出た後は、横林に伴う造成のために削平されて行き先が判らなくなっているが、その延長線上に墓道2があるので、墓道1と墓道2は本来同じ墓道であった可能性が高い。両者の連結箇所を確認できないのは、420号墳の掘削の造成により、その位置が破壊されているためと思われる。

このように、420号墳は墓道2を利用して墳丘を画して築造されており、当然、築造や葬送にあたっても墓道2（墓道1）とその延長の掘削が用いられたとみられる。

さて、420号墳は掘削と墳丘の形状により円墳とみられる。掘削の墳丘寄りの底から玄室の中央と推定した位置の距離を計測すると、11.0m～14.1mで、南側の開口部に至るに従って数値は大きくなる。また、玄室中央推定位置から北には8.9mで盛土端に達し、以下は急な斜面となる。一方、西には8.7mで盛土端に達し、コンターラインでいえば143.50～144.00mの辺りに地山成形を施して、やや平坦な面を形成する。こうした位置関係からいえば、主体部は墳丘の中央ではなく、やや北西に寄った位置に設けられているといえる。墳丘の規模については、南北は石室開口部に続く前庭部南端が自然崩壊しているので確定はできないが、約24mに復元でき、東西は土坑11の位置で19.6mを測る。石室床面からの墳丘の高さは4.7mもあって、群集墳内の古墳としては比較的大きいものといえるだろう。

墳丘は核となる部分は版築状に突き固められており、しかも墳丘規模がやや大きかったために調査は困難を極め、加えて同様の条件の421号墳の調査工程との調整を図る必要があったために、遺憾ながら本墳の調査は不十分なまま終了せざるを得なかつたところがある。

最大の痛恨事は、墳丘土層断面図作成のために南北、東西方向共にトレンチを設けたが、地山に起源を持つ土を版築状に突き固めた墳丘や墓塚埋土の掘削、およびそれと本来の地山との判別に手間取り、東西方向のトレンチは途中で放棄せざるを得ず、また、墓塚の調査はほとんど手付かずのままで残したことである。墳丘土層図（図39）は北（O）～南（O'）方向のみ完成させることができた。

墓塚内の埋土は、北および東西共、いずれも版築状に突き固められている。版築「状」とここでいうのは、必ずしも粘土と砂が互層にならずに、砂質土ばかりで構成されたり粘質土ばかりで構成さ

れる箇所が多いからで、これは掘り起こした地山をそのまま用いたためである。しかし極めて堅緻で、地山と誤認すること度々であり、ときには地山より堅いと感じることさえあった。

版築状の地業は墳丘の盛土になども北側では高さにして1.2mばかり墓壙の肩を超えて為され、墳丘の「核」ともいべきものを形成して墳丘端を両したのち、さらにその上に通常の盛土が1.2mほど積まれる。盛土は内から外へ為されるのが原則である。版築状の部分は概ね水平が意識され、突き固めつつ幾度かの単位に分けて盛られている。こうした状況も東西方向でも同様である。

2. 主体部（図40）

乱掘著しく、石室石材は元の位置には全く遺存していない。抜取痕から判断すると、右片袖式の横穴式石室とみられ、玄室幅1.81m、玄室長4.65m、羨道幅1.41m、羨道長約5.6mに復元したが、概ね大過ないであろう。石室主軸はN-23度-Eで、玄室南半の中央付近には敷石が遺存する。

敷石は図39でも示したように、地山の上に黄褐色砂質土の間層を5~10cmばかりの厚みで敷詰めたのち、図40の通り、長径30~40cmの人頭大の花崗岩（黒雲母角閃石閃綠岩）自然石を置いて間隙を割石で詰めるものである。敷石面が初葬面か追葬面かの判断の材料は本墳では得られなかつたが、後述する隣接の421号墳の状況に鑑みると、黄褐色砂質土の間層と呼んだものが本来は初葬面であり、敷石面は追葬面と理解するのが妥当と思われる。

羨道部の中央には、袖石付近から開口部へ抜けるとみられる排水溝がある。埋土には全く石材を含まないので、素掘りまたは有機質の材料を用いた排水溝とみられる。検出状態での北端と南端の排水溝底での比高差は約8cmである。

3. 出土遺物（図41~44）

搅乱が著しく原位置を保つものは一切ないが、本来420号墳に伴つたとみられる遺物には41-1~21および42-22~30の須恵器、43-1~6の馬具、43-7・8の釘、43-9の刀子、44-34~36の鉄滓などがある。図示の遺物の大半は石室搅乱土からの出土だが、43-9のみ後述の土坑13の周囲の流出土から出土した。

41-1~8の杯蓋および41-10の杯身はTK43型式（田辺1966）併行とみられる。また、41-9の杯蓋と41-11~17の杯身はTK209型式（田辺1966）併行とみられ、埋葬が複数の時期に亘って行われたことを概ね示すものと思われる。このほか図示し得なかった須恵器破片には人形、壺、長脚2段スカシの高杯などがある。

馬具としては杏葉（43-1）、轡（43-2~5）の残欠と鞍具指金（43-6）とおぼしき破片がある。

杏葉（43-1）は鉄地金銅張輪葉形杏葉の一部とみられ、約3mm厚の地板に約2mm厚の銀金を置いた後、金銅板を被せて鋲を繁打するが、外周側では金銅板は銀金の下に巻き込まれるかたちとな

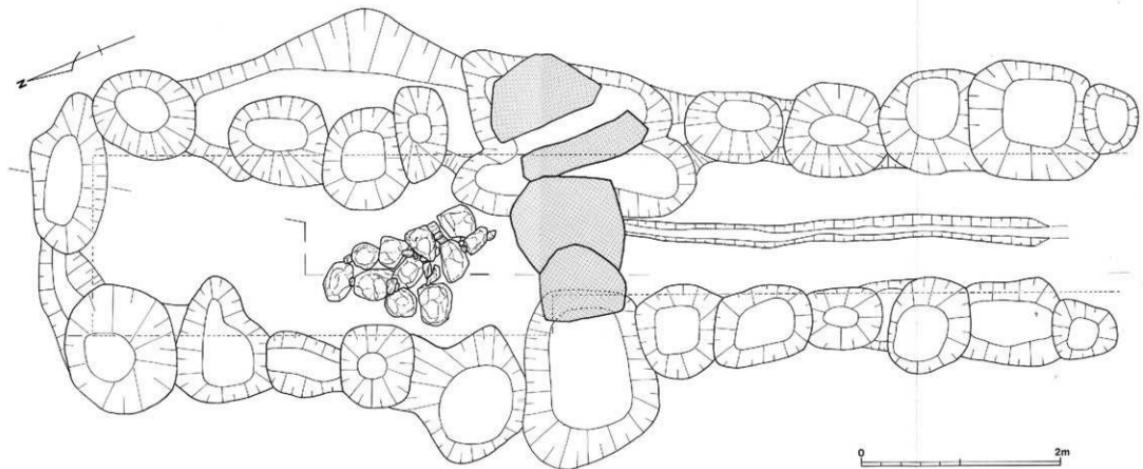


图 40 巨泰山 420 号墓 石室 ($S_{\cdot} = 1/40$)

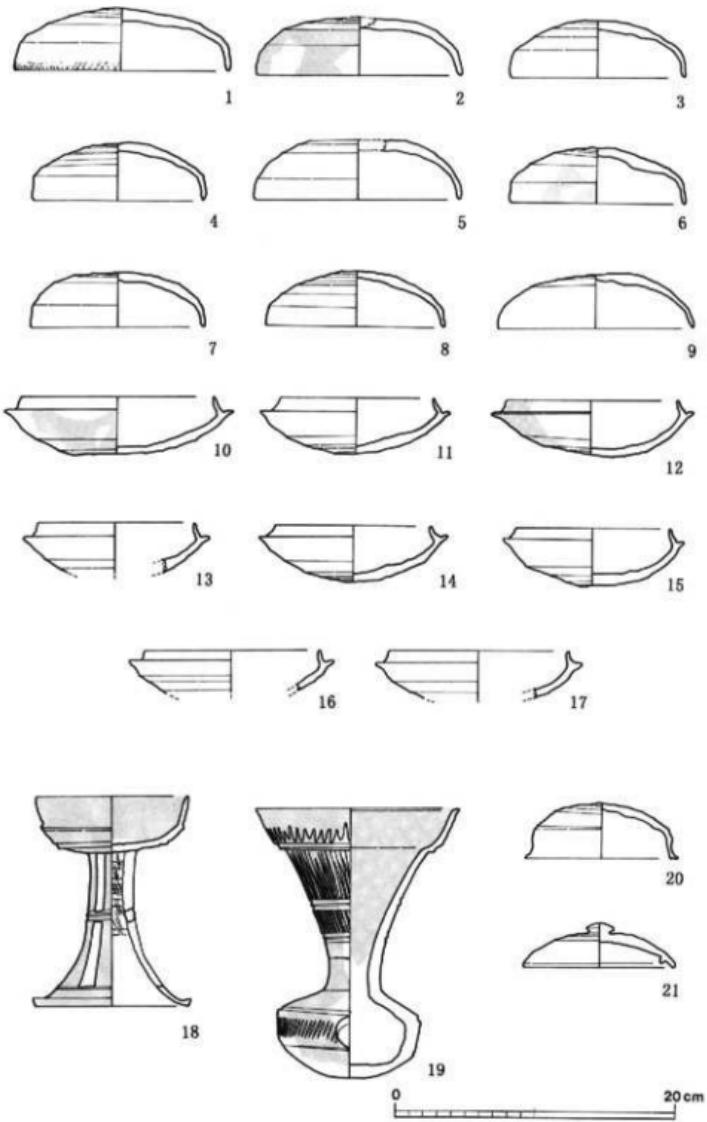


図41 巨勢山420号墳 出土上器その1 (S.=1/4)

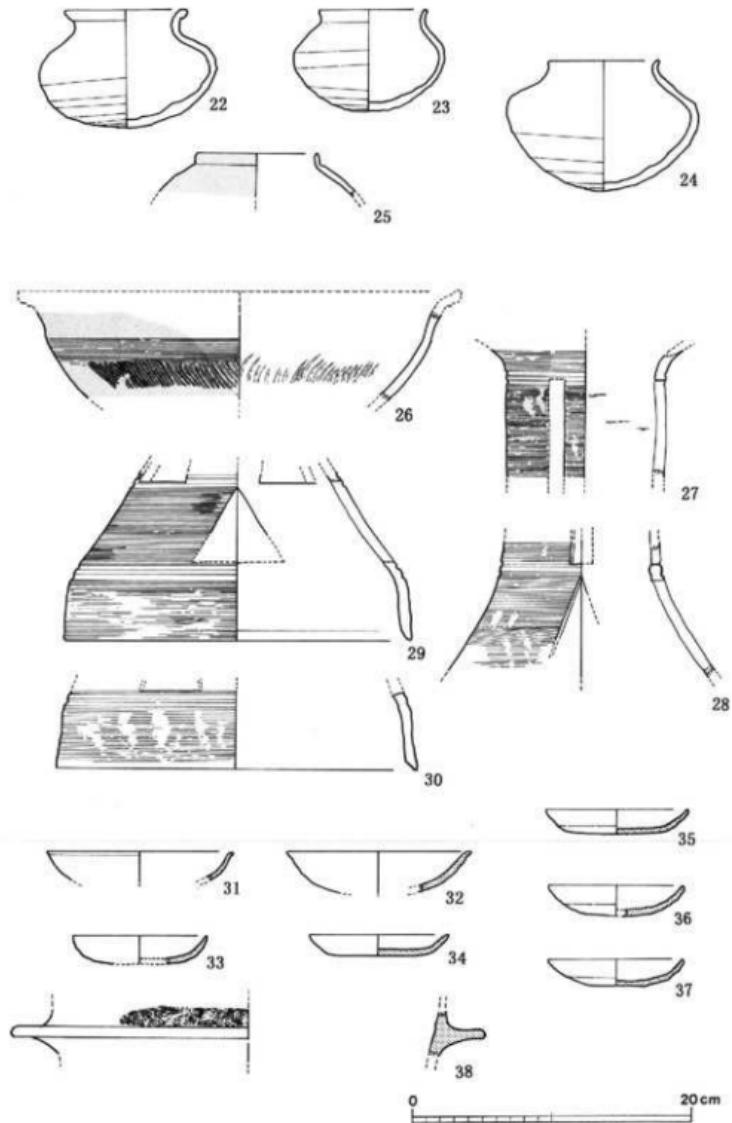


図42 巨勢山420号墳 出土土器その2 (S.=1/4)

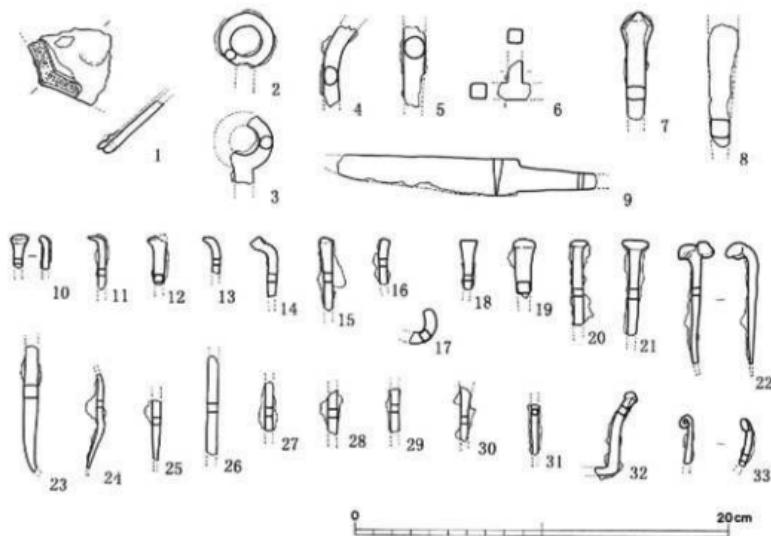


図43 巨勢山420号墳 出土鉄製品 (S.=1/3)

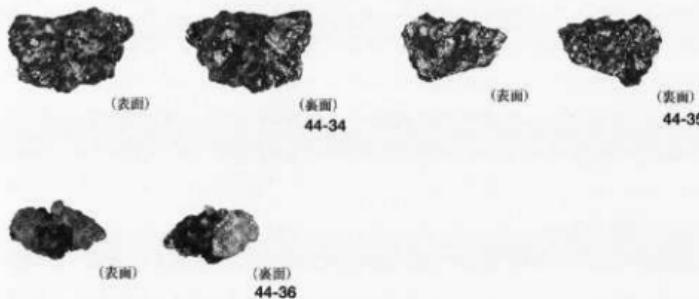


図44 巨勢山420号墳 出土鉄片 (S.=1/2)

っている。縁金は紙が打たれる部分では周囲より1mmほど円形に凹ませてあり、また、縁金と透し板は共造りとなっている。透し板の文様は不明だが、単なる鋸とみるには不自然な、円弧を描く痕跡が認められ、おそらく唐草文などが描かれたものと思われる。鋸はいずれも鋸頭を欠失しているが、鋸脚の周囲に縁青を観察できるものがあり、鋸頭にも金銅板が被せられたらしい。いずれも地板を貫通する。

鉢具指金らしき破片(43-6)は、断面方形でやや特殊であるが、鋸化の状態から古墳時代の遺

物と判断する。断面形は漸次凹形に移行していくものとみみたい。

43-10~33は釘の類だが、双頭のもの(43-22)、打ち損じによる屈曲を伴うもの(43-32)、歯状のもの(43-33)など、古墳時代の釘にはまず見受けられないものがあり、鋸化の状態も近似していることから、後の時代の石室再利用、または墳丘上にあったとみられる歴史時代の土坑に伴うものと判断する。

44-34と44-35は橢形鍛錬鍛冶滓とみられ、接合する。元は径10センチを超える大形の洋の破片とみられる。堅微で重量感があり、洋中には多数の砂礫の混入が認められる。表面には1cm程度、裏面には5mm程度の小さな木炭痕が認められる。外面は褐黄色、裏面は灰黒色を呈する。磁着度は3で、34は4.8cm×3.0cm×2.3cm、重量は42.1g、35は3.9cm×2.4cm×2.0cm、重量25.7gである。44-36は3.6cm×2.2cm×1.8cm、重量20.4g、磁着度5の鉄塊系遺物で、表面には小さな木炭痕による凹凸がある。鉄質は均一ではない。

このほか、各所から元来419号墳に伴ったとみられる埴輪片が若干量出土している。

第11節 墓道3、墓道4

(図3、38、45)

墓道3は420号墳の西側を北西方向から南東方向に、尾根を斜行して登りくるもので、南端部付近では崩れて行き先が判らなくなっているが、検出し得た北端部付近では大きく直角に近く屈曲し、北東に抜けるので、先述の墓道2との尾根北側における連絡を想定できる。

墓道4は420号墳と、後述の421号墳のはば中央、尾根が鞍部状になって平坦面を形成する位置のはば中央に、尾根方向に直交して設けられた掘削状の遺構で、底はほぼ平坦、部分的には幅2mを越える幅広のものである。ほぼ中央部の底面近くから図45に図示した須恵器12点のほか、体部や低脚高杯脚部の破片などが、直径2m前後の比較的まとまった範囲で出土した。これらの須恵器のうち杯身・杯蓋はMT85型式(出辺1981)併行に比定でき、他の器種についてもこの型式の範疇で提えることが可能である。

420号墳から421号墳の東側にかけては、420号墳をはさんで、東に墓道2(墓道1の延長とみられる)、西に墓道3と墓道4があって、墓道が集中する傾向がみられる。420号墳はTK43型式併行期、421号墳はTK209型式併行期の築造とみられ、他方、墓道1(墓道2)はTK10型式併行期、墓道4はMT85型式併行期の造成とみられるので、墓道の方が両墳の築造よりも先行する。したがって、両墳の築造を墓道造成の契機とすることはできないので、この付近に墓道が集中する理由は、地形的な条件によるところが大きいものと思われる。

420号墳が墓道2を利用しており、またそれを用いて墳丘を削している事は先述の通りだが、一方で、これら複数の墓道がどのように用いられ、あるいは、使い分けされていたかは判然としない。

一つの連続する尾根筋にあっても複数の墓道が存在することは、それが旧来の墓道の自然崩落な

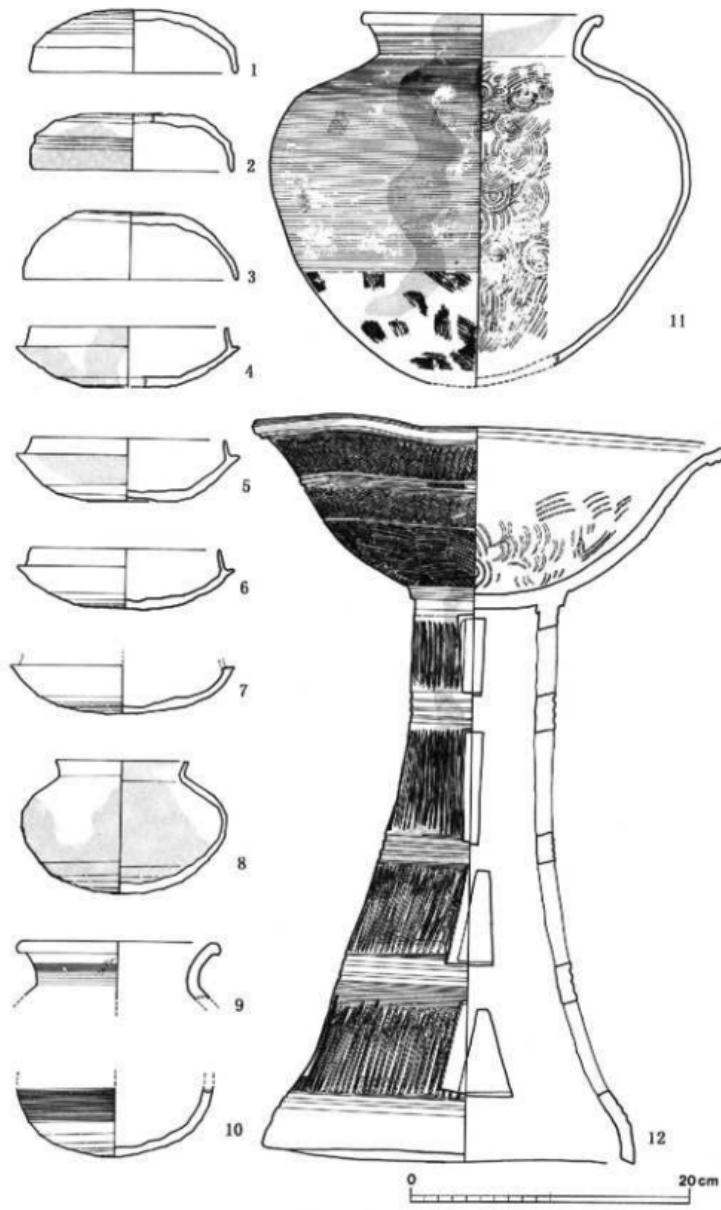


图45 墓道4 出土土器 ($S_r = 1/4$)

どの要因によったとしても、古墳の築造の度に墓道は（もしくはその一部にせよ）新たに造成する場合もありえた事を示している。

また、これらの墓道はいずれも後期に入ってから造成されたとみられることは注意が必要である。つまり、こうした尾根を深く掘削して造成する形状の墓道は、巨勢山古墳群の場合、横穴式石室を内部主体とするようになってから必要とされたとみうけられるということである。

第12節 巨勢山421号墳

直徑19.0～19.5mの群集墳中の古墳としては大形、腰高の円墳である。墳丘は、核を形成するかのごとく、中心部を版築状に突き固める。横穴式石室は右片袖式と推定され、玄室幅2.1m、玄室長推定4.0mの大形である。円石墳といってよく、奥壁は3段積みで高さは3.3mある。床面は3面あり、初葬面（第1次床面）が土床、追葬面（第2次床面）はその上に敷石を施し、第3次床面はさらに土床を張る。

須恵器は第2次床面に帰属するもので、T K 209型式併行である。築造期もこの時期に想定する。初葬面の遺物には鉄地金銅張込金具、鉄鎌、鑿、両頭棒状鉄製品など、追葬面の遺物には鉄地金銅張忍冬柄円文心葉形杏葉、鉄地金銅張込金具、鉄鎌、両頭棒状鉄製品と須恵器、上飾器などがある。須恵器杯は自然釉の観察により、窯での焼成位置が判るものも多い。

初葬面遺物と追葬面遺物には共通項が多く、特に鉄鎌では微細な継工までも一致が見られ、初葬面被葬者から追葬面被葬者への贈与を想定することができる。

1. 位置と墳丘（図3、38、46）

421号墳はこの尾根の最西端の先端部に占地し、下層の771号墳を破壊して築造されている。東には尾根が鞍部状になって平坦面を形成する位置のはば中央に墓道1がある。

421号墳の墳丘は、東側は植林による削平が著しく、旧状をとどめていない。北西側では擾乱部分の直前の137.00mのコンターライン付近に傾斜の変換があるが、他の位置では明確ではない。

墳丘土塁図（図46）によって墳丘端を確認すると、北側（P方向）においては、石室奥壁から10.6mの位置に、西側（Q'方向）においては石室中軸から11.6mの位置に、東側（Q方向）においては石室中軸から7.4mの位置にそれぞれ墳丘端がある。つまり、石室はやや西側に偏って構築されることになるが、これは尾根先端部に築造された地形状の制約によるもので、西側においてはここから急激に下る急斜面となっているためである。

墳丘は、北西側も北から西にかけての部分も円弧を描くので、円墳とみてよい。規模については以上の状況から直徑19.0m～19.5mと推定することができる。また、墳丘は極めて高く、石室床面から墳丘残存部分の最高所まで6.8mを測る。

421号墳においても420号墳と同様、墳丘の中心に核ともいべきものを形成している。やはり砂

 版条状の砂質土
 版条状の粘質土
 旧表土（それに起源するもの含む）

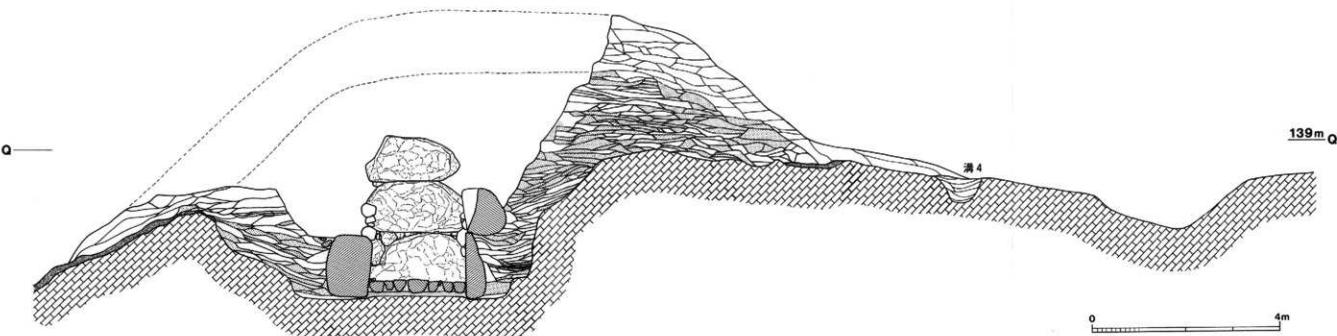
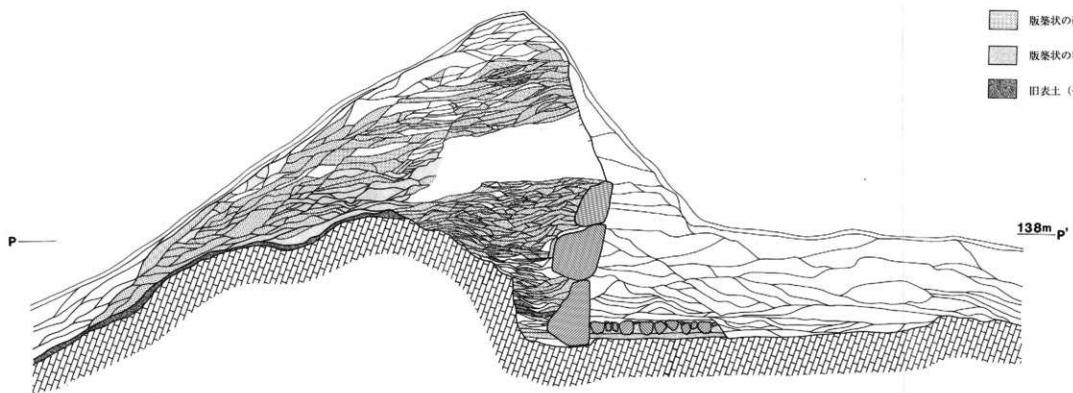


図 46 巨勢山 421 号墳 土剖面図 (S. = 1/80)

質上と粘質土は互層というわけではないが、版築状に堅く叩き締められており、北側においては石室床面から約6.0mの高さまで版築状の地業で墳丘を積み上げ、さらに通有の盛土を約0.8m行っている。東側では同じく版築状の部分の高さ約4.6mに、通有の盛土の高さ約1.2mが残存している。

また、墳丘は原則として旧表土を基底として積み上げられているが、特に北から北西側にかけては、この旧表土直上のそれに起源を持つ黒灰色砂質土から、先行する771号墳に伴ったと見られる古式の須恵器片が後述のように多く出土している。

なお、P-P'断面において空白となっている部分は、墳丘があまりに高いためにトレンチ崩壊の危険を避けたことにより生じたもので、つまり、深さ約2mを限度に掘削や調査を行った後は、石室内は調査中で土砂や石材の崩落の危険があったために上位の墳丘を除去できず、しばらく作業を持えざるを得なかったが、ついには作業行程との兼ね合いで、どうしても掘削や調査が間に合わなかつた部分である。石室の調査がほぼ終了したのち、その人員を退避させてこの高さまで墳丘を重機で削除し、さらに墓壙調査のためのトレンチを掘削するなどの必要があった。良好な墳丘資料を得ながら十分な図面を残せなかつたことは遺憾ではあったが、事故防止を優先させた結果であり、与えられた調査の条件下ではやむを得ぬ措置であったと思っている。

2. 主体部（図47）

主軸をN-19度-Wに採る横穴式石室で、石材の抜取痕から右片袖式とみられる。玄室幅2.10m(2.08~2.12m)を測る巨大なもので、玄室長は約4.0m、羨道幅は約1.4mに復元できる。

奥壁は造有状態良好で、3石の巨石によって構成される。天井石は本来、最上段の石材の上には直接架けられたものとみられる。図示した敷石の床面は追葬面であるが、ここからでも石室の高さは3.03mを測り、初葬面では3.30mの高さがある。初葬面まで下がった状態での石室立面図は完成させることができなかつた。

奥壁の基底石はほぼ垂直に据えられるが、2段目と3段目は76度程度の持ち送りとなる。基底石は幅2.10m、高さ1.38m、奥行き0.87mで、断面は三角形の石材の最長の辺を壁面に用い、壁面では中央が高く周囲が低い弧を呈する形状のため、左右に生じた間隙を他の石材を用いて埋め、持ち送りのために必要な傾斜面を巧みに作り出している。その上に乗せられる2段目は高さこそ基底石に劣るが最も大きく、幅2.28m、高さ1.23m、奥行き0.98mあって断面も台形状を呈し、3段目はやや偏平で、高さ0.96m、幅1.98m、奥行き0.65mとやや小ぶりである。

左右側壁はそれぞれ2石と1石の奥壁寄りの基底石を残すのみである。左(東)側壁には奥壁寄りにかろうじて2段目の石材を残すが、壁面となる面は石材抜取時に打ち削られていた。左右基底石は奥壁の基底石の高さと概ね揃い、また、左(東)側壁の2段目も奥壁2段目に高さがほぼ揃う可能性が高く、目地を通す意識があったことが判る。側壁に関しては基底石から85度程度の持ち送りが行われている。

右（西）側壁の1石の場合には断面直方体に近いが、左（東）側壁の基底石2石は比較的偏平な石材を用いている。奥壁の基底石も比較的偏平な石材で、基底石としては安定度を欠くものとも思われたが、これは基底の壁面の高さや広さを得ることが優先された結果であろう。奥壁基底石は左右が低く、他の石材を用いて基底の壁面を構成していたが、これも必要な高さの長方形の壁面を取ることのできる石材が得られなかつたためと考えられる。そして、壁面を広く取ることが要請されたために、比較的偏平な石材を用いざるを得なかつたわけだが、その安定度を増すために採られた方法が版築状の地業であったとみることができよう。

壁面にはいずれも剖面が認められ、比較的平滑に調整されている。石材種は敷石と共に、いずれも角閃石黒雲母石英閃綠岩である。

床面の敷石は追葬に伴うもので、人頭大もしくはそれ以上の大きさの自然石の小口面を部分的に平滑に調整したものを奥の中央から順に敷き詰め、間に割石と褐色砂質土を詰める。敷石には初葬面に裏面側の小口が接したものや埋め込まれた状態になっているものが多く認められ、敷石1石の厚みは17~32cmに達する。なお、初葬面と追葬面の比高差は23~27cmで、初葬面は地山に黄褐色砂質土を8cmほどの厚みで敷くことによって形成されている。

3. 遺物の出土状態（図48）

石室玄室の残存部分では、初葬面・追葬面ともに遺物が出土している。追葬面の遺物は敷石面（第2次床面）に伴うものではなく、敷石面からは一切遺物は出土しなかつた。

図48に示す状態は、敷石の上に厚さ7cmのよく縮った黄灰色砂質土が貼られた、第3次床面での出土状態である。ただし16~18は中世の石室再利用時に、第3次床面が若干の攪乱を被った位置にあり、原位置を保っていない。

第3次床面では、遺物は奥壁と左（東）側壁の形成するコーナー部分に集中して出土した。敷石面（第2次床面）の片付け行為によって集められたものであろう。つまり第3次床面からは第2次床面の遺物が出土することになる。玄室もおよそ1/2しか残存していないこともあるが、第3次床面そのものに伴う遺物は見出せない。したがって第3次床面形成の時期は不明だが、よく縮った土が意図的に貼られており、古墳時代（ここではTK217型式期）のうちに収まるとみられる。

図48の遺物には須恵器（1~15）、土師器（16）、鞍とおぼしき漆塗りの木製品（17）、杏葉（18）、鉄鏡（茶色で図示）がある。器台（14）の口縁の破片が杯身（6）の下から表面を上にして出土していること、甌（15）口縁の破片が器台（14）の脚部の下から单独で出土していること、土師器壺（16）の上半は左（東）側壁に接する位置にあるのに対して下半は離れた位置にあること、鉄鏡の鏡身の方向が一致しないことなどは、これらの遺物が片付けによる2次の移動により集積させられたことを示すものである。

初葬面（第1次床面）の出土遺物には須恵器は無く、全て鉄製品である。後述のように多くは奥

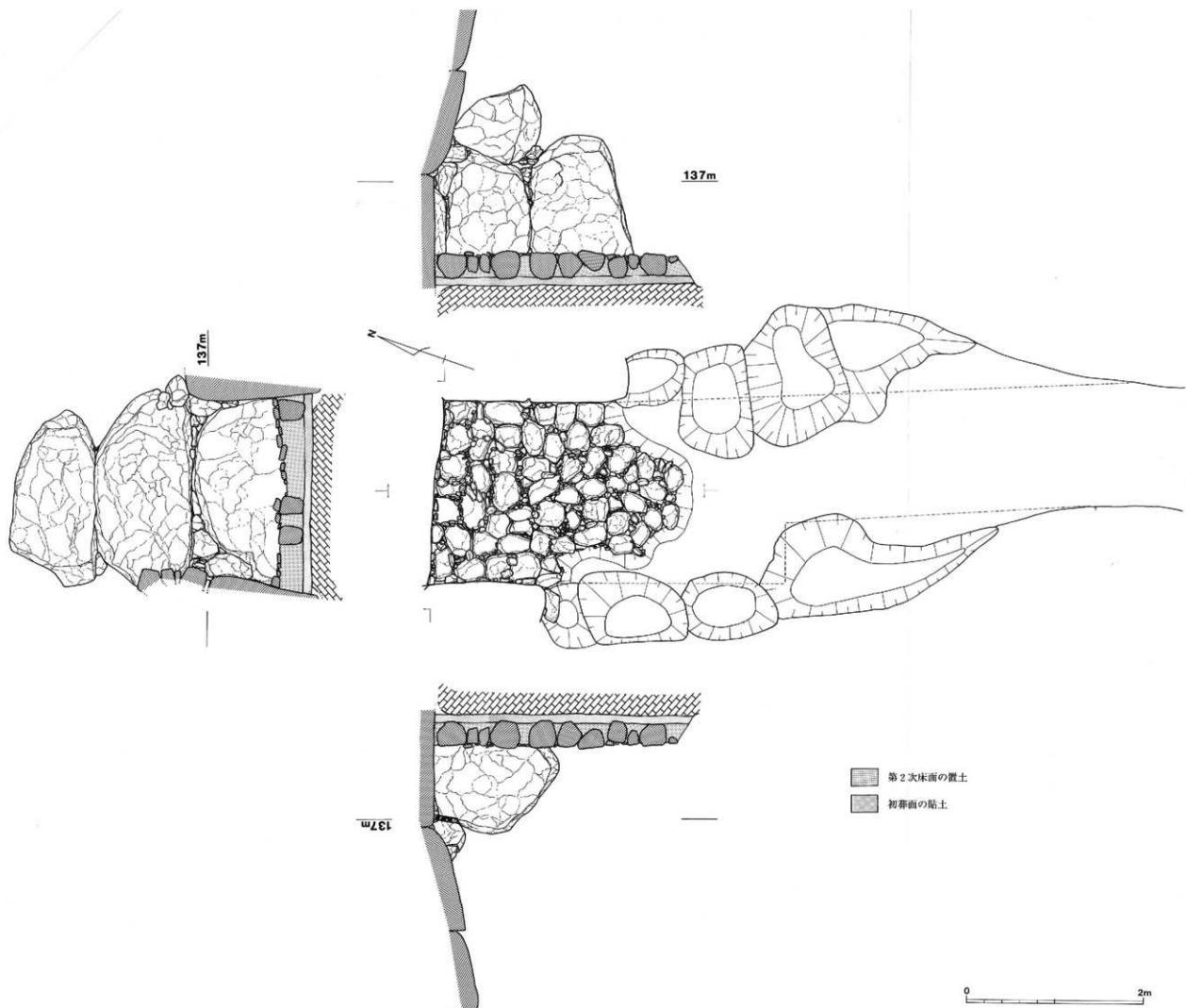


図47 百蔵山491号地 石室 (S = 1/40)

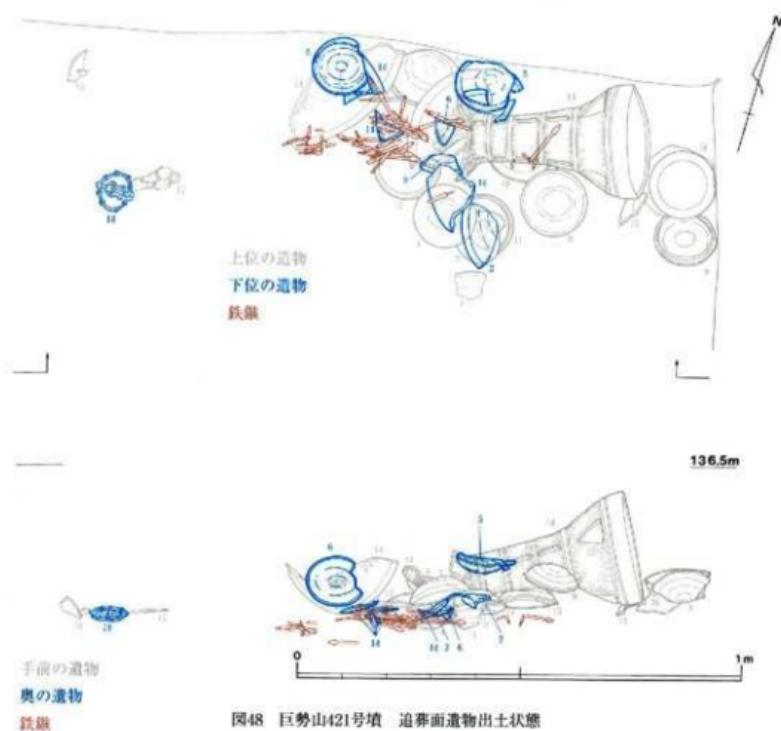


図48 巨勢山421号墳 追葬面遺物出土状態

壁に寄った位置から出土し、敷石の下というよりも、奥壁と敷石の間または敷石と敷石の隙間に埋もれたものが多い。調査日程に全く余裕が無く、図化はできなかったが、出土状態にこれ以外の規則性等は見出せない。須恵器などの土器を含まないことと、壁面に寄った状態での出土は、明らかに2次的移動を示すものであり、また、いずれの鉄製品も破片となっていることはそれを傍証する。

4. 追葬面の出土遺物（図49～52）

図49～51はいずれも先述の通り、第3次床面の出土遺物だが、本来は第2次床面に帰属する。

図48の追葬面遺物出土状態の遺物番号と図49の49-の後に続く番号とは対応させている。また、図48の18の杏葉は図51の51-1である。

図52の石室搅乱土中出土の須恵器も杯身・杯蓋をみるかぎり同工の製品なので、やはり本来は第

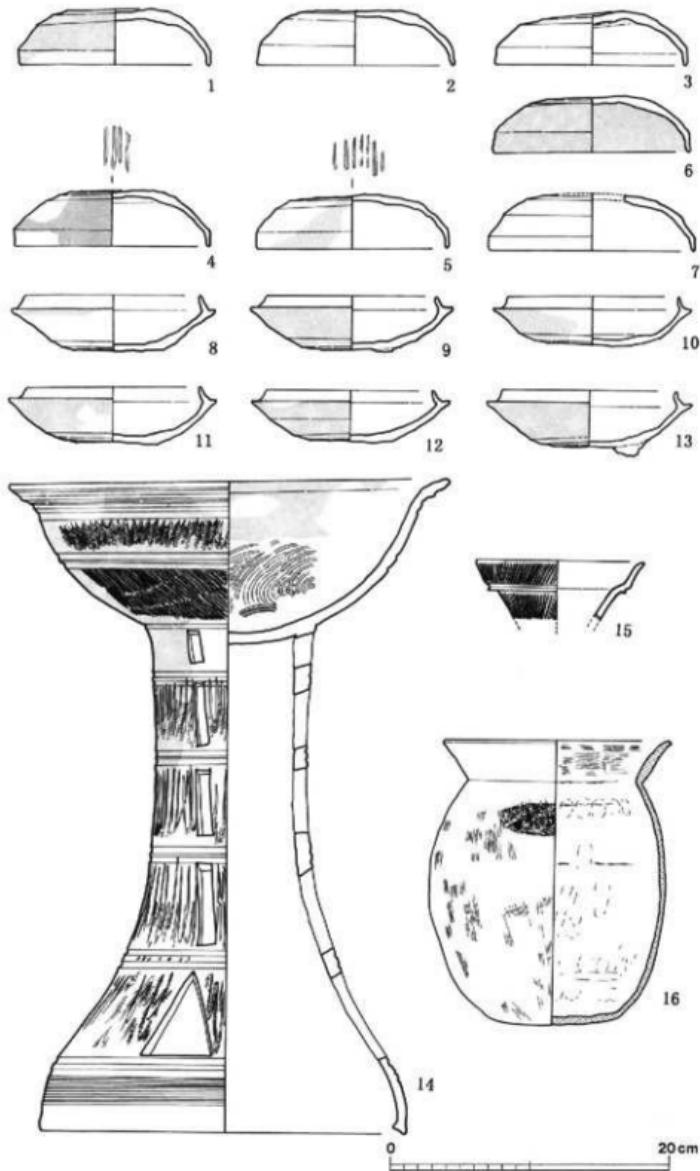


図49 巨勢山421号墳 追葬面出土土器 (S.=1/4)

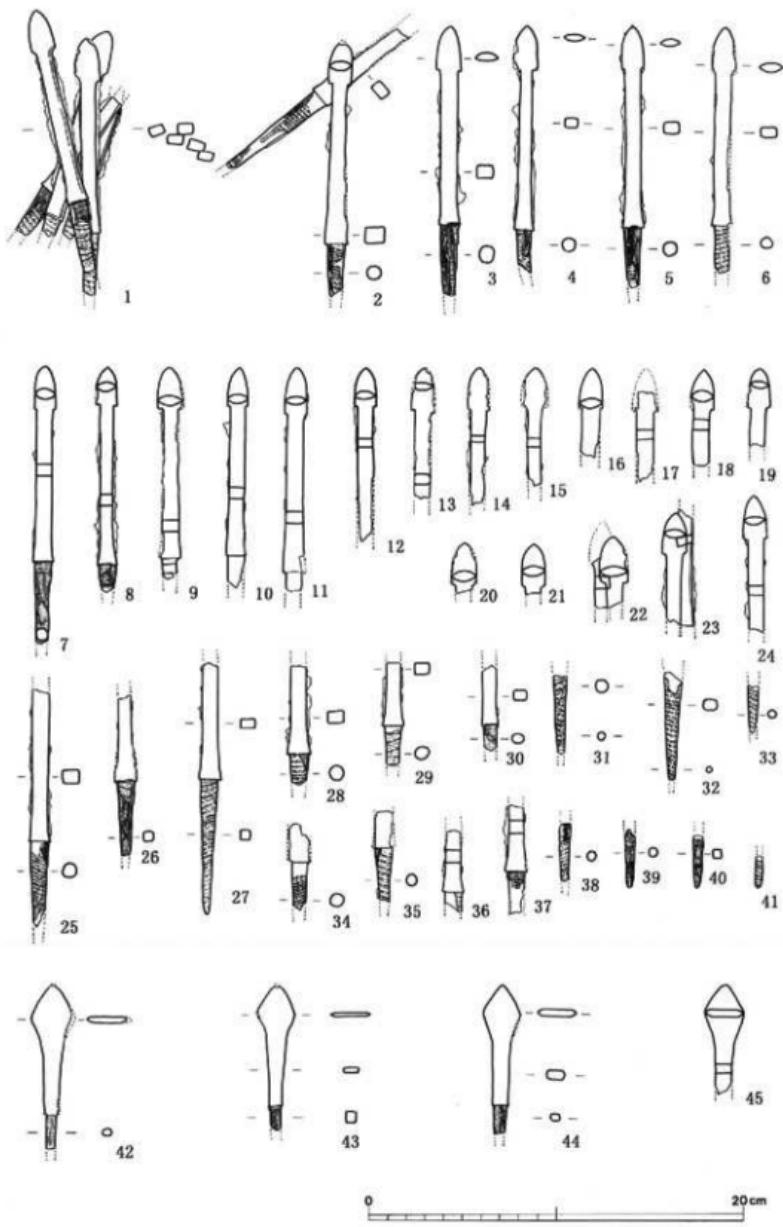


図50 巨勢山421号墳 追葬面出土 鉄器 (S.=1/3)

2次床面に帰属していたものと判断する。

須恵器はいずれもTK209型式(昭和1966)併行に比定でき、広い範囲に釉のかかるものが多い。

まず、49-9・10・13、52-7はいずれもガラス質の緑色釉が特徴的な杯身である(図版51=原色図版)。うち、49-9と49-13には体部外間に窯壁が融着している。また、49-9と52-7では受部端に一部欠損があり、これは窯床に融着したために引き剥がす際に生じたものである。

49-9はこうした状況を最も明瞭に示すので観察結果をやや詳しく述べると、ガラス質緑色釉は図版51の通り、左上からかかって中央(底部)に溜りを作り、この位置に窯体(窯壁)の融着が認められる。ガラス質緑色釉はここから下方へ抜けるに際して筋になって垂れている部分を観察でき、その先の最下の位置、受部端にも窯体(窯床)の融着があって、ここで先述の欠損が生じている。

また、ガラス質緑色釉と後述のくすんだ黒色釉は、筋になって重ねたところがあり、垂直方向が判るので、以上から49-9は登り窯の焚き口に向かって左側の窯壁沿いの、窯床から窯壁が立ちあがる位置に、外面を窯壁側に向け、斜めに立てかけられて焼成されたことが判る。先述の欠損の位置の受部と立ち上がりの境界のわずかに上(口縁寄り)では、円周5.9cmに亘って緑色釉の付着によって融着した、杯蓋の口縁端部とみられる剥離痕があり、49-9は杯蓋とセットで焼成されたことが判る。

なお黒色釉は、中央(底部)から左下にかけて重ね、窯床と一体化している。一部ガラス質のところもあるが全体につやは無く、くすんだ感がする。これは窯壁に接した位置にあったので温度が上がらなかったためとみられる。釉の色や状況が、つやが無くくすんだ黒色から灰状白色さらにガラス質の緑色となる変化は漸移的なので、釉の原材は1種類とみられ、状況からみて自然釉であることを疑い得ない。

同様の観察によって、受部端に欠損の生じている52-7の杯身もこの位置を下にして、49-9とは逆の、右側の窯壁に立てかけられて焼成されたことが判る。52-7の同様の位置にも緑色釉に因する、円周2.0cmの杯蓋口縁の融着による剥離痕がある。

また、49-10・13の杯身も、緑色釉の状況から焼成にあたって窯壁に立てかけられた際の上下が判る例である。49-10の場合にはガラス質の黒色釉によって49-5の杯蓋口縁が受部と立ち上がりのまさに境界に融着しているが、その位置は焼成時の最上位に相当する。

ここまで記述の中で、融着によって杯身と杯蓋がセットになって焼成されたことが判明したものは2種ある。いずれも緑色釉のかかる、したがって窯壁に立てかけられて焼成されたものなのだが、①は49-9と52-7の2個体の杯身、②は杯身49-10と杯蓋49-5で、既に記してきたように、融着の位置が焼成時の最下位か最上位かの差は、融着の原因となった釉がガラス質の緑かガラス質の黒かの差異があり、また、融着の微妙な位置が、立ちあがりにかかっているか、受部と立ち上がりのまさに境界かの差異とともに、全て対応関係にある。

次に、49-11の杯身も杯蓋とセットで窯壁に立てかけられて焼成されたことが判るものだが、釉

の状況は上記の例とは異なる。つやが無くすんだ黒色釉の位置を最上位にし、やはり外面を窯壁側に向けて焼成される。杯蓋とセットで焼成されたことは、受部にかかった灰状白色釉の状況から判断できる。52-5の杯身も釉の状態から同様の状態により焼成されたものとみられる。

また、49-6の杯蓋は421号墳出土須恵器中、窯壁に立てかけられたもののなかでは唯一、杯身とセットにならずに単独で焼成されたものである。これはガラス質黒色釉と灰状白色釉の状況から判る。

一方、窯床に並べられ、杯蓋と杯身セットの焼成時の対応関係が判る例には49-2と52-6のセットがある。49-2の杯蓋にはガラス質黒色釉と灰状白色釉がかかる部分があり、杯身52-6を下にした焼成である。両者は421号墳出土須恵器の中で唯一生焼け状態のもので、焼成状態や色調の微妙な部位による変化が合致する。52-4の杯身は底部に窯床の融着がある。受部縁辺に灰状白色釉がかかり、杯蓋とセットで杯身を下にして焼成されたことが判る。

このほかの、窯床で焼成された杯身・杯蓋には、杯蓋を上にして焼成されたとみられるもの（杯蓋49-1・4）と、杯身を上にして焼成されたとみられるもの（杯身49-8・12、杯蓋52-3）がある。49-8の外面にはY字状の灰状白色釉がある。重ね焼きの隙間からかかったものとみられ、受部外面の位置において一箇のみに釉がかかる部分があるのは、この位置に重ね焼きされたものがやや立った状態であったために、隙間が生じたからであろう。52-3の杯蓋の大井部外面には窯床が融着する。

以上、421号墳出土の須恵器杯蓋杯身の釉はいずれも自然釉であるが、題（49-15）の場合は内外面全面にガラス質黒色釉がかかり、意図的な施釉の可能性もある。本体の断面の色調も紫灰色で、他と異なることにも注意したい。須恵器には他に器台（49-14）、高杯（52-8）、短頸壺（52-9）や、図示できなかった別個体の杯蓋、杯身、高杯、短頸壺の破片がそれぞれ1個体分ずつある。土師器壳（49-16）は半底で、やや新しい要素を有するが、出土状況から須恵器と併行する時期のものと判断する。

鉄錠はいずれも図48に示した位置からまとめて出土した。やはり第2次床面（敷石面）に帰属する。反頭錠（50-1～37）と上頭錠（50-42～45）があり、丰頭錠4本に対し、長頭錠の錠身部分は27個体分ある。なお、長頭錠の間部分は26個体分で、錠身部分の数とはほぼ同数なので、接合できなかったものも多いといえ、同一個体の長頭錠を複数に数える可能性は低く、錠身の27個体はそのまま長頭錠の本数に読み替えても大過ないものとみられる。

長頭錠はいずれも長三角形両丸造の錠身を有し、錠身闊は両角闊である。完形のものは存在しない。長頭錠には2種あり、重厚なものをI類、やや細身のものをII類として以下記述する。

I類長頭錠は17本（鍛着した50-1・2の計7本と50-4～7・25～30）の間部分を含む個体を確認でき、錠身長2.3cm、笠被長8.4cm、茎長7.2cm前後で、これを合計した全長は17.9cmとなる。完形に近い50-3の重さは26.8g、50-5と50-7は23.6gある。錠身の厚みは5～6mmもあり、笠被も

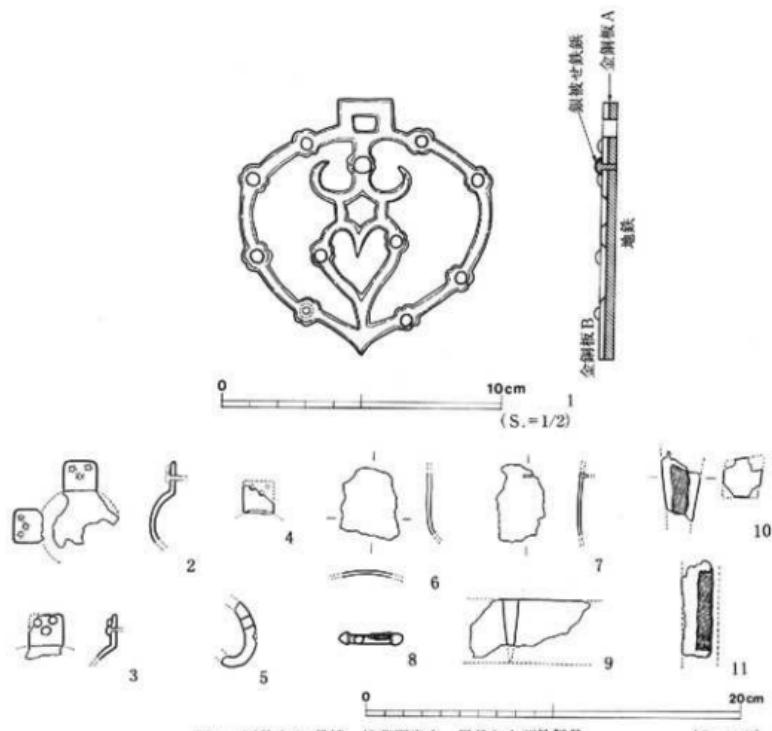


図51 巨勢山421号墳 追葬面出土 馬具および鉄製品 (S. = 1/3)

重厚で断面は $8 \sim 9\text{ mm} \times 5 \sim 6\text{ mm}$ を測る大型笠被長頸鎌（藤田1988）である。笠被関は台形関で上下左右の全面に段を有する。その茎には脱落防止用に有機質の紐状のものを丁寧に巻き付ける細工が見られる。これを下巻き（図版52）と称することにするが、大半のI類長頸鎌の茎にはこれが認められ、おそらくI類の長頸鎌の茎には全てこの下巻きが施されたものとみられる。

II類長頸鎌は9本（50・8・9・10・11・12・14・15・17・18）を確認でき、やや細身である。鎌身長2.0cm、笠被長8.0~8.3cmで、最も完形に近い50・10の重さは16.2gである。鎌身の厚みは4~5mmで、笠被の断面は $7 \times 4\text{ mm}$ 程度である。笠被関は台形関だが側面への張りは顕著ではなく、上下には段を有しない。I類にみられた茎への下巻きは認められない。

主頭鎌は50~42~45のはば同工同大の造りで、平造りである。関を有し、全長は9.7cm程度であろう。鎌身最大幅は2.0~2.3cmで、茎に下巻きを施すものはない。47~44の重さは8.3gである。

図51の馬具および鉄製品はいずれも石室堆積土からの出土で原位置を保っていないが、中世の右

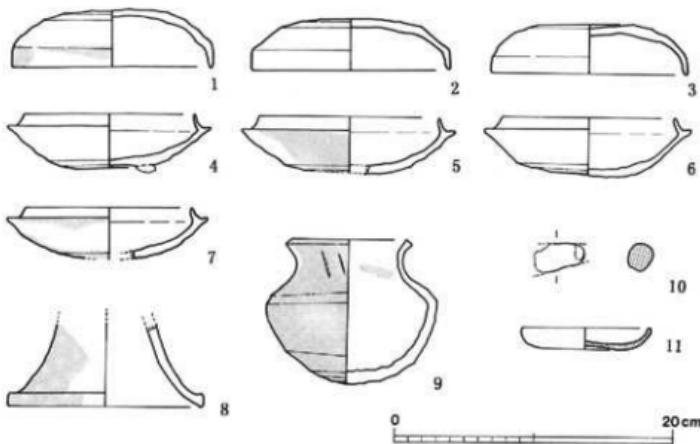


図52 巨勢山421号墳 石室擾乱土中出土土器 (S.=1/4)

室再利用時に若干移動したのみとみられる51-1と51-12は図48で18、17として出土位置を示した。

杏葉（51-1）は鉄地金銅張の「忍冬楕円文心葉形杏葉」と称すべきものという。松尾光晶氏から玉稿を戴き、第7章に掲載できたので参照されたい。法量は全長9.15cm、最大幅9.05cm内区最大幅8.05cmである。地板は3mm厚の鉄板で、その上に金銅板Aと、「忍冬楕円文」を配した金銅製の透し板（金銅板B）を重ねて紙を打つ。透し板は緑金と共に造りとなっており、厚さ2mmである。紙は径4～5mm、高さ2mmの鉄製で、紙頭に銀を被せている。紙は緑金部分に左右4紙ずつの8紙のほか透し板部分にも3紙が打たれ、緑金・透し板のそれぞれの位置には、円形の内外に刻み目に入った花形の台座様のものが配される。紙はいずれも裏面に貫通しており、裏面には漆が塗られたようである。立間に鉤金具残片が鋲着する。

辻金具（51-2～4）は鉄地金銅張の同一個体とみられ、径3.8cm（推定）、高さ1.3cmの低い半球形の鉢部の四方に長さ1.6cm、幅1.7cmの方形脚が付く。脚に打たれる紙は3紙で、51-3のみ紙頭が遺存している。紙には金張や銀張の痕跡はなく、鉄紙のままとみられる。紙は径4mm、高さ2mmである。

51-5は断面方形の把手金具状のもので、須恵器器台（49-14）の脚部内より出土した。51-6・7は鞍等かとみられる曲面を有する鉄板で、51-7には幅3.5mmの楔状の釘が打たれている。51-8は両頭棒状鉄製品といわれるもので、棒状部分のほぼ全面に木質が付着する。51-9は鉄刀、51-10・11は鉄釘である。51-12は鞍かとおぼしき漆塗り木製品で、12.0×5.5cmの破片となっている。取り上げたものの、遺存状態は極めて悪いので出土状況の写真を図版46に掲げた。

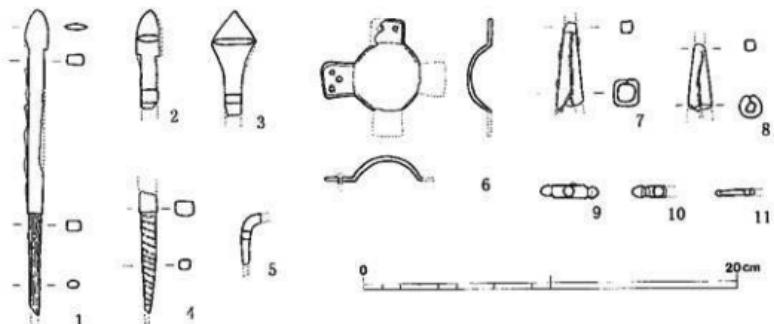


図53 巨勢山421号墳 初葬面出土 馬具および鉄製品 (S.=1/3)

5. 初葬面の出土遺物 (図53)

判るものについては出土状態や位置も併せて記述する。

53-1 の長頭鏡は、敷石上面から10~12cm下の石室東半で、奥壁に貼り付くような状態で出土した。長三角形両丸造の鏡身を有し、鏡身闊は両角闊である。鏡身長2.0cm、鏡被長8.3cm、現状での重さは15.7gで、鏡被闊はあるが顕著ではない。茎にはやはり下巻きではなく、追葬面鉄鏡のII類長頭鏡に分類できる。

53-2 の長頭鏡と53-3 の上頭鏡は鏡身方向を互い違いにして銛着した状態で、敷石上面から6cm下の石室東半から、やはり奥壁に貼り付いた位置で出土した。長頭鏡53-2の鏡身長は2.4cm、鏡被断面は9×8mmで、追葬面鉄鏡のI類長頭鏡である。上頭鏡53-3は鏡身最大幅2.3cm。53-4 の鏡被は太く、台形闊で茎には下巻きが認められ、I類長頭鏡に分類できる。53-5 の鉄製品は石室西半奥壁沿いの出土。

53-6 の辻金具は立った状態で敷石面に一部露出して石室東半で、やはり奥壁に貼り付いて出土した。鉄地金銅張で、径3.6cm、高さ1.3cmの低い半球形の鉢部の四方に長さ1.7cm、幅1.7~1.8cmのやや逆白形の脚と、長さ1.3cm、幅1.6cmの方形脚が付く。台形脚に打たれる筋は3筋で、方形脚には2筋が打たれる。鏡頭は遺存しないが、痕跡からその径は4mmであることが判る。

53-7・8は鑿の袋部とみられる。53-7は西側壁沿いの敷石下面のさらに下5cmから、53-8は石室東半敷石上面から15cm下の奥壁沿いから出土した。53-9~11は両頭株状鉄製品で、いずれも石室東半奥壁沿いから出土した。

以上のように初葬面の出土遺物の大半は奥壁や側壁に沿った位置から出土しているが、ほかに不定形の鉄鏽と漆膜の細片各1があり、これらののみ奥壁から80cmほど離れた、石室中軸付近の敷石下面のさらに下から出土している。

玄室の南半以南が破壊されているせいか、初葬面では須恵器を検出し得なかったために、その帰属

時期を決定することは困難であるが、次にまとめる通り、追葬面出土の鉄製品と共通の意匠のものが多く、初葬面の造成および本墳の築造も、やはりTK209型式期のうちに収まるものと考えたい。

6. 初葬面と追葬面の被葬者の関係

巨勢山421号墳の追葬面に用いられた敷石は、人頭大もしくはそれ以上の大きく重いもので、一人ではとても持ち運ぶことはできない。また、敷石が大きいこともあって、この追葬面と初葬面の間には高さにして23~27cmもの隔たりがある。それほど隔絶した状態で追葬面を造成しておきながら、初葬面の遺物と追葬面の遺物には共通する要素が多い。

それぞれから出土した鉄地金銅張辻金具は、脚部分の造りは若干異なるが、鉢の径や高さも概ね同大で、ほぼ同様の意匠を持つものといってよい。また、さほど類例の多くない、用途不明の両頭棒状鉄製品も、初葬面・追葬面に共通して認められた。初葬面にみられた盤は追葬面からは出土していないが、第3次床面での片付け行為や乱掘の影響は当然考慮すべきであろう。

特に注目したいのは鉄鍔である。初葬面と追葬面の鉄鍔の組成は、I類長頭鍔・II類長頭鍔・主頭鍔の3型式で共通し、それぞれは同じ同大といつても過言ではない。

加えて、I類長頭鍔には茎部分に脱落を防止するための下巻きが認められた。常識的には在って当然ともみられるこの下巻きだが、実は寡聞にして類例を知らず、いずれにせよ類例は極めて乏しいものと思われる。その下巻きが初葬面・追葬面共にI類長頭鍔に限って認められたのである。

いずれにせよ、I類長頭鍔の茎への下巻きといった特殊な細工をはじめ、これほどまでに共通項が多いことは、初葬面被葬者と追葬面被葬者の間には極めて緊密な関係があったことを示している。

さらに、それが遺物、とりわけ、特殊な細工が遺物の上において認められることは重要で、そのことはつまり、初葬面被葬者から追葬面被葬者に対する、贈与があった可能性を示唆するからである。

とはいって、こうした贈与のようにみえる状況が生じる事情に関しては、他にいくつかの可能性が考えられる。1つには、両名がこうした遺物を同時に入手し、それぞれの死にあたって副葬された可能性、2つには初葬面の遺物が追葬面に残った可能性である。

第1の可能性は否定する事はできないが、本墳は本米、初葬面被葬者のために築造されたものであるから、両名の間には時期差と共に階層の上下関係が成立している。そうであれば物品の同時入手の機会に、既に、上位者から下位者への贈与が行われた、とみなす事は可能である。

第2の可能性はほとんど無い。というのは、追葬面の造成には人頭大の敷石を敷設する必要があり、この工事の間、初葬面の遺物はひとびと石室外に持ち出され、敷石の完成後、再び持ち込むという工程を想定する事が必要になるからである。

初葬面に残った遺物は、無造作に奥壁寄りに押しやられていた。53-1の長頭鍔と53-9を除けば、それぞれの遺物の破損の度合いは著しく、そこには初葬面の遺物をひとびと持ち出すという行

為や思想の存在を想定する事は困難である。

その数量がやや少ない点に難はあるが、残存した以外の遺物は、比較的近時の石材抜取時の乱掘により失われた可能性が高いと考える。それは、横穴式石室を調査して玄室の敷石をはずし、初葬面の遺物が敷石下から破片となって出土する際にまま経験することがあるが、こうした場合、明らかに奥壁寄りよりも玄門寄りの方が出土量が多い。

これはある意味当然のことであって、敷石の敷設にあたっては、初葬面の遺物は邪魔になるので片付けられる必要があるが、光の届かぬ狹小な横穴式石室の空間にあっては、奥壁側に遺物を押しやるよりも玄門側へ遺物を引いた方が、より広い作業スペースを得ることができ、作業は楽だからである。ゆえに、既に破壊された玄門寄りの玄室に、より多くの初葬面の遺物が残されていたであろうとの推定も、理山の無いことではない。

さて、上記の通り第1の可能性、つまり、初葬面被葬者と追葬面被葬者の両名が、こうした遺物を同時に入手し、それぞれの死にあたって開葬された可能性はあるが、先述の通り、それも贈与の一種である。そして、現在の我々に馴染みの深い、遺産相続といったことも、もちろんあり得る。こうした贈与が、初葬面被葬者の生前に行われたものか、死後に行われたものかは、残念ながら分からぬが、その媒介の場としては家族を想定する事が最も相応しいと言えるだろう。

第13節 巨勢山771号墳

421号墳の築造により破壊された中期古墳である。一辺約16mと推定される方墳で、TK73型式期の築造である。

1. 位置と墳丘(図3・46)

421号墳の東の盛土下で、尾根に対して直交して直線に延びる溝4と、北の斜面でそれに直角につながり、西に延びる溝5を検出した。いずれも771号墳の墳丘縁を両する溝と考えられる。

溝4は南端での幅0.9m、北端での幅1.5mを測り、南に向けては途切れていますが、地山の地形(図示省略)では本来はさらに3mばかり延びていたことが推測でき、その全長は約16mとなる。現状の南端での底部の標高は138.4m、北端でのそれは136.6mなので、その比高差は1.8mである。

溝5は総延長1m強しか検出できなかった。幅は1.0mで、底部ともいえる若干の窪み(深さ8cm程度)はあるが、墳丘端を両する平坦面といった趣の方がむしろ強い。底部の標高は135.8~135.5mで、西に低い。溝4の北端底部との比高差は0.8~1.1mである。溝4と交わるコーナーから西に2.2mの地点の溝底部で土師器甕2点(54-上段1・2)が出土した(図版22)。供獻土器であろう。

このほかの遺物は須恵器と土師器で、いずれも421号墳の北側から北西側にかけての墳丘下で、IH表土直上のそれに起因した黒灰色砂質土(図46)から出土した。本來771号墳の墳丘上に供獻されていた上器が、421号墳による破壊に際して、墳丘下へ転落したものとみられる。

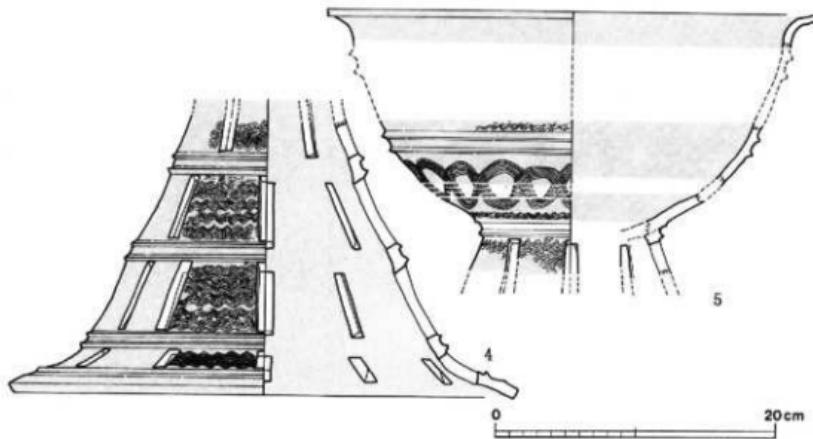
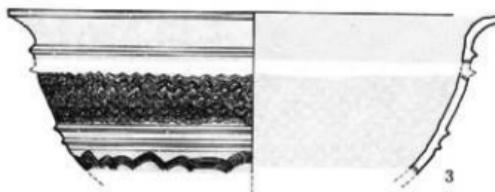
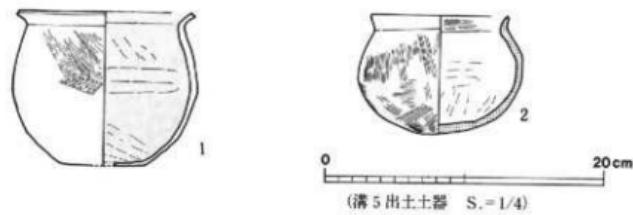


図54 巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その1 (S.=1/4)

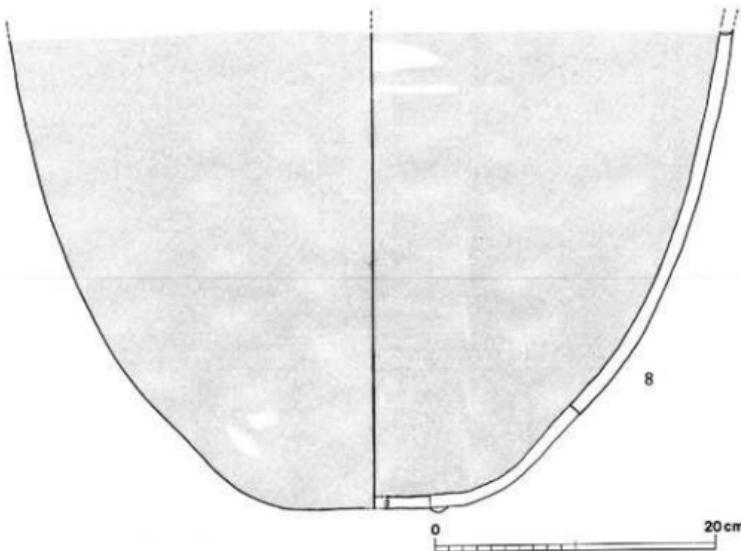
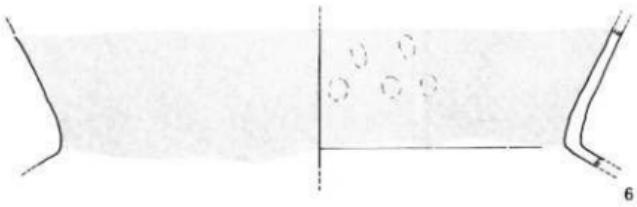


図55 巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その2 (S.=1/4)

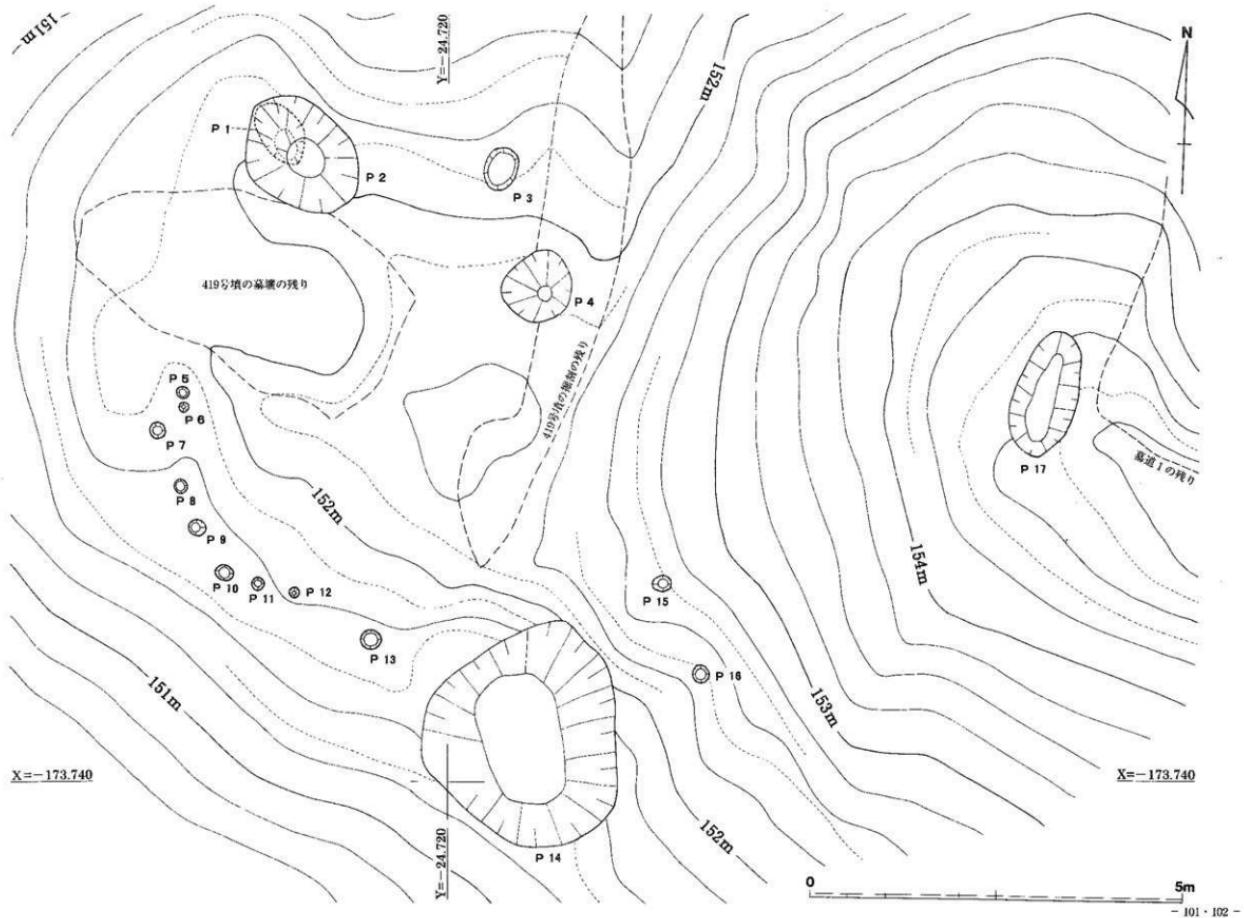


図 56 発生時代の遺構 (419号墳塚丘下および周辺)

2. 出土遺物（図54～55）

図54の上段は溝5出土土師器で、1の平底鉢は韓式系土器といえるが、外面にハケメ調整を行う。図54の下段と図55は421号墳の墳丘下出土の須恵器で、54-1の短頸壺、54-3・5の高杯形器台の口縁部はともに、端部を丸く收める。器台各部の突帯は鋭く、組紐文の採用と波状文の組合せが特徴的である。壺（55-6～8）の内面はスリケシで、55-7・8ともに底部を焼成後に丸く打ち欠いて穿孔する。墳丘下出土遺物にはこのほか土師器の壺とおぼしき破片2個体分や焼土塊がある。土師器は溝5出土のものも含めて大半は地元産の胎土だが、墳丘下出土の土師器1点のみ、径2mm以下の大粒の角閃石を多量に含む搬入土器がある。

本墳の築造期については、須恵器器台の特徴からTK73型式（川辺1966）併行期とみられる。

第14節 弥生時代の遺構と遺物

419号墳の墳丘下および周辺の堆積土の下から、図56に示した計17個のピットまたは土坑を検出した。以下、419地点の遺構と称することにする。419地点のピットおよび土坑の埋土はいずれも暗黄褐色（褐黃色）砂質土または暗灰褐色（褐灰）砂質土で、地山に起源を持つが、うちP4のみは炭化物が充満していた（図57）。P4の最上層は暗黄褐色砂質土、中層は暗灰色砂質土、下層は暗灰褐色砂質土となっている。中層と下層が炭化物の層で、炭化物は灰と炭からなり、共に径1cm程度の炭を若干含んでいる。その他、各ピットの計測値を次表に掲げておく。

ピットに伴う遺物はP4の最上層から緑色片岩の小片（重さ2.1g）が出土したのみであるが、419号墳の盛土内からは弥生土器片が若干出土しており、そのほかA地点の調査区内各所でも弥生時代の遺物が散見されるので、これらのピットは弥生時代の所産とみられる。いずれのピットからも柱痕はみいだせなかったが、ピットの壁上が砂質土なので崩れやすく、こうした条件のために遺存しなかった場合も多かったとみられる。

P5～P13は直径にして8m強の円弧を描く。P4は、この円弧の中心からさほど離れない位置にあり、炭化物が充満していたことと断面形からも炉と考えられ、P1～P3と共に、P4およびP5～P13は1棟の竪穴式住居を構成するとも考えられた。しかし、平坦な床面を想定すると、P4の南側の152.25mからP10付近の151.7m前後の標高まで50cm以上の比高差が生じる。竪穴式住居を想定するとP5～P13は周壁板を支えるためのものとみなければならないが、それにしては50cm以上の比高差は大きすぎ、よって、竪穴式住居とはなり得ない。

したがって、P5～P13は構列などを想定すべきであり、P1～P4はそれぞれ単独の遺構とみた方が妥当であろう。そうするとP4は屋外炉となり、ノロシ坑として使用された可能性も生じることになる。

このほかP14は南北2.94m、東西2.62m、深さは最大で2.05mを測る大形の土坑であるが、遺物は出土しなかった。P15とP16はP14に付属するピットとみられる。また、P17はこの一画で最高所

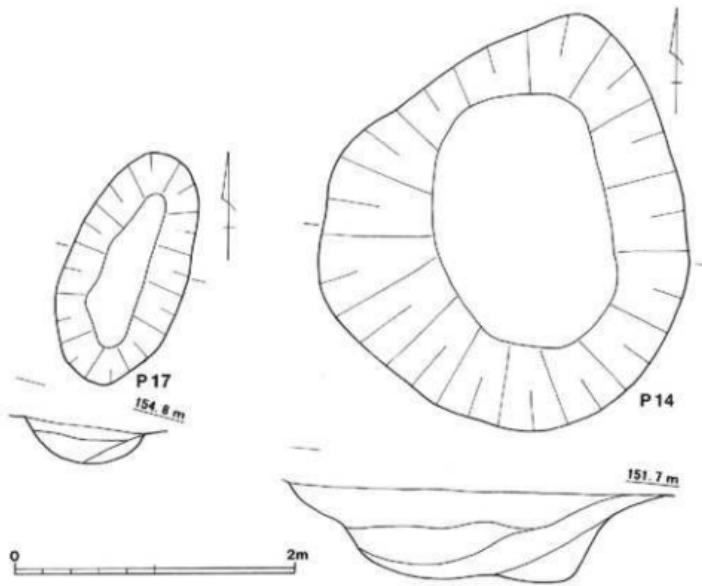
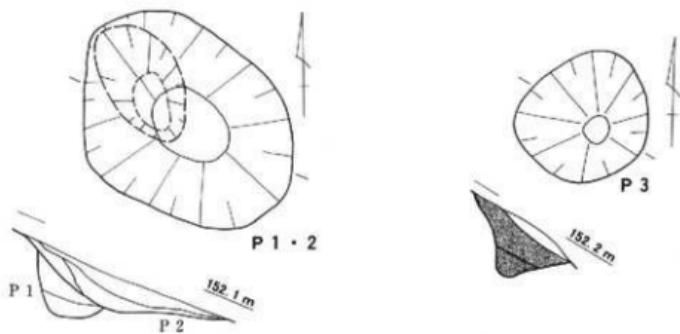


図57 ピットの詳細（一部）

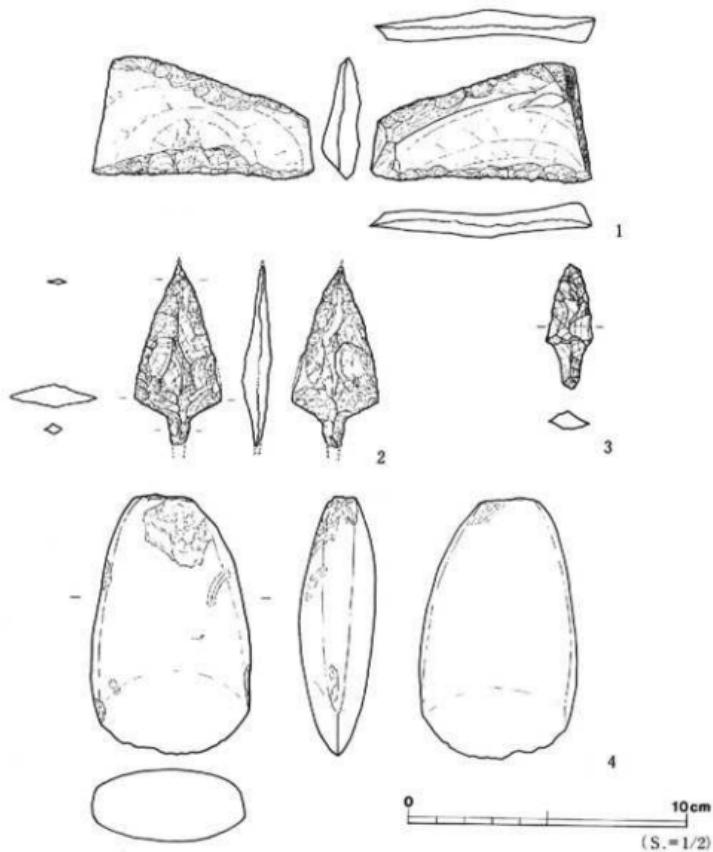


図58 A地区出土の弥生時代の遺物

遺構名	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17
直径	93	180	56	96	18	12	22	19	24	25	18	14	28	294	25	24	172
規格	55	130	46	86	14	11	21	19	22	22	17	13	26	262	22	22	88
深さ(最大)	20	34	8	61	8	7	14	14	21	15	16	17	11	205	15	8	40

表2 419地点遺構計測表(数値の単位はcm)

に位置する楕円形の土坑である。

遺物については、A地区全体で出土した、弥生時代に関するものを一括して図58に示した。58-1～3はいずれもサヌカイト製である。58-1は416号墳の北側の墳丘盛土から出土したサイド・スクレーバーで、図示状態の下刃が刃部である。上刃には原石面を一部残し、刃溝し加工がみられる。側刃の長い方は折り取ったまま、短い方は原石面である。 $7.835 \times 4.450 \times 0.820\text{cm}$ (いずれも最大)、重量は39.1gである。58-2は418号墳石室攤乱上出土の大形の凸基有茎式石鏃で鏃身は三角形に近い。先端は鋭く、精巧なつくりである。 $6.540 \times 3.055 \times 0.875\text{cm}$ (いずれも最大)、重量は117gである。58-3は墓道4から出土した小形の凸基有茎式石鏃で、鏃身は細身である。 $4.370 \times 1.575 \times 0.760\text{cm}$ (いずれも最大)、重量は3.4gである。58-4の麻製石斧は420号墳北斜面流出土から出土した。刃部には刃歯れが見られ、基部は一部破損する。 $9.140 \times 5.585 \times 2.575\text{cm}$ (いずれも最大)、重量は220.3gである。奥田尚氏によると玄武岩質凝灰岩製で、紀ノ川または丹波山地に産する石材という。58-5～8は弥生土器とみられる。詳細は観察表によられたい。このほか、図示したもの以外にサヌカイト剥片は5点あり、58-9以下の番号を付して法量等を下表に、写真を図版54に示しておく。うち58-12は写真位置で上端にわずかに原石面を残す石核状の剥片である。また、弥生土器と思しき剥片もほかに数点あるが、断定できないため記述を割愛する。

遺物番号	出土場所	法量(cm)	重量(g)
58-9	416号墳墳丘北側盛土	$6.595 \times 5.025 \times 1.045$	38.4
58-10	419号墳墳丘北側盛土	$5.140 \times 4.480 \times 1.105$	29.6
58-11	419号墳墳丘北側盛土	$2.930 \times 2.810 \times 0.500$	3.7
58-12	420号墳墳丘北側盛土	$7.625 \times 4.125 \times 2.340$	48.2
58-13	421号墳墳丘北側盛土	$5.225 \times 3.715 \times 0.715$	16.9

表3 図示しなかったサヌカイト剥片観察表

時期については、419地点では58-6の挿入付加法の脚部があり、418地点には58-7の長頭轆や大形の石鏃(58-2)がみられることから、大半は弥生時代後期のもので、58-6からはその後半に主体を置く可能性が考えられる。

この419地点の遺構については、巨勢山境谷遺跡との関係を考えるのが妥当であろう。巨勢山境谷

遺跡に関しては、巨勢山458号墳（境谷10号墳；藤田1985）の調査（以下458地点と呼ぶ。）時に畿内V様式様式2（寺沢1980）に相当する土器が出土している。その標高はおよそ179mなので、西側眼下の葛城川の扇状地の標高約116mまでの比高差は63mであるから、典型的な高地性集落と言って良いだろう。ちなみに419地点と西側眼下の葛城川の扇状地までの比高差はおよそ35mである。

さて、458地点は朝町山から北に派生する主尾根上に存する（図2参照）が、そこから主尾根を南に約300m登ると389号墳（地点）に至り、ここから北西に派生する支尾根を250mほど下った位置が419地点である。

このように巨勢山境谷遺跡はかなりの広がりを持つようで、主尾根の北端に相当する449号墳の調査でも石鏡（本書の図89-7）が出土しているし、別に派生する支尾根上の439号墳（境谷1号墳；久野1974）では弥生土器が、371号墳の調査（1998年御所市教委調査）でもサヌカイト片が出土している。

つまり371号墳（地点）から458地点を経て449号墳（地点）に至る南北の主尾根上と、そこから西に向いて派生する幾筋もの支尾根上のはんどんに巨勢山境谷遺跡に関わるとみられる遺構や遺物があるようで、その範囲は南北約800m、西には支尾根ごとに150~250mに及ぶ。

無論その全てに遺構（施設）があるわけではなかろうが、この度、419地点において、巨勢山境谷遺跡としては初めて明確な遺構が検出され、横列やノロシ坑らしきものがみられたこと、そして、より高所（標高にして約25mの差）で多くの遺物が出土した458地点との関連を想定できたことは、高地性集落の内部構造を知る上で意義があるものと思われる。

第15節 歴史時代の土坑

A地区調査地には歴史時代の土坑が散在している。今回の調査では、計14基の土坑を検出した。その位置については図3の全体図ならびに図4・18・38などを参照されたい。土坑埋土の状況は図59~60に連番にて一括して示す通りだが、炭層や焼土層等特徴的なものについては本文中に記した。

上坑1（図59・61・62）

巨勢山415号墳の東側掘削に掘り込まれた3基の土坑のうち北に位置し、東側掘削の東の肩から掘削埋土にかけて掘り込まれている。長軸は北西~南東に取る。長径は1.01m、残存している短径は約0.53m、現状の最大の深さ0.18mを測る。埋土に炭層や焼土層は認められなかった。

土坑のほぼ中央からガラス玉、隆平水質、土師器小皿が出土した。土師器小皿（62-13）は他の土師器小皿よりもやや位置が高く、その内部からはガラス玉（62-1~7）と隆平水質（62-12）が出土した。土師器小皿（62-14）および土師器小皿（62-15）は伏せた状態で出土し、その周辺にガラス玉（62-8~11）が散在していたが、本来はいずれも土師器小皿（62-13）に収められていたと考えられる（図61）。ガラス玉は62-5のみがアルカリ石灰ガラスと見られ、透明度の高い水

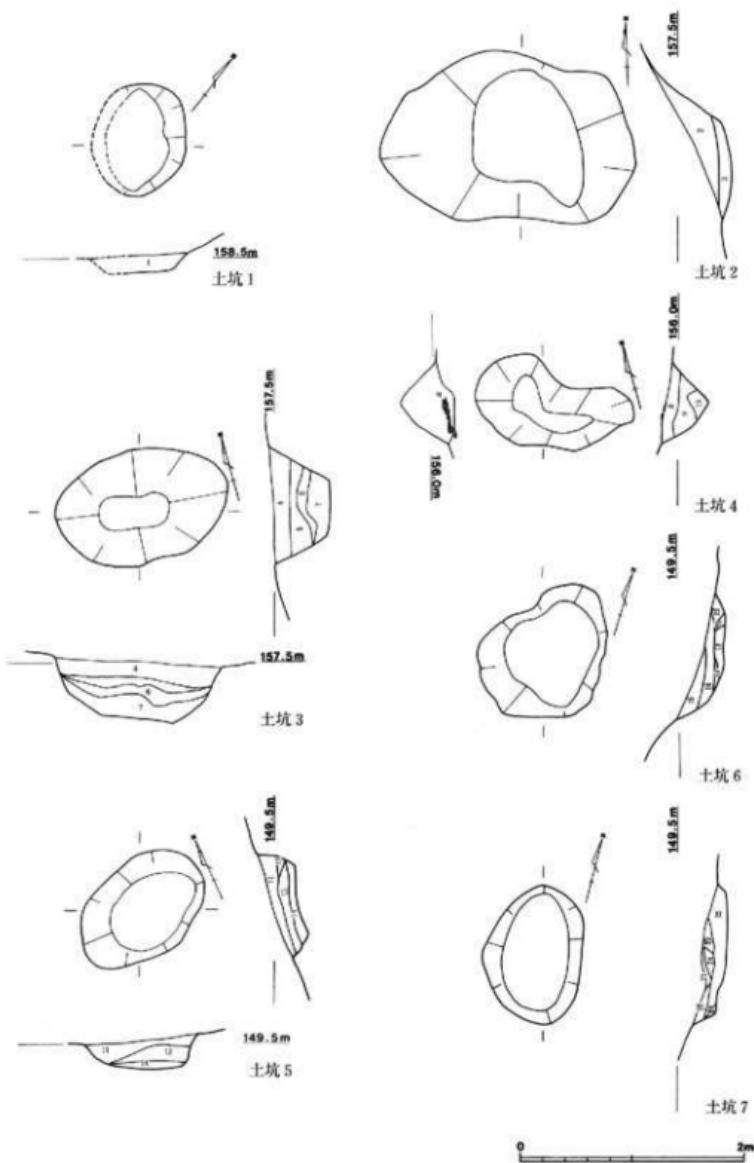


図59 A地区土坑堆積状況等 その1 (S.=1/20)

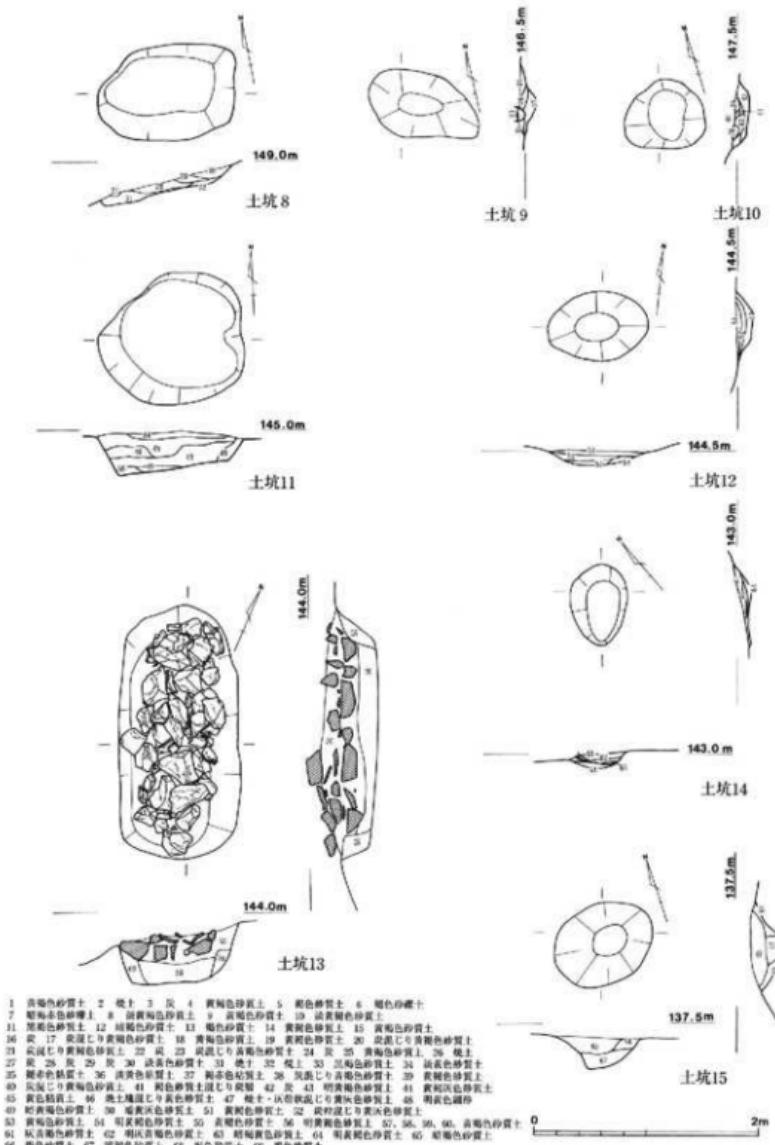


図60 A地区土坑堆積状況等 その2 (S.=1/20)

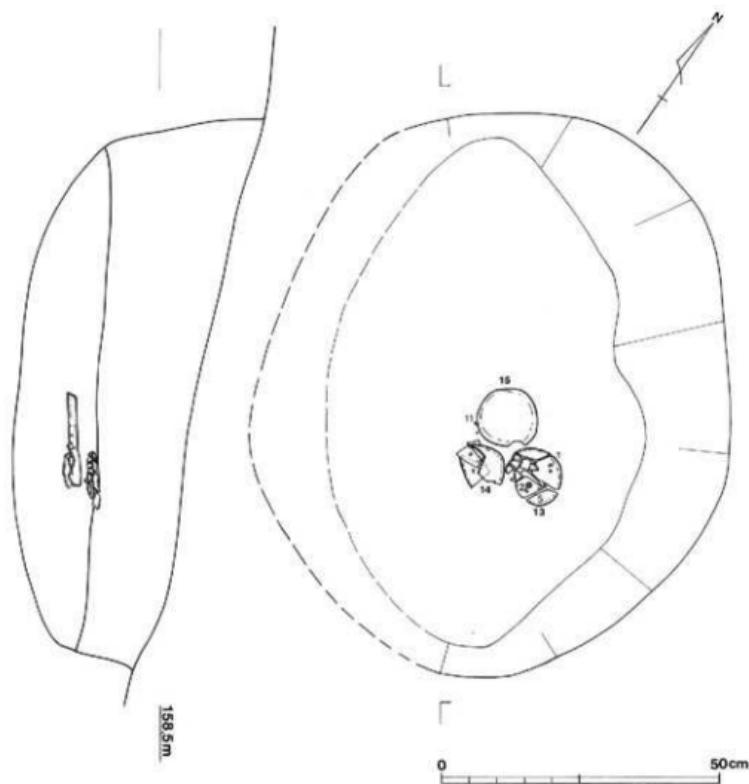


図61 土坑1 遺物出土状態 (S.=1/10)
(赤網=珠玉、緑網=隆平永寶)

色を呈する。その他のガラス玉は鉛ガラスと見られ、劣化した結果透明度は全く失われ、62-1・3・4・6・7・9・10・11は白濁色、62-2・8は褐色を呈している。ガラス玉の計測値は表に示す通りであるが、62-7・8については破損著しく計測不能であった。

土師器小皿はすべて手捏ね土器である。口縁部がやや外反する傾向がみられるものの、丸みをもって立ち上がることから土師皿Bに比定することができる（松本・服部1988）。

隆平永寶（62-12）（初鋤、延暦15年—796年）は皇朝十二錢中の一種で、右半の一画が破損している。法量は直徑2.590cm、外縁幅は一定でなく0.195cm～0.230cm、孔の一辺0.625cm、内縁幅は0.115cm、厚さ0.190cmで、現状での重量は1.5gである。

土坑の時期は、土師器小皿から12～13世紀のものと考えられる。

番号	62-1	62-2	62-3	62-4	62-5	62-6	62-9	62-10	62-11
長さ	(6.20)	425	7.00	7.10	3.35	(8.80)	6.45	6.10	(2.40)
幅	3.70	2.10	3.20	5.25	3.90	3.45	3.85	3.15	4.55
孔径	(3.60)	1.90	3.60	3.25	1.25	(3.80)	3.10	3.45	(2.60)

表4 土坑1 出土ガラス玉計測表 単位はmm、()内数値は破損あり

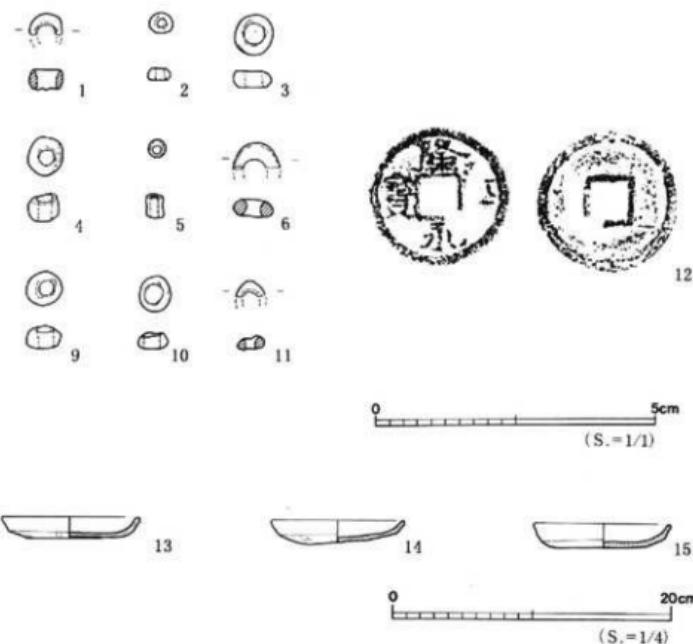


図62 土坑1 出土遺物

土坑2 (図59)

巨勢山415号墳の東側掘削に掘り込まれた3基の土坑の中央に位置し、415号墳東側掘削の埋土に掘り込まれている。長軸は東西に取る。長径2.29m、短径1.45m、現状の最大の深さ0.78mを測る。埋土は上層に焼土層(2)、下層に炭屑(3)があり、出土遺物は確認されなかった。

土坑3 (図59・63~64)

巨勢山415号墳の東側掘削に掘り込まれた3基の土坑のうち南に位置し、415号墳東側掘削の埋土に掘り込まれている。長軸は東西に取る。長径1.57m、短径1.01m、現状の最大の深さ0.55mを測る。埋土に炭屑や焼土層は認められなかった。

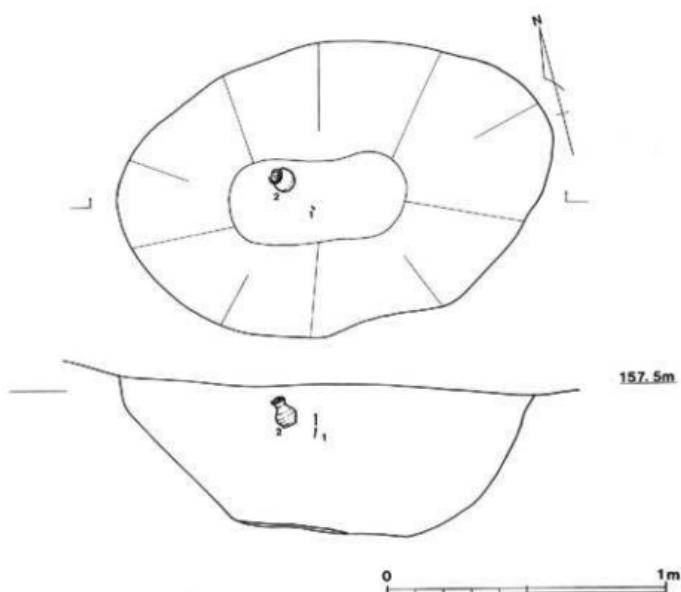


图63 土坑3 遗物出土状态 (S.=1/10)

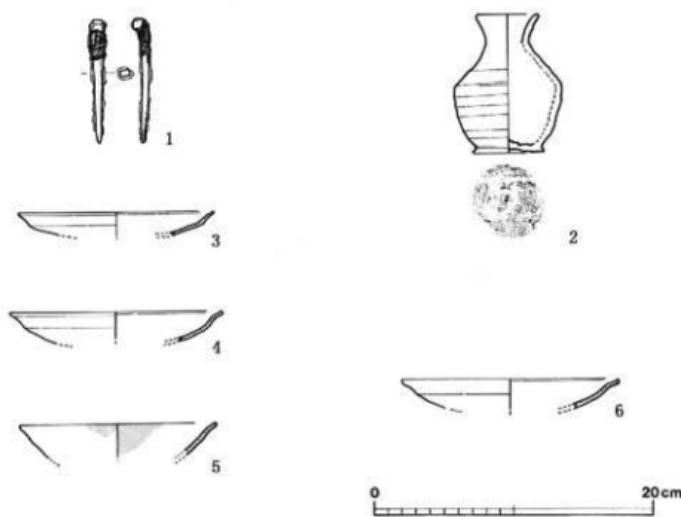


图64 土坑3 出土遗物 (S.=1/4)

土坑の中央から鉄釘（1）は頭部、須恵器水瓶（2）は口縁部を上にした状態で出土した（図63）。また、土師器皿（3～6）はこの土坑に伴うものである。

鉄釘（64-1）は全長9cm、身部は巾1cm、厚さ0.5cmを測り、頭部の形態は長方形を呈する。須恵器水瓶（64-2）は口頭部が外反し、端部は丸く治め、肩部はほぼ中位にある。底部は糸切り底で全面が接地し、奈良I-A期に比定できると考えられる（森下・立石1986）。また、土師器皿はすべて手捏ね土器である。口縁端部が「て」状口縁に成形されていることから土師皿Aに比定される（松本・服部1988）。

土坑の時期は土師器皿の出土位置が土坑の周辺であるため、土坑より出土している須恵器水瓶の時期によると9世紀中頃～後半であると考えられる。

土坑4（図59-65）

巨勢山415号墳の北側急斜面に掘り込まれた土坑で、長軸は北西-南東にとる。長径1.45m、短径0.61m、現状の最大の深さ0.43mを測る。埋土に炭層や焼土層は認められなかった。

土坑中央周辺より土師器長胴壺1個体（65-1）が多数の小片となって出土した。長胴壺の口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁部の外面はヨコナデ、体部の外面はタテハケを施し、内面は指頭による指圧およびナデによる調整がされている。接合不可能な破片が多数あることから、破碎された後土坑に入れられたものと思われる。

土坑の時期は長胴壺の形態（三好1996）より7世紀代と考えられる。

土坑5（図59-66-67）

調査区東端の東側斜面流出土に掘り込まれた3基の土坑のうち東側の土坑で、長軸は北東-南西にとる。長径は1.27m、短径0.85m、現状の最大の深さは0.46mを測る。埋土に炭層や焼土層は認められなかった。

土坑のほぼ中央から土師器皿（67-1・3）、土師器小皿（67-2）が並んだ状態で出土した。また、土師器皿（67-4～9）はこの土坑に伴うものである。

土師器皿はすべて手捏ね土器である。土師器小皿は口縁部がやや外反する傾向がみられるものの、丸みをもって立ち上ることから土師皿Bに比定することができる（松本・服部1988）。

土坑の時期は、土師器小皿から12～13世紀のと考えられる。

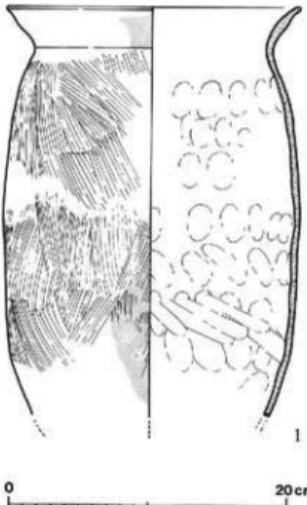


図65 土坑4 出土遺物（S.1/4）

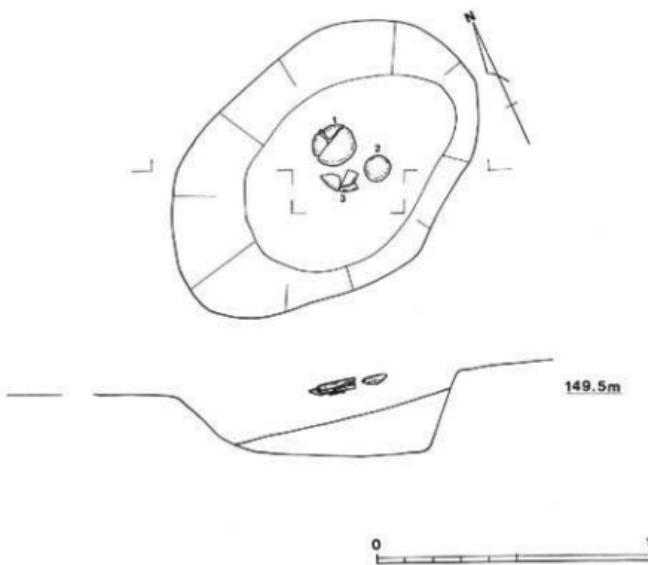


図66 土坑5 遺物出土状態 ($S_r = 1/10$)

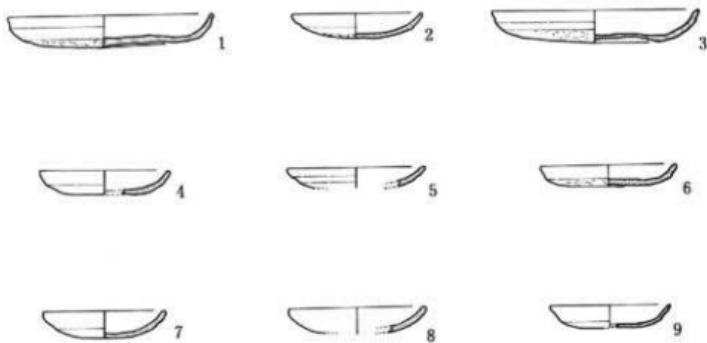


図67 土坑5 出土遺物 ($S_r = 1/4$)

土坑6（図59）

調査区東端の東側斜面流出土に掘り込まれた3基の土坑のうち中央に位置する。長軸は北東-南西にとる。長径は1.34m、短径は1.30m、現状の最大の深さ0.44mを測る。埋土は上層に炭層（16）、下層に炭混じり黄褐色砂質土（17・20）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑7（図59）

調査区東端の東側斜面流出土に掘り込まれた3基の土坑のうち西側に位置する。長軸は北西-南東にとる。長径は1.25m、短径は0.87m、現状の最大の深さ0.30mを測る。埋土は上層に炭混じり黄褐色砂質土（21・23）、中層に炭層（22・24）、下層に焼土層（26）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑8（図60）

巨勢山418号墳の南側掘割の埋土から墓道1の埋土にかけて掘り込まれている。長軸は北東-南西にとる。長径は1.30m、短径は0.87m、現状の最大の深さ0.35mを測る。埋土は上層に炭層（27・28・29）、下層に焼土層（31・32）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑9（図60・68）

巨勢山418号墳墓道の南側の肩から墓道埋土にかけて掘り込まれている。長軸は北西-南東にとる。長径は1.04m、短径は0.60m、深さは0.15mを測る。埋土に炭層や焼土層は認められなかった。

土坑の南西隅より土師器甕（68-1）が埋地された状態で出土した。土師器甕は口縁部と体部の一部が欠損している。平底の短胴甕で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめられる。口縁部は内面をヨコハケ、外面にヨコナデを施す。体部は内面を指頭による指圧とヨコナデ、外面をタテハケで調整し、底部は内面に指頭による指圧とナデ、外面をタテハケとナデで調整している。

土坑の時期は土師器甕に類似したものが平城IIにあることから8世紀代（西1986）と考えられる。

土坑10（図60）

墓道1の南側の肩から墓道埋土にかけて掘り込まれている長軸は北西-南東にとる。長径0.74m、短径0.61m、現状の最大の深さ0.14mを測る。埋土に炭混じり黄褐色砂質土（38）、炭混じり黄褐色砂質土（40）、褐色砂質土混じりの炭層（41）、炭層（42）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑11（図60）

巨勢山420号墳の東側の墓道2・掘割の埋土に掘り込まれている2基の土坑のひとつで、長軸は東西にとる。長径1.30m、短径1.18m、現状の最大の深さ0.35mを測る。埋土は上層にブロック状の焼

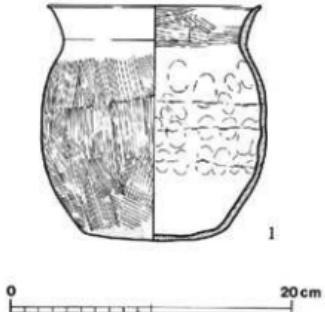


図68 土坑9 出土遺物（S.=1/4）

コナデ、外面をタテハケとナデで調整している。

土坑の時期は土師器甕に類似したものが平城IIにあることから8世紀代（西1986）と考えられる。

土坑10（図60）

墓道1の南側の肩から墓道埋土にかけて掘り込まれている長軸は北西-南東にとる。長径0.74m、短径0.61m、現状の最大の深さ0.14mを測る。埋土に炭混じり黄褐色砂質土（38）、炭混じり黄褐色砂質土（40）、褐色砂質土混じりの炭層（41）、炭層（42）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑11（図60）

巨勢山420号墳の東側の墓道2・掘割の埋土に掘り込まれている2基の土坑のひとつで、長軸は東西にとる。長径1.30m、短径1.18m、現状の最大の深さ0.35mを測る。埋土は上層にブロック状の焼

土混じり黄色砂質土（46）、下層に多量の焼土・灰帶状混じり黃灰色砂質土（47）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑12（図60）

巨勢山420号墳の東側の墓道2・掘削の埋土上に掘り込まれている2基の土坑のうち南に位置する。長軸は北東-南西にとる。長径0.90m、短径0.62m、現状の最大の深さ0.16mを測る。埋土上に炭粒混じり黃灰色砂質土（52）があり、出土遺物は認められなかった。

土坑13（図60・69~71）

巨勢山420号墳の南側墳丘流出土に掘り込まれた土坑で、長軸を北西-南西にとる木棺直葬の埋葬施設を検出した。墓域は長径2.26m、短径1.07m、現状の最大の深さ0.50mを測る。木棺の痕跡は長径1.70m、短径0.70m、現状の最大の深さ0.20mを測る。床面は平坦であり、箱形を呈する木棺であつたと考えられる。埋土に炭屑や焼土層は認められなかった。

遺物は、須恵器（70-1）、土師器羽釜（70-2）、宝塔（図71）、刀子が埋土に混在した状態で出土した。また、墓域の上層部分全体には緑泥片岩と、宝塔に使用された二上山白色凝灰岩が散在していた。

須恵器（70-1）は出土状態を図示できなかった。頸部から口縁部にかけては欠損している。内外面ともにナデによる調整で、よく肩のはるかに丸い底部をもつ。TK43（田辺1966）に相当し、本来は土坑が掘りこまれている巨勢山420号墳に伴う遺物であると思われる。土師器羽釜（70-2）は土坑全体に点在して出土した。J2片に割れており、復原は不可能であった。内外面ともにヨコナデによる調整である。口縁部の幅を広く外反成形し、胴部の張りに対して口頭部の幅を比較的狭く成形してある事から広口A-T（松本・服部1988）に比定する事が出来る。刀子は同様出土状態を図示できなかった。刀子は420号墳に伴うものとみられるので、さきに43-9として図示した。全長14cm、刃部長9.7cm、幅0.5mmを測る。鉢、刃部、柄の先端部が欠損した状態で出土した。

宝塔（図71）は、下から基盤、塔身、相輪の3部分が出土し、笠部分は認められなかった。基礎は1部欠損しているものの1辺幅24.8cm、厚さは5.1cmの方形の板である。摩滅が激しいため高さは不明であるが上面中央部に盛り上がりが見られ、ここに塔身を据えると考えられる。

塔身は下から軸部、首部、柄部に分けられる。軸部は胴部最径16cm、高さ35.5cmを測る。平面形はやや精円形を呈し、底部は削り込みにより約0.4cmの上げ底となっている。長辺と短辺の一辺ずつと底部の大部分が欠損していた。首部は基部径15.1cm、上面径12.2cm、高さ6.4cmを測る。基部にノミ状工具痕が認められる。柄部は径6.3cm、高さは上部が著しく摩滅しているため不明である。塔身全体の表面調整はノミ状工具痕を残したままの粗い仕上げである。

相輪は長径9.1cm、短径8.2cm、残存高11.2cmを測り、平面形は精円形を呈する。相輪は本來下から、柄、伏鉢、請花（下部）、宝輪、水煙、請花（上部）、宝珠の7部分から構成される。今回出土した相輪は下半分が欠損しているため宝輪以下の構成は不明であるが、残存部から宝珠と宝輪の2単位

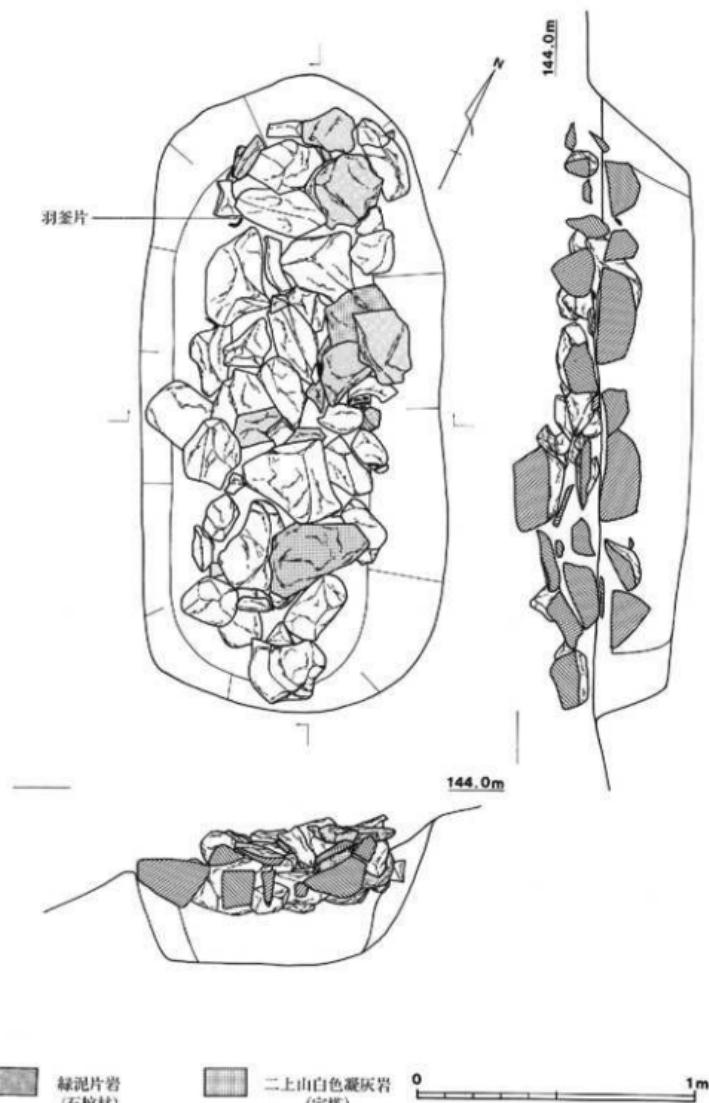


図69 上坡13 平面図および立面図 (S.=1/10)

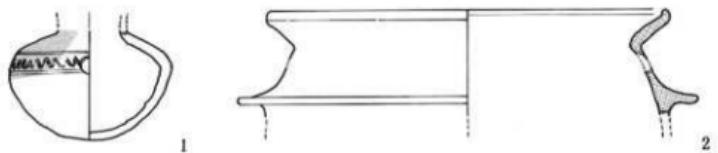


図70 土坑13 出土遺物 (S.=1/4)

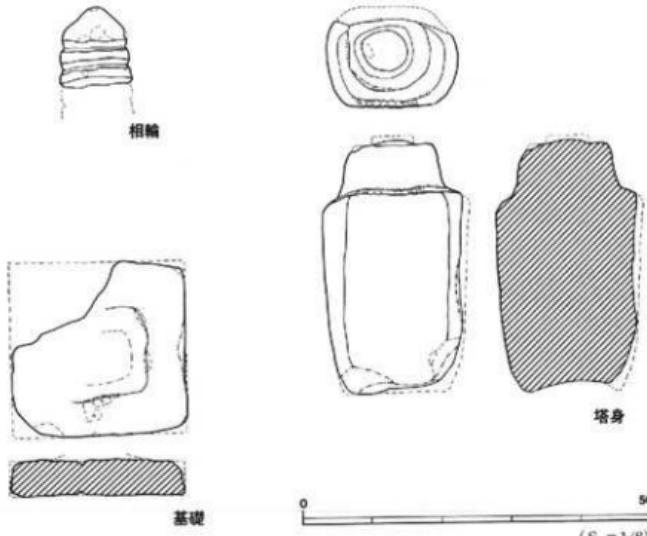


図71 土坑13 宝塔 (S.=1/8)

の表現が認められた。また、請花（上部）の表現は省略されている。宝塔は北野隆亮氏のご教示によると12~13世紀にみられる型式という。

土坑の時期に関しては、土師器羽釜A-1は11世紀後葉とされる井戸39上層期に類例があるので概ね12世紀代のものと考えられる。

土坑14（図60・72）

土坑13の南西に位置する。長軸は北東-南西にとる。長径1.49m、短径1.02m、現状の最大の深さ0.32mを測る。埋土に炭層および焼土層は認められなかった。

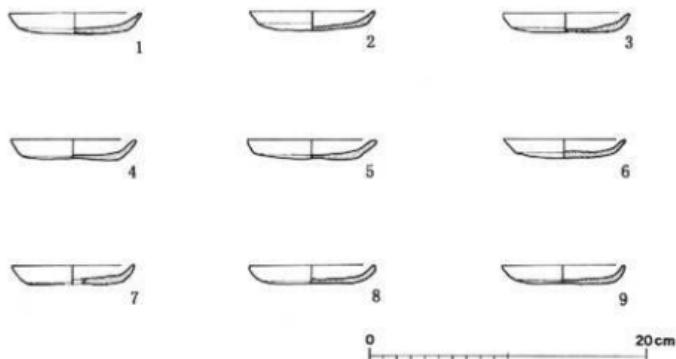


図72 土坑14 出土遺物 (S. = 1/4)

遺物は土師器小皿 (72-1~3) が重なった状態で出土した。また、土師器小皿 (72-4~9) もこの土坑に伴うものである。

土師器小皿はすべて手捏ね土器である。土師器小皿はやや丸みをもって立ち上がるものの、口縁部が直線的な立ち上がりをもつことから土師皿Cに比定できる。(松本・服部1988)。

土坑の時期は土師器小皿から12~13世紀のものと考えられる。

小結

今回の調査地内では、7~13世紀の土坑、計14基を検出した。

これらの土坑には以下のような2つの傾向が見られる。ひとつは埋土に炭層・焼土層を含んでいるが、共伴する遺物のない土坑2・6・7・8・10・11・12。もうひとつは遺物の出土はあるが、埋土に炭層・焼土層を含まれない土坑1・3・4・5・9・13・14である。

前者は、土層断面図に示されるとおり層状に堆積していることから、人為的に投入されたものと考えられる。このことは火葬後の炭や焼土を土坑内に投入したものと想定される。

一方後者は、破碎されてから土坑内に投入されたと考えられる土坑4、埋置されたと考えられる土坑1・3・5・9・14、土坑内に遺物が混在している土坑13がある。

これらのうち、ほかの土坑と時期が異なり、遺物の時期が古い土坑3、土坑4そして土坑9がある。土坑3は火葬骨の有無は不明であるが、木棺に使用されたと思われる鉄釘と供獻具と思われる須恵器水瓶が出土し、火葬に伴う遺物を埋納したと思われる。土坑4については性格は不明である。破碎されてから土坑に投入されたと考えられるので蔵骨器とは考えにくい。土坑9の性格は骨蔵器を伴う火葬墓と位置づけたいが、遺物の出土が土師器壺の1点のみの出土であり、人骨の有無が不明であるため、積極的な根拠には乏しい。土坑1・5・14は土師器皿が出土している。土坑1にお

いてガラス玉、土師器小皿、降半永賓が出土し、遺物の構成から祭祀行為が行われた可能性を想定できる。残る2つの土坑は土師器皿のみであるが同様の性格を想定したい。土坑13に関しては、木棺や宝塔の存在から墓であると考えられる。

次に、土坑にはもう一つ近接した位置にいくつかの土坑が固まる傾向が見られる。それは、巨勢山415号墳の東側掘割に掘り込まれた土坑1～3、調査区東端の東側斜面流出上に掘り込まれた土坑5～7、巨勢山418号墳の南側掘割の埋土から墓道1の埋土にかけて掘り込まれている土坑8と墓道1の南側の肩から墓道埋土にかけて掘り込まれている土坑10、巨勢山420号墳の東側の墓道2・掘割の埋土に掘り込まれている土坑11・12、巨勢山420号墳の南側墳丘流出土に掘り込まれた土坑13・14である。しかし、有機的な関係があるかどうかは不明である。

以上土坑の性格について述べてきた。土坑13を除く計13基の土坑については、火葬墓である可能性を想定してきた。しかし、どの土坑も人骨の有無は不明であり、火葬墓であるという積極的な根拠は乏しい。しかし、炭屑・焼土屑、そして遺物を人為的に投入、埋地した造構であり、今後人骨を含む土坑や炭屑・焼土屑を出した火葬場が出土する可能性も皆無ではないことから、火葬墓である可能性を想定しておきたい。

最後に、巨勢山丘陵が古墳時代から中世まで墓地として利用され、また、地形的に当然であるかもしれないが古墳裾の平坦面や墓道を利用して土坑が作られた可能性は重要であると思われる。

第16節 炭焼窯

414号墳から419号墳に至るまで10度前後の緩斜面で西に下った尾根は、419号墳の西では56度前後の急斜面となった後、再び14度前後の比較的緩やかな斜面となるが、炭焼窯A・Bはこの傾斜変換線上に築かれている。これらの北には420号墳が位置し、墳丘東南部を曲する掘割には接する位置にあたる。炭焼窯A・Bはいずれも地山を掘り込んだ半地下式の構造で、遺物は検出されなかった。詳細な構築時期は不明だが、炭焼窯Aの形状が、煙道部に煉瓦を使用している巨勢山429地点（本書第5章）の炭焼窯に類似していることから考えて、炭焼窯A・Bともに明治前後の構築とみられる。

1. 炭焼窯A（図73）

後述の炭焼窯Bの奥壁部の一部を破壊して本窯は棗かれており、炭焼窯Bより後出する。主軸はN-46度-Eを向く。焚口、燃焼部、焼成室、煙道部から成る。後述する通り、天井は崩落しているため形状は不明である。壁面は被熱によって全体に黒褐色あるいは赤褐色に変化している。壁面の高さは最も高いところで床面から約0.8mである。全長は4.1mで、平面形はしゃもじ形を呈する。焚口は幅約0.7mで、緩やかに傾斜しつつ燃焼部へと続いている。燃焼部と焼成室との境界に段や溝などは見られず、緩やかな斜面でつながっている。

焼成室は長さ約2.2m、最大幅約1.6mで、床面はほぼ平坦である。圓化出来なかったが、床面全体

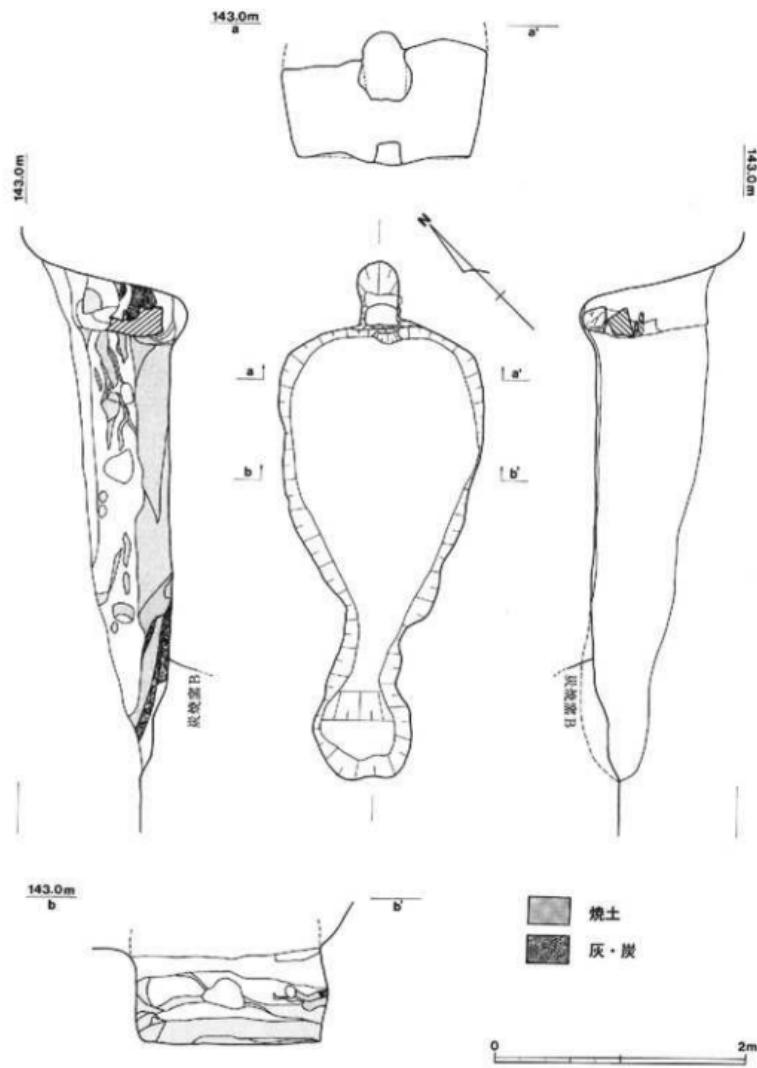


圖73 炭燒窯A

は、厚さ1～2cm程度の木炭で覆われていた。

煙道は焼成室の奥壁中央部を掘り込んでつくられており、幅約30cm、奥行約40cmである。煙道最下部は焼成室床面より約10cm低くなっている。煙道入口は概ね方形に加工した石材を左右に2石据え、その直上に比較的大きな石材1石を架け渡し、さらにその上に偏平な石材2石が積まれている。こうして形成された煙道部前面はスサを多く含んだ粘土で被覆されており、被熱によって黒褐色に変質していた。石材を被覆している粘土の最上面は平坦面を成しており、何らかの目的で平坦にされたのは明らかである。おそらくこの部分にも煙道入口が存在していた可能性がある。したがって2つの煙道入口を有する構造であった可能性が高い。

焼成室内の堆積の状況だが、床面から約20cm程度の焼土層は操業を終えた直後、天井および壁面の大部分が一気に崩落したものと考えられる。その上層で塊状に観察される焼土も天井あるいは壁面の一部と思われ、堆積の過程で混入していったものだろう。また、焚口から燃焼部にかけての木炭層の堆積状況から判断して3回の操業面が確認できる。ただ、焼成室床面には木炭層の顕著な堆積は認められないので、おそらく焼成室内に限っては、操業の度に掃除が丁寧に行われていたのだろう。

2. 炭焼窯B（図74）

炭焼窯Aの焚口部が本窯の奥壁部の一部を破壊してつくられており、構築時期は炭焼窯Aに先行する。主軸はN-29度-Eを向く。炭焼窯Aと同様、焚口、燃焼部、焼成室、煙道部から成る。天井は崩落しており、形状を知ることは出来ない。壁面は天井部に向かってやや広がるが、直立に近い。最も高い箇所では床面から約1m程遺存している。壁面全体は被熱によって黒褐色あるいは赤褐色に変質している。全長は約5.2mで、平面形は羽子板状を呈する。焚口から燃焼部にかけての床面はほぼ平坦だが、焼成室に向かって緩やかに下降していく。

焼成室は長さ約2.5m、最大幅約2.2mで、固化出来なかったが床一面に薄く木炭が堆積していた。特徴的なのは煙道下部から焼成室中央にかけて溝がびている点である。長さは約1.6mだが、焼成室中央部辺りで溝の先端部はピット状に膨らむ構造になっている。これがどのような役割を果たしていたのかはっきり判らないが、除湿用ではないかと推定している。

煙道部は奥壁部中央を掘り込んでつくられており、幅約40cm、奥行約50cmである。煙道最下には炭焼窯Aと同様、方形に加工された石材2石が左右に配され、煙道入口を形成している。その上に架け渡すかたちで比較的偏平な石材が7石積み上げられており、この部分はスサを多く含んだ粘土で被覆されていた。粘土は被熱によって黒褐色に変質していた。最上段の石の上面には粘土の被覆は無く、石の面を利用して平坦面が形成されている。前述の炭焼窯Aのように、粘土と石の違いはあるものの、この平坦面は意識的につくりだされたものと思われ、この部分にもう一つ煙道入口が存在していた可能性がある。

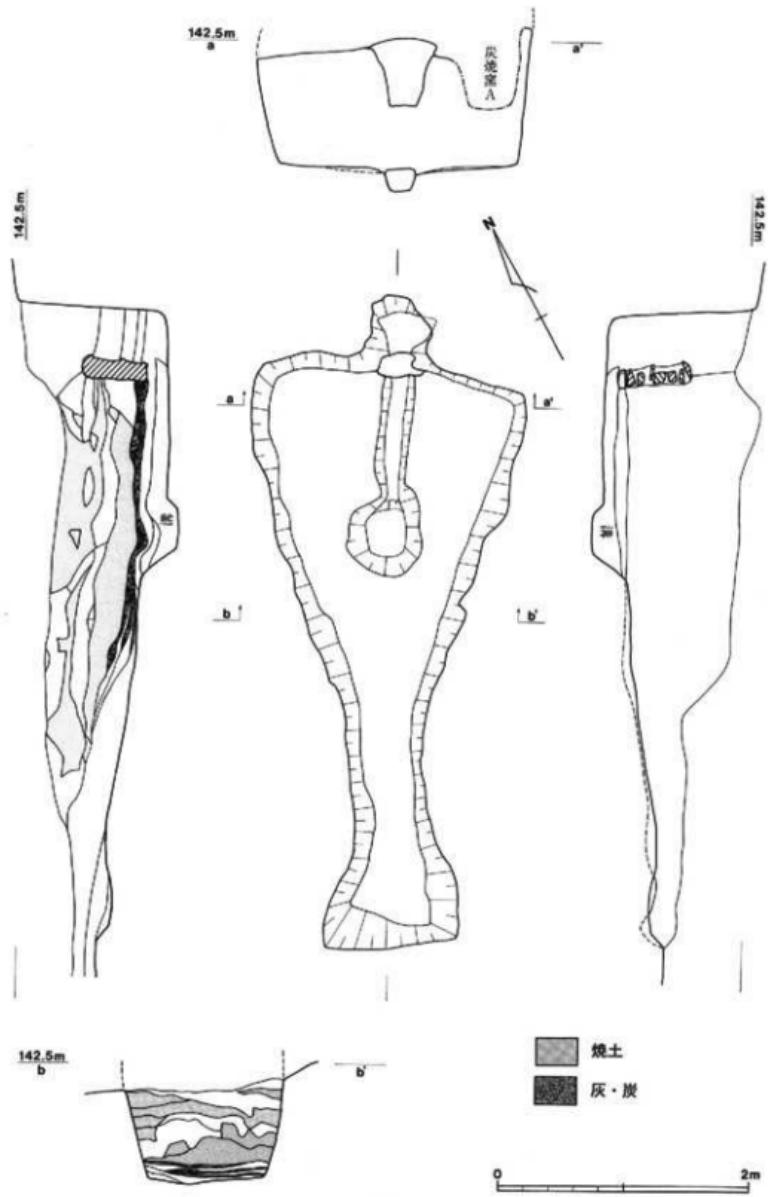


図74 炭焼窯B

焼成室内の堆積状況だが、焼土層は操業が終了して間もなく、天井部および壁面が崩落したものと思われる。一方、木炭層の堆積状況から4回の操業面を確認出来る。燃焼部により近い部分の堆積状況は操業面を判別しやすいが、焼成室奥半部の木炭層は分層が困難であったため、図上では厚い1層の堆積となっている。しかし本来は3回の操業の結果として堆積したものであろう。ここで問題となるのは2回目操業時における煙道入口の位置である。2回目操業時点において、煙道入り口は堆積土によって塞がれてしまっていたようである。そうすると2回目以降の操業時においては前述のもう一つの煙道入口が機能していたと考えるしかなく、この存在の可能性が強い。そして、これら二つの煙道入口は築造当初から機能していたと考えられる。

第3章 B地区（西寺田字血取および城山地区）

巨勢山373・374号墳の調査

第1節 位置と調査方法

調査地は巨勢山古墳群の西部に相当する（図2）。標高286.3mの朝町山から四方に尾根が派生し、巨勢山丘陵の西半部を形成しているが、うち、北西に延び、371号墳へと至った尾根は2方へと分岐する。

一方は371号墳から北西に延びる407・408・409号墳を乗せる支尾根で、この一両は1997～1998年度にかけて調査を実施しており、別に報告の機会を予定している。

もう一方は、371号墳から京宮山古墳の南側へと至る総長800mに亘る北へ延びる主尾根で、以下報告する巨勢山373・374号墳はこの主尾根の371号墳の北側直下の位置に古地し、さらにここから北へ下った後、さらに北西や西に向いて派生するそれぞれの支尾根上に第2章で報告した巨勢山414～421号墳や「塙谷支群」（久野1974）などがあった。

さて、巨勢山古墳群では早くから土砂採取や採石のために多くの古墳が未調査のまま破壊されてきたが、この巨勢山373・374号墳の両墳も遅くとも昭和57年にはこうした開発行為のために、尾根上に取り残された状態であった。

同57年、巨勢山古墳群の全面的な分布調査が実施され、その成果は「巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」（田中1983）として刊行されたが、同書ではこの両墳は消滅墳として登録されていた。このような誤りが生じた原因は、両墳の場合、尾根の西半分は完全に削り取られた状態であったので、単なる踏査では位置の認定が極めて困難であったことに起因して、採石工事が尾根の背を超えてさらに東側まで及んでいるものと誤解されたためとみられる。

この度の調査に先立ち、周辺を再踏査したものの、上記のような事情で、やはり位置関係の認定は難しく、古墳の名称さえ判然としないまま調査に入らざるを得なかつたが、事前に開発業者と共に現地に立ち会い、調査の必要な範囲を現地で明示することによって、一度は消滅墳とされた両墳を発掘調査対象とし得たのは幸いであった。開発業者の株式会社御所興産のご理解とご協力に深謝したい。

なお、両墳の地図上の位置関係を確定でき、それぞれの古墳名（番号）が明らかになったのは、調査の終盤に、国土座標に基づく汎化測量業務を委託したことによる。

調査は、尾根中央に土層観察用のアゼを設定したうえで、地形や古墳の遺存状況を勘案しつつ、それに直交または斜交するアゼのほか、必要に応じて任意にアゼやトレンチを設定して掘り進めた。煩雑になるので、地形測量図では図示の箇所の位置と方向を示すことにとどめている。なお、地形測量業務は株式会社相互技研に委託した。本章で用いる「北」は第IV系国土座標の方眼北である。

第2節 巨勢山374号墳

記述の都合上、374号墳を先に報告する。本墳は一辺13~22mの歪な形状の台形を呈する墳丘で、群集墳中のものとしては大形といえ、南北それぞれに墳丘端を画する掘割を設ける。

ほぼ真南に開口する左片袖式と推定される横穴式石室を内部主体とし、玄室長4.6m、玄室幅2.4m程度に復元でき、その規模も巨勢山古墳群としては最大級である。玄室には敷石を有し、開口部から南に延びる墓道がある。

出土の須恵器はTK10およびTK43型式併行で、このほか鉄洋、釘、足金具、黒色土器片などが出土した。

1. 位置と墳丘（図2、75~76）

371号墳はこの付近のピーカーを形成しており、そこから主尾根と支尾根はそれぞれに急な斜面を経た後に北と北西に延びて行く。以下報告する374号墳は、主尾根のこの急な斜面がひとびやや平坦となる尾根鞍部に古地し、その北側は再び標高を若干上げて後、北へ下る主尾根となる（図2）。

371号墳から北に下る急傾斜がとぎれ、やや平坦となる南の鞍部端の位置に、尾根に直交する南掘削を設け、同様に約22m北の鞍部端にも北掘削を掘削する（図75）。いずれも地山を掘削したもので、直線状に延びるので、方形の墳丘を意識するものとみられるが、南・北掘削の方向は一致しない。北掘削の下辺の幅は1.8mでほぼ一定である。

南掘削は墓道にはば直交して取り付き、墳丘西半部にのみ掘削される。南掘削の下辺の幅は1~3m程度となっており、墳丘は本来この南掘削の北の肩から立ち上がるが、後に築造された373号墳（後述）によって改変を受けており、西の辺も373号墳の地山整形によって同墳近くが削り取られている。

墳丘頂は石室床面からおよそ1mの高さにあり、腰高である。盛土は原則として内から外に積まれる（図76）が、貴重したものではない。石室石材の抜取は東に向けて行われており、東側での墳丘の改変が著しい。

墳丘と石室を横断するトレチ（B-B'）は設定し、掘削はしきったものの、遺憾ながら調査期間の制約により完全な図化までには至らなかったのでここでの図示は割愛したいが、そこで判明したことは、①墳丘西側の盛土は最大1.3mで、西側では標高にして213.2mで地山に達すること、②尾根の中央（背）は墳丘の西半部分にあり、そこでは北掘削の位置から南掘削の位置に至るまで、標高約213mのほぼ平坦な鞍部の旧地形であったこと、③墓壁は尾根の背から東斜面にかけての地山を、尾根筋からやや東側に振った軸で掘削され、玄室床面から墓壁上面までの高さは、西側で2.6m、東側で0.6mと大きく異なること、④これは横穴式石室の開口方向が尾根の背から東に振った斜面に設定されたためであること、⑤墓壁の幅は玄室部分の上辺で5.2m、下辺で3.8mであること、などである。

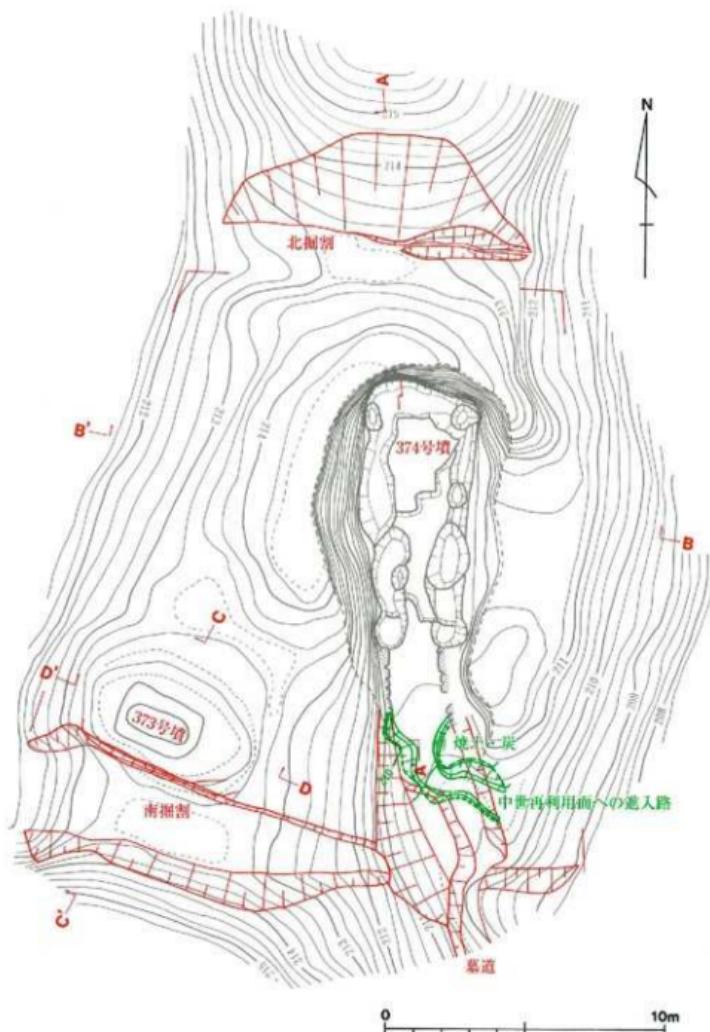


図75 巨勢山373・374号墳 溝量図 (S. = 1/200)
(赤網は374号墳の造構)

墳丘規模については、東西方向では断面位置(B-B')で測った場合には西は212.50m、東は210.50mのセンター付近に盛上の端があるが、北・南の掘削は尾根の背いっぽいまで抜けており、実際の墳丘規模はこれより大きい。

東西では斜面が急激に落ちて行くところまでが墳丘とみなされたよう、センターも直線状に延びるので、地山の整形も成されたのであろう。

まず、南掘削は西では212.25m、東では209.00mのセンター付近まで延びており、南の辺は約21mとなる。

一方、北掘削は西では212.00mのセンター付近まで掘削され、南掘削の南西コーナーと概ね対応する位置にあるが、直角のコーナーを形成しない。また、東では、仮に崩落を考慮に入れたにせよ、痩せ尾根となっているために図示の位置以東に北東コーナーを想定することはできないので、ここでも直角のコーナーを形成しない。北掘削の東西方向の長さは最大で見積もっても13m強ということになるから、南掘削の辺、約21mとの差は大きく、コーナーも直角を意識しているとは考え難いので、方墳というよりも台形の墳丘を指向した可能性がある。もとより重な形状なので規模を示し難いが、一応、一辺約13~22mの台形の墳丘を持つ古墳としておく。

開口部には地山を掘り込んだ墓道が取り付き、概ね南に延びる。主体部の横穴式石室の開口方向は南東のコーナーに近い方向へ向くことになる。墓道はひとたび18m程度に幅を減じた後、墳丘の南東コーナーの南向きの落ちと交差する付近ではさらに幅を減じて東の肩を失う。この状態では墓道として機能しがたいとみられるので、おそらく墓道として使用する際には東側に盛土を行

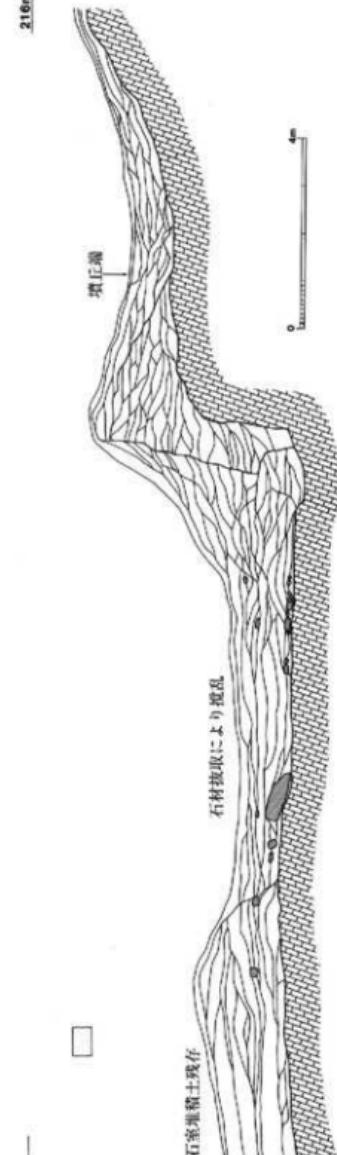


図76 巨勢山274号墳 土解断面図

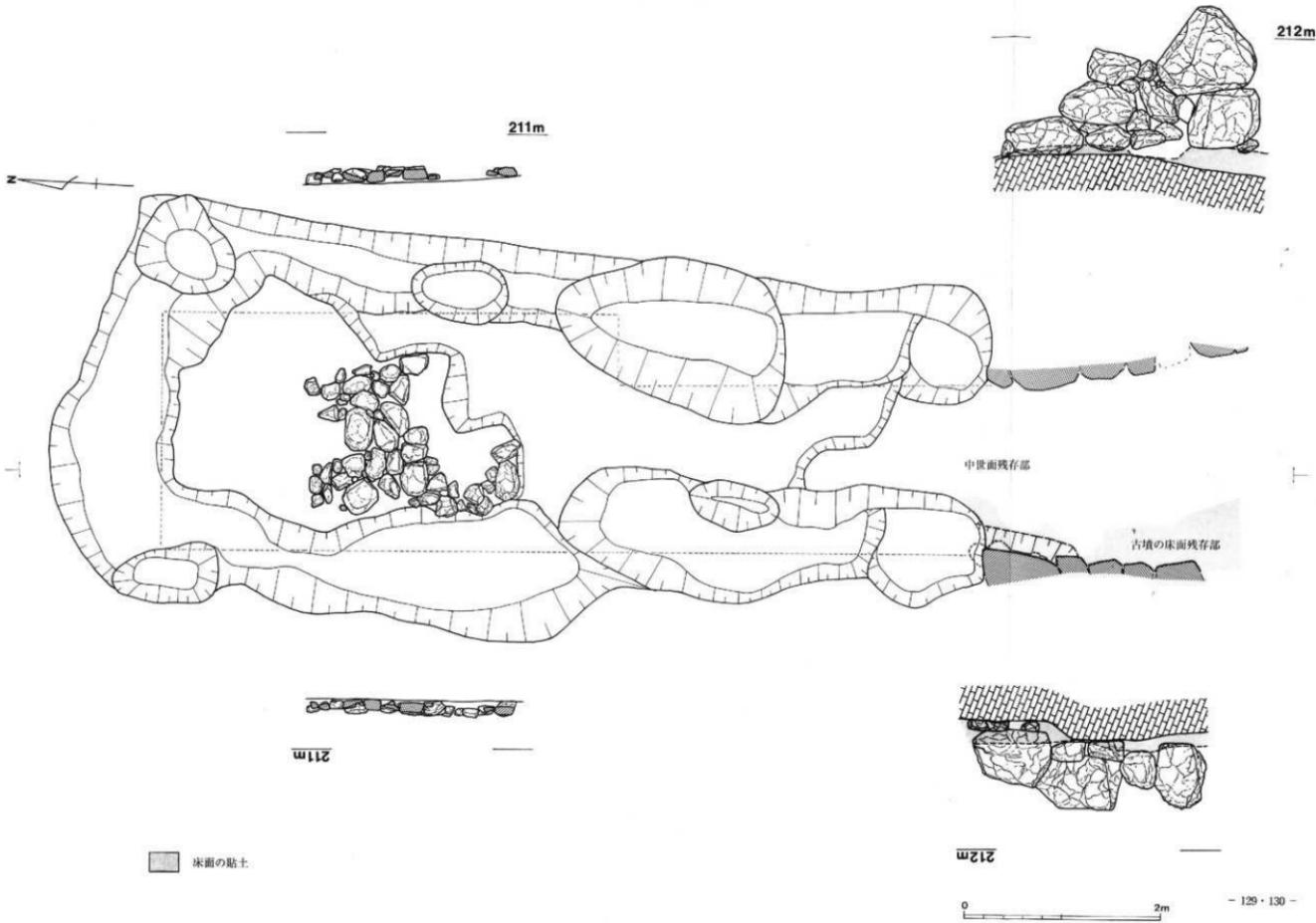


図77 巨勢山374号墳 石室 ($S_r = 1/40$)

い、平坦面を確保していたものと考えたい。

なお、図75に示したように、中世再利用面への進入は東側から行われ、開口部付近の東側の一画には、焼上や炭が厚さ10cmばかり堆積していた。

2. 主体部（図77）

乱掘著しく、狭道の開口部付近の一部石材を除いては、石室石材は元の位置に遺存していない。東中央の、袖部と推定した位置の抜取痕は他より20~30cm程度深く、その他の位置の抜取痕も含めて検討すると、東側に袖を持つ左片袖式の横穴式石室とみられる。前述の通り、開口方向を尾根の東斜面に設定するために西側が尾根の背となっており、左片袖式となったのはこうした地形の制約を受けたためであろう。なお、抜取痕の形状から西側にも袖があった可能性も考えたが、かなり不自然な平面プランを想定しなくてはならないので、これは棄却する。また、西側に極めて小さな袖部を想定することもできるが、古墳の築造時期（T K 10型式併行期）からみて可能性は低い。

石室全長11.0m、玄室幅2.4m、玄室長4.6m、羨道幅1.7m、羨道長6.4mに復元したが、概ね大過ないものとみられ、巨勢山古墳群では最大級の横穴式石室といえる。石室主軸はN-3度-Wではば真南に開口する。

玄室の中央付近には敷石が遺存する。長径25~45cm、厚さ10cm程度の花崗岩（黒雲母角閃石閃緑岩）で、間隙を割石で詰める。表面は自然面、裏面は削面の場合が多い。敷石は地山に直接乗るものもあるが大半は黄褐色砂質土の間層を5cmほどはさむ。敷石面が初葬面か追葬面かの判断の材料は得られなかつたが、巨勢山古墳群の他例に鑑みると、敷石は追葬にともなって施された可能性が高い。

開口部にはわずかに石室が遺存した。石材はやはり花崗岩（黒雲母角閃石閃緑岩）である。概ね基底石を残すのみであるが、南端の入り口部分まで遺存し、羨道につながる。壁面を構成する石材は長径70~80cmの小振りのものも多いが、放置された石材には1.1~1.5mのものがみられるので、これは開口部付近の部分的な特徴であろう。開口部においては両壁とも、南端の石室入口部から160~180cm北までは地山と基底石との間に黄褐色砂質土の間層がある。安定を欠き石材も小振りなので、おそらくこの部分には天井石が構架されることはないであろう。

3. 出土遺物（図78~82）

石室が遺存する羨道部分と玄室の敷石遺存部分では石室の堆積土も遺存し、その床面付近は少なくとも中世の再利用時の状態を保っていたが、原位置で出土した遺物は皆無であった。

須恵器杯蓋・杯身の帰属時期は2時期に分けることが可能である。杯蓋78-1~7と杯身78-11~17はT K 10型式併行に、杯蓋78-8~10と杯身78-18~22はT K 43型式併行に比定できる。おそらく初葬と追葬の差であろう。須恵器には図79に図示した高杯や器台、短頸壺の他、図示不能なが

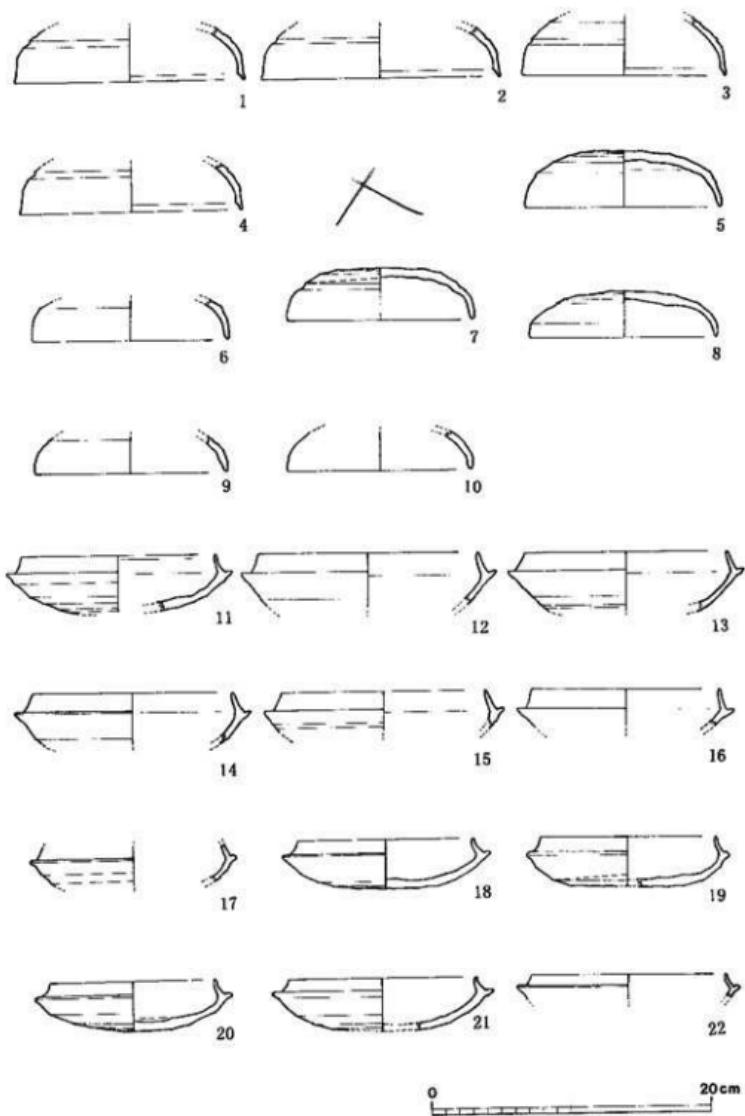


図78 巨勢山374号墳 出土上器 その1 (S.=1/4)

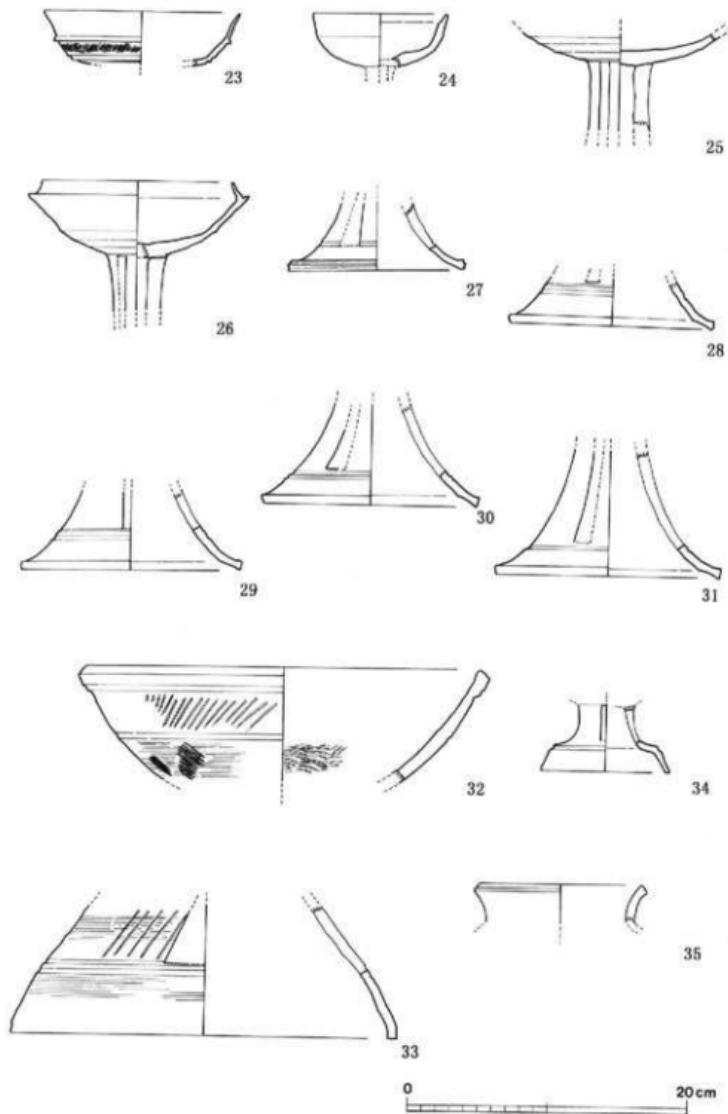


図79 巨勢山374号墳 出土土器 その2 (S.=1/4)

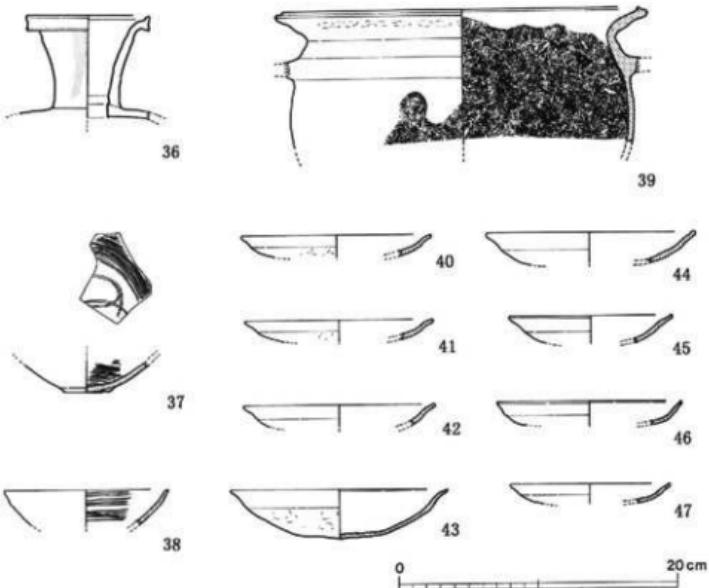


図80 巨勢山374号墳 出出土器 その3 (S.=1/4)

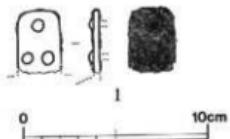


図81 巨勢山374号墳
出土雲珠脚金具 (S.=1/3)

ら長頭壺や甕の破片もある。

本来374号墳に伴ったとみられる鉄製品としては鉄釘と脚金具、鉄滓などがある。鉄釘の破片は数点あるが、いずれも長さ5cm程度しか遺存しておらず、図示に耐えない。断面方形で8mmほどの原みのものである。脚金具(81-1)は玄室敷石遺存部上面の中世の堆積土から出土した。長さ3.3cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmで、先端の両角は隅丸である。長さからして雲珠の脚金具とみられる。鍛金は認められない。3紙が打たれており、鍛頭径はいずれも7mm、鍛頭高3mmである。

鉄滓は大半が楕円鍛練鍛冶滓とみられる。82-2~6は淡道堆積土のうち、石室基底石の中位から上位にかけて堆積した、黒褐色砂質土(厚さ11~26cm)から出土した。82-2は4.5cm×3.4cm×2.9cm、重量38.5g、磁着度は2である。分割されたうちの1片で、側面の3辺が破面となっている。表面は褐灰色を呈する。側面はほぼ直角の辺を持ち平坦である。破面は灰褐色を呈し、気泡が発散、砂粒を多く含みやや粗い。裏面は楕状の炉床の形状をよく残し、砂粒が多く付着する。82-3は側面全辺が削られている。5.0cm×2.5cm×2.3cm、重量22.3g、磁着度は2である。表面は灰褐色を呈する。

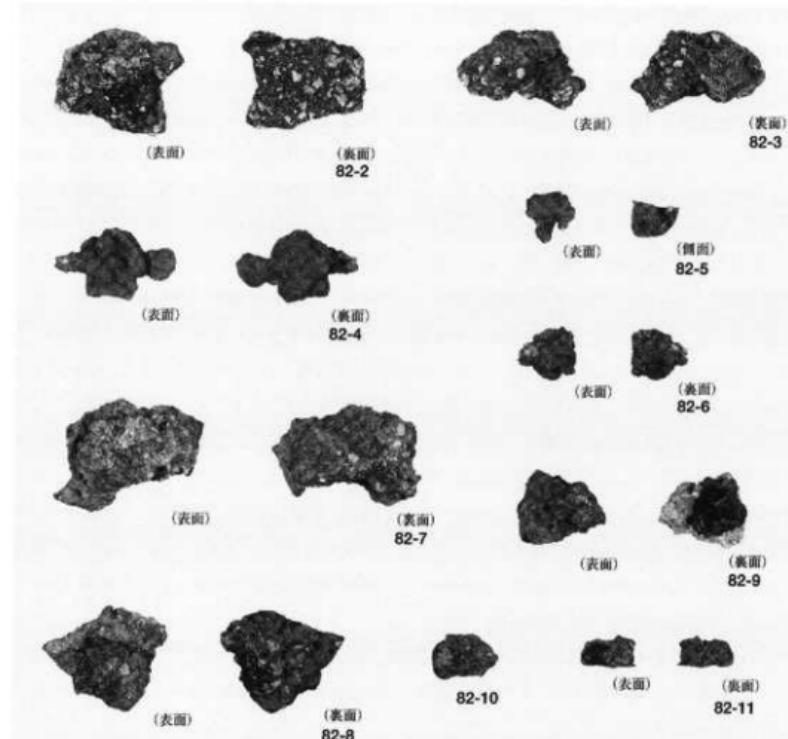


図82 巨勢山374号墳 出土鉄滓 (S.±1/2)

上面は中央寄りが壅み、羽口および黒色ガラス滓が付着する。凹凸を有し、砂粒が多く付着する。破面は灰褐色を呈し、気泡が発散、砂粒を多く含みや粗である。裏面は凹凸は有るがほぼ平坦でが床を付着し、ガラス質に変質した部分がある。82-4は端部で、中央寄りの1辺が破面となっている。4.2cm×2.8cm×1.7cm、重量22.4g、磁着度4の含鉄鉄滓である。表面は褐色を呈する。上面は小波状の凹凸を有するが滑らかである。破面は褐色を呈し、気泡が発散するが砂粒はほとんど含まず緻密で硬質である。裏面はほぼ平坦で木炭痕を有する。82-5は端部を含む破片で1.7cm×1.7cm×1.5cm、重量5.6g、磁着度2である。表面は褐色から黄褐色を呈する。上面は多孔質で凹凸を有し、黒色の鉄成分が目立つ部分がある。側面の1辺はほぼ直角の辺を持ち平坦である。破面は黒褐色を呈し、気泡が発散するが砂粒は含まず緻密で硬質である。裏面は凹凸はあるがほぼ平坦である。82-6も端部を含む破片で表面は褐色から黄褐色を呈する。2.0cm×2.1cm×0.9cm、重量5.3g、磁着度2である。上面は若干の凹凸を有するが比較的滑らかである。破面は褐色を呈し、気泡が発散し砂粒

を多く含むが緻密で硬質である。裏面は凹凸はあるがほぼ平坦である。

鉄滓の82-7~11は狭道堆積土のうち、中世再利用面埋土の黄褐色砂質土（厚さ9~17cm）から出土した。なお、この層は、さきの黒褐色砂質土より下位の基底石の下位近くに堆積し、両層との間に暗灰黄色砂質土（厚さ11~29cm）の間層をはさむ。また、374号墳木床の床面は、図76に示した一部を除き、この中世面しか遺存しない。82-7は端部で、中央寄りの1辺が破面となっている。5.6cm×3.4cm×2.8cm、重量72.8g、磁着度4である。1.8×1.0cmの鉄片を取り込んでいる。表面は褐黄色を呈する。上面は平坦であるが砂粒が多く付着する。側面はほぼ直角の辺を持ち平坦である。破面は褐色を呈し、気泡が発散、砂粒を多く含むが緻密で硬質である。裏面は炉床の砂粒が多く付着する。精錬鍛冶滓とみられる。82-8も精錬鍛冶滓の1片とみられ、側面の2辺が破面となっている。表面は褐灰色を呈する。4.0cm×4.0cm×1.0cm、重量30.6g、磁着度4である。上面は比較的平坦な面の上に2.5×2.0cmの鋸化の進んだ鉄片が乗る。外皮の側面はほぼ直角の辺を持ち平坦である。破面は灰褐色を呈し、気泡が発散、砂粒を多く含む。裏面は椀状の炉床の形状をよく残し、砂粒と炭が多く付着する。82-9は精錬鍛冶系鉄塊で、3.3cm×2.9cm×1.8cm、重量22.0g、磁着度5である。表面は黄褐色を呈し、5mm以下の小さな本炭痕がある。緻密で硬質である。82-10は割れ口を持たない小塊不整形鉄滓で、外皮は褐灰色を呈する。2.5cm×1.8cm×1.1cm、重量3.7gで比重は軽い。全面に砂粒が付着する。82-11は棒状のT具に付着していた洋の一部である。2.1cm×1.8cm×0.6cm、重量1.9g、磁着度2である。表面は溶解して垂れ落ちる水滴のような様子を見せる部分がある。表面は黒褐色を呈し、滑らかで破面も緻密で硬質である。

その他、石室攤乱土からの出土遺物には須恵器壺（80-36）、瓦器壺（80-37・38）、羽釜（80-39）、土師器小皿（80-40~47）など奈良時代から中世にかけての土器がある。いずれも石室再利用に伴うものであろう。

第3節 巨勢山373号墳

374号墳の南西隅の墳丘盛土を削って整形された小墳で、7.0m×4.8mの長方墳を意識するらしい。主体部は舟形木棺を直券する。出土遺物はなかった。TK10型式併行の築造であろう。

373号墳は、374号墳の南西コーナーの内側に、374号墳の墳丘盛土を削って整形された小墳である（図75）。373号墳の墳丘の南側は、先行する374号墳の南側削剤をそのまま用いて画され、南の墳丘端は不整形ながら直線に延びるので、方墳を意識したものとみられる。

373号墳は全く盛土を行っておらず、墳丘はすべて374号墳の盛土とそこからの流出土でまかなわれる。図83のC-C'断面で示した通り、地山整形された374号墳の墳丘端を利用するわけではなく、流出土が地山整形部分にかぶって埋もれたままの状態で、373号墳は墳丘を整形している。D-D'断面でも374号墳の墳丘盛土をそのまま利用している状況は同様で、墳丘の造成にはほとんど手をか

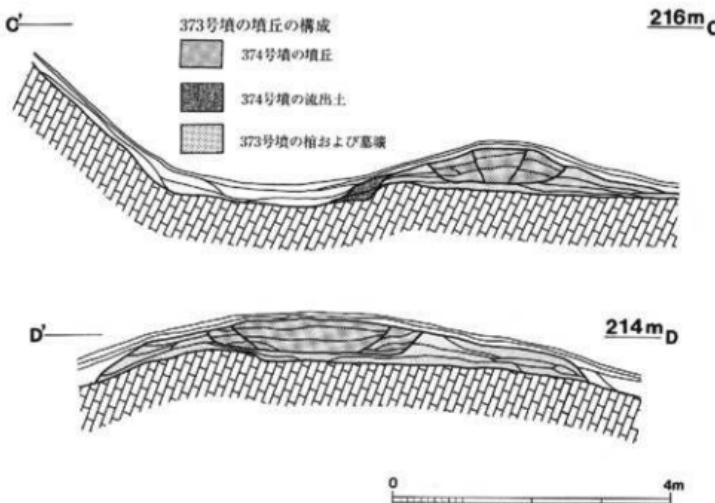


図83 巨勢山373号墳 土層断面図 (S.=1/80)

けていない。ただし、373号墳の北西部分では212.75～213.25mのコンターにかけて西側への地山の張り出しが認められ、これについては373号墳の築造にあたって地山整形が行われた箇所であろう。この張り出し部分は、先行する374号墳の南掘削西コーナー墳丘側の整形を意識して成されたものとみられ、373号墳の墳丘の一部を構成するものではあるが、373号墳そのものは標高およそ213.25mの平坦面を造成した上に築造されているので、ここでは墳丘の規模には含めないでおく。また、

墳丘の各コーナーは明確ではないものの、以上から373号墳は北西～南東に長軸を探る7.0m×4.8mの長方墳を意識して築造されたもので、これ以外に墳丘を大きく見せるために、西側で若干の地山整形を行ったものと捉えておく。

主体部はその墳丘の中央に長軸を平行して木棺を直葬する(図84)。墓壙の上辺

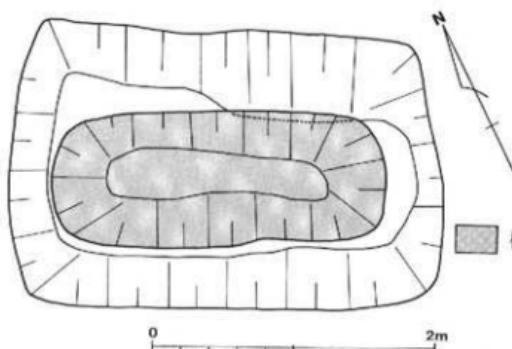


図84 巨勢山373号墳 主体部 (S.=1/40)

は長さ6.1mで、幅は4.0m～3.6mあり、北西側の方がやや広い。本棺は、各辺とも上辺より下辺が狭い舟形木棺とみられ、上辺の長さ4.8m、幅1.9m～1.7mで、墓壙と同様、全体に北西側の方がやや広く、こちらが頭位であろう。主軸はN-65度-Wである。

出土遺物は全くなかったが、374号墳より後出することは間違いない。図83のC-C'断面によれば374号墳からの流出土がさほど溜まっていたなかった時期の造成と判断でき、374号墳の築造期、T K 10型式併行もしくはさほど時期を隔てないうちに373号墳の築造期も捉えておきたい。

第4章 C地区(室宇西墳内地区)

巨勢山449号墳の調査

第1節 位置と調査方法

巨勢山449号墳は、巨勢山丘陵から北に派生した一尾根のほぼ先端に古地し、巨勢山古墳群の北西端に相当する(図2)。墳丘上からは指呼の間に、室宮山古墳の豪壯な姿を前方部側から望むことができる位置にあり(図版77)、室宮山古墳の前方部の周濠は本墳を乗せる尾根によって画されている。

昭和57年の分布調査の時点で、墳丘の南西側の一画は既に土砂採取のために破壊されていた(田中1984)が、この度(平成2年度)の調査では、墳丘の中心を越える頂部を含めた、墳丘の南西半が対象となった。墳丘の北東半は現地に遺存している。

調査は、対象となった箇所に地形や古墳の遺存状況を勘案しつつ、必要に応じて任意にアゼやトレンチを設定して掘り進めた。なお、本章で用いる「北」は磁北である。

第2節 巨勢山449号墳

直徑35.0mを測り、巨勢山古墳群では最大の円墳である。長さ約8.3mの長大な粘土櫛を内部主体とするが、遺存状態は良くない。埋葬頭位は南西側とみられる。原位置を保つ遺物はないが、埴輪、刀劍、甲冑の破片が出土した。埴輪は墳頂部にのみ立て並べられたものであろう。

築造期は中期前葉とみられ、巨勢山古墳群形成の端緒となった古墳といえる。また、本墳は、室宮山古墳の前方部側の周濠を両する尾根上にあり、時期の上でも室宮山古墳被葬者との間に密接な関係を想定できる。

1. 墳丘(図85~86)

パトロール中に工事を目撃し、急遽、墳丘の間近に迫った工事機械をひとたび止めて入った、極めて緊急性の高い調査であったため、期間、費用の両面での制約が多く、工事対象箇所(墳丘南部)のみの調査に止まらざるを得なかった。

早くから行われた土砂採取により、西側は比高差18mを越える崖面となっており、南西側の一画は地割れを起こして1m程度滑落し、崩落寸前でかろうじて崖面に引っかかっている状態であった。

調査対象となった箇所の墳丘は、墳頂部を除き、全て地山削り出しによる。段築・葺石等は認められない。調査区南部では134.1~134.7mのセンター付近に墳丘端を検出した。それ以南はひとたび傾斜が緩やかになる。一方、調査区北西部では、図示したセンター、136.25m付近までは旧状を保っていたが、以西については工事に伴う重機による根起こしのための擾乱が著しく、調査を断念した。

調査区外となった北東側には掘削があって、円弧を描く墳丘端の状況が明瞭である。この度検出

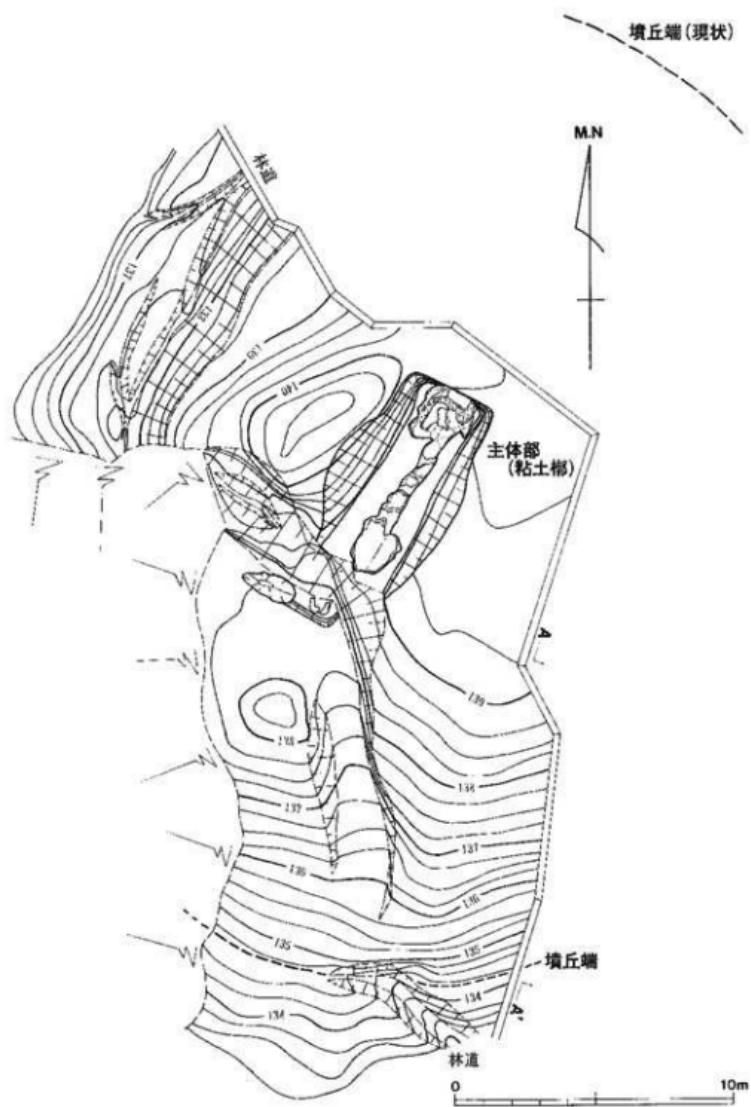
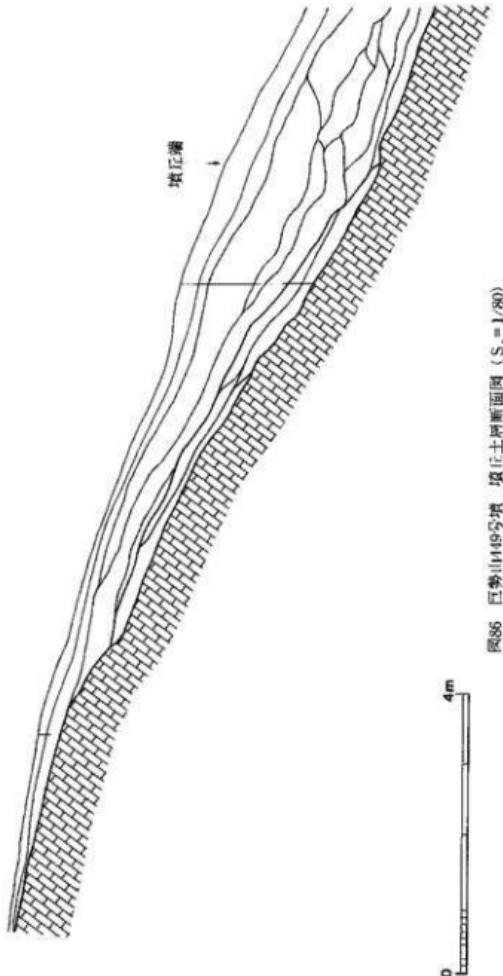


図85 石勢山449号墳 測量図 (S.=1/200)

140m A'

A



した南側の墳丘端とあわせて計測すると、本墳の直径は35.0m、高さ6.3m以上とみられ、巨勢山古墳群では最大の円墳となる。

2. 主体部 (図85・87～88)

地山を掘削した墓塙に粘土層を収める。南西側の小口付近は地滑りにより1mばかり滑落した位置にかろうじて遺存した。

墓塙は墳丘のほぼ中央に掘削される。墳頂部はかなりの削平および乱掘を受けており、墓域理土が面として遺存するのも北東の小口付近に限られる状況であった。墳頂部が削平された状態で、しかも乱掘により墓塙埋土の大半が失われているために、図示した墓塙の形状は当時のものとは言い難い側面もあるが、地山は岩盤そのものの

図86 巨勢山(149号墳) 墳〔土解断面図 ($S_r = 1/80$)〕

ところも多いので、検出したレベル（高さ）においては、概ね旧状を伺うと知り得るものと判断する。

墓塙北西側の長辺の一画では、墓塙の掘り込みは少なくとも標高140.20mからなされていた状況を看取できる。ここでの墓塙上辺と墓塙下辺（底）との比高差は1.3m以上に及び、これは他の箇所

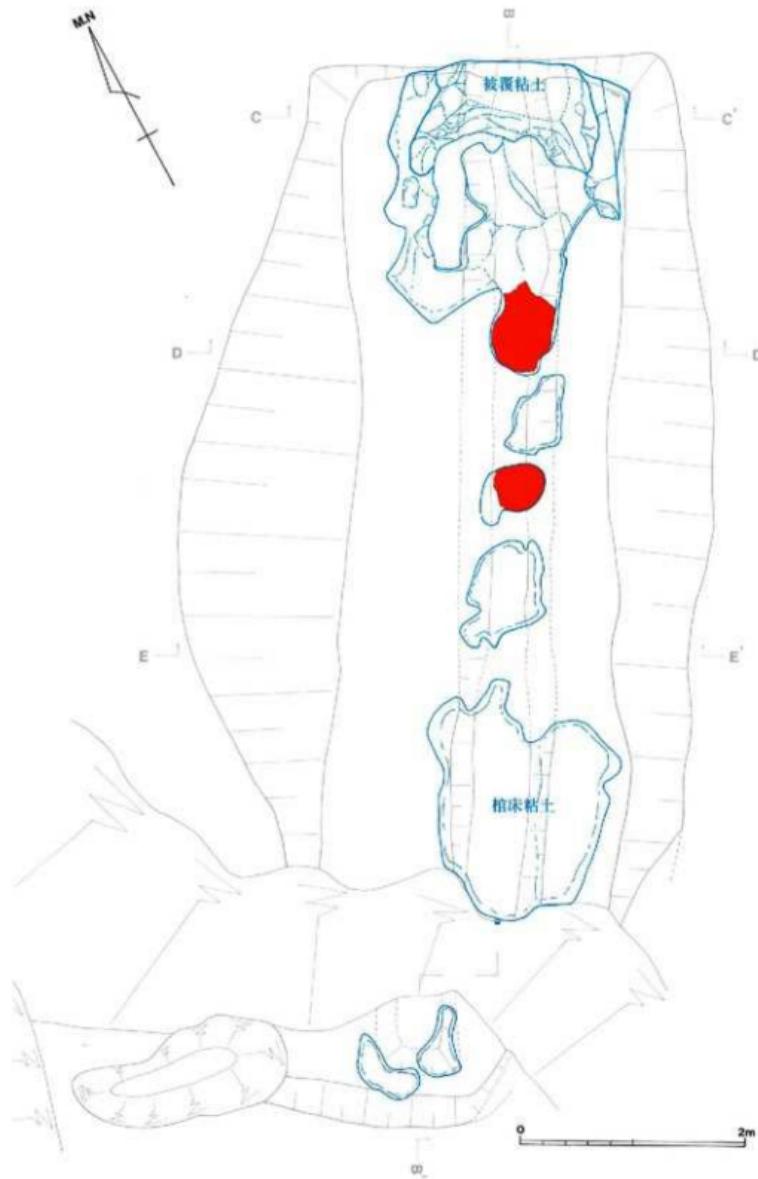


图87 巨势山449号墳 主体部粘土構 (S.=1/50)

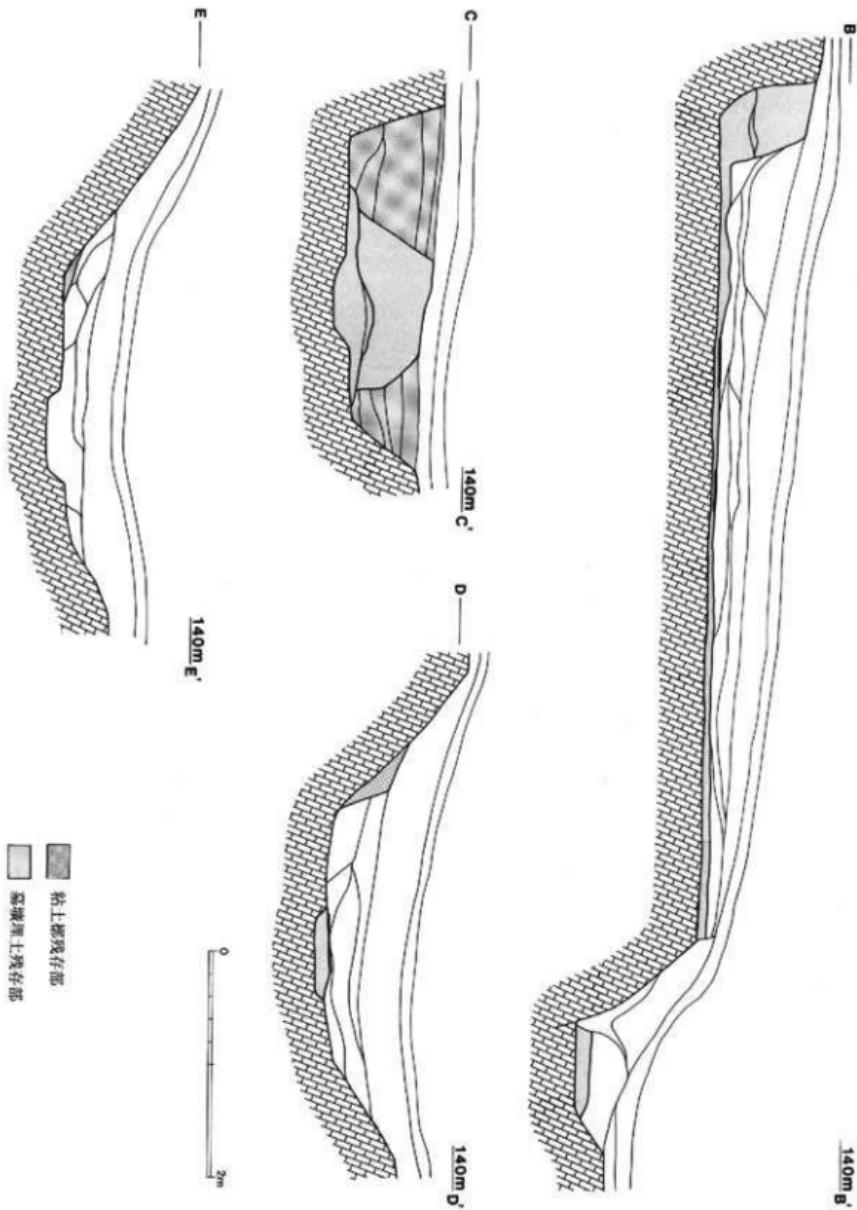


图88 巨势山449号墳 主体部粘土層断面図 ($S_r = 1/50$)

でもほぼ同様であったと考えられる。一方で墓壇は、北東の小口部分は、垂直に近い急な角度（約100度）で立ち上がるが、南西の小口部分も含め、他の箇所は比較的緩やかな掘削角度（140度前後）となっている。墓壇が上記の高さから本来は掘削されていたとすると、墓壇下辺は長さ約99m（滑落部分を推定復元）、幅はC-C'断面位置で約3.8m、D-D'断面位置で約5.3m、E-E'断面位置で約6.1mとなる。このことからすると、埋葬頭位は南西側であった可能性が高い。

なお、墓壇下辺の長さは約8.3m（滑落部分を推定復元）で、粘土桿の長さに合致するものとみられる。また、下辺の幅はC-C'断面位置で2.54m、D-D'断面位置で2.24m、E-E'断面位置で2.40mを測り、墓壇下辺の幅に関しては各位置で大差はない。また、墓壇の底はほぼ水平である。

粘土桿はまず、墓壇底のはば中央にN-30度-E（S-30度-W）に主軸を探る、長さ約8.1m（滑落部分を推定復元）、幅0.7~0.8m、深さ10~12cmの素掘り溝を設ける。この溝は北東小口では墓壇下辺に接するが、南西小口では接しない。

次に、棺床粘土上でこれを埋めるが、本来、棺が置かれた位置の棺床粘土の遺存状態は良くなく、多くは上記の素掘り溝を埋める程度までしか残っていない（B-B'断面では復原的に図示）。対して北東小口部では、棺の外側ではあるが比較的粘土桿の遺存状態が良く、これによってある程度は粘土桿の構築過程の復元が可能である。図88のB-B'、C-C'にみると、棺床粘土は素掘り溝を埋め、さらに墓壇底から中央（素掘りの溝の直上）をやや高めにして、同一の灰褐色粘土（精良だが砂礫を若干含む）で盛り上げられる。C-C'断面位置での棺床粘土の幅は1.97m、厚さは素掘り溝の底からは最大30cm、墓壇の底からは最大11cmである。

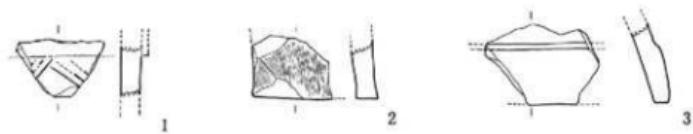
この段階で粘土桿構築の工程に中断があったものとみられ、棺床粘土の上には、C-C'断面では中央付近にのみ、疊混り灰褐色粘土の薄い間層（厚さ最大6cm）がある。疊の混り方が多く、木棺の搬入や副葬品の配列の際に、踏み締められたためかとも推測する。なお、粘土棺床においてましまみられる、この段階での赤色顔料の散布は、少なくともこの位置では認められなかった。

その上を被覆粘土（褐灰色粘土；棺床粘土より砂礫や多い）が覆う。被覆粘土はC-C'断面位置においても上面が削られた状態だが、下辺の幅は1.60mで、棺床粘土からは0.6m以上の厚みをもって盛り上げられている。この位置での墓壇埋土はほぼ水平に積まれており、比較的よく締っている。なお、墓壇埋土のうちに稀に拳大の粘土を含む場合がある。粘土桿用の粘土の残余が紛れて墓壇埋土に混入したものであろう。

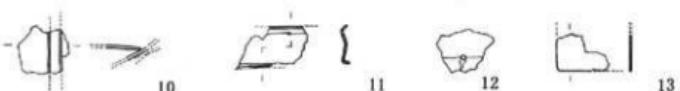
これ以外の箇所では、本来、棺が存在したと推定される位置の素掘り溝内にはところどころに棺床粘土が遺存し、うち2箇所に、極く薄いながらも、棺底に塗布されたとみられる赤色顔料の遺存が認められた。赤色顔料は未分析だが鮮やかさに欠ける。おそらくベンガラであろう。

3. 出土遺物（図89）

原位置を保つものはない。埴輪（89-1~6）はいずれも形象埴輪の細片で、円筒埴輪はみいだ



0 10cm
(S.=1/4)



0 10cm
(S.=1/3)

図89 巨勢山449号墳 出土遺物

せなかった。89-1は鞍形、他は家形埴輪とみられ、焼成の状態から、いずれも黒斑を有すると推測される。量が少なく、墳丘端等には埴輪列を認め得なかったので、埴輪は墳頂部にのみ立て並べられたと考えられる。

鉄製品（89-8～13）は武器・武具のみみられる。89-8は墳丘南斜面流出土から出土した細身の剣である。断面レンズ形の剣身部で、鎬は認められない。刃部の幅2.7cm（推定）、厚みは0.5cmで、鞘の木質が付着する。89-9は粘土棺床直上から出土した刀の茎で、全面に把の木質がみられる。

89-10～13は甲冑の破片である。89-10は墳丘南斜面流出土から出土した肩甲で、3枚が銛着している。表面は漆塗りされている。89-11は墳丘南斜面流出土から出土した。上弯した帯状の鐵板の上下端を0.3cmずつ折り返すもので、下の折り返しの方が屈曲がきつく、直角に近い。上の折り返

しの谷の部分に鍼孔があり、その径は0.2cmである。鉄板の幅は2.0cmと細く、やや特異であるが、袖鎧か肩甲の最下部とみられる。漆塗りは不明。89-12は墳丘南斜面流出土から出土した。径0.3cmの縦孔を持つ鉄板で、この鉄板が下になって上重ねされる。表面は漆塗りされている。89-13は主体部乱掘層から出土した。2辺は直角に裁断されており、表面は漆塗りされている。

本墳の築造期に関しては、長大な粘土郷という内部主体のあり方、有黒斑の埴輪、革縫式の甲冑の存在などから中期前葉に比定するのが妥当であろう。

なお、89-7は墳丘西斜面流出土から出土した凹基無茎式のサヌカイト製の石鎧である。先端は欠損しているが、鎧長は推定2.6cm、幅1.500cm（最大）、重量は現状で0.6gの小形品である。巨勢山境谷遺跡に関わる遺物であろう。

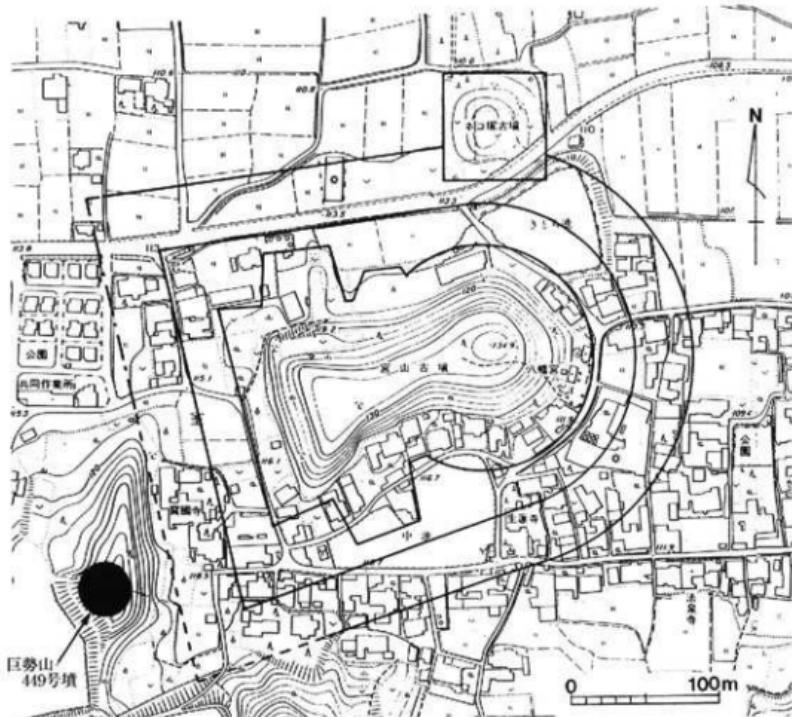


図90 室宮山古墳と巨勢山449号墳（木許1996から、一部改変）

第5章 D地区(西寺田字境谷地区)

巨勢山428・429・430地点の調査

第1節 位置と調査方法

調査地は巨勢山古墳群の西端部に相当し、元来は本書第2章に既述したA地区東側の標高のより高い位置から北西方向に派生した支尾根がこのD地区であった。A地区同様に尾根は東側から土砂採取とその後の自然崩壊により浸食され、既に昭和58年の分布調査の時点で426号墳以東は消滅していた。

調査はこの残存した支尾根の全面発掘とし、尾根中央に土壙観察用のアゼを設定した上で地形や遺構の状況を勘案しつつ、必要に応じてアゼやトレンチを設定して掘り進めた。当初、3基の古墳の存在が予想されたが、429地点は炭焼窯を横穴式石室墳の残存と認めたものであることが判明したほか、428地点は近世墓、430地点は中世集落によって完全に旧地形が改変されている。このうち430地点については若干ながら埴輪や須恵器の破片も出土している状況から見て、元々この位置に古墳があったものとみられる。なお、地形測量業務は株式会社アイシーに委託した。座標を示す場合には第IV系国土座標を用いており、本章で用いる「北」は方眼北である。

第2節 428地点 近世墓

428地点には、郡山藩に招請され正徳3年(1713年)2月5日に没した儒学者「高橋出幽」の墓とその事績を詳しく刻んだ石碑(『御所市史』184~186ページ参照)があった。墓は尾根をカットして南北14.4m、東西4~6mの平坦面を造成し、その中央に北~南に主軸を探る南北5.0m、東西3.0~3.2m、深さ2mを超える長大な墓壇を穿ち、釘で固定した木棺を直葬するもので、伸展葬の遺骸は衣服や頭髪も遺存する生きしい状態であった。なお、1名のものとするには頭髪の量が異常に多かったので、おそらくは近親者や弟子などのものであろう。

この墓壇の南小口を切って直径1.4mの別の壙があり、花崗岩(葛城石英閃緑岩)で蓋をし、白色粘土で口張りを施した備前焼系の甕棺(口縁直径50cm、高さ55cm)が納められ、硯や筆などが副葬されていた。甕棺であり人骨の大きさから判断すれば子供の墓であろう。

これらの遺骸や人骨は子孫の手により西寺田の市営墓地に改葬された。本書ではこれらの墓に関する写真や図面の掲載は行わない。ただし、甕や副葬品は他の遺物と同様に御所市文化財資料室で保管している。

このほか、6世紀代とみられる須恵器の破片が数点出土しているが、この428地点の平坦面はすべからく上記の近世墓に関わるものとみられるので、これらの古墳時代の遺物については、より標高の高い位置にかつて存在した426号墳などの遺物が流出したものと判断する。

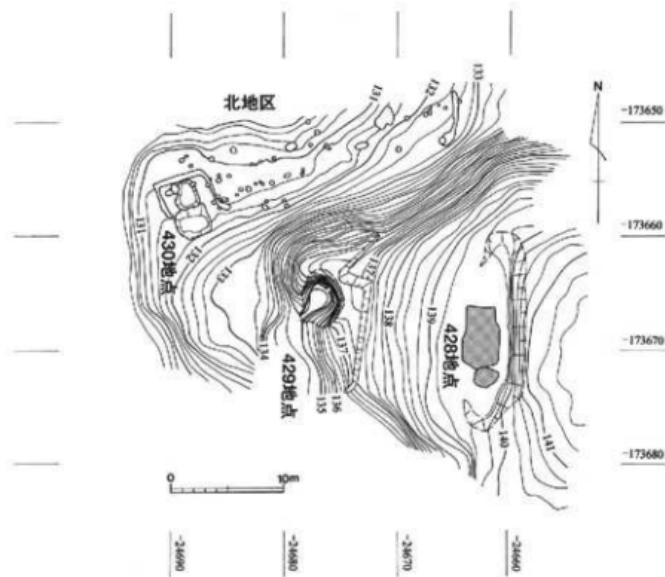


図91 428(右)～430(左)地点測量図 (S.=1/500)

第3節 429地点 炭焼窯

流出上から掘り込んで壁面はほぼ全面地山となる半地下式の構造で、遺物は検出されなかったが、煙道部に煉瓦を使用しているので明治以降の構築とみられる（図92、図版85）。

主軸はN-41度-Eに採り、焚口、燃焼部、焼成室、煙道部から成る。天井は崩落しているため形状は不明である。壁面の外側は被熱によって全体に8cm程度の幅で青灰色に変化し、さらにその外側は12cm程の幅で赤色に変化していた。ただし焚口部分は酸素が供給されるために赤色の変化のみでありその幅は20cm程度となっている。

壁面の高さは最も高いところで床面から約1.3mである。全長は3.8mで、平面形はしゃもじ形を呈する。

焚口は幅約0.7mで、緩やかに傾斜しつつ燃焼部へと続いている。燃焼部と焼成室との境界に段や窪みなどは見られず、緩やかな斜面でつながっている。

焼成室は長さ約2.3m、最大幅約2.1mで、床面は奥側に向けて7cm下がるがほぼ平坦である。床面全体は、厚さ1～2cm程度の木炭で覆われていた。

煙道は焼成室の奥壁中央部を掘り込んでつくられており、幅約15cm、奥行約50cmである。煙道最

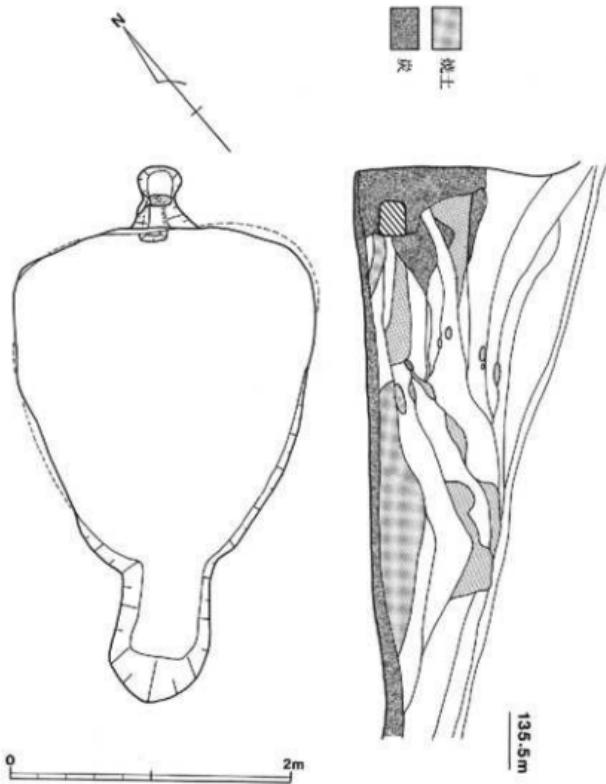


図92 429地点 炭焼窯 (S.=1/40)

下面是焼成部床面より約10cm低くなっている。煙道入口は煉瓦を2等分したものを左右に配し、その上に結晶片岩を架け渡し、その直上に石材2石が積まれておる、ここまでで床面から約30cmの高さまでを残存させているが、それより上位の構造は破壊されていた。こうして形成された煙道部前面はスサを多く含んだ粘土で被覆されており、被熱によって黒褐色に変質していた。

焼成室内の堆積の状況だが、床面から約20~30cm程度の焼土層は操業を終えた直後、天井および壁面の大部分が一気に崩落したものと考えられる。その上層で塊状に観察される焼土も天井あるいは壁面の一部と思われ、堆積の過程で混入していったものだろう。操業回数を堆積状況等から確認することはできなかった。

このほか焼成室の埋土から6世紀代の須恵器高杯脚部片が1点出土している。428地点と同様、

426号墳などの遺物が流出したもの
であろう。

第4節 北地区(430地点 含む) 集落跡

番号	長径cm	短径cm	深さcm	形	性質cm
P 1	54	39	12	a	直徑11
P 2	36	31	9	a	
P 3	25	22	17	a	
P 4	68	57	12	a	
P 5	87	60	20	a	
P 6	62	32	29	a	直徑18
P 7	40	35	18	a	直徑18
P 8	39	27	34	a	
P 9	23	24+	15	a	
P 10	40	40	42	a	
P 11	25	28	6	a	
P 12	27	25	13	a	
P 13	43	26	41	a	
P 14	37	29	11	a	
P 15	23	22	14	a	
P 16	39	29	24	a	
P 17	24	29	20	a	
P 18	61	43	23	a	
P 19	31	28	28	a	
P 20	25	24	13	a	
P 21	48	37	15	a	
P 22	54	36	11	a	直徑27
P 23	26	24	12	a	
P 24	23	21	7	a	
P 25	34	25	8	a	
P 26	24	22	18	a	直徑11
P 27	27	27	23	a	
P 28	32	28	12	a	
P 29	51	35	14	a	
P 30	27	26	19	a	直徑15
P 31	35	37	37	a	
P 32	37	31	14	a	
P 33	64	31	37	a	
P 34	30	27	17	a	
P 35	33	32	34	a	
P 36	103	87	47	a	
P 37	34	28	12	a	
P 38	31	27	18	a	
P 39	36	29	16	a	
P 40	50	47	32	a	直徑25
P 41	48	29	12	a	
P 42	75+	25	21	a	
P 43	36	30	22	a	
P 44	28	24	19	a	
P 45	129	55	19	a	
P 46	216	156	49	a	
P 47	49	44	25	b	
P 48	34	30	11	b	
P 49	47	40	17	a	
P 50	65	23	11	a	
P 51	23	18	8	a	
P 52	23	22	14	a	
P 53	27	22	7	a	
P 54	70	63	26	a	
P 55	33	31	14	a	
参照土の別					
a : 砂質褐色砂質土					
b : 原色砂質土					

北地区 ピット計測表

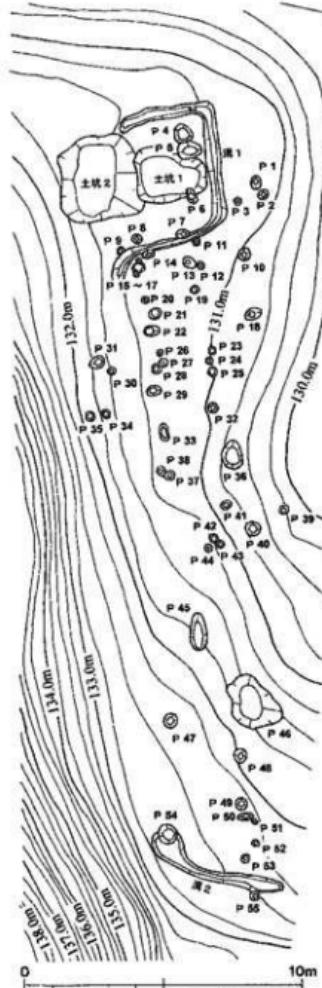


図93 北地区遺構 (S.=1/200)
センターは25cm間隔

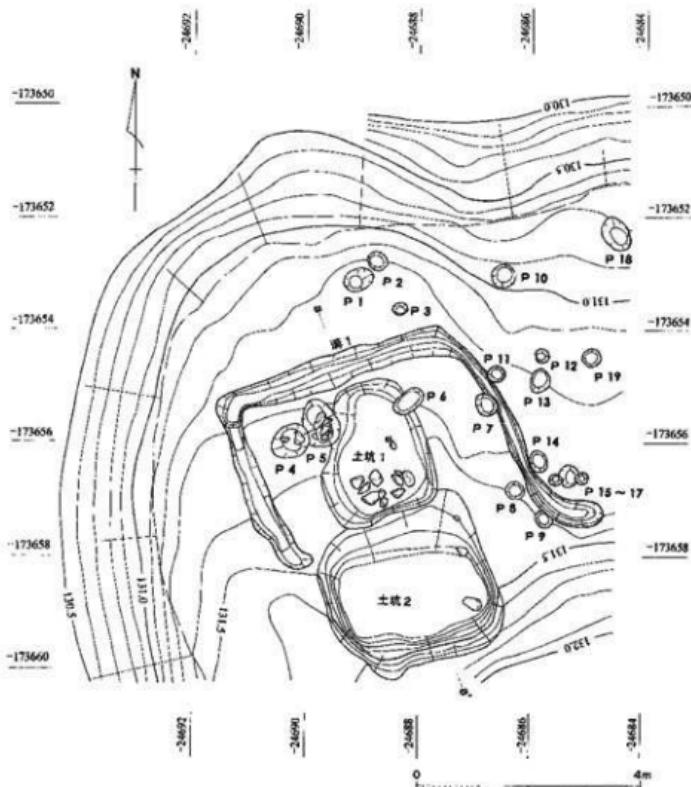


図94 北地区遺構（部分）(S.=1/100)
センターは10cm間隔

- 1 暗青灰色砂質土
- 2 煉土・灰褐色砂質土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 黄褐色砂質土
- 5 黄褐色粘土及び黄褐色シルト
- 6 灰褐色砂質土
- 7 暗黄褐色砂質土



図95 溝1・土坑1・土坑2　断面図 (S.=1/50)

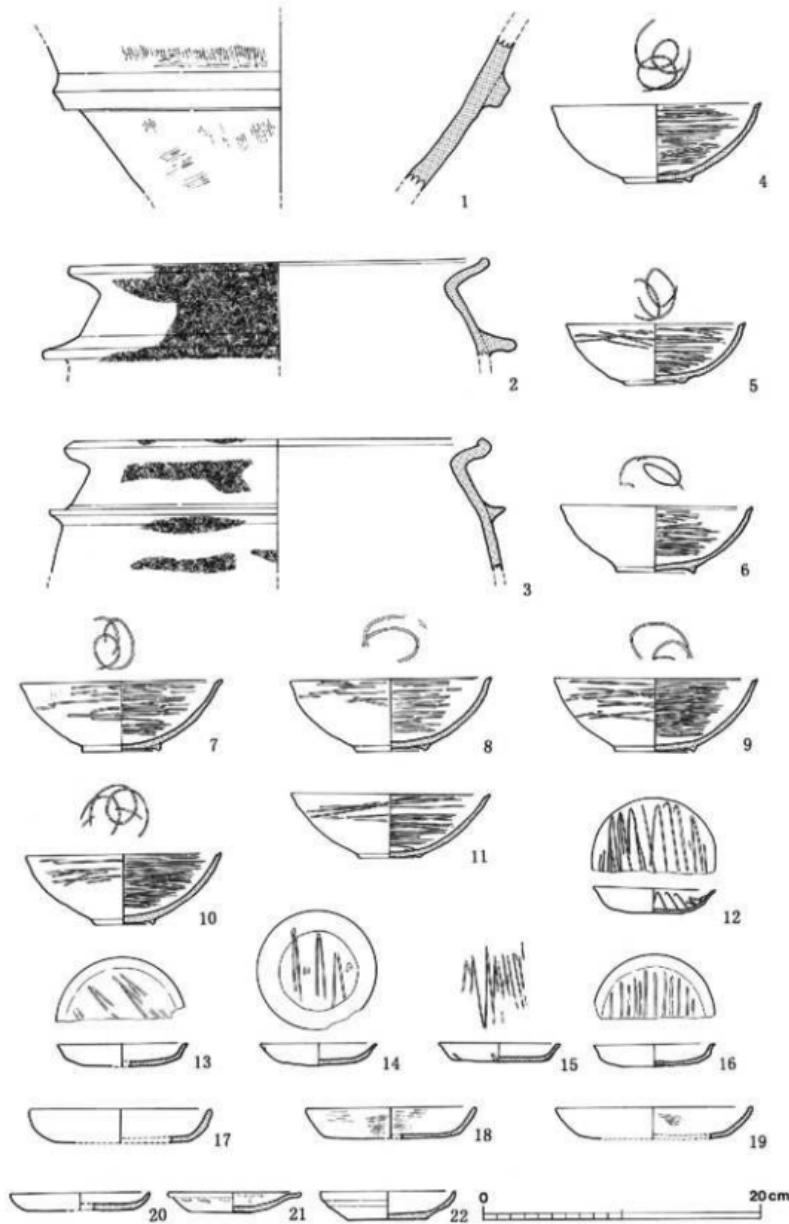


图96 北地区出土遗物 (S. = 1/4)

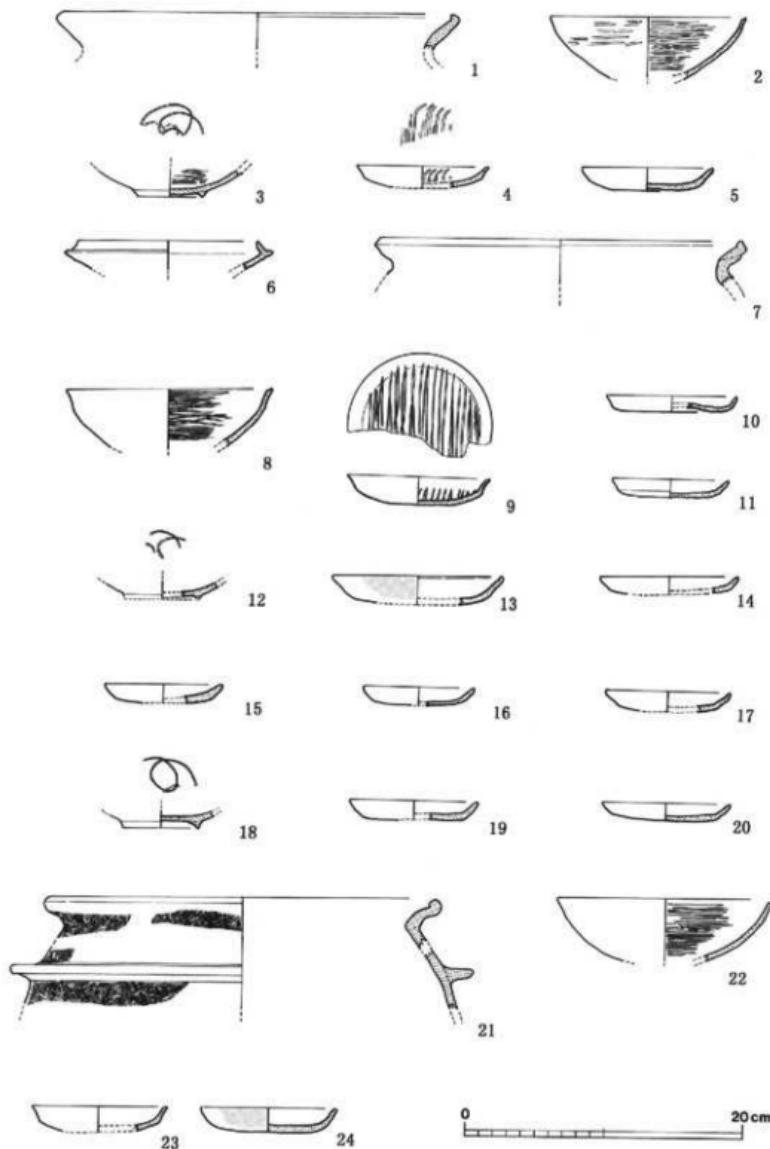


图97 北地区出土遗物 (S. = 1/4)

430地点は次に述べる溝1などの付近の平坦面に相当するが、この位置からその東側にかけて、尾根の北斜面を造成した幅5～9mの平坦面と中世の遺構がある。その全体を北地区と称することにする。

北地区的遺構（図93）は溝2、土坑2、ピット55からなる。現状ではピットの並びは雑然としており、建物構造などを復元することはできない。溝1は土坑1・土坑2などを取り囲むように方形に巡るが、南側の辺は閉じない（図94）。なお、図95に示すとおり、土坑1は焼土が埋土となっている。

図96に掲げたのはいずれも北地区的遺構直上の包含層出土遺物である。中世土器の大半は井戸-20期古様相（松本1988）に相当するものとみられ、同時期は12世紀後葉～13世紀中葉の実年代が与えられている。図97に掲げたのは各遺構から出土した遺物のうち図示が可能であったものである。1～5は土坑1、6～11は土坑2、12～17はP5、18はP22、19、20はP31、21・22はP33、23・24はP43からそれぞれ出土した。9などはやや古相を呈するが、いずれも井戸-20期古様相に収まるものと判断する。

このほか430地点においては96-1のような川西V期の朝顔形埴輪や97-6のようなTK209型式併行期の須恵器杯身の存在も知られる。また、図示していないが、須恵器杯蓋の破片もみられる。

この破片は外表面とも赤褐色を呈するもので、体部と口縁部の境界の凹線をわずかに残すTK43型式併行期のものとみられる。このように430地点においては、平坦面の広さや遺物の残存状態からみて、おそらくかつて古墳が存在したものとみられるが、遺物には時期差があるので、その実体は不明と言うほかない。

第6章 古墳時代の造構と遺物に関するまとめ

A地区（西寺田字血取、境谷および鶴ヶ谷地区）の1基、巨勢山419号墳（第2章第9節）は、前期後葉から中期初頭の幅の中で築造の時期を考えた。御所市内では前期古墳としてオサカケ古墳（鳥本1938）や近年検出された鶴都波1号墳（藤田・木許編2001）が知られるが、巨勢山419号墳は巨勢山古墳群では最古に位置づけられ、中期前葉築造の室宮山古墳よりも先行する。ただ、巨勢山419号墳は単独もしくはそれに近い状況で築造された前期古墳とみられ、それが先行するといつても、室宮山古墳のエポックメーリングな点には変わりではなく、室宮山古墳が巨勢山古墳群形成の契機になったとの評価には変更の必要はないだろう。

さて、A地区は土砂採取のために丘陵の主尾根から切り離された状態であったが、△地区東端の414号墳より東の主尾根に続く斜面は非常に急峻になり、尾根の上方（東側）にあった413号墳までは比高差にして11m以上、直線距離にして35m以上あるので、△地区そのものをひとつの単位集団、いわゆる小支群と捉える事も可能である。

A地区ではさきの419号墳の後、かなり時間を置いて、中期中葉の前半（TK73型式併行期）に至って尾根の先端（西側）に方墳の771号墳（第2章第13節）が築かれ、そこから直線距離にして約100m離れた尾根の上方（東側）に、中期中葉の後半（TK208型式期）に円墳の770号墳（第2章第4節）が築かれることになる。771・770号墳の2基の古墳は、このように中期の内に継続して築造されるが、分布としては散在的なありかたを呈している。

統いてA地区において古墳が築造されるのは、後期後葉のTK43型式期を待たねばならない。420号墳（第2章第10節）はTK43型式期、414号墳（第2章第2節）はTK43ないし209型式期、415号墳（第2章第3節）・418号墳（第2章第8節）・421号墳（第2章第12節）はTK209型式期、また、416号墳（第2章第6節）・417号墳（第2章第7節）はTK217型式期の築造とみられ、これら7基の横穴式石室墳のうち後続の2基を除く5基が、TK43ないしTK209型式期の後期後葉に集中して築造される。

つまりA地区においては、中期中葉の770号墳・771号墳に続く古墳は、後期後葉に至るまで1世紀以上の間、築造されることがないわけであるから、両者の間には系譜関係はないとみるのが自然である。この点については、A地区における後期後葉の5基の横穴式石室墳のうち4基について、いずれも以下のように占地の点で特殊な状況が認められることにも顕現している。

一つには、先行して所在したこれらの中期古墳を破壊して築造していることである。414号墳と415号墳は770号墳を、421号墳は771号墳をそれぞれ破壊して築造された。系譜関係のなきを如実に示すものとみて良い。なお、群集墳において古墳の築造によって古墳が破壊される事例は現在のところ、中期古墳が後期古墳によって破壊される場合に限られており、同じ群集墳内にあっても、元

より中期古墳と後期古墳では系譜が異なる場合も多いとみられる（藤田2003予定）。

特殊な状況のもう一点は、特異な立地を探るものがあることである。418号墳は東西に伸びる尾根の北斜面を利用して築造する異例の立地で、にもかかわらず、内部主体の横穴式石室は主軸を尾根に平行させて不安定の感を拭えない。また、A地区の他の横穴式石室墳は、TK217型式期築造の416号墳、417号墳を含めて、いずれも概ね南に向むけるのに対し、こうした立地のために418号墳のみ西向きに開口しており、これも異例である。

それそれかなり無理をして古墳を築いていると言わねばならないが、こうした古地を探らざるを得なかつた共通の理由としてはやはり造墓スペースの不足に求めることが妥当であろう。

つまり、前期後葉に419号墳、中期中葉に770号墳・771号墳と散在的な状況で古墳が造られてきたA地区の尾根筋が、1世紀以上とみられる時を経て、後期も後葉に入ったTK43型式期に至ると突然に、横穴式石室を内部主体とする後期古墳の墓所として設定されるわけだが、狭い尾根筋に集中して築かなければならなかつたがゆえに、上記のような特殊な条件下でなければ造墓スペースの確保ができなかつたとみられるのである。

そこで、後期後葉に築造期が集中し、先行する古墳を破壊してまで築造しなければならない理由、または、敢えて不安定で異例の立地を甘受してまで築造しなければならない理由が明らかにされねばならないが、この問い合わせに示唆を与えるのは、これらの古墳の副葬品内容である。

A地区において後期後葉に集中して築造されたこれら5基の古墳のうち、414・415・418・420号墳の4基の古墳はいずれも鉄滓を副葬していたとみられ、残る421号墳も乱掘が著しいので可能性がないわけではない。

巨勢山古墳群における鉄滓の検出例としては、巨勢山431号墳（境谷8号墳；久野編1974）の墳丘裾で総重量66.3gが出土（千賀1988）していることが知られていたが、本章ではここまで触れていないB地区の374号墳（第3章第2節）例もあわせて、本書所収分で一気に5基の例を加え、計6基となった。巨勢山古墳群および周辺の鍛冶関連の遺物を出土した遺跡と古墳は次の通りである。

遺跡では名柄遺跡（藤田1991）で若干の鉄滓の出土が知られたが、南郷遺跡群（坂1996）では約16kgにも及ぶ鉄滓や鍛冶関連遺物が知られるようになり、南葛城でも大規模な鍛冶生産がなされていたことが明らかとなった。これらは中期後葉までの事例である。

対して、周辺地域の古墳においては現在のところ、中期末葉とみられる巨勢山436号墳（境谷4号墳；久野編1974）、寺口忍海日-16号墳（竹川1988）の鍛冶工具の副葬まで鍛冶関連遺物は知られない。

古墳に伴う鉄滓は当初は周溝に供献されるが、後期に入ると多くの場合は横穴式石室に副葬されたとみられる。巨勢山374号墳のTK10型式期の例はあるが、大半はTK43ないしTK209型式期の後期後葉の事例である。

千賀久氏は寺口忍海古墳群の性格を検討（千賀1988）する中で、花田勝広氏の主張（花田1989）

を念頭に置きつつ、鍛冶と鉄滓の問題にも触れ、「脇田および周辺地域での鍛冶生産は、盆地では布留と並ぶ大規模なものであった可能性が強く、しかも中央政権の管理下にあったとすれば、その操業開始とともに各地から鉄器生産に関連する特殊技術を持つ工人集団が、多数葛城山麓に集められたであろう。そして、出自の違い等によって、墓域がそれぞれ設定され、山麓一帯に古墳群の造営が開始されたと推測できる。そのうちの一つが忍海古墳群であり、…竪穴式横口式石室の系譜によれば、北部九州ないし吉濟・伽耶の地域からやってきた人達も含まれていた可能性が強い。」という。

A地区所在の5基の後期後業の古墳の場合、鉄滓のみならず、朝鮮半島との関わりの中で理解すべき要素が多い。415号墳では銀環（銀製指輪）とミニチュア埴形土器が出土したし、421号墳でも半島から舶載されたとみるべき特殊な意匠の杏葉（第7章松尾考察参照）の副葬が知られた。また、420号墳と421号墳にみられた、墳丘の核を形成する版築状の地業は、従前の盛土工法からは生じ得ない、特殊な墳丘築造方法（補註）といえる。また、鉄滓を出土したB地区の374号墳の墳丘は、亞な形状の台形を呈するが、これも意識したものであるとすれば参考になるかもしれない。

いずれの古墳も石室の基底石さえほとんど抜取されるほどに亂掘が著しいにもかかわらず、これほど顕著かつ多くの波来系の要素を抽出できるということは、本來はこの傾向はさらに濃厚であつたと推測する必要があろう。

そしてA地区においては、かれら渡来系の集団を統括する長の墓域が、1世紀以上前のそれとは異なる原理によって新たに設定されたがゆえに、先行する古墳を破壊するなどという事態が生じたとみられる。なお、後期後業の段階で、従前とは異なる原理での墓域設定がなされたであろう事については、A地区的個別の事情に止まらず、巨勢山古墳群全般、ひいては畿内域程度にまでは、拡大して解釈できる可能性が高い（藤川2003予定）。

一方で418号墳のように不安定で異例の立地を甘受せざるを得なかつた事例についても、この時に設定された墓域がまかぬべき古墳数と、その規模に対する墓域の相対的狭小さに因を求めれば理解しやすい。

さて、A地区的後期後業の5基の古墳も、B地区的374号墳も、巨勢山古墳群中の横穴式石室墳の規模としては最大もしくは最大級で、馬具や長頸瓶の副葬も目立つので、群集墳中ににおける階層は、より上位に位置づけられる（藤川1987・1988）。

このように、石室規模と副葬品内容の相関関係によって示し得る階層構造に組み込まれているので、何らかのかたちで当時の政権の傘下、管轄下にあったことは疑い得ない。また、既に述べたとおり、従前の系譜を引いておらず、1世紀以上を経て日本古墳を破壊して新たな古墳を築造している点で新興の勢力といえ、かつ、鉄滓やミニチュア埴形土器などの副葬品から「波来系」と称される人々であったことも受け入れられるだろう。ただ、かれら自身とその配下にあったと想定される鍛冶の技術者集団の「新来」の時期が、これらA地区的横穴式石室墳の築造された後期後業であった

遺跡・古墳名	鉄滓純重量	その他の鍛冶関連遺物	時期（須恵器型式期）	文献
南郷遺跡群	16719.6 g	輪羽口、小鉄片	TK73・TK216中心	坂1996
名柄遺跡	12.6 g		TK23	鷹川1991
鷺田遺跡	あり	輪羽口	(6世紀後半～8世紀)	東1983
巨勢山374号墳	225.1 g		TK10	本吉
巨勢山414号墳	161.9 g		TK43～TK209	本吉
巨勢山415号墳	47.6 g		TK209	本吉
巨勢山418号墳	73.1 g		TK209	本吉
巨勢山420号墳	88.2 g		TK43	本吉
巨勢山431号墳（境谷8号墳）	66.3 g		MT15	久野1974
巨勢山436号墳（境谷4号墳）	なし	鉄槌、鉄鋤	TK47?	久野1974
石光山1号墳	あり		TK47	亀田1976
笛吹8号墳	あり		TK43	岡川1987
笛吹12号墳	あり		TK43	岡川1987
寺口忍海E-10号墳	112.3 g		TK209	吉村1988
寺口忍海E-12号墳	260.1 g		TK217	吉村1988
寺口忍海E-8号墳	256.0 g		TK217	吉村1988
寺口忍海H-16号墳	なし	鉄槌、鉄鋤、鉄床	TK47	竹田1988
寺口忍海H-22号墳	164.8 g		TK209?	河上1988
寺口忍海H-29号墳	157.7 g		TK209	千賀・杉山1988
寺口忍海H-2号墳	36.5 g		TK43～TK209	林部1988
寺口忍海H-30号墳	329.3 g		TK43	千賀・杉山1988
寺口忍海H-36号墳	310.0 g		TK209	伊藤・千賀1988

表6 巨勢山古墳群と周辺の鍛冶関連遺物出土上の遺跡と古墳

のかと言えば、これは別の問題に属する。

巨勢山古墳群では、寺口忍海古墳群の状況（千賀1988）とは若干異なり、中期末葉の鍛冶工具の副葬（436号墳）から、鉄滓の副葬が顕著となる後期後葉に至るまでの間を埋める鉄滓出土古墳が、MT15とTK10型式期に431号墳、374号墳と1例ずつとはいって、知られる状況がある。つまり後期全般を通じて鍛冶関連遺物がみられるわけである。

このことは、巨勢山古墳群周辺においては、TK73型式期に南郷遺跡群で開始されたとみられる鍛冶に携わる技術者集団の掌握が、少なくとも後期後葉に至るまで継続してなされていたことを示唆している。

したがって、中期中葉の時点で「新米」したとみられる鍛冶に携わる技術者集団は、その後この南葛城の地に定着し、地力を付けて行く過程で後期後葉に至り、さらに古墳を築造し得る階層が広がっ

たためにA地区に見るような状況が生じた、とすることも可能である。もちろん、この時期には古墳を築造し得る階層の広がりが近畿一円に認められるので、そのような事情も勘案する必要がある。この場合には、定着後1世紀以上を経ても、なお、半島系の要素が目立つ理由が説明されねばならないが、これにも幾つかの可能性が考えられよう。このようにかれらがいつ「新来」または「渡来」したのかの問題は、様々な要素が絡み、にわかには決し難い。

ちなみに、墓域の設定という意味では、巨勢山古墳群においては現在のところ、鐵治関連遺物を出土する古墳は、室あるいは西寺田の古墳群西斜面の一画に限られていることは興味深い。つまり各古墳からの景観は、西南方の南郷遺跡群方面というよりはむしろ、名柄遺跡を含めた吐田郷（西寺田、名柄、豊田、森脇など）の地域を指向する。南郷遺跡群に続く鐵治関連遺跡の探索に際しては、この地域は今後さらなる注意が必要となろう。

さて、本書にはこのほか、個々の古墳についての注目すべき状況も取録することができた。415号墳では墳丘下に墓道があり、破碎された土器群がみられた。また、石室構築に際して用いられたとみられる木柱の痕跡を開口部で検出した。TK217型式期築造の416号墳、417号墳は、双墓の意識の下に築造された可能性を指摘した。418号墳の開口部中央には依代とみられる木柱があった。421号墳では自然軸の状態により、須恵器杯の焼成時における窯での位置が概ね推定できた。また、敷石下の初幕面と敷石上の追葬面遺物に共通する要素が多く、とりわけ鐵鏡の茎にみられた下巻きと称した脱落防止用の細工が双方に見られることから、初幕面被葬者から追葬面被葬者への贈与が考えられた。

また、A地区では4本の墓道を検出した（第2章第5・10・11節）。いずれも後期のものであり、こうした、尾根を大きく掘削する形状の墓道は、巨勢山古墳群においては横穴式石室の導入に伴って必要とされたと推定できたことも成果の一つであった。

他方、C地区（室宇西塙内地区）の巨勢山449号墳（第4章第2節）は、室宮山古墳の前方部側周濠を両する尾根上にあり、巨勢山古墳群中最大の円墳である。内部主体も室宮山古墳北張出部（泉森・河上1971、藤田・木許1999）の主体部を想起させる長大な粘土構で、築造時期の上でも両者の間には密接な関係が想定される。巨勢山古墳群の形成の端緒となった古墳として相応しいあり方と評価することが可能であろう。なお本墳は、粘土構および甲冑の巨勢山古墳群における初の検出例となつた。

補註 この墳丘築造方法は、隣接する尾根に基かれた、横口式石室を内部主体とする巨勢山323号墳に受け継がれている。

土 器 觀 察 表

巨勢山414号墳 出土土器	161
巨勢山415号墳 墳丘下墓道 出土土器	163
巨勢山415号墳 石室擾乱土 出土埴輪および土器	164
巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳墳丘下出土の土器および埴輪	170
墓道1 出土土器 観察表	173
巨勢山417号墳 出土土器	174
巨勢山418号墳 石室擾乱土 出土土器	174
巨勢山419号墳出土 墓輪観察表	176
巨勢山419号墳に伴ったとみられる埴輪観察表	178
巨勢山420号墳 石室擾乱土 出土土器	179
墓道4 須恵器 観察表	185
巨勢山421号墳 奥壁部 出土土器	187
巨勢山421号墳 石室擾乱土 出土土器	188
巨勢山771号墳に伴ったとみられる421号墳墳丘下出土土器	190
弥生土器観察表	192
歴史時代の土坑 出土土器観察表	192
巨勢山374号墳出土土器	195
巨勢山449号墳 墓輪観察表	201
北地区（430地点含む）出土土器	202

巨勢山414号墳 出土土器 (図6、図版23)

須 患 器 観 察 表

部 - 遺物番号 器 出 土 場 所	形 異 と 調 性 ・ 体 部 ・ 底部(脚部)	胎 上	燒 成	色 調 - 外面 - 内面	備 考
61 盃 主幹部上位層	口 径 11.0cm (残存1/12からの回転復元) 残存高 2.3cm 内縫部は丸く、口縫部は内壁気味に外にのが外縫部にわざりに面を持つ。体部は外輪する。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・欠損	直径0.5mmの長石、 石英をわずかに含む。 密。	良好	・淡灰青色 ・淡灰青色 ・淡灰青色	
62 杯蓋 主幹部上位層	口 径 11.0cm (残存1/10からの回転復元) 残存高 1.4cm 口縫部は丸く、同じひざで内輪するかえりを付し、縫部はやや丸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) つまみ欠損 ・内面 ヨコナダ ・体 部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・口縫部およびかえり 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ	直径0.5mmの長石、 石英をわずかに含む。 密。	不良	・灰白色 ・灰白色 ・灰白色	
63 無蓋高杯 天井 主幹部上位層	口 径 15.0cm (残存1/6からの回転復元) 残存高 2.7cm 口縫部は外方に立ち上がり、縫部は丸い。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・欠損 ・欠損	直径0.5mmの長石、 石英を若干含む。 密。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
64 無蓋高杯 主幹部上位層	口 径 10.7cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 3.6cm 外縫部は近くに内縫をして内壁気味にし、新 角(内角)の凸縫部を有して後さらに内壁気味に外上 方に立ち上がり、やや丸くある。 ・外冠 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外縫 ヨコナダのち4度を半径とする波状文 (8条/cm) ・内面 ヨコナダ ・欠損	直徑 1mm, 0.5mmの 長石をわずかに含む。 密。	良好 堅膜	・灰青色 ・灰青色 ・黄灰色	外側に黒色輪
65 短瓶 主幹部上位層	口 径 9.4cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 6.6cm 口縫部はやや外反し縫部は無い。体部はやや丸 く「く」字形に急に出し、肩部に最大径がある。 ・外縫 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外縫 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外縫 ヘラケズリ (ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナダ	直径0.5mmの長石 をわずかに含む。 密。	不良	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
66 伴身 主幹部上位層	高台径 10.8cm (残存1/2からの回転復元) 底面径は平らで、底端部はらやか内側に八字形の 高台が付く。縫部は前面を成す。 ・欠損 ・欠損 ・外縫 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ	直徑 1mmの石英を 若干含む。直徑 0.5mmの長石、長石 を若干含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
619 片蓋 北斜面突出上	口 径 14.8cm (残存1/45からの回転復元) 残存高 3.0cm 口縫部は外然して下り、縫部は内輪する段を成 す。縫は凹輪を成し、新角三角形で底縫部は浅い。 ・天井部 欠損 ・体 部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・口縫部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ	直徑 1mmの長石、 石英を若干含む。 密。	良好 堅膜	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	内外面に黒色輪

遺物番号 登出上場所	形態と調査 ・山頂部 ・体基 ・底部(脚部)	山頂部 ・山頂部 ・体基 ・底部(脚部)	胎		焼成	外観 色調 ・内面	備考
			石	灰			
620 部分 北斜面出土	口 径 13.0cm (残存1/15からの回転復元) 残存高 1.6cm たらあがはほほ高立し、端部は内傾する段を成す。 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損 ・欠損	直径0.5mmの長石 をわずかに含む。	良好 堅硬			・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
621 部分 北斜面出土	口 径 13.5cm (残存1/15からの回転復元) 残存高 3.4cm たらあがはほく内傾後、直立し、端部は内傾する段を成す。受け部は外方にのび、端部は堅い。 受部はやや外方にのび、端部は堅い。 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損	直径0.3mmの長石 をわずかに含む。	良好 堅硬			・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	内外面に黑色釉
622 部分 主体部上位層	口 径 13.0cm (残存1/8からの回転復元) 残存高 3.6cm たらあがはほく内傾後、直立し、端部は内傾する段を成す。受け部は外方にのび、端部はやや丸い。受部はややくずら。 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (クロクロ回転方向右選り) ・内面 ヨコナデ	直径1mmの長石 石十合む。	良好 堅硬			・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側部に黑色釉

土師器観察表

遺物番号 登出上場所	法 量 と 調 査 ・山頂部 ・体基 ・底部(脚部)	山頂部 ・外観 色調 ・内面	胎						備 考
			石	灰	角	芯	チ ヤ ト 校	本 色	
67 上部器 杯 主体部上位層	口 径 5.8cm (残存1/8からの回転復元) ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M	M	S	S	S	M	
68 上部器 小瓶 主体部上位層	口 径 13.9cm (残存1/8からの回転復元) ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデおよび不定方向ナダ ・内面 ヨコナデおよび不定方向ナダ	・淡褐色 ・淡褐色 ・淡褐色	M	M	S	S	S	S	
69 土器器 小瓶 主体部上位層	口 径 12.6cm (残存1/15からの回転復元) ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損	・褐色 ・褐色	L	L	S	S	S		

土師質製品観察表

遺物番号 登出上場所	法 量	タガ 形態	外 面 調 査	内面調整	胎						備 考	
					石	灰	角	芯	チ ヤ ト 校	本 色		
6-17 縦剥口? 主体部上位層	径 6.5cm (残存1/3からの回転復元)	ヨコナデ	ヨコナデ		・黄褐色 ・黄褐色 ・赤褐色	L	L	S	M	S	0	外側下に黒 内面下二次 焼成

埴輪観察表

遺物番号 分類 出上場所	法量	タガ 形態	外因調査	内部調査	色調 ・外因 ・断面 ・内面	埴土						備考	
						石	灰	角	四	砂	チヤ ト	粘	その 他の 色
6-18 内筒か倒側 内筒部上端	タガ無復元不可	1lb	・体部 ヨコハケ (Ca ? 4束/cm) ・タガ ヨコナデお よびヨコハケ (8束/cm)	ヨコナデ	・紫褐色 ・黄褐色 ・赤褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	四 石 3	砂 3	チヤ ト 3	粘 3	外蓋に 黒斑

巨勢山415号墳 墳丘下墓道 出土土器 (図11、図版24)

須恵器観察表

遺物番号 分類 出上場所	形態と調査 ・口部 ・体部 ・底部(脚部)	寸法等 ・径 ・高さ	断土	焼成	色調 ・外因 ・断面 ・内面	埴土						備考	
						石	灰	角	四	砂	チヤ ト	粘	その 他の 色
11-1 切妻型 塚丘下墓道に埋置	口 径 9.2cm (完形) 高 8.0cm		直 径 1mm~0.5mm の長石、石先を石 子含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色								外蓋底部付近 に白色帶 外蓋全体に灰 色溶離して陳状 になったもの付 着
11-6 壺 塚丘下土坑に埋置	11 径 23.4cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 17.8cm	口部は、坂上外方に外壁気味に延び、外方 に傾曲させ腰厚にする。腰高は無い。肩部は直部 より100度で腰り出し、下外方へ内腰しながら下 る。	直 径 1mm~0.5mm の長石、石先を石 子含む。	良好	・灰青色 ・青灰色 ・灰青色								外蓋および内 面(脚部)に黑色 帶 外蓋の黒は部分 的にコハリト ブルーに発色

土師器観察表

遺物番号 分類 出上場所	法量と調査 ・口部 ・体部 ・底部(脚部)	寸法等 ・径 ・高さ	色調 ・外因 ・断面 ・内面	断土	埴土						備考		
					石	灰	角	四	砂	チヤ ト	粘	その 他の 色	
11-2 竹 塚丘下墓道に埋置	口 径 11.5cm (残存1/2からの回転復元) 高 4.8cm		・水褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S S 3	M S 3	S S 3	S S 3	S S 3	S S 3	M 0 0			
11-3 竹 塚丘下墓道に埋置	口 径 13.5cm (完形) 高 4.5cm	口部はわずかに外壁しながら上外方に延び、 腰高は無い。口部と体部の境界に棱があり、底部 は丸くおきめる。	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	石 四 砂 3	角 四 砂 3	砂 砂 3	チヤ ト 0	S 3		
		・外壁 手持ちによるヘラケズリ ・内面 ヨコナデ											
		・外壁 ヨコナデ											
		・外壁 ヨコナデ											
		・外壁 手持ちによるヘラケズリ											
		・外壁 放射状ノカメ (6束/cm)											

国 - 遺物番号 器 種 類 出 土 場 所	法 算 と 調 査	・口頭部 ・体 部 ・底部(脚部)	色調 ・外面 ・側面 ・内面	地 上 土					備 考
				石	長 石	角 石	雲 母	チヤント ル	
114 瓦制転倒部 埴輪下土坑に埋葬	残存高 9.0cm 体部は直線的に下内方へ下り、底部付近できら に内方への傾度を増す。若干丸みを帯びたがら ない底部から見られる。 ・欠損 ・外面 タテハケ (6条/cm) を右割り、下から 内面 ヨコナゲ ・外面 タテハケのちナゲ 内面 ヨコナゲ	黄褐色 ・青褐色 ・淡黄色	LL S S	LL S S	S	M S		S	
115 瓦転倒部 破砕後、散在して積 丘下土坑と埴丘下土坑 に埋葬	口 深 20.0cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 38.0cm 口縁部は切欠上外方に延び、両端はやや丸い。 腹部は口縁部から約110度で下外方に内折しないで 開き、ほぼ直線に下る長い胸窓を持つ。底部は丸 くおさめる形を見られる。 ・外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ ・外面 ナメまたはタテ方向のハケメ (6条/cm) を左側右側方に下から上 内面 ヨコナゲ ・外面 ナメまたはタテ方向のハケメ、2次的 焼成によるものと思しい。 内面 ヨコナゲ	黄褐色 ・青褐色 ・赤褐色	L S S	L S S	S	S		S	体外部断面 点下と底部に塗 付青 体部外側中位 に墨跡

巨勢山415号墳 石室搅乱土 出土埴輪および土器 (図13、14、図版25~27)

埴輪観察表

国 - 遺物番号 器 種 類 出 土 場 所	法 算 と 調 査	アガ 那 那 那	外 面 病 變	内 面 病 變	色調 ・外面 ・側面 ・内面	地 上 土					備 考
						石	長 石	角 石	雲 母	チヤント ル	
13-1 家形 器部と 窓の下部 石室搅乱土	基部から窓まで 高 3.58cm	ヨコナゲ	ヨコナゲ	ヨコナゲ	・赤褐色 ・墨灰色 ・淡黄色	LL S S	L S S	S S S	M S S	S S S	

* 備考 窓から窓の下辺まで赤色顔料を施す。窓部に墨跡。

須恵器観察表

国 - 遺物番号 器 種 類 出 土 場 所	形 造 と 調 査	・口頭部 ・体 部 ・底部(脚部)	色調 ・外 面 ・側面 ・内面	地 上 土	発 成	・外 面 ・内面		備 考
						石	長 石	角 石
13-2 杯 石室搅乱土	口 深 12.0cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 3.4cm 口縁部は、直角に下った後、わずかに外反し。 腹部は内側に凹取を施す。腰は断面三角形で、輪 郭は鋭い。天井部は高く無い。 ・天井部 公開 ・体 部 外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ ・丁脚部 外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ ・欠損	直径 1mmの孔打、 石英を含む。溶。	良好			・青灰色 ・灰青色 ・青灰色		
13-3 杯 石室搅乱土	口 深 11.0cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 3.0cm 口縁部は、外壁気味に下外方に下り、輪郭はや や丸い。天井部は高く無い。 ・天井部 外面 ヘラクスリ (ロクロ回転方向右 巻り) 内面 ヨコナゲ ・体 部 内面 ヨコナゲ 外面 ヨコナゲ ・丁脚部 内面 ヨコナゲ	直径 1mmの孔打、 石英を含む。溶。	良好			・青灰色 ・灰青色 ・灰青色		

開 閉 器 出 土 場 所	遺物番号 種 類	形 態 と 調 査	・頭部 ・体 部 ・底部(脚部)	筋 上 筋 成	色 調 ・表面 ・裏面 ・内面	備 考
13-4 杯足 石室搅丸土 石室材性吸穴	11 桁 12.4cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 3.2cm 口縁部に、内凹気味に外方に下り、端部は鋸 い。大井部は高く丸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) ・内面 ヨコナダ ・体 部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・口縁部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ		直径0.5mmの長石、 石灰を含む。筋。	良好	・青灰色 ・灰青色 ・青灰色	
13-5 杯足 石室搅丸土	11 桁 12.7cm (完形) 残存高 3.8cm 口縁部は、外壁気味に直角に下り、わずかに外 反して斜める。端部は丸く、天地部は平ら。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) ・内面 ヨコナダ ・体 部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・口縁部 外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ		直径5mmの花崗岩 をわずかに含む。 直 径 1mm~0.5mm の長石、長石を含 む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
13-6 杯身 石室搅丸土	11 桁 12.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 3.5cm たちあがりは内傾し、端部は内傾する段丘を成す。 受部は近く、やや外方に延び、端部は鋸い。 ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) お よびヨコナダ ・内曲 ヨコナダ		直径0.5mmの長石、 石灰をわずかに含 む。直 径 0.5mmの石英、長石 を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部外側に黑色 釉
13-7 杯身 石室搅丸土	受部桿 13.4cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 3.4cm 立ちあがりは内傾し、受部は近く外方に延び、 端部は鋸い。底部は平ら。 ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) の ちヨコナダ ・内曲 ヨコナダ		直径5mmの石英を 若干含む。直 径 0.5mmの石英、長石 を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色	体部外側に黑色 釉
13-8 杯身 石室搅丸土	11 桁 11.6cm (完形) 基 高 3.3cm たちあがりは内傾後直立に立ちあがり、端部は 鋸い。受け部はほぼ水平に延び、端部は丸い。底 部は平ら。 ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ・内曲 ヨコナダ		直径0.5mmの長石、 石灰を若干含む。 直 径 5mm~0.5mm の黑色斑紋をかか り含む。	良好 堅敏	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部外側に白 色釉と黑色釉 底部に淡苔片 付着
13-9 杯身 石室搅丸土	11 桁 13.0cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 3.6cm たちあがりは内傾し、端部は鋸い。受部はほぼ 水平に延び、端部は鋸い。底部は丸い。 ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヨコナダ ・内曲 ヨコナダ ・外曲 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ・内曲 ヨコナダ		直径0.5mmの長石 をわずかに含む。 直 径 0.5mmの長石 を含む。	良好 堅敏	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	

国 別 出 上 場 所	形 態 と 調 査	・山根部 ・全体 ・成部(脚部)	新 上		・外側 ・前面 ・内面	備 考
			新	成		
13-10 台付 脚部 石室撲乱上	成 長 13.4cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 5.0cm やや外側方に下外方に下り、段を形成した後、さらに下外方に外側斜方に下り、端部近くでやや外反する。端部は平面を成す。中位に2条、段の真下に1条の凹縫を施す。スカシは長方形で、四方に有ると見られる。 ・欠損 ・欠損 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直徑0.5mmの長石をわずかに含む。	良好 堅緻		・青灰地 ・青灰色 ・青灰色	
13-11 長脚部 脚部 石室撲乱上	底 伴 12.2cm (残存1/6からの回転復元) 残存高 4.4cm やや外側斜方に下外方に下り、小さな突起を成してさらに下り、端部近くで段を成して凹縫を施し、丸く收める。端部は弧い。 ・欠損 ・欠損 ・外側 カキ目 (11条/cm) およびヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直徑3mmの石英、長石を含む。直徑0.5mmの石英、長石を若干含む。成部2mm~0.5mmの黒色粉含む。	良好 堅緻		・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	外側に黑色輪 内面に白色輪
13-12 高杯 石室撲乱土	11 伴 11.9cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 4.1cm 口縫部は、外側して立ち上がり、端部は弧い。底部との間に深い凹縫を施す。成部内側は平ら。脚部はほぼ直立に下った後、下外方に外側斜しながらひらく。中位に2本の開閉孔を有し、上位と下段に長方形のスカシを2方にあける。 下段スカシの真下とみられる位置にも細く深い凹縫が有る。 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (ヨクロ開閉方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ (シボリ直なり)	直徑3mmの石英、長石を含む。直徑0.5mmの石英、長石を若干含む。	良好		・淡青灰地 ・淡青色 ・淡青色	
13-13 脚部 石室撲乱土	11 伴 12.3cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 4.6cm 外側して立ち上がり、端部はやや弧い。中位と底部との間にそれぞれ縫合があり、前者はやや丸く後者は弧い。脚部との接合部にはスカシの切り込みが認められる。 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (ヨクロ開閉方向右廻り) 後、ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損	直徑3mmの石英、長石を含む。直徑0.5mmの石英、長石を含む。	良好		・淡青灰地 ・淡青灰色 ・淡青色	
13-14 高杯 脚部 石室撲乱土	成 長 13.4cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 7.3cm ほぼ垂直に下った後、下外方に開き、端部附近では水平に延び、下方に鋭く彎曲させる。端部は弧い。長方形のスカシを3方にうがらし、その上方には凹縫を施させる。長方2段スカシの下段。 ・欠損 ・欠損 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	最後5mmの花崗岩を含む。直徑1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好		・青灰地 ・灰青色 ・灰青色	
13-15 高杯 脚部 石室撲乱土	成 長 13.2cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 3.2cm 下外方に開き、端部附近では水平に延び、下方に鋭く屈曲させる。端部は弧い。長方形スカシであるが、既不明 ・欠損 ・欠損 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mmの長石、石英を若干含む。	良好		・青灰地 ・灰青色 ・青灰地	

固・遺物番号 器 出 土 場 所	形 態 と 構 造	・口部 ・外 部 ・底部 (脚部)	粘 土	燒 成	・外 面 色調 ・底面 ・内面	備 考
13-16 高 体 脚 石室搅乱土	直 径 14.8cm (残存1.5からの回転復元) 残存高 3.3cm ト外方に開き、端部付近で丸く彎曲して垂れ下る。端部は丸い。スカシは見出せない。 ・火指 ・火鉤 ・外面 ヨコナダ ・内面 ミコナダ		直徑0.5mmの石英、 長石をわずかに含む。	小島	・灰青色 ・黄褐色 ・灰褐色	瓦質土器に五 角形。
13-17 直口立 石室搅乱土	口 径 14.8cm (残存1.6からの回転復元) 残存高 8.5cm 口縁部はやや外側しながらほぼ直立し、腹部は水平な凹面で底平。肩部は、口縁部より約15度を成して盛り出し、下外方へ下る。颈部に1条のやや太い凹線。肩部に2条の頗る凹線を施す。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外腹 ヨコナダ (スリケシ) ・内腹 ヨコナダ。体部はヨリタケ ・火指		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を若干含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
13-18 短脚直 石室搅乱土	口 径 8.3cm (復元完形) 器 高 13.3cm 口縁部は頗る外反し、内側する瘤を持つ。腹部は丸い。肩部は口縁部より約8度を成して盛り出し、最大径を有した後、内へへだらかに下り、水平な底部が平。肩部に2条の頗る凹線を施す。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外腹 カキ目 (4条/cm) ・内腹 ヨコナダ ・外腹 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ・内腹 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を若干含む。	直 约 直 好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
13-19 短脚直 床頭直上 石室搅乱土	口 径 7.6cm (変形) 器 高 7.3cm 口縁部は頗る直角に延び、端部は丸い。肩部は口縁部より約10度を成して盛り出し、最大径を有した後、内へへだらかに下る。底部は平ら。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外腹 ヨコナダ ・内腹 ヨコナダ ・外腹 ヘラケズリ (ロクロ回転方向左廻り) ・内腹 ヨコナダ		直 径 5mmの花崗岩 を含む。直 径 1mm ~0.5mmの石英、長 石を含む。	直 好	・灰青色 ・観察不可 ・灰青色	
13-20 直 石室搅乱土	口 径 10.2cm (復元完形) 器 高 11.9cm 口縁部は外板として立ち上がり、段を作った後、やや内側気味に大きく外方に開き、端部はやや丸い。段の部分に1条の上口の凹線を施し、その下は頗る直線となる。中位にも2条の凹線を有する。 ・石部は、肩部と約125度を成して下外方に下り、内側を有して直道に下り、太日の凹線を持ち、丸くおこめる。 ・外腹 ヨコナダ ・内腹 ヨコナダ ・外腹 ヨコナダ ・内腹 ヨコナダ ・外腹 ヘラケズリ (ロクロ回転方向左廻り) ・内腹 ヨコナダ		直 径 5mmの石英を 含む。直 径 1mm ~0.5mmの石英、長 石を若干含む。	直 好	・青灰色 ・灰青色 ・青灰色	底部を殆ど外 面全体に灰青色 と白色相 ・口縁部内面に 白色釉
14-21 (台付) 長脚直 脚部・体部 石室搅乱土	肩部深 16.4cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 14.2cm 肩部はやや外側気味に外傾して立ち上がる。肩部は、肩部と約110度を成して下外方に下り、最大径を有して凹線を入れ、ほぼ直角に下った位置に凹窓を施し、2条の凹線を入れて、下外方に丸く収まる。 ・外腹 ヨコナダ ・内腹 ヨコナダ ・外腹 ヨコナダのち直窓 ・内腹 ヨコナダ ・外腹 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ・内腹 ヨコナダ		直 径 3mmの花崗岩 を含む。直 径 1mm ~0.5mmの石英、 長石を含む。	直 好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	

国 - 遺物番号 器種 出土地所	形態と調査 ・口部部 ・体部 ・底部(脚部)	施上	焼成	外観 ・断面 ・内面	備考
14-22 高杯?舞台部 右空椎丸土	奥部径 16.2cm (残存9/10からの回転復元) 残存高 8.5cm 舞台部は、ほぼ直角に下り、凹斜を入れた後、外壁気味に下方方に下り、わずかに水平の面を得た上で、その直下に円錐を盛らせ、再びトス方以下る。端部は丸い。舞台部には長方形2段のスカシを、おそらく8万に穿つ。 ・欠損 ・欠損 ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ	直徑0.5mmの石英、 長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰黄色 ・灰青色	
14-23 器 石室複盤土 右空椎丸土直上	口 径 12.6cm (ほぼ完形) かえり部分径 10.5cm 高さ 4.1cm 台付基部の差が大月部はやや丸くおさまる、中央部には擬似模様のつまみを付す。口縁端部は丸く、外壁シント内方へそれより長く下り、かえりを付す。端部は競い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (クロクロ回転方向右 廻り) のちヨコナダ、つまみヨ コナダ 内面 ヨコナダ ・体 部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・口縁部およびかえり 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
14-24 (右付) 長颈甌 口部 右空椎丸土	口 径 8.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 9.2cm 外壁しながからト外方に弧び、端部はやや丸い。 ・外 面 ヨコナダ 内 面 ヨコナダ ・欠損 ・欠損	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
14-25 杯 右空椎丸土	口 径 16.7cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 15.5cm 高さ 1.9cm 大月部は丸く平らで中央には削平な底座模様のつまみを付す。口縁端部は丸く、内側には同じ高さで低く凹むかえりを付す。口縁端部に径2mmの小孔を1個、外から内へ穿つ。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (クロクロ回転方向右 廻り) のちヨコナダ、つまみヨ コナダ 内面 ヨコナダ ・体 部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・口縁部およびかえり 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ	直徑5mmの花崗岩 粒を含む。直徑1 mm~0.5mmの石英、 長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	

土師器・瓦器・黒色土器観察表

国 - 遺物番号 器種 出土地所	法量と調査 ・口部部 ・体 部 ・底部(脚部)	施上	土	備考
色相 ・外面 ・断面 ・内面	石 英 長 石 青 石 云 母 チ ヤ リ ト 赤 色 青 色 赤 色	色 相 ・外 面 ・断 面 ・内 面	赤 色 青 色 赤 色	その他の 特徴
14-25 土師器 長颈甌 右空椎丸土	口 径 8.8cm (ほぼ完形) 残存高 16.7cm 口縁部近辺はわずかに内厚しつ。端部はやや外壁しながからト外方に弧び。口縁端部は丸くおさまる。端部と口部は約130度を成し、瓶門形の体部と底部に沿る。 ・外 面 ヨコナダ (11条/cm) のちヨコナダ 内面 ナナメヨコナダ (11条/cm) のちヨコナダ ・外 面 ヨコハケ (11条/cm) のちヨコナダ 内面 摺拌による押打およびヨコナダ ・外 面 不定方向ハケのち不定方向ナダ 内面 押打による押打およびヨコナダ	5 M S S S S 3 3 3 3 1		

図 号	遺物番号 種 類 出 土 場 所	法 量 と 圖 形	・II部 ・体 部 ・底部(脚部)	色調	施 土						備 考	
					・外 面		・内 面		・内 面			
					石	良	角	密	サ	チャ ート		
石	良	角	密	サ	石	良	角	密	サ	チャ ート	その 他	
14-26	土師器 ミニチュア カマド形 石室模造	受I部径 9.8cm (残存1.9cmからの回転復元) 復元高 17.0cm 底部復元径 20.0cm 側部は内側して外側し、受I部底部は外反してやや丸い。体部は下外方にやや内傾して下る。受口は半円形で開けし、底を付す。 ・外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ (8条/cm) のちヨコナゲ ・外面 タチナゲ (5条/cm) を下から上 内面 指紋による押ねおよびヨコナゲ ・外面 タチナゲ (5条/cm) を下から上 内面 指紋による押ねおよびヨコナゲ	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	LL S 3 3	LL S 3 3	S S 3 3	M S 2 2	S S 2 2	S S 2 2			
14-27	土師器 把手 把手 石室模造	ミニチュアカマド形 I型のコシキに伴う把手か 調整 手筋による押せおよびヨコナゲ	・褐黄色 ・褐黄色 ・褐黄色	L S 3 3	L S 3 3	S S 3 3	M S 3 3	S L 1 2				
14-29	土師器 柄 (把手有り?)	口 径 18.6cm (残存1.3cmからの回転復元) 残存高 7.5cm 口縁周辺は強くヨコナゲし、わずかに外反する。端部はやや丸い。体部はやや外側しながら下内方に下り、底部は丸くおさめる。 ・外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ ・外面 横方向に右側りでヘラミガキ (幅1.5mm) を施す。 内面 横方向への筋文風のヘラミガキ (幅1.5mmを4mm延) のうち底部附近に横方向に右側りでヘラミガキ (幅1.5mm) を施す。 ・外面 小近方舟へラケヅリ (幅7mm) 内面 放射状の筋文風ヘラミガキ (幅1.5mm)	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M S 3 3	M S 2 2	S S 2 2	S S 2 2	S S 2 2	S S 2 2			
14-30	瓦 小皿	口 径 9.3cm (残存2.3cmからの回転復元) 高さ 18cm ・外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ ・外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ成形のち施し、平行縞文 (幅1.5mmを3~4mm延) ・外腹 指紋による押せ 内面 ヨコナゲ成形のち施し、平行縞文 (幅1.5mmを3~4mm延)	・黑色 ・白色 ・黑色				M					
14-31	黒色土器 瓶	II 壶 16.0cm (残存1.8cmからの回転復元) 高さ 6.0cm (復元) ・外面 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ成形、腹部に沈捺有り。のち施し、密な平行縞文 (幅1mm延) ・外腹 ヨコナゲ 内面 ヨコナゲ成形のち施し、密な平行縞文 (幅1mm延) ・外腹 ヨコナゲ、高さ4mmの低い前面三角形の凸台を付す。 内面 ヨコナゲ成形のち施し、密な平行縞文 (幅1mm延)	・褐黄色 ・褐黄色 ・黑色	S 3 3	M 3 3	S 3 3	S 3 3	S 2 2	S 2 2	S 2 2		
14-32	土師器 柄	口 径 13.2cm (残存1.4cmからの回転復元) 残存高 3.2cm ・外腹 ヨコナゲ 内腹 ヨコナゲ ・外腹 ヨコナゲ 内腹 ヨコナゲ ・外腹 不定方向へラケヅリ 内腹 ヨコナゲ	・褐色 ・褐色 ・褐色	L S 3 3	L S 3 3	S S 2 2	S S 2 2	S S 2 2	S S 2 2	S S 2 2	摩訶不思議	
14-33	I部器 蓋	口 径 15.0cm (残存1.3cmからの回転復元) 残存高 7.0cm I型底部には外側する面を持ち、四面を施す。側部と体部の境界は強くヨコナゲし、底を有する。 ・外腹 ヨコナゲ 内腹 ヨコナゲ ・外腹 ヨコナゲ 内腹 ヨコナゲ ・外腹 ヨコナゲ	・黄褐色 ・黄褐色 ・褐色	M S 3 3	M S 3 3	S S 3 3	S S 3 3	S S 1 3	S S 1 3	S S 1 3	外腹側部およ び側部に煤の付 着跡	

国 - 遺物番号 器 部 品 出 土 所	法 益 と 調 査	・口頭部 ・体 部 ・底部(脚部)	・外 色 調 ・底面 ・内面	胎 上					備 考
				石 長 角 四 石 英	石 透 透 透 透 透	透 透 透 透 透	透 透 透 透 透	透 透 透 透 透	
14-34 土師器 坐	口 径 12.6cm (残存1/10からの回転復元) 残存高 3.5cm ・外面部 内面部 ・外面部 内面部 ・外面部 内面部 ・欠損	・青褐色 ・墨灰色 ・黄褐色	M L S S S S	S S S S S S	S S S S S S	S S S S S S	S S S S S S	S S S S S S	

巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳墳丘下出土の土器および埴輪 (図17、図版28~30)

須恵器観察表

国 - 遺物番号 器 部 品 出 土 所	法 益 と 調 査	・口頭部 ・体 部 ・底部(脚部)	胎 土	焼 成	・外 色 調 ・底面 ・内面	胎 上					備 考
						石 長 角 四 石 英	石 透 透 透 透 透	透 透 透 透 透	透 透 透 透 透	透 透 透 透 透	
17-1 杯蓋 415号墳上 内 a地点 415号墳埴輪 下 案2	11 件 14.5cm (残存1/3からの回転復元) 高 14.7cm ・天井部 外面部 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 翫り) 内面部 ヨコナデ ・体部 外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ ・口縁部 外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ	良好 の長石、石英を含む。			・青灰色 ・青灰色 ・青灰色						
17-2 杯蓋 415号墳上 内 a地点	11 件 13.7cm (残存2/3からの回転復元) 高 13.5cm ・天井部 外面部 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 翫り) 内面部 ヨコナデ ・体部 外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ ・口縁部 外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ	良好 の長石を含む。			・青灰色 ・灰青色 ・灰青色					外面に黒色釉	
17-3 杯蓋 415号墳上 内 c地点	11 件 11.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 3.5cm ・天井部 外面部 ヘラケズリ (ロクロ回転方向左 翫り) 内面部 ヨコナデ ・体部 外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ ・口縁部 外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ	良好 の長石、石英を含む。			・灰青色 ・灰青色 ・灰青色						
17-4 杯身 415号墳土 内 c地点	11 件 11.1cm (残存1/8からの回転復元) 残存高 3.8cm たちあめは内側し、底部は内側する段を成し、 窓は、窓部は窓く、やや向外方に延び、底部は窓 く。 ・外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ ・外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ ・外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ	良好 の長石、石英を含む。			・細青色 ・細青色 ・細青色					細化共焼成風	
17-5 短縄帶 口縁部・体部 415号墳埴輪 内 d地点	11 件 9.8cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 3.5cm T字部は、窓く垂直に延び、底部は水平の面を 持ち、窓く、前部は、T字部と約130度を成してす る外方に張り、最大径を有する。 ・外面部 ヨコナデ 内面部 ヨコナデ ・外面部 カギメ (5条/cm) 内面部 ヨコナデ ・欠損	長径 5mm の花開刃 窓を若干含む。直 径 0.5mm の石英、長 石を若干含む。			・灰青色 ・灰青色 ・灰青色						

固 形 部 分 出 土 場 所	遺 物 名 稱	形 態 と 調 査	JIS 評定		地 土 成 分	外 由 色 調 ・新 面 ・内 面	備 考
			・JIS 部 ・体 ・部 ・成 部 (静部)	・直 径 ・良 好			
17-6 支 柱 底部 415号埴造土 内 a 地点	残存高 4.3cm ・外側 ヨコナデ ・内側 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (クロ回転方向右廻り) 内側 ヨコナデ	直径 5mm~0.3mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰 ・灰青色 ・灰黑色	外側に黒色輪		
17-7 筒 口盤部 415号埴造土 内 b 地点	口 径 12.0cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 4.3cm ・口盤部は、外側として上外方に立ち上がり、水平に延びるわかな段を経て1条の内縁を施し、さらに若干内側しつつ延び、底部で外反する。端部は内傾する凹面を成す。 ・外側 ヨコナデ、側部に6条 (5条/cm) の波状文を左から右へ施す。 内側 ヨコナデ ・外側 ・内側		良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色			
17-8 高杯 脚部 415号埴造土 内 b 地点	底 径 11.0cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 4.6cm 脚部はやや外脇骨際に下外方に下り、段を形成した後、直進に下る。端部は鋭い。 ・外側 ・内側 ・外側 ヨコナデ、カキメ (10条/cm) 内側 ヨコナデ	直 径 10.5mm の黄 石 をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に黒色輪 内側に白色輪		
17-10 杯足 415号埴造丘 下 濡 2 (770号埴輪剖面)	口 径 11.1cm (残存9/10) 器 高 4.4cm ・天井部 外側 ヘラケズリ (クロ回転方向右 廻り) 内側 ヨコナデ ・体 部 外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ ・口盤部 外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ		良好	・青灰色 ・灰黑色 ・青灰色	天井部外面に白 色輪		
17-11 杯身 415号埴造丘 下 濡 2 (770号埴輪剖面)	口 径 11.4cm (残存2/3からの回転復元) 器 高 5.5cm ・外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (クロ回転方向左廻り) 内側 ヨコナデ	直径 3mm の石英を 含む、直径 1mm~ 0.3mm の長石、石英 を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色			
17-12 杯身 415号埴造丘 下 濡 2 (770号埴輪剖面)	口 径 12.6cm (残存1/8からの回転復元) 残存高 3.6cm ・外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ ・外側 内側	直径 3mm の長石を 含む。直 径 0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部外面に白色 輪		
17-13 杯身 415号埴造丘 下 濡 2 (770号埴輪剖面)	残存高 3.6cm ・外側 内側 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (クロ回転方向左廻り) 内側 ヨコナデ	直 径 1.1mm~0.5mm の長石、石英を含 む。	良好	・灰青色 ・青灰色 ・青灰色	体部外面に黑色 輪		
17-15 杯足 415号埴造丘 下 濡 1	口 径 13.3cm (残存1/6からの回転復元) 残存高 4.5cm ・天井部 外側 ヘラケズリ (クロ回転方向左 廻り) 内側 ヨコナデ ・体 部 外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ ・口盤部 外側 ヨコナデ 内側 ヨコナデ	直 径 1.1mm~0.5mm の長石、石英を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色			

固 - 遺物番号 器 出 土 場 所	形 状 と 調 査	・山根部 ・本 部 ・武部(脚部)	断 土	成 分	・外 面 色 調		備 考
					・内 面 色 調	・内 面 内 容	
17-16 杯身 415号埴燒丘 下 槻 1	11 桟 11.5cm (残存2/3) 器 高 5.2cm ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ヘラケズリ (14クロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナダ	直 径 1mm~0.5mm の長石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色			
17-17 杯身 415号埴燒丘 北斜面突出上	11 桟 11.5cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 3.2cm ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ヘラケズリ (14クロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナダ	直 径 2mm~0.5mm の長石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色			
17-20 高杯脚端部 415号埴燒上 内 c 点	脚部の側面。外壁気味に下外方に開き、端部 附近で若干組み上げた上、下方へ屈曲させ、外周 平面を成し、組み上げた端部は丸い。 ・欠損 ・欠損 ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ	直径0.5mmの石英、 長石を含む。	良好	・青灰色 ・灰青色 ・青灰色			
17-21 短颈瓶 415号埴燒上 内 b 点 415号埴燒石 底乱土	肩部は口部端と110°を成して下外方に張り出 す。 ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 カキメ (6 条/cm) ・内面 ヨコナダ ・欠損	直径 3mmの長石を 含む。直径 1mm~ 0.5mmの長石、石英 を含む。	良好	・暗灰色 ・青灰色 ・青灰色	外表面部に白 色釉 外表面部に黑 色釉		
17-22 瓶 415号埴燒上 内 b 点 415号埴燒丘 下 槻 1 415号埴燒丘 下 槻 2	瓶部は外唇しつつ下外方に開き、突端、内縫を 経てさらに右側内唇しつつ延び、端部は外折する。 瓶部は水平に凹面を有す。 ・外側 口部ヨコナダ。瓶部はヨコナダ。のち、 11条/cmの波状文を幅3.8cmにわたって施 す。 ・内面 ヨコナダ ・欠損 ・外側 ヘラケズリのヨコナダ ・内面 ヨコナダ	直 径 1mm~0.5mm の長石、石英を含 む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	外表面に白色釉		
17-23 甕 修部 415号埴燒土 内 b 点 415号埴燒丘 下 槻 1	・欠損 ・外側 平行タタキのうち部分に 8 条/cm の方舟 入。 ・内面 同心円タタキのうち部分にスリケシ。 ・欠損	直 径 1mm~0.5mm の長石、石英を含 む。	不良	・白灰色 ・灰白色 ・灰白色			
17-24 甕 休部 415号埴燒土 内 b - c 点 415号埴燒丘 下 槻 1	・外側 ヨコナダ (底部破損) ・内面 ヨコナダ (底部破損) ・外側 平行タタキのうち 3 ~ 4cm毎に幅約 1cm の ヨコナダ。 ・内面 同心円タタキのうちスリケシ ・欠損	直径 3mmの長石を 含む。直径 1mm~ 0.5mmの長石、石英 を含む。	良好	・青灰色 ・灰青色 ・灰青色			

埴輪観察表

固 - 遺物番号 器 出 土 場 所	法 量	タガ 形態	外 面 調 査	内面調査	断 土						其 他 色 彩	備 考
					直 径	長 度	角 度	高 度	内 石	内 層	ナ イ ロ ン	
17-9 円筒小頭部 415号埴燒上 内 d 点	タガ厚 復元 不可	2 cm	・体部 ヨコハケ (ca. 4 条/cm) ・タガ ヨコナダ	ヨコナダ	・褐色 ・黑色 ・朱褐色	LL S 3	LL S 3	S 2	S 2	S 2	M S J 2	外表面 黒斑

土師器観察表

図 - 遺物番号 器部 出土場所	法量と測定 ・目頭部 ・体部 ・底部(脚部)	色調 ・外面 ・新面 ・内面 美 石	筋 土					備考	
			石	長	角	圓	審	チャ ット	
17-14 把手付鉢	口 径 10.4cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 3.6cm 口縁部は上外方に弧び、底部はやや低い。体部中央に半円形の大きな把手を付ける。底部はやや平らか。 ・外頭 ナナメハケ (10条/cm) のちヨコナデ 内面 ヨコハケ (10条/cm) のちヨコナデ ・外頭 ヨコハケ (10条/cm) のちヨコナデ 内面 ナナメハケ (10条/cm) のちヨコナデ ・外頭 テッハケ (10条/cm) のちヨコナデ 内面 クモノス状ハケタメのちヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色 S S	M	M	S	S	S		口縁から下に 28cmの位置に 朝1周の細い 沈線。但し全周 しない。
415号埴 造丘下 第1			3	3	3	2	1		

基道1 出土土器 観察表(図19、図版23)

須恵器観察表

図 - 遺物番号 器部 出土場所	形態と測定 ・目頭部 ・体部 ・底部(脚部)	色調 ・外面 ・新面 ・内面 美 石	筋 土					備考
			石	長	角	圓	審	
19-1 杯蓋 基道1埴土内	口 径 12.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 2.7cm 11縁部は、直点に下った後、わずかに外反し、 底部は内側する段を作成し、やや丸い。天井部と体部の境に凸凹輪を施し、後は断面一舟形で、溝部は やや深い。天井部はやや高い。 ・天井部 外面 ・体部 11縁 ・内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直接 1mmの長石、 石英を含む。審。						・青灰色 ・青灰色 ・青灰色
19-2 杯底 基道1埴土内	口 径 13.2cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 4.0cm 11縁部はほぼ直点に下り、溝部は高い。天井部 と体部の境に凸凹輪を施し、底はやや浅い。 ・天井部 外面 ・体部 ヘリケズリ (ロカ11回松方右 廻り) ・内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直接 1mmの長石、 石英を含む。審。						・灰青色 ・灰青色 ・灰青色

土師器観察表

図 - 遺物番号 器部 出土場所	法量と測定 ・目頭部 ・体部 ・底部(脚部)	色調 ・外面 ・新面 ・内面 美 石	筋 土					備考	
			石	長	角	圓	審	チャ ット	
19-3 土器 杯 基道1埴土	口 径 11.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 3.6cm ・外頭 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外頭 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外頭 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外頭 手捻ちヘラケズリ 内面 ヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色 S S	L	L	S	S		M	
19-4 土器 杯 基道1埴土	口 径 13.4cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 4.3cm ・外頭 ヨコナデ 内面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外頭 ヨコナデ 内面 ヨコナデ 手捻ちヘラケズリ 内面 ヨコナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色 S S	M	M	S	S	S		外底底面に墨 跡、墨痕著しい。

巨勢山417号墳 出土土器 (図24、図版30)

黒色土器・土師器観察表

遺物番号 部品 出上場所	法 規 と 調 整	口部基 底部 底部(脚部)	外 部 色調 ・内 面	土						備 考
				石	良	角 度	石	チ タ ト	水 色	
24-1 黑色土器 碗 底部・高台 石室搅乱土	高台径 9.6cm (残存1/2からの復元) 底高 0.7cm 残存高 1.8cm ・欠損 ・欠損 ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダのち縦し、平行縞文 (幅1.5~2mm) を密に施す。	・赤褐色 ・青灰色 ・黒灰色	S S S S	S	S	3 3 3	3 0	3		
24-2 黑色土器 碗 石室搅乱土	口 径 10.0cm (残存1/6からの復元) 底高 4.1cm 残存高 4.1cm ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ、邊部に沈線、のち縦し、平行縞文 (幅1.5mm) を密に施す。 ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ、邊部に沈線、のち縦し、平行縞文 (幅1.5mm) を密に施す。 ・欠損	・赤褐色 ・青灰色 ・黒灰色	M L S S	S	S	3 3 3	3 0	3	底底蓋らしい。	
24-3 土器蓋 小瓶 石室搅乱土	口 径 9.6cm (残存1/3からの復元) 管 高 1.5cm ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 破壊による押付力およびヨコナダ 内面 ヨコナダ	・黄褐色 ・青褐色 ・黒褐色	M M S S	S	S	3 3 3	3 0	1	口縁部内面に青褐色による押付有る	

巨勢山418号墳 石室搅乱土 出土土器 (図27、図版31~32)

須恵器 観察表

遺 物 番 号 部 品 出 上 場 所	形 態 と 調 整	口部基 底部 底部(脚部)	施 工			外 部 色調 ・内 面	備 考
			石	良	成		
27-1 盃 石室搅乱土	口 径 16.4cm (残存1/2からの復元) 残存高 7.1cm 口縁部は外反して立ち上がり、外方に屈曲し腹を廻らし底部近くで両面二角形の突起を外側に有する。底の裏面に円錐を施す。邊部は丸い。側部は約1.5段を成して張り出す。 ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 平行タタキのちカキメ (6条/cm) 内面 同心タタキ ・欠損	長径3mmの長石、 石英を含む。直線 1mm~0.5mmの 石 英、長石を含む。	良好			・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
27-2 杯身 石室搅乱土	口 径 12.8cm (残存1/8からの復元) 残存高 4.5cm たちあがりは内傾し、邊部はやや丸い。底部は短く。やや上外方に延び、端部はやや丸い。 ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (クロコ回転方向右振り) 内面 ヨコナダ	直徑0.5mmの長石、 石英を若干含む。	良好			・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	成都外側に1景 のヘラ記号有り。

器物番号 部品 出上場所	形態と調整 ・口部 ・体部 ・底部(脚部)	断面	焼成	外観 色調 ・断面 ・内面		備考
				直徑	高さ	
27.3 器合 杯部・脚部 右空腹丸上	<p>脚部径 9.4cm (残存1/3弱からの回転復元) 同上直徑</p> <p>体部はやや内側しながら、約12段位にして脚部に来る。脚部は平底にて下る。上邊には複合のための筋子状の切り込みがある。3方スカシ。</p> <p>・欠損</p> <p>・外面 同上(タタキのちヨコナダ)、圓示の上部から、四縞、例文式(左から右)、カキメ(7条/cm)</p> <p>・内面 同上(タタキ)、上部のみ、のちヨコナダ</p> <p>・外面 ヨコナダ、カキメ(7条/cm)のち、四縞の上位から、四縞、例文式(左から右)、四縞を繰り返す。</p> <p>・内面 ヨコナダ</p>	直徑 1mm~0.5mm の右美、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	外面上に黒色斑	
27.4 茶合 右空腹品土	<p>脚部径 最小10.2cm、最大15.8cm (残存1/3弱から の回転復元)</p> <p>残存高 14.5cm</p> <p>先底に下り、外輪しつつ下外方へ斜く。3方スカシ。</p> <p>・欠損</p> <p>・外面 ヨコナダ、カキメ(7条/cm)のち、四縞の上位から、四縞、例文式(左から右)、四縞を繰り返す。</p> <p>・内面 ヨコナダ</p>	直徑 5mmの花崗岩 粒を含む。直徑 1mm~0.5mmの右美、 長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	3と同一個体 外面上に黒色斑	
27.13 水瓶(茶碗) 右空腹品土	<p>残存高 10.0cm (11縞を除き完形)</p> <p>底部径 5.0cm</p> <p>・外面 ヨコナダ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p> <p>・外面 ヨコナダ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p> <p>・外面 回転充切り</p> <p>・内面 ヨコナダ</p>	無物はほとんど含 まない。	やや 不良	・白黄色 ・白黄色 ・白黄色	外面上に薄い緑 色斑 底部に土の ヘリ記号	

土師器・瓦器観察表

器物番号 部品 出上場所	法式と調整 ・口部 ・体部 ・底部(脚部)	色調 ・外観 ・断面 ・内面	断面					備考
			石	長	角	凸	チャート	
英	石	母	母	母	母	母	母	
27.5 上部器 小皿	<p>口 径 15.2cm (残存2/3からの回転復元)</p> <p>器 高 22.0cm</p> <p>・外面 ヨコナダ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p> <p>・外面 指面による押圧およびナゲ</p> <p>・内面 ナゲ</p>	<p>・鵝黃色</p> <p>・褐色</p> <p>・鵝黃色</p>	L.L.	S	S	S	S	
27.6 土師器 小皿	<p>口 径 9.4cm (完形)</p> <p>器 高 15.0cm</p> <p>・外面 ヨコナダ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p> <p>・外面 指面による押圧およびナゲ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p>	<p>・赤褐色</p> <p>・赤褐色</p> <p>・赤褐色</p>	M	M	S	S	S	
27.7 上部器 小皿	<p>口 径 10.4cm (残存1/4からの回転復元)</p> <p>器 高 20.0cm</p> <p>・外面 ヨコナダ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p> <p>・外面 指面による押圧およびナゲ</p> <p>・内面 ナゲ</p>	<p>・青褐色</p> <p>・鵝黃色</p> <p>・鵝黃色</p>	S	S	S	S	S	
27.8 土師器 小皿	<p>口 径 9.0cm (残存1/6からの回転復元)</p> <p>残存高 12.0cm</p> <p>・外面 ヨコナダ</p> <p>・内面 ヨコナダ</p> <p>・外面 表面による押圧およびナゲ</p> <p>・内面 ナゲ</p>	<p>・水褐色</p> <p>・赤褐色</p> <p>・赤褐色</p>	L.	S	S	S	S	

遺物番号 種類 部出 土場所	法量と調査 ・11類 ・修 ・底部(新部)	色調 ・外面 ・裏面 ・内面	地 土						備 考
			石	長	角	雲	チ モ ト	赤 色 粒	
27-9 上部器 小皿	口 径 10.3cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 1.8cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 指痕による押圧およびナダ ・内面 ナダ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	LL S S	S S S	S S S	S S S	M S S	S S S	
27-10 上部器 小皿	口 径 8.8cm (完形) 器 高 1.8cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 指痕による押圧およびナダ ・内面 ナダ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M S S	M S S	M S S	M S S	M S S	M S S	
27-11 上部器 小皿	口 径 9.6cm (残存1/5からの回転復元) 器 高 1.8cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 指痕による押圧およびナダ ・内面 ナダ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M S S	M S S	M S S	M S S	M S S	M S S	
27-12 上部器 小皿	口 径 5.2cm (残存1/8からの回転復元) 器 高 0.6cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 指痕による押圧およびナダ ・内面 ナダ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S S S	S S S	S S S	S S S	S S S	S S S	搬入品
27-14 丸器 腹部	高台径 20cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 1.9cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ、平行暗文(幅1mm)を有する ・外面 ヨコナダ、横ヨコ暗文(幅1mm)を3~7mm間隔で施す。 ・内面 ヨコナダ	・黒灰色 ・白灰色 ・黒灰色	S S S	S S S	S S S	S S S	S S S	S S S	

巨勢山419号墳出土 塙輪観察表 (図33~37、図版33~35)

遺物番号 種類 部出 土場所	法量	口縁 タガ の 形態	外 国 調査	内面調整	色調 ・外面 ・裏面 ・内面	地 土						備 考
						石	長	角	雲	チ モ ト	赤 色 粒	
33-1 円筒 口縁部 419号墳流出土	口 径 39.0cm 残存高 1.17	II c : タテハケ (5条/cm) 口縁底に沈穂	ヨコナダ		・黄褐色 ・黑色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	S S S	外面上に 黒斑
33-2 円筒 口縁部 419号墳流出土	口 径 37.4cm 残存1/13	II b : タテハケ (5条/cm)	ヨコハケ (7条/cm)		・黄褐色 ・黑色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	S S S	
33-3 円筒 口縁部 419号墳流出土	口 径 25.4cm 残存1/6	II b : タテハケ (5条/cm)	ヨコハケ (8条/cm)		・赤褐色 ・黒色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	S S S	内外面 に黒斑
33-4 円筒 口縁部 419号墳流出土	口 径 37.2cm 残存1/15	II b : 1次: タテハケ (3条/cm); 2次: ヨコハケ (3条/cm)	ヨコハケ (3条/cm)		・黄褐色 ・赤褐色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	S S S	
33-5 円筒 口縁部 419号墳流出土	口 径 34.6cm 残存1/27	II b : ヨコナダ	ヨコナダ		・黄褐色 ・赤褐色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	S S S	
33-6 円筒 口縁部 419号墳流出土	口 径 33.4cm 残存1/17	II b : タテハケ (8条/cm)	ヨコハケ (8条/cm)		・黄褐色 ・赤褐色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	S S S	

通 物 番 号 通 部 品 上 場 所	法 量	目録 タガの 形態	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調 ・外 部 ・内 部	駆 上 色 其 ナ ト 色 軽 その 他			考 察	
						石 英 石	長 石	四 方 石	青 石	
33-7 川奥 山腰 残存1/26 419号噴出土	11.5 34.0cm 残存1/26	B-a タテハケ (5条/cm)	ヨコナゲ	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	S S S	S S S	S S S	S S S	外面に 黒鉛
34-8 朝潮 原山16 残存1/3 419号噴出土	タガ透 29.5cm 残存1/3	3-cb タテハケ (6条/cm)	ヨコハケ (5条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	
34-9 朝潮 原山18 残存1/9 419号噴出土	タガ透 28.5cm 残存1/9	3-bc タテハケ (5条/cm)	ヨコハケ (5条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M S S	
34-10 朝潮 原山 背部 419号噴出土	タガ透 27.4cm 残存1/8	3-bb タテハケ (7条/cm)	ヨコハケ (7条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	方形を たはく 角形の スカシ
34-11 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 27.6cm 残存1/11	3-bb タテハケ (6条/cm)	ナテ 指頭押圧	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	外面に 黒鉛
34-12 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 27.6cm 残存1/17	3-bc タテハケ (5条/cm)	ナテ 指頭押圧	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	外面に 黒鉛
34-13 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 28.5cm 残存1/9	3-bb タテハケ (6条/cm)	ヨコハケ (6条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	
35-14 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 32.0cm 残存1/8	1-cb ヨコハケ (5条/cm)	ナテ	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	
35-15 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 30.2cm 残存1/10	3-cb タテハケ (5条/cm)	ヨコハケ (7条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	方形ス カシと みられ る。
35-16 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 32.2cm 残存1/16	2-cb タテハケ (6条/cm)	ヨコハケ (6条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	
35-17 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 29.6cm 残存1/12	- タテハケ (7条/cm)	ヨコハケ (6条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	円形ス カシ
35-18 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 29.6cm 残存1/12	4-cb タテハケ (6条/cm)	タテ・ヨコ ハケ (7条/cm)	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	円形ス カシ
35-19 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	タガ透 34.6cm 残存1/15	1-cb タテハケ (8条/cm)	ナテ 指頭押圧	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	M M S	外面に 黒鉛
36-20 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	-	3-be 不明	ナテ 指頭押圧	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	L S S	
36-21 内蔵または朝潮 体部 419号噴出土	-	1-bc ヨコハケ (5条/cm)	ナテ 指頭押圧	- ・褐黄色 ・灰灰色 ・褐黄色	LL S S	LL S S	S S S	S S S	L S S	外面に 黒鉛

遺物番号 部品 出土場所	法 量	L標 タガ の 形態	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調 ・外 面 ・断 面 ・内 面	施 上						その 他
						石	長	角	圓	表	チ タ イ ト	赤 色 数
36-22 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	-	2Db	ナゲ	ナゲ	- 黄褐色 - 風灰褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	L S 3	
36-23 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	-	4Cb	タテハケ (3条/cm)	ヨコハケ (5条/cm)	- 黑褐色 - 黑灰色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	M S 3	外面上 黒度
36-24 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 20.0cm 残存1/2	2b	タテハケ (7条/cm)	ヨコハケ (7条/cm)	- 黑褐色 - 黑灰色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	M S 3	
36-25 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 22.0cm 残存1/9	2a	タテハケ (6条/cm)	ヨコハケ (6条/cm)	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	M S 2	内面上 黒度
36-26 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 25.6cm 残存1/11	1a	タテハケ (6条/cm)	ナゲ	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 2	S 0	M S 2	
36-27 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 19.8cm 残存1/11	2c	タテハケ (6条/cm)	ナゲ 指面押付	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 2	S 0	M S 2	
36-28 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 21.3cm 残存1/9	2c	タテハケ (5条/cm)	ナゲ 指面押付	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 2	S 0	M S 2	
36-29 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 23.0cm 残存1/6	4c	タテハケ (6条/cm)	ナゲ 指面押付	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 2	S 0	M S 2	
36-30 円筒または朝顔 体部 419号埴流出土	底部延 26.0cm 残存1/13	2c	タテハケ (4条/cm)	ナゲ 指面押付	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 2	S 0	M S 3	

巨勢山419号墳に伴ったとみられる埴輪観察表(図37、図版35)

遺物番号 部品 出土場所	法 量	L標 タガ の 形態	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調 ・外 面 ・断 面 ・内 面	施 上						その 他
						石	長	角	圓	表	チ タ イ ト	赤 色 数
37-1 円筒または朝顔 体部 420号埴流丘底出土	タテ延 34.0cm 残存1/6	2a	タテハケ (5条/cm)	ナゲ 指面押付	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	M S 3	退化し た巴形 スカシ
37-2 円筒または朝顔 体部 420号埴流丘底出土	底径 21.6cm 残存1/4	-	タテハケ (5条/cm)	ナゲ 指面押付	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	M S 3	上と同 一部体 か
37-3 參照形 420号埴流丘底出土	-	-	ヨコナゲ	ナゲ	- 黄褐色 - 黑褐色 - 黄褐色	LL S 3	LL S 3	S S 3	S 3	S 0	M S 3	外面上 黒度

被移文を沈綴にて表現する。被移文部分の幅、23~26cm。上段被移文の下端と下段被移文の上端が遺存しており、上段被移文の幅は19cm、下段被移文の幅は20cmを有する。

遺物番号 出土地點	法身	口縁 タガ の 形態	外側調査	内面調査	色調 ・外側 ・内面	鉢			土			備考
						石	長 角 四 石	古 四 石	ナ イ ト	赤 色 板	その 他	
37-4 水井? 排水? 420号墳石室複乱土	-	-	ナデ	ナデ	・赤褐色 ・灰黑色 ・茶褐色	L	I.	S	S	M	S	北端内部に赤褐色斑点残存
37-5 円筒 口縁部 421号墳埴流出土	口 径 34.8cm 残存1/12	B.b	タガハケ (5本/cm)	ヨコナデ	・山褐色 ・灰黑色 ・赤褐色	LL	LL	S	S	S		
37-6 円筒 口縁部 421号墳石室複乱土	タガ径 32.5cm 残存1/3	2.a	タガハケ (7本/cm) 上方:ヨコハケ 指輪溝	ヨコハケ (7本/cm) 上方:ヨコハケ	・褐青色 ・灰灰色 ・褐色	LL	I.	S	S	M	S	万葉歌 たはし 字歌ス カシ

巨勢山420号墳 石室複乱土 出土土器 (図41~42、図版36~38)

須恵器観察表

遺物番号 出土地點	形態と調査	・口縁 ・体部 ・底盤(脚部)	鉢	土	焼成	色調 ・外側 ・内面	備考			
							直徑1mmの長石、 石英を含む。	直好	良好	青灰色 ・青灰色 ・青灰色
41-1 杯垂	口 径 15.4cm (復元形態) 器 高 4.5cm 体部と口縁部の間に深い溝を有し、口縁部は、 やや内凹しつつ、直立してはそれに近い角度で 下る。端部は丸い。2.、4.、6.、8.と同型。 ・天井部 外側 ハラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) ・内面 ヨコナデ ・体 部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ									夫婦像に適合 の痕跡 ・口縁部外側端 部付近に連続する 指輪文有り。 のちヨコナ デ。
41-2 杯垂	口 径 14.8cm (残存1/4からの復元復元) 器 高 4.1cm ・天井部 外側 ハラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) ・内面 ヨコナデ ・体 部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ									外側に白色帶
41-3 杯垂	口 径 12.6cm (ほぼ完形) 器 高 4.1cm 体部と口縁部の端は不明瞭で、丸い。口縁部は、 やや内凹しつつ下外方に下る。端部は丸い。5. 9.と同型。 ・天井部 外側 ハラケズリ (ロクロ回転方向左 廻り) ・内面 ヨコナデ ・体 部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ									・青灰色 ・灰黑色 ・灰青色
41-4 杯垂	口 径 12.0cm (ほぼ完形) 器 高 4.1cm ・天井部 外側 ハラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) ・内面 ヨコナデ、ナデ ・体 部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ									・灰青色 ・青灰色 ・青灰色

重 物 量 出 土 所	形 独 と 調 査	・上 頭 部 ・体 部 ・口 横 部 (脚部)	輪 土	機 成	色調	外 国 新 古 内 古	備 考
41-5 杯蓋	口 径 14.6cm (残存1/5からの回転復元) 器 高 4.2cm ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 側り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口横部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径1mmの長石、 石英を含む。	良好		・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
41-6 杯蓋	口 径 12.6cm (残存2/3) 器 高 4.0cm ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 側り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口横部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径1mmの長石、 石英を含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外間に黑色釉	
41-7 杯蓋	口 径 12.5cm (残存4/5) 器 高 3.9cm ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 側り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口横部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径5mmの花崗岩 粒を含む。直径1 mmの長石、石英を 含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
41-8 杯蓋	口 径 12.6cm (残存2/3) 器 高 4.0cm ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 側り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口横部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径5mmの花崗岩 粒を含む。直径1 mmの長石、石英を 含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
41-9 杯蓋	口 径 14.0cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 3.8cm ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 側り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口横部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径1mmの長石、 石英を含む。	良好		・灰 ・灰青色 ・灰青色		
41-10 杯身	口 径 13.8cm (復元完形) 器 高 4.0cm たるみがは、よく内側し、底部はやや丸い。受 け部はやや外方に延び、底部はやや丸い。底部 は浅く、すら。本埴出土中、口径最大の杯身。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右側り) 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の長 石、石英を若干含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部外間に白色 釉	
41-11 杯身	口 径 11.0cm (完形) 器 高 4.0cm 口縁部、全部の輪郭、鋸い。底部は丸い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右側り) 内面 ヨコナデ	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		

遺物名	出土地所	形態と特徴	・口盤部 ・体部 ・底部(脚部)	船	上	焼成	・外側 ・断面 ・内面	色調	備考
41-12 杯身	口 径 11cm (残存2/3) 器高 40cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。			良好	・灰青色 ・紫灰色 ・灰青色	口よりも底部 はやや丸い 外側に黑色帶	
41-13 杯身	口 径 11.2cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 35cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。			やや甘い	・灰色 ・灰色 ・灰色	12と同期	
41-14 杯身	口 径 11.1cm (ほぼ定形) 器高 40cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。			良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	口と同類	
41-15 杯身	口 径 11.0cm (定形) 器高 41cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。			良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	口と同類	
41-16 杯身	口 径 11.2cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 30cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。			やや 甘い	・灰色 ・灰色 ・灰色	12と同期	
41-17 杯身	口 径 12.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 34cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。			良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	12と同期	
41-18 高杯	口 径 10.9cm (残存1/2からの回転復元) 器高 15.0cm ・口盤部は外側して立ち上がり、溝部はやや丸い。 体部との境に尖端を有して外輪度を増して下り。 底部との境に浅い凹部を施す。底部内面は平ら。 脚部ははば車輌に下った後、下外方に外輪しなが らひらく。中段に2本の凹線を有し、上段と下段 に瓦力軸のスカシを3方にあける。 下段スカシの直下とみられる位置にも細く浅い 凹輪がある。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ (シボリ目有り)		直径0.5mmの石英、 長石を若干含む。			良好	・青灰色 ・紫灰色 ・青灰色	外側に黑色 帶、 杯部内面底部 に白色帶、 外側にも部分 的に白色帶。	

地 質 分 類 名 称 所	形 状 と 調 整	・口部 ・体 部 ・底 部(脚部)	粘 土	成 分	・外 部 色 調 ・断 面 ・内 面	備 考
41-19 泥 石炭模擬土	11 深 14.3cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 19.2cm 口頭部は外反して立ち上がり、段を有した後、やや内傾して大きめに外方に開き、端部はやや弧い。段の部分に1条の大口の凹縫を有し、その直下は浅い突起となる。中段に有2条の凹縫を2段に有する。 前部は、頭部と約90度を成して下外方にとり、凹縫を有して直立に下り、浅い凹縫を持ち、丸くおさめる。 ・外面 ヨコナデ、口縫部に1条の波状紋、第部の2段は波状文に見せかけた、縦方向の波筋。 ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ、側突文 ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ヨクロ回転方向右廻り)のものが ・内面 ヨコナデ	直径5mmの石英を含む。直 径0.5mmの石英、長石を若干含む。	良好	・青灰色 ・褐灰色 ・青灰色	体部中央に空孔。外向凹縫部と体部側面に黑色物、体部1/2部に白色物を塗り別ける。口縫部内面には白色物。	
41-20 泥 (擬似泥炭)	11 深 11.0cm (残存1/5) 器 高 39.0cm 11脚部は、外側しつづ外方に張り出し、端部は弧い。直面は擴する面を成す。大井部は丸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ(ヨクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・11脚部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
41-21 糞便	口 深 10.8cm (残存1/4からの回転復元) 器 高 32cm 11脚部は、下外方に下り、端部は丸く、内側するかえりをU字型より上に付す。大井部はやや高く丸い。天井部中央に擬似球根つまりを付す。 ・天井部 外面 ヘラケズリのちヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・11脚部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直 径0.5mmの石英、長石を若干含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	大井部に幾枚片付着	
42-22 糞便	口 深 9.0cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 8.5cm 11脚部は切く外反して肥厚し、上面には水平の縫を持つ。端部はやや弧い。脚部は口縫部より約120度を成して張り出し、並大抵をした後、内方へなららに下り、底部は丸い。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ(ヨクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直 径 2mm~0.5mmの石英、長石を若干含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	厚手のつくりで重い。	
42-23 糞便	11 深 7.8cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 7.2cm 11脚部は切く外反して延び、端部はやや弧い。脚部は口縫部より約125度を成して張り出し、並大抵を有した後、内方へ内凹気味に下る。底部は丸い。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ(ヨクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直 径5mmの花崗岩を含む。直 径1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好	・灰 ・灰 ・灰		

通 用 名 称 出 上 場 所	形 態 と 調 査	・13脚部 ・体 部 ・足部(脚部)	筋 上	成 成	・外 面 ・筋面 ・内 面	備 考
42-24 加羅虫	口 伸 8.5cm (残存1/7からの回転復元) 残存高 9.5cm 口縁部は幅広に外傾して延び、端部はやや弧い。 肩部は口縫より約100度を成して張り出し、最大 径を有した後、上方へ内側気味に下る。底部は丸 い。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外腹 ヘラケヌリ (ロクロ回転方向剥離) ・内面 ヨコナデ	直 径5mmの花崗岩 を含む。肉径1mm ~0.5mmの石英、長 石を含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
42-25 擬蠍虫	口 伸 8.5cm (残存1/7からの回転復元) 残存高 2.5cm 口縁部は、近くやや内傾して延び、端部は丸 い。肩部は口縫部より約130度を成して張り出 す。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外面に黑色斑。
42-26 翁介 体部	残存高 6.1cm 口縫部は外傾しつつ上方に延びる。体部はや や内傾して下方に下る。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ、平谷タキのちカキメ (8条/cm) ・内面 ヨコナデ、開心谷タキ ・欠損	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外面に黑色斑。
42-27 翁介 脚部	脚部延 11.5cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 9.1cm 脚部は、体部と約130度を成して垂直に下る。 端部に凹縫を多めに施す。3方スカシだが、スカシ の幅不明。 ・欠損 ・欠損 ・外腹 カキメ (8条/cm) ・内面 ヨコナデ	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外腹に黑色斑。 26と同・側体 か?
42-28 翁介 脚部	門脛花崗 12.0cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 9.5cm 脚部は平直にだった後、やや外傾しつつ大きく 下外方に開く。1方スカシで、上段方形、下段三 角形だが、スカシの幅不明。スカシの間に2条の 凹縫を入れる。 ・欠損 ・欠損 ・外腹 カキメ (5条/cm) ・内面 ヨコナデ	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	27とは側體 か?
42-29 翁介 脚部	座脚延 25.0cm (残存1/6からの回転復元) 残存高 12.1cm やや外傾しつつ外方に下ってきた脚部は、底 部付近の2条の凹縫を境に、垂直に開くする。底 部は内傾する面を成し、端部は丸い。スカシは三 角形カキメ、上下段で千鳥状に配列するが、放 は小形。上下段のスカシの境にも凹縫2条を入れ る。 ・欠損 ・欠損 ・外腹 カキメ (5条/cm) ・内面 ヨコナデ	直 径 1 mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	28と同・側体 か?

遺物番号	形態と調査	断面	輪	成	外観	備考
	・口頭部 ・体部 ・底部(脚部)		上	上	表面 ・前面 ・内面	
42-30 器台 脚部 部位	底部径 35.8cm (残存1/7からの回転復元) 残存高 5.3cm 2枚の四隅を軽て、底部に下する。底部付近でやや外傾し、底部は内側するかすかな段を成し、端部は丸い。スカシは三角形スカシだが、数は不明。 ・欠損 ・欠損 ・外観 カキメ (7 束/cm) 内面 ヨコナダ ・底部(脚部)	直径 1mm ~ 0.5mm の石突、長石を含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色 ・内面	29号別体 26・27と同一部 分か?

上部器観察表

遺物番号	形態と調査	・口頭部 ・体部 ・底部(脚部)	断面					備考
			外観 色調 ・前面 ・内面	G 英石	M 角石	S 圓石	チャード は	
42-31 土器器 小皿	口 径 13.4cm (残存1/9からの回転復元) 残存高 2.0cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ナダ	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	M S	S	S	S	S	
42-32 土器器 小皿	口 径 15.4cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 2.2cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ヨコナダ	・肌褐色 ・肌褐色 ・肌褐色	M S	S	S	S	S	
42-33 土器器 小皿	口 径 9.6cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 1.9cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ナダ	・青褐色 ・青褐色 ・青褐色	S 3	S 3	S 3	S 3	S 0	1
42-34 土器器 小皿	口 径 12.0cm (残存1/6からの回転復元) 器 高 1.5cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ナダ	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	L S	L S	S 3	S 3	S 0	1
42-35 土器器 小皿	口 径 10.2cm (残存1/6からの回転復元) 器 高 1.7cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ナダ	・褐色 ・褐色 ・褐色	S 2	S 3	S 3	S 3	S 0	4
42-36 土器器 小皿	口 径 9.8cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 2.2cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ナダ	・褐色 ・褐色 ・褐色	M S	M S	S 3	M 3	S 0	1
42-37 土器器 小皿	口 径 9.8cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 2.0cm ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外観 指印による押圧およびナダ 内面 ナダ	・褐色 ・褐色 ・褐色	M S	M S	S 3	S 3	S 0	1
42-38 土器器 小皿	口 径 34.0cm (残存1/9からの回転復元) ・欠損 ・外観 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・欠損	・青褐色 ・青褐色 ・青褐色	M S	M S	S 3	S 2	S 0	1

墓道4出土 須恵器 観察表(図45、図版39~41)

須恵器観察表

登 記 番 号 出 土 場 所	形 態 と 調 査 ・体 部 ・底部(脚部)	寸 法 ・長 さ ・幅 ・高 さ	前 上 ・後 下 ・横 幅	成 分 ・外 部 ・内 部	色 調 ・断面 ・内面	備 考
45-1 杯型	口 径 14.8cm(残存1/2からの測定復元) 器 高 45cm 天井部は高く丸い。体部と口縁部の境に焼い模 を有し、口縁部は、やや外唇しつつ、下外方に下 る。底部は丸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の長 石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	天井部に重ね燒 きの痕跡。	
45-2 杯型	口 径 14.2cm(残存1/2からの測定復元) 器 高 40cm 天井部は高く平ら。体部と口縁部の境に古く灰 い凹縫を入れる。口縁部は、やや外唇しつつ垂直 に下る。底部は丸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径3mmの石英を 含む。直径1mm以 下の石英、長石を かなり含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外面に黑色帶	
45-3 杯型	口 径 15.2cm(残存1/2からの測定復元) 器 高 45cm 天井部は高く平ら。体部と口縁部の境は不明瞭 で、焼けから1段階部にかけて、やや外唇しつつ下 外方に下る。底部は丸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径1mmの長石、 石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
45-4 杯型	口 径 14.0cm(残存1/2からの測定復元) 器 高 42cm あちあがりは、内傾して低張。底部はやや丸 い。底部はやや浅く、平ら。 ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の長 石、石英を若干含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部および底部 外向に白色帶	
45-5 杯身	口 径 13.8cm(復元の受部はば定形) 器 高 45cm 4と同類 ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外面に白色帶	
45-6 杯身	口 径 13.5cm(復元の受部はば定形) 器 高 43cm 4と同類 ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	口よりも邊部 はやや丸い。 外側に黑色帶	

物 品 分 類	形 態 と 調 態	筋 上	発 成	外 蕊	備 考
出 土 場 所				・新 色 ・既 有 色 ・内 蕊	
45-7 杯身	受部径 16.0cm (残存受部4/5から約軸) 基部口径約14cm 残存高 32.0cm ±と同期 - 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ - 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ - 外面 ヘリケツリ (ロクロ回転方向右巻き) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰色 ・青灰褐色	
45-8 鋏頭部	口 径 9.4cm (残存1/2からの加軸後元) 番 高 9.5cm 口縁部は軽く外反して延び、端部は水平の肩を成し、やや尖る。肩部は口縫部より約120度を成して張り出し、最大径を有した後、内方へ内側気味に下る。底部は丸い。 - 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ - 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ - 外面 ヘリケツリ (ロクロ回転方向右巻き) 内面 ヨコナデ	長径 5mm の花崗岩 長石を含む。直 径 0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰色 ・青灰褐色	外側に黑色帶 内面に白色帶
45-9 鋏 口縁部	口 径 13.8cm (残存1/6からの加軸後元) 残存高 4.1cm 1縁部は外側しつつ外側にして延び、端部は肥厚して丸い。肩部は、1/3底辺より約120度を成して下方に向く。 - 外面 ヨコナデ、カキメ (5条/cm) 内面 ヨコナデ - 外面 ヨコナデ - 外面 ヘリケツリ (ロクロ回転方向右巻き) 内面 ヨコナデ	長径 2mm の石英を含む。直 径 0.5mm の石英、長石を若干含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰色 ・青灰褐色	
45-10 鋏 底 底部	残存高 5.0cm 口縁部と体部の大半欠損。丸い底部。 - 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、カキメ (10条/cm) - 外面 ヨコナデ - 外面 ヘリケツリ (ロクロ回転方向右巻き) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・灰褐色 ・灰青色 ・灰青褐色	
45-11 鋏	口 径 16.9cm (復元定形) 残存高 26.0cm 口縁部は外側しつつ外方に延び、端部は丸い。肩部は口縫部より約120度を成して内側にして張り出し、口縫からさらに約1/3の位置で最大径を有した後、内方へ内側気味に下る。底部は丸い。 - 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ - 外面 平行タタキのちカキメ (6条/cm) 内面 同心円タタキ - 外面 平行タタキ 内面 同心円タタキ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・灰褐色 ・灰青色 ・灰青褐色	
45-12 器台	口 径 33.6cm (残存2/3) 番 高 53.0cm (最大) 1縁部は外側しつつ上方方に延び、端部は肥厚せんまい。一部がやや内側して下方に下る。脚部は、軽く約120度を成して底点になり、中位からやや外側しつつ外方に下る。底部付近で底盤に近い角度でとり、端部は内傾する面を成し、やや丸い。 - 外面 ヨコナデ、肥厚部分の上下に凹輪。 内面 ヨコナデ - 外面 平行タタキのち、カキメ (5条/cm)、のち、11条を単位とする波状文 (5条/cm)、のち、2条の凹輪。底盤との接合部に完全に密着しない凹輪。脚部との接合部に開口方形の1条の凹輪。 内面 同心円タタキのち、ヨコナデ。 - 外面 カキメ (5条/cm) およびヨコナデのち、2条、3条、2条、3条、3条の凹輪。それぞれの間に、波状文 (7条/cm)。 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰色 ・青灰褐色	スカラシは 1 方 4 段。上 2 段は方 形。下 2 段は内 菱および三 角 形。外側に黑色 帯。底部内面に 底ぬ洗の跡跡。

巨勢山421号墳 奥壁部 出土土器 (図49、図版42~44)

須恵器観察表

遺物番号 分類 出土地	形態と内装 ・口径部 ・体部 ・底部(脚部)	胎土 泥	成形 法	外輪 ・断面 ・内側	備考
49-1 杯蓋	口 径 13.4cm (完形) 器 高 40cm 大井部は底く平ら。体部と口縁部の端に浅い棱を有し、口縁部は、垂直もしくはそれに近い角度で下る。透過程は丸い。以下、杯蓋はいずれも同様。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ同軸方向右回り) 内面 ヨコナデ ・体 部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径 1mmの長石、石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に白色、緑色の輪。大井部に重ね焼きの痕跡あり。
49-2 杯蓋	II 径 14.0cm (完形) 器 高 39cm 46-10と重ね焼き。	直径 5mmの石英含む。 直径 1mmの石英、長石を含む。	やや 甘い	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	天井部に平行タキ 1回。1/4ほど生焼けで白灰色。外側に黑色輪と白色輪。
49-3 杯蓋	II 径 13.8cm (完形) 器 高 39cm	直径 1mmの長石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
49-4 杯蓋	口 径 13.8cm (完形) 器 高 40cm	直径 1mmの長石、石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に黑色輪と白色輪。天井部に平行タキ 1回。
49-5 杯蓋	II 径 13.6cm (完形) 器 高 39cm 46-10と重ね焼き。	直径 3mm以下の長石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	天井部に平行タキ 1回。
49-6 杯蓋	口 径 14.1cm (完形) 器 高 42cm	直径 1mmの長石、石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に黑色輪、白色輪。内面に白色輪。
49-7 杯蓋	II 径 14.6cm (残存1/3から) (同軸復元) 器 高 40cm	直径 1mmの長石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
49-8 杯身	II 径 12.4cm (完形) 器 高 40cm たわあがりは、底く内傾し、端部はやや丸い。 受け瓶には水斗に當り、瓶底はやややい。底部は、底く平ら。以下、杯身はいずれも同様。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ同軸方向右回り) 内面 ヨコナデ。底部に同心円タキ文2箇所にあり。	直径 1mm以下の長石、石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	体部外側に白色輪
49-9 杯身	口 径 12.0cm (完形) 器 高 39cm 内面底部に同心円タキ文あり。	直 径 1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に白色、緑色、黒色の輪既存部に集生被着。
49-10 杯身	II 径 12.3cm (完形) 器 高 36cm 46-3と重ね焼き。 内面底部に同心円タキ文2箇所にあり。	直 径 1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	外側に白色、緑色、黒色輪
49-11 杯身	II 径 12.4cm (完形) 器 高 41cm 内面底部に同心円タキ文あり。	直 径 1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に白色、黑色輪
49-12 杯身	II 径 11.8cm (完形) 器 高 38cm	直 径 1mm~0.5mmの石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に白色輪

遺物番号	形態と調査	施土	焼成	外觀 色調 ・内面	備考	
49-13 杯身	口 径 12.4cm (底形) 器 高 4.1cm	口部 ・体部 ・底部 (脚部)	直 径 1 mm ~ 0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰褐色 ・青灰色	外觀に白色、綠色、黒色。 底部に墨塗顔。
49-14 蓋台	口 径 31.2cm (頂元形) 器 高 16.6cm (最大)	口部は外輪として飛び、腹部は丸い。体部は中央で内側として内方に下る。脚部は、杯身と約10度を成してほぼ直線に下り、中段からやや外側につづく外方に下る。底部付近で底面に凹い角度で下り、脚部は内側に傾する面を成し、やや丸い。 ・外側 リコナヂ、1段腰線上に凹窓、1.1cm下に突起。 ・内面 ヨコナヂ ・外側 平行ラタキのち、カキメ (7条/cm) のち、8条を基底とする波状文 (8条/cm) のち、口縁部との間に2条の凹窓。底部付近はカキメと内側に凹窓。 ・内面 ヨコナヂ、のち、ヨコナヂ。 ・外側 ヨコナヂ、のち、波状文を5段。底部付近はカキメ (6条/cm)。 ・内面 ヨコナヂ	直 径 1 mm ~ 0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰褐色 ・青灰色	スカラシは3方4段。上3段は方形、下1段は一角形。内外面に黑色、白色相。
49-15 蓋	口 径 11.8cm (残存1/2からの回転復元) 底座高 4.3cm 11.1頭部は外方に立ち上がり、中位で突起、内縁部分で外方に開き、さらに上外方に延び、腹部は丸い。 ・外側 ヨコナヂ、のち、波状文に似せた斜文を2段に施す。 ・内面 ヨコナヂ ・外側 ヨコナヂ ・内面 ヨコナヂ	口部 ・体部 ・底部 (脚部)	直径0.5mmの石英、長石を若干含む。	良好	・青灰色 ・青灰褐色 ・青灰色	内外面に黑色、白色相。

上師器観察表

遺物番号	形態と調査	・口部 ・体部 ・底部 (脚部)	施土						備考
			石	粘土	骨	苔	チャート	水色	
49-16 蓋	口 径 16.0cm (ほぼ底形) 器 高 20.5cm (頂上復元) 11.1脚部は外輪する面を持つ。肩部は、頭部より約10度を成して張り出し、内側しながら平らな底底に下る。 ・外側 ヨコナヂ ・内面 ヨコハケ (6条/cm) のち、ヨコナヂ ・外側 タテハケ (6条/cm) ・内面 斜面による押捺およびヨコナヂ ・外側 タテハケ、ハケ (6条/cm) のちナヂ ・内面 斜面による押捺およびヨコナヂ	・青褐色 ・青灰褐色 ・青褐色	L L S 3	L L S 3	S S 3 3	S S 3 3	S S 0 1	S	体感外観に底の付着。

巨勢山421号墳 石室攪乱土 出土土器 (図52、図版47)

須恵器観察表

遺物番号	形態と調査	施土	焼成	外觀 色調 ・内面	備考	
52-1 杯身	口 径 14.1cm (残存3/4) 器 高 4.0cm 以下、杯身・杯身とも鳥居部のものと同型。 ・火炎部 外面 ヘラケズ (ロクロ回転方向右巻り) ・内面 ヨコナヂ ・体部 外面 ヨコナヂ ・底部 (脚部) 外面 ヨコナヂ ・内面 ヨコナヂ	口部 ・体部 ・底部 (脚部)	長径 3 mm の花崗岩 粒を含む。直径 1 mm の 長石、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰褐色 ・青灰色	外觀に白色相。

遺物番号 部	形態と調査 部	・口面部 ・体部 ・底部(脚部)	粘土	焼成	免焼 ・外側 ・内面	備考
52-2 杯蓋	口 径 14.0cm (残存1/3からの測定復元) 器 高 3.7cm	長径 3mmの石英含む、内径 1.5mmの石英、長石を含む。	灰灰	・灰青色 ・灰白色 ・灰青色		
52-3 杯蓋	口 径 13.9cm (残存1/2からの測定復元) 器 高 3.5cm	直径 1mmの長石、石英を含む。	良好		・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	火炎部に焼付跡有。
52-4 杯身	口 径 12.1cm (残存4/5) 器 高 3.9cm	長径 5mmの花崗岩 粒を含む。直径 1 mm~0.5mmの石英、 長石を含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に黑色帶。 内部に白色帶。 底部に黒移動 有。
52-5 杯身	口 径 12.8cm (残存2/3) 器 高 4.0cm	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	外側に白色帶。
52-6 杯身	口 径 12.4cm (完形) 器 高 4.1cm 周縁部の杯身 (図-2) と重ね比較	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	やや甘い		・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	1/4ほど生焼け で白灰色
52-7 杯身	口 径 11.8cm (残存2/3) 器 高 3.8cm	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外側に白色、緑 色帶。
52-8 高杯 脚部	底 径 14.2cm (残存1/3からの測定復元) 残存高 5.9cm やや外傾しながら下外方に下り、垂直に下る を持つ。底部は円い。スカレ不明。 ・欠損 ・欠損 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ	直径 0.5mmの石英、 長石をわずかに含 む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	内外側に黑色、 白色。
52-9 短瓶底	口 径 8.3cm (完形) 器 高 10.3cm 1/3部位は、外傾しながら下外方に下り、瓶部 は外傾する曲を持ち、やや圓い。肩部は、1/3部位 より約20度を成して着火性を有し、外傾しながら 丸い底部に下る。 ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ヨコナダ ・内面 ヘラケツリ (ヨコナダ側板方向を割り) ・内面 ヨコナダ	直徑 3mm以下の石 英、長石を含む。	良好		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	瓶部に青緑之本 のハラ記号。外 側に黑色帶。

土器器観察表

遺物番号 部	法 番 と 国 番 部	・口面部 ・体部 ・底部(脚部)	色調	粘 ・外側 ・内面	長 角 圓 石 月 片	上 チ ヤ ト ホ 色 板	備 考
52-10 把手	残存長 3.2cm (最大) 中央:		・赤褐色 ・褐青色	M S — — — —	M S S S S S	S S S S S S	
52-11 小皿	口 径 9.1cm (残存4/5) 器 高 1.6cm ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 指面による押付およびヨコナダ ・内面 ヨコナダ		・青褐色 ・黄褐色	M S — — — —	M S S S S S	S — — — — —	

巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器(図54~55、図版48~50)

上部器観察表

遺物番号 部品位置 出土場所	法器と調査 (上部器 ・底盤 ・底部)	・外側 色調 ・断面 ・内面	土					備考
			石 良 角 四 行 石	灰 灰 母 母 母 母	ナ マ ト ト ト ト	赤 色 色 色 色 色	その 他の 種類	
53-1 平底外 底 5	口 径 12.3cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 11.0cm 口縁部は、よく上外方に延び、縁部は、外側十 字面を持ち、円錐を施す部分が有り、やや裂け。 体部は、中央に人柱を持ち、内壁しながら平ら な底部に平ら。器底は秀い。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ナナメハケのちヨコハケ (いざれも H差 /cm) ・内面 ヨコナダ、ナダ ・外側 ナナメハケ (8巻/cm) ・内面 ヨコナダ、ナダ	・赤褐色 ・紫褐色 ・暗褐色	M S S	M S S	S 3 3	S 3 3	S 0 3	いかゆる輪式系 上部だが、筋上 からすれば船元 系とみられる。
53-2 切頂直 底 5	口 径 9.8cm (北形) 器 高 8.6cm 口縁部は、よく上外方に延び、丸い。体部は、 中央に人柱を持ち、内壁しながら丸い底部に至 る。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコハケ (7巻/cm) のちヨコナダ ・外側 タテハケ (7巻/cm) ・内面 ヨコナダ、ナダ ・外側 ハケ (7巻/cm) ・内面 ヨコナダ、ナダ	・赤褐色 ・紫褐色 ・暗褐色	M S S	M S S	S 3 3	S 3 3	S 0 3	外側に黒帯。 地元盛の船元。

須忠器観察表

遺物番号 部品位置 出土場所	形態と調査 (上部器 ・底盤 ・底部)	・外側 色調 ・断面 ・内面	土		備考
			石	灰	
54-1 腹追垂 上縁部 421号墳北 底出上	口 径 11.2cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 4.1cm 口縁部は、よく上外方に延び、縁部は丸い。周 縁部は、口底より約90度を成して大きく張り出 す。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・欠損	直径0.5mmの黄白色 有黄金合む。	良好	・青灰色 ・紫灰色 ・青紫色	
54-2 底上縁 上縁部 421号墳北 底出上	口 径 10.0cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 5.6cm 口縁部は、やや外脛しつつ外方に延び、縁部 付近で垂直の面を持ち、円錐を施し、縁部は丸い。 ・外面 ヨコナダ、小口に2条の突起。その上下 に12巻を単量とする波状文 (11巻/cm) を施す。 ・内面 ヨコナダ ・欠損 ・欠損	直径0.5mmの黄白色 有黄金合む。	良好	・灰青色 ・紫青色 ・灰青色	外側に黑色帶。
54-3 器台 上縁部 421号墳北 底出上	口 径 35.0cm (残存1/12からの回転復元) 残存高 11.4cm (回転復元) 口縁部は、外脛しつつ上外方に延び、縁部付近 で垂直の面を持ち、円錐を施し、縁部は丸い。口 縁下25cmの突起は高く無い。上縁下8~10cm附近 にも2条を単量とするやや低く、深い突起を入れ る。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外側 実腹開 波状文 (8巻/cm) を下から上突 起下 相組文 (8巻を半段、8巻/cm) ・内面 ヨコナダ ・欠損	直径0.5mmの長石、 をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・紫灰色 ・青灰色	外側に黑色帶。 内側に白色、薄 緑色帶。(と同一 個体)

遺物番号	形態と調査	粘土	焼成	外観 色調・新規 ・内肉	備考
54-1 器台 脚部 421号埴北 旧表土	<p>肩部径 35.8cm (残存1/4からの測軸復元) 残存高 35.9cm (地上復元)</p> <p>器部中央に2条を単位とする細い突起を3列、底部近くに1条の突起を入れ、外輪の角度を差し、底面は丸い。その間、上から6方、8方、10方、12方に方形のスカシを波状文のうちに重つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欠損 ・欠損 ・外觀 波状文 (8条を単位、8条/cm) ・内面 ヨコナダ 	直径0.5mmの石英、長石をわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・灰青色 ・灰青色 ・灰青色 	杯部底面に深緑色斑。外面に白色、緑色斑。3と同・側作。
54-5 器台 口縁部・脚部接合部 421号埴北 旧表土	<p>11 缶 30.1cm (残存1/8からの測軸復元) 残存高 15.0cm (地上復元)</p> <p>口縁部は、外縁はしつつ上外方に延び、端部付近で垂直の面を持ち、底部は丸い。口縁下 5~7cm 付近に2条を単位とする、高く無い突起 (10条突起) を入れる。脚部は、折詰と約10度を成してやや外張しながら下外方に引く。腰帶に突起2条 (底座突起) を出す。6方スカシ。 <ul style="list-style-type: none"> ・外觀 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外觀 1/4下奥縁～中段左縁側面 波状文 (8条/cm) ・中段右縁～底座突起側面 上： 織紋文 (8条を単位、8条/cm) 下： 波状文 (4条を単位、8条/cm) ・内面 ヨコナダ ・外觀 波状文 (8条を単位、8条/cm)、のち 方形8方スカシ ・内面 ヨコナダ </p>	直径0.5mmの長石をわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・青灰色 ・紫灰色 ・青灰色 	外面に黑色斑。杯部内面・底部に白色斑、底面に深緑色斑。
55-6 甕 脚部 421号埴北 旧表土	<p>頭部径 37.5cm (残存1/7からの測軸復元) 残存高 10.1cm</p> <p>頭部は、底部より約90度を成して張り出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外觀 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外觀 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・欠損 	直径0.5mmの長石をわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・青灰色 ・紫灰色 ・青灰色 	頭部外周に黑色斑、底部内面に白色斑。
55-7 甕 421号埴北 旧表土	<p>底部径 9.2cm (この部分のみ復元復元) 残存高 18.6cm</p> <p>底座焼成後穿孔 (直径9.2cmの孔は平凹)。平らな底部。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欠損 ・外觀 平行タキ (原体幅2.3cm、5条/cm) ・内面 スリケン ・外觀 平凸タキ。のち、スリケン ・内面 スリケン 	直径0.5mmの長石、長石をわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・灰青色 ・紫灰色 ・灰青色 	体部外周に黑色斑、底部内面に白色斑。
55-8 甕 421号埴北 旧表土	<p>底部径 12.9cm (残存1/3からの測軸復元) 残存高 34.1cm</p> <p>底部やや上方の側面を焼成後穿孔 (直径13.9cmの孔は平凹)。平らな底部。焼台付着。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欠損 ・外觀 スリケン ・内面 スリケン ・外觀 スリケン ・内面 スリケン 	直径0.5mmの石英、長石をわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・青灰色 ・紫灰色 ・青灰色 	外觀に黑色斑。内面に白色斑。

弥生土器観察表 (図58、図版54)

遺物番号 部 出上場所	法 器 と 調 整	・口頭部 ・体部 ・底部(脚部)	・外 面 色調 ・内面 色調	始				土				備 考
				右 美 石	左 石	角 石	四 石	右 母	左 母	チ ヤ ー ト	赤 色 板	
585 葉 口頭部 416号墳 須佐北墓 出土	口径不明 やや内側しつつ軽く立ち上がる。端部は丸く仕上げる。 ・外側 日コナゲ 内側 日コナゲ ・外側 ヨコナゲ 内側 ヨコナゲ		・赤褐色 灰黄色 黄褐色	M S 3	M S 3	S S 3	S 3	S 0	S 2		S	
586 脚付小形体 脚付 419号墳 須丘北墓 出土	残存高 32cm 挿入接合法の脚部。直立に早く下った後、大きくながる。 ・ ・外側 ヨコナゲ 内側 ヨコナゲ		・黄褐色 灰黑色 黄褐色	M S 3	M S 3	S S 3	S 3	S 2	S 2		S	
587 長財壺 須部・体部 418号墳 須作 流出土	須部径 9.2cm (残存1/3からの回転復元) 丸い唇部。 ・外側 タテハケ (7条/cm) 内側 片ナガのちヨコナゲ		・黒黄色 灰黑色 黒褐色	L S 3	L S 3	S S 3	S 3	S 3	S 3		S	外側に加風
588 豆 底部 419号墳 北斜面 流出土	底部径 10.4cm (残存1/3からの回転復元) 平らで広い底盤。 ・外側 タテハケ (7条/cm) 内側 片ナガのちヨコナゲ		・青灰色 灰黑色 黄褐色	L S 3	L S 3	S S 2	S 2	L 3	S 3		S	

歴史時代の土坑 出出土器観察表 (図62~72、図版62~64)

遺物番号 部 出上場所	法 器 と 調 整	・口頭部 ・体部 ・底部(脚部)	・外 面 色調 ・内面 色調	始				土				備 考
				右 美 石	左 石	角 石	四 石	右 母	左 母	チ ヤ ー ト	赤 色 板	
62-13 上坑1 土師器 小皿	口径 9.8cm (ほぼ完形) 高さ 1.5cm ・口頭部・体部 外側 ヨコナゲ 内側 日コナゲ ・外側 指面による押圧およびナゲ 内側 ナゲ		・黒褐色 灰褐色 黄褐色	S 3	S 3	S 3	S 3	S 3	S 0	S 2		
62-14 上坑1 土師器 小皿	口径 9.6cm (ほぼ完形) 高さ 1.8cm ・口頭部・体部 外側 ヨコナゲ 内側 日コナゲ ・外側 指面による押圧およびナゲ 内側 ヨコナゲ		・黒黄色 黒褐色 黄褐色	S 2	S 2	S 3	S 3	S 3	S 2	S 2		
62-15 土坑1 土師器 小皿	口径 10.2cm (ほぼ完形) 高さ 1.7cm ・口頭部・体部 外側 ヨコナゲ 内側 ヨコナゲ ・外側 指面による押圧およびナゲ 内側 ナゲ		・黄褐色 灰褐色 黄褐色	M S 3	M S 3	S S 3	S 3	S 3	S 2	S 1		
62-16 上坑3 須志器 瓶	口径 4.3cm 高さ 9.9cm (完形) 口頭部は外反して上方に軽く立ち上がり端部は丸い。肩部はほぼ半球位であり、底部は高台状だが全体で最も下る。底部を壓して切ろうとして失敗。体部では先端が見出。最終は糸切り削である。 ・口頭部・体部 ヨコナゲ ・底部 外側 須志切りのち糸切り 内側 ヨコナゲ		・青灰色 青灰色 青灰色									直径 2mm以下の石突、長石を若干含む。

通 物 番 号	機 器 名 称	上 部 寸 寸	法 量 と 固 形	・II頭部 ・体部 ・底盤(脚部)	色調 ・外側 ・断面 ・内面	地 土						備 考
						石	真 英	角 石	青 石	沙 母	赤 色	その 他
						英	石	角	青	沙	赤	其 他
64-3	上坑3 上部器 小皿		口 径 13.8cm (残存1/10からの回転復元) 残存高 15cm	・II頭部 ・体部 ・底盤(脚部)	・褐色 ・米黄色 ・米褐色	S	S	S	S	S	S	
64-4	上坑3 上部器 小皿		口 径 15.6cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 21cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・赤褐色 ・米褐色 ・赤褐色	S	S	S	S	S	S	
64-5	上坑3 上部器 小皿		口 径 16.0cm (残存1/10からの回転復元) 残存高 24cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・赤褐色 ・米褐色 ・米褐色	S	S	S	S	S	S	内面に斑状。
64-6	上坑3 上部器 小皿		口 径 15.4cm (残存1/10からの回転復元) 残存高 23cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S	S	S	S	M	S	
65-1	上坑4 上部器 長柄匙		口 径 20.6cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 25.5cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 タテハケ (7条/cm) を施す下から上、左 廻りに施す。 ・内面 指面による押圧およびナデ	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	M	M	S	S			口縁部と体部分 面に斑状。
S	S					3	3	3	3	0	0	
67-1	上坑5 上部器 小皿		口 径 14.3cm (完形) 器 高 23cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S	S	S	S			
67-2	上坑5 上部器 小皿		口 径 9.0cm (完形) 器 高 12cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S	S	S	S			
67-3	上坑5 上部器 小皿		口 径 14.8cm (残存3/4) 器 高 24cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M	M	S	S	S		
67-4	上坑5 上部器 小皿		口 径 9.0cm (残存1/4からの回転復元) 器 高 18cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 指面による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S	S	S	S	S	S	
67-5	上坑5 上部器 小皿		口 径 9.7cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 14cm	・II頭部 ・体部 外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 估測による押圧およびナデ ・内面 ナデ	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S	S	S	S	S	S	外間に擦付着。
						2	2	2	2	2	2	

遺物番号 分類 出土地	正規と調整	・口縁部 ・体部 ・底部(脚部)	色調 ・外側 ・裏面 ・内面	胎土					備考
				石 灰 灰 石	長 角 四 柱	雲 雲 雲	ナ ナ ナ	赤 色 色 彩	
67-6 土坑5 上脚器 小組	口 径 9.4cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 1.6cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	M S 3	M S 3	S S 3	S S 3	S S 0	
67-7 土坑5 上脚器 小組	口 径 9.5cm (残存1/4からの回転復元) 器 高 1.6cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	M S 2	M S 2	S S 3	S S 2	S S 2	外向底部に出現。
67-8 土坑5 上脚器 小組	口 径 9.4cm (残存1/7からの回転復元) 残存高 1.8cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S 3	S 3	S 3	S 0	S 2	外向底部に出現。
67-9 土坑5 上脚器 小組	口 径 9.5cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 1.8cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ナデ 内面 ナデ		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S 3	S 3	S 3	S 2	S 2	
68-1 土坑9 上脚器 裏	口 径 15.2cm (残存1/2からの回転復元) 器 高 1.6cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ (4条/cm) ・外側 タケナカ (6条/cm) を短版下から上、左 側方に施す。 内面 指頭による押圧、ヨコナデ ・外側 タケナカ (6条/cm)、ナデ 内面 指頭による押圧、ナデ		・黄褐色 ・黒褐色 ・黄褐色	L S 3	L S 3	S S 3	S 2	M S 3	体部外面に出現。
70-1 土坑13 乗車器 通	よく崩れるなる体部に丸い底面、肩部最大径付近 に1個の円形のカシを有し、下トドに沈緑。その間に 3~4条のくびれ状波状を施す。 ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		灰色 灰色 灰色			厚径 1mm以下の石突、長石を有 下含む。			本末は420分塊 に作られた物で あろう。外面に 白色、黒色等。
70-2 土坑13 上脚器 31號	口 径 28.2cm (残存1/9からの回転復元) ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		・黄褐色 ・灰褐色 ・黄褐色	L S 3	M S 3	S 2	S 0	S 2	
72-1 土坑14 上脚器 小組	口 径 9.4cm (残存1/2) 器 高 1.5cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S 3	S 3	S 3	S 3	S 3	
72-2 土坑14 上脚器 小組	口 径 9.4cm (完形) 器 高 1.4cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S 2	S 2	S 2	S 2	S 2	
72-3 土坑14 上脚器 小組	口 径 9.0cm (完形) 器 高 1.3cm ・口縁部・体部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S 3	S 3	S 3	S 3	S 3	

遺物番号 出土地点	法式と調整 ・L1断部 ・体部 ・底部(脚部)	色調 ・外側 ・断面 ・内面	胎 土					備考
			石	長 角 圓 石 英	青 白 灰 はく 石	赤 チヤ ート 色 紅	その 他	
72-4 土坑14 土師器 小瓶	L1 径 9.0cm (完形) 残高 1.3cm ・L1断部・体部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 指圧による押圧およびナゲ 内面 ナゲ	黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	LL S	LL S	S	S	S	
72-5 土坑14 土師器 小瓶	L1 径 9.0cm (完形) 残高 1.3cm ・L1断部・体部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 指圧による押圧およびナゲ 内面 ナゲ	黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S	M S	S	S	S	
72-6 土坑14 土師器 小瓶	L1 径 8.8cm (ほぼ完形) 残高 1.4cm ・L1断部・体部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 指圧による押圧およびナゲ 内面 ナゲ	黄褐色 ・海苔色 ・海苔色	M S	M S	S	S	S	
72-7 土坑14 土師器 小瓶	L1 径 8.8cm (残存1/2からの回転復元) 残高 1.3cm ・L1断部・体部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 指圧による押圧およびナゲ 内面 ナゲ	赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S	S	S	S	S	
72-8 土坑14 土師器 小瓶	L1 径 9.0cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 1.3cm ・L1断部・体部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 指圧による押圧およびナゲ 内面 ナゲ	黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S	S	S	S	S	
72-9 土坑14 土師器 小瓶	L1 径 8.8cm (残存1/2からの回転復元) 残存高 1.3cm ・L1断部・体部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・外面 指圧による押圧およびナゲ 内面 ナゲ	黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	S	S	S	S	S	

巨勢山374号墳 出出土器 (図78~80、図版74~76)

須恵器観察表

遺物番号 出土地点	形態と調整 ・L1断部 ・体部 ・底部(脚部)	胎 土	焼成	色調 ・外側 ・断面 ・内面	備考	
					直徑	色調 ・外側 ・断面 ・内面
78-1 杯 石室開口部 埴生土	口 径 14.8cm (残存1/9からの回転復元) 残存高 4.0cm 体部とL1断部の境に純い内面を有し、口縁部は、やや内側しつつ、底から半周もしくはそれに近い角度で下り、縁部付近でやや外反する。端部は内側する凹面を成し、やや鋭い。2. 3. 4と同類。 ・天井部 次相 ・体 部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・L1断部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ	直徑0.5mmの具石、 右英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
78-2 杯 石室復元土	口 径 17.1cm (残存1/5からの回転復元) 残存高 3.6cm ・天井部 久留 ・体 部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ ・L1断部 外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ	直徑1mmの長石、 右英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		

通 告 号	公 告 事 項	形 狀 と 質 量	・(頭部 ・体 部 ・口部(脚部)		成 分	外觀 ・表面 ・内面	備 考
			筋 上	板 成			
783 标番 石造地盤土	公 告 事 項	口 径 11.7cm (残存1/1からの回転復元) 残存高 4.2cm ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ロコナデ ・体 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径3mmの花崗岩 粒を含む。直径 0.5mmの石英、長石 を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
784 标番 石空開口部 堆積土	公 告 事 項	口 径 14.9cm (残存1/8からの回転復元) 残存高 3.3cm ・天井部 欠損 ・体 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径0.5mmの長石、 石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
785 标番 石空堆積土	公 告 事 項	11 � 径 14.9cm (残存2/3) 高 度 4.1cm 体部と口部部の境に、鋸い縫を入れる。端部は やや鋸い。6と同様。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ロコナデ ・体 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径2mm以下の長 石、石英を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
786 标番 石空堆積土	公 告 事 項	口 径 14.0cm (残存1/6からの回転復元) 残存高 2.9cm ・天井部 欠損 ・袋 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径0.5mmの長石、 石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
787 标番 石空堆積土	公 告 事 項	口 径 13.2cm (残存1/3) 高 度 3.7cm 体部と口部部の境に、退化した凹縫を入れる。 口部端部はやや鋸い。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ロコナデ ・体 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径3mmの花崗岩 粒を含む。直径1 mmの長石、石英を 含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
788 标番 石空堆積土	公 告 事 項	口 径 13.4cm (残存1/3からの回転復元) 高 度 3.3cm 体部と口部部の境に鋸い縫を入れる。口部部は端 部が直線になる。端部はややえぐい。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ロコナデ ・体 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径3mmの花崗岩 粒を含む。直径1 mmの長石、石英を 含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
789 标番 石空堆積土	公 告 事 項	口 径 14.0cm (残存1/9からの回転復元) 残存高 2.6cm 体部と口部部の境が黒。端部は丸い。10と同 様。 ・天井部 外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右 廻り) 内面 ロコナデ ・体 部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ ・口部部 外面 ロコナデ 内面 ロコナデ	直径1mmの長石、 石英を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		

物 品 名	分類 出上場所	形 異 と 調 査	治 土	焼 成	色 調	外 壤 ・断面 ・内面	備 考
78-10 杯身 石炭混乱土		口 径 132mm (残存1/4からの回転復元) 残存高 28cm ・外縁部 欠損 ・体 部 例示 ・底 部 内面 ヨコナデ ・口縁部 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径 1mm以下の長 石、石英を含む。	良好	・青灰色 ・古灰色 ・青灰色		
78-11 杯身 石炭開口部堆積土		口 径 125mm (残存1/6からの回転復元) 残存高 42cm 口縁部はやや外側気味に上方にしがり、腹部 は、わずかに内側する凹面を含む。受部は上方外 方に及び、端部はやや低い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
78-12 杯身 石炭開口部堆積土		口 径 155mm (残存1/3からの回転復元) 残存高 38cm 口縁部は、上方には比較的的に立ち上がる。 腹部はやや丸い。13, 14, 15, 16, 17と回転。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・灰青色 ・灰青色		
78-13 杯身 石炭開口部 堆積土		口 径 145mm (残存1/9からの回転復元) 残存高 43cm ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		
78-14 杯身 石炭混乱土		口 径 142mm (残存1/1からの回転復元) 残存高 38cm ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・古灰色 ・青灰色	体外由山に黑色 斑。	
78-15 杯身 石炭混乱土		口 径 146mm (残存1/7からの回転復元) 残存高 44cm ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
78-16 杯身 石炭混乱土		口 径 134mm (残存1/7からの回転復元) 残存高 27cm ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色		
78-17 杯身 石炭混乱土		受部径 148mm (残存1/12からの回転復元) 残存高 28cm ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外縁 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含 む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色		

登 場 物 名 及 び 分 類 場 所	形 態 と 調 査 ・(1)頭部 ・体部 ・足部 ・表皮(脚部)	筋 上	被 成	外 面 ・色 調 ・所 在 ・内 面	備 考
				直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	
78-18 杯身 右笠壇上	口 径 12.8cm (受部残存1/3からの回転復元) 器 高 3.6cm 口縁部は上方向に上がり、中段からほぼ垂直に立ちあがる。縁部は、やや丸い。19, 20, 21, 22と同類。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ		良好	・青灰褐色 ・灰褐色 ・青灰褐色	外面に白色釉。 底部に×のヘラ記号。
78-19 杯身 右笠壇上	口 径 12.6cm (受部残存1/3からの回転復元) 器 高 3.6cm 18と同類だが、受部は、立ち上がりとの境を四面で直し、やや厚く、丸い。20, 21, 22と同類。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
78-20 杯身 右笠壇上	口 径 11.8cm (受部残存1/3からの回転復元) 器 高 3.6cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰褐色 ・青灰褐色	
78-21 杯身 右笠壇上	口 径 13.4cm (残存1/4からの回転復元) 器 高 3.7cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナダ	直 径 3mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
78-22 杯身 右笠壇上	口 径 14.0cm (残存1/15からの回転復元) 器 高 1.8cm ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・欠損	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰褐色 ・青灰褐色	
79-23 盃杯 杯部 右笠壇口部 堆積土	口 径 13.8cm (文様部残存1/3からの回転復元) 残存高 4.9cm 1縁部は、外傾して立ち上がり、縁部はやや丸い。体部の壁に長い尖突を有して外傾度を失して下り、底部との境に同様と尖突を施す。底部内面は平ら。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 体部 液状灰 (10条を単位。11条/cm) 底部 ヘラケズリ、のち、ナダ 内面 ヨコナダ ・欠損	直 径 0.5mmの石英、 長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	口縁部外側に黑色帶。
79-24 盃杯 杯部 右笠壇上	口 径 10.8cm (残存1/3からの回転復元) 器 高 3.8cm 1縁部は、やや内傾して上方に延び、縁部付近でやや外反する。縁部はやや丸い。底部は丸い。 ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・外面 ヨコナダ ・内面 ヨコナダ ・欠損	直 径 2mm以下の石 英、長石を含む。	良好	・青灰褐色 ・青灰褐色 ・青灰褐色	

標本番号	名前	形態と両葉	胎土	焼成	外向 色調 ・所産 ・内面	備考
出土地		・口部 ・体部 ・足部(脚部)				
79-25 高杯 杯部・脚部 石室櫻乱土		残存高 7.1cm 杯部より、脚部は約110度を成して垂直に下る。 長方形 3方スカシ。 ・欠損 ・外面 ヘラケズリ、のち、ナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
79-26 高杯 杯部・脚部 石室櫻乱土 堆積上		口 径 13.6cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 9.3cm 口部は、上内方に外縫しつつ立ち上がり、周 部はやや丸い。受部はややく外方に延び、端部は やや丸い。底面より、脚部は約120度を成して、垂 直に下る。長方形 3方スカシ。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直 径 3mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	脚部外面に黑色 帯。
79-27 高杯 脚部 石室櫻乱土		脚部径 12.7cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 4.8cm 脚部は、外縫しつつ外方へ下り、端部付近で 突縮を入れ、頂点に下って間に凹部を入れる。端 部は丸い。長方形 3方スカシで、下端に凹部を入 れる。 ・欠損 ・外縫 ・内面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直径0.5mmの石英、 長石を若干含む。	良好	・灰色 ・灰色 ・灰色	
79-28 高杯 脚部 石室櫻乱土		脚部径 14.6cm (残存1/4からの回転復元) 残存高 3.4cm 脚部は、外縫しつつ外方へ下り、端部付近で 突縮を入れる。端部は丸い。長方形 3方スカシで、 直下に2箇の鋭い凹部を入れる。29、30と同型。 ・欠損 ・外縫 ・内面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外表面部附近に 黑色帶。
79-29 高杯 脚部 石室櫻乱土 堆積上		脚部径 14.0cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 5.8cm ・欠損 ・外縫 ・内面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直径0.5mmの石英、 長石を若干含む。		・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
79-30 高杯 脚部 石室櫻乱土		脚部径 13.1cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 7.3cm ・欠損 ・外縫 ・内面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直径0.5mmの石英、 長石を若干含む。		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
79-31 高杯 脚部 石室櫻乱土		脚部径 16.0cm (残存1/3からの回転復元) 残存高 9.1cm ・欠損 ・外縫 ・内面 ヨコナデ。スカシ直下の鋭い凹部は1 箇。 ・内面 ヨコナデ	直径0.5mmの石英、 長石を若干含む。		・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
79-32 高台 脚部 石室櫻乱土		口 径 28.0cm (残存1/6からの回転復元) 残存高 8.2cm 杯部は内縫しつつ、上外方に延びる。端部付近 で突縮させ、下端に凹部を入れ。端部は丸い。 ・外縫 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外縫 体部 ヨコナデ、のち、剥皮文。中位に 浅い凹部。 ・内面 平行タタキ、のち、カキメ (5 溼/cm) ・外縫 ヨコナデ、同心円タタキ ・内面 ヨコナデ ・外縫 ヨコナデ	直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外向に黑色帶。 器口1/3部は別 に1脚作有り。

物 品 名	發 現 地	形 態 と 調 整	・口端部 ・体 部 ・底部(脚部)	胎 土	燒 成	外觀 ・斷面 ・内面	備 考
79-33 器 物 脚部 石空搅乱土		脚部径: 27.5cm (残存1/7からの回転復元) 残存高: 9.4cm 脚部は、やや内凹しつつコド特方に下る。端部は半面を成し、丸い。スカシは三角形だが、数は不明。芦下に2条の凹縫を入れる。 ・欠損 ・欠損 ・外側 カキメ (6条/cm) のち、ヨコナデ。スカシと同様に割突式。 ・内面 ヨコナデ		直 径 3mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	外面上に黑色物、記と同一物か?
79-34 器 物 脚部 石空搅乱土		脚部径: 9.1cm (残存1/4からの回転復元) 残存高: 4.8cm 脚部は、走面に下った後、本体に張り出し、直下に凹縫を入れて、のち、下外方に開く。端部はやや丸い。長方形よりスカシだが、スカシの幅が狭い。 ・欠損 ・欠損 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色	内外面上に黑色物。
79-35 器 物 脚部 石空搅乱土		底部径: 25.0cm (残存1/6からの回転復元) 残存高: 12.1cm 上縁部は、外側しつつ強く向外方に延び、外側する面を持ち、下縁に凹縫を入れる。端部は丸い。 ・外側 日コナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損 ・欠損		直 径 1mm~0.5mm の石英、長石を含む。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	
80-36 長筒型 (四耳型?) 口端部		口 径 8.8cm (残存1/3からの回転復元) 残存高: 7.1cm 脚部は、外側しつつ上向外方に延び、端部を上下に突出させて下する口縫を形成し、太い凹縫を入れる。端部は丸い。 ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損		直径0.5mmの石英、 長石をわずかに含む。精良。	良好	・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	外面上に黑色物。

瓦器・土師器観察表

物 品 名	發 現 地	形 態 と 調 整	・口端部 ・体 部 ・底部(脚部)	色調	胎 土	外觀 ・断面 ・内面	備 考
				石 英 美	長 角 石 母	雲 母 石 英 石 母	赤 色 鉱 物 の 他
80-37 瓦器 脚 石空搅乱土		高台径: 32.0cm (残存1/3からの回転復元) 残存高: 2.3cm ・外側 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ成形のち極し、密な平行暗文 (幅1.5~1mm) ・外側 ヨコナデ、高さ3mmの低い斜面 (角部の高台を含む)。 ・内面 ヨコナデ成形のち極し、逆斜線状暗文 (幅1mm)		・黒灰色 ・灰青色 ・黑色	S S S S S S	S S	
80-38 瓦器 脚 石空搅乱土		口 径 11.6cm (残存1/9からの回転復元) 残存高: 2.6cm ・外側 斜面による押付およびナテ ・内面 密な平行暗文 (幅1mm) ・欠損		・黒灰色 ・灰白色 ・黑色	0 0 0 0 0 0		
80-39 土師器 羽器 石空搅乱土		口 径 36.2cm 残存高: 9.7cm ・外側 ヨコナデ ・内面 ナゲ、捺痕による押付 ・欠損		・黄褐色 ・灰黑色 ・黄褐色	M M S S S	S	内外面上に黑色物。

地 物 名 分 類 別 地 質 場 所	法 基 と 開 拓 ・ 体 部 ・ 底 部 (脚部)	色 調 ・ 外 面 ・ 底 部 ・ 内 面	地 七 色 石 長 角 青 四 石 肉 舟 青 色 赤 色 セ マ ト 赤 色 其 他 其 他						備 考	
			石	長	角	青	四	石	土	
			英	石	肉	舟	舟	青	セ	
80-40 土師器 小皿 右空模様上	11. 残 残存高 1.5cm ・外側 ココナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	13.5cm (残存1/6からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	S S S S	S				S		
80-41 土師器 小皿	11. 残 残存高 1.5cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	13.4cm (残存1/9からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S M	S				S		
80-42 土師器 小皿	11. 残 残存高 1.6cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	14.0cm (残存1/11からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S S	S				S		
80-43 土師器 小皿	11. 残 残存高 3.9cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	15.6cm (残存1/3からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S S	S				S		
80-44 土師器 小皿	11. 残 残存高 2.3cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	14.8cm (残存1/8からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S S	S				S		
80-45 土師器 小皿	11. 残 残存高 1.9cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	11.5cm (残存1/10からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S S	S				S		
80-46 土師器 小皿	11. 残 残存高 1.7cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	13.2cm (残存1/10からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S S	S				S		
80-47 土師器 小皿	11. 残 残存高 1.5cm ・外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外側 指頭による押圧およびナデ 内面 ナデ	11.2cm (残存1/10からの回転復元) ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	M M S S	S				S		

巨勢山449号墳 墓輪観察表 (図89、図版83)

地 物 名 分 類 別 地 質 場 所	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調 ・ 外 面 ・ 底 部 ・ 内 面	地 七 色 石 長 角 青 四 石 肉 舟 青 色 赤 色 セ マ ト 赤 色 其 他 其 他						備 考
				石	長	角	青	四	石	
				英	石	肉	舟	舟	青	
89-1 形状? 小位 面斜面突出上	上部に突堤剥離痕。ヘラ跡で細曲を表現する。壁底合い。	ヨコナデ	ナデ	L S S S	1 1	S	S	S	M	
				S S	S S				S	
				3 3	2 2	3 3	0 0	2 2		

遺物番号 器種 出土地所	外表面	内面	色調 ・外面 ・内面	胎上						備考
				石	長	角	雪	ナイト	赤	
89-2 取形? 縫跡底部? 西斜面出土	塗りの良い平滑な基底からやや外方に立ち上がる。	タテハケ (13条を半段。10条/cm)	ナゲ	・赤褐色 ・灰黑色 ・赤褐色	M S 3	M S 3	S 3	S 3	S 0	底部に斑斑。
89-3 家形 縫跡軒先横押縫 軒体部底面	横押縫の上辺の幅40cmで、かなり大形のもの。高さ約0.4m。	ナゲ	ナゲ	・本褐色 ・灰黑色 ・赤褐色	M M 3	M S 3	S 3	S 0	M 3	角度は推定。
89-4 家形? 縫跡軒先横押縫 西斜面底面	ナゲ	ナゲ		・赤褐色 ・灰黑色 ・赤褐色	M M 3	M S 3	S 3	S 0	M 0	角度は推定。
89-5 家形? 縫跡軒先横押縫? 西斜面底面	タテハケ (10条/cm) のちナゲ	剥離のため不詳。		・赤褐色 ・灰黑色 ・(剥離)	M S 3	M S 3	S 3	S 0	M S 0	角度は推定。
89-6 不明形態 南斜面底面	ナゲ	ナゲ		・黄褐色 ・灰黑色 ・黄褐色	M M 3	M S 3	S 3	S 0	M S 3	

北地区(430地点含む) 出土土器 (図96~97、図版87~89)

地輪観察表

国-遺物番号 器種 出土地所	法 算	タガ の 形態	外表面	内面調査	胎上						備考
					色調 ・外面 ・内面	石	長	角	雪	ナイト	
96-1 例題 北地区 佐賀県	タガ底 327cm	2b	・体部 タテハケ (6条/cm) ・タガ ヨコナゲ	ヨコナゲ	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	M 1 3	M 1 3	S 2	S 3	S 1	S 1

須恵器観察表

國-遺物番号 器種 出土地所	形態と構造 ・外 ・内	口部 ・外 ・内	胎土構成 ・外 ・内	色調 ・外面 ・内面	胎上						備考
					石	長	角	雪	ナイト	赤	
97-6 杯身 北地区 土坑2	口径 12.8cm (残存1/3からの回転復元) 器高 4.0cm たちあひは、板く内傾し、端部はやや丸い。受け部はほぼ水平に延び、底部はやや丸い。 ・外 ・内 ・外 ・内 ・外 ・内	ヨコナゲ ヨコナゲ ヨコナゲ ヨコナゲ -	直径1cm以下の長石、石英を若干含む。	良好						・灰青色 ・灰青色 ・灰青色	

中世土器観察表

国・造物・身サ 都・上場所	口部	頸部外輪	頸部内面	底部	高台	色調	備考
96-2 北地区 包含層	A11 A1 ヨコナデ 29.8cm	ヨコナデ 残存6.9cm	ヨコナデ			・外面 ・断面 ・内面	外面に焼付有 残存1/3
96-3 北地区 包含層	A11 B1 ヨコナデ 29.2cm	ヨコナデ 残存9.6cm	ヨコナデ			・街灰色 ・黒灰色 ・褐色	外面に焼付有 残存1/3
96-4 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 15.0cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 5.6cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 5.0cm	瓶底部A 同心円 3輪	高台C 4.7cm 0.5cm	内黒	残存1/3
96-5 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 13.6cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 4.2cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 3.6cm	瓶底部B 同心円 3輪	高台C 4.6cm 0.3cm	内黒	残存1/3
96-6 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 13.5cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 4.3cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 5.0cm	瓶底部A 同心円 3輪	高台C 5.7cm 0.4cm	内黒	残存1/2 (窓部分)
96-7 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 14.6cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 5.0cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 4.5cm	瓶底部A 同心円 3輪	高台C 5.6cm 0.5cm	内白	残存1/2
96-8 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 14.2cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 5.6cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 4.5cm	瓶底部A 同心円 2輪	高台C 5.0cm 0.5cm	内黒A	残存1/2
96-9 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 14.3cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 5.2cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 4.8cm	瓶底部B 同心円 4輪	高台C 5.7cm 0.4cm	内黒	残存1/2
96-10 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 D ヨコナデ 14.0cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 5.0cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 4.4cm	瓶底部B 同心円 4輪	高台C 4.2cm 0.4cm	内黒	残存1/3
96-11 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 D ヨコナデ 14.2cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ 4.4cm	ヨコナデ→ ヨコナデ→ ミガキ B 4.1cm	瓶底部B 同心円 4輪	高台D 4.4cm 0.3cm	内黒A	残存1/3
96-12 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 8.8cm	ヨコナデ→ ヨコナデ 1.6cm	ヨコナデ 1.4cm	瓶底部A 平行線		黒褐色	残存1/2
96-13 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 9.3cm	ヨコナデ→ ヨコナデ 1.5cm	ヨコナデ 1.2cm	瓶底部A 平行線		黒褐色	残存1/2
96-14 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 9.4cm	ヨコナデ→ ヨコナデ 1.2cm	ヨコナデ 1.2cm	瓶底部A 平行線		黒褐色	完形
96-15 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 8.8cm	ヨコナデ→ ヨコナデ 1.2cm	ヨコナデ 1.1cm	瓶底部A 平行線		黒褐色	完形
96-16 瓦器輪 北地区 包含層	陶口縁 B ヨコナデ 8.6cm	ヨコナデ→ ヨコナデ 1.2cm	ヨコナデ 1.2cm	瓶底部A 平行線		黒褐色	残存1/2

国-道 物 品 分 類 器 出 土 場 所	口 横 部	頭部外面	側面内面	底 部	高 台	色 異	備 考
	形態 調整 調整 工具	調整 器具	調整 見込み高	形態 暗文	形態 注 高	・外面 ・前面 ・内面	
96-17 上部盤B 北地区 包含層	頭口棒 Ⅱ ヨコナデ 14.0cm	指圧→ ヨコナデ 2.4cm	ヨコナデ 2.0cm	底底部A		淡赤褐色	残存1/2
96-18 上部盤B 北地区 包含層	頭口棒 Ⅱ ヨコナデ 12.2cm	指圧→ ヨコナデ 2.2cm	ヨコナデ 1.9cm	底底部A		淡赤褐色	残存1/2
96-19 上部盤B 北地区 包含層	頭口棒 Ⅱ ヨコナデ 11.2cm	指圧→ ヨコナデ 2.3cm	ヨコナデ 1.9cm	底底部A		淡赤褐色	残存1/2
96-20 上部盤B 北地区 包含層	頭口棒 Ⅱ ヨコナデ 10.0cm	指圧→ ヨコナデ 1.2cm	ヨコナデ 0.7cm	底底部A		淡褐色	残存1/2
96-21 上部盤A 北地区 包含層	頭口棒 Ⅰ ヨコナデ 9.6cm	指圧→ ヨコナデ 1.5cm	ヨコナデ 1.0cm	底底部A		淡褐色	残存1/2
96-22 上部盤B 北地区 包含層	頭口棒 Ⅰ ヨコナデ 9.8cm	指圧→ ヨコナデ 2.0cm	ヨコナデ 1.6cm	底底部A 側面斜切り		明褐色	完形
97-1 土釜 北地区 土坑 1	広口 B 1 ヨコナデ 28.0cm	ヨコナデ	ヨコナデ			・青褐色 ・墨灰色 ・黄褐色	2次焼成 残存1/5
97-2 瓦器皿 北地区 土坑 1	瓶口棒 B ヨコナデ 14.0cm	手圧→ ヨコナデ 1ガキ	ヨコナデ 1ガキ B		内壁 A		残存1/4
97-3 瓦器皿 北地区 土坑 1				底底部A 内凹孔 3編	高台 C 4.6cm 0.5cm	黑色	残存1/2 (高台部分)
97-4 瓦器皿 北地区 土坑 1	瓶口棒 Ⅱ ヨコナデ 9.6cm	指圧→ ヨコナデ 1.5cm	ヨコナデ 1.2cm	底底部A 平行線		黑褐色	残存1/5
97-5 上部盤B 北地区 土坑 1	頭口棒 Ⅱ ヨコナデ 9.6cm	指圧→ ヨコナデ 1.6cm	ヨコナデ 1.1cm	底底部B		明褐色	残存1/2
97-7 広口 B 1 ヨコナデ 18.4cm						・明褐色 ・灰褐色 ・明褐色	外面に鉛付着 残存1/10
97-8 瓦器皿 北地区 土坑 2	瓶口棒 B ヨコナデ 11.6cm	手圧→ ヨコナデ 1ガキ B	ヨコナデ 1ガキ B		内壁 A		残存1/3
97-9 瓦器皿 北地区 土坑 2	頭口棒 Ⅱ ヨコナデ 10.2cm	指圧→ ヨコナデ 1.9cm	ヨコナデ 1.5cm	底底部A 平行線		黑褐色	残存1/2
97-10 土器皿B 北地区 土坑 2	瓶口棒 Ⅱ ヨコナデ 9.4cm	指圧→ ヨコナデ 1.1cm	ヨコナデ 0.5cm	底底部B		明褐色	残存1/2

同-遺物番号 器 出 手 場 所	口 部 部	制御外 形 調査 観察 計測	制御内 部 調査 見込み高	底 部 形態 底文	高 台 形態 柱 高	色 調 ・外周 ・断面 ・内部	考 察	
							明褐色	残存1/2
97-11 土器皿B 瓦器 北地区 P 5	直口縁 II ヨコナデ 8.4cm	指圧→ ヨコナデ 1.3cm	ヨコナデ 1.0cm	周底部A			明褐色	残存1/2
97-12 瓦器 瓦器 北地区 P 5				輪底部B 同心円 3輪以上	高台D 5.2cm 6cm	肉桂	残存1/4 (高台部分)	
97-13 土器皿B 北地区 P 5	直口縁 II ヨコナデ 12.2cm	指圧→ ヨコナデ 2.0cm	ヨコナデ 1.6cm	底底部A			明褐色	残存1/2
97-14 土器皿B 北地区 P 5	直口縁 II ヨコナデ 9.8cm	指圧→ ヨコナデ 1.2cm	ヨコナデ 0.8cm	底底部A			褐色	残存1/4
97-15 土器皿B 北地区 P 5	直口縁 II ヨコナデ 8.4cm	指圧→ ヨコナデ 1.3cm	ヨコナデ 1.0cm	底底部A			明褐色	残存1/4
97-16 土器皿B 北地区 P 5	直口縁 II ヨコナデ 7.0cm	指圧→ ヨコナデ 1.3cm	ヨコナデ 1.0cm	底底部A			明褐色	残存1/4
97-17 土器皿B 北地区 P 5	直口縁 II ヨコナデ 9.0cm	指圧→ ヨコナデ 1.4cm	ヨコナデ 1.0cm	底底部A			ダイダイ色	残存1/4
97-18 瓦器 北地区 P 22				輪底部A 同心円		陶黒	残存1/2 (高台部分)	
97-19 土器皿B 北地区 P 31	直口縁 II ヨコナデ 9.2cm	指圧→ ヨコナデ 1.4cm	ヨコナデ 0.9cm	底底部B			明褐色	残存1/4
97-20 土器皿B 北地区 P 31	直口縁 II ヨコナデ 9.2cm	指圧→ ヨコナデ 1.2cm	ヨコナデ 0.9cm	底底部A			明褐色	残存1/4
97-21 土器皿B 北地区 P 33	直口 B 1 ヨコナデ 27.6cm	ヨコナデ	ヨコナデ				・褐黄色 ・黒灰色 ・褐黄色	外面上部付表 残存1/3
97-22 瓦器 北地区 P 33	直口縁 II ヨコナデ 15.6cm	掌圧→ ヨコナデ→ ヨコナデ	ヨコナデ→ ヨコナデ 1.1cm				陶黒	残存1/4
97-23 瓦器 北地区 P 43	直口縁 II ヨコナデ 9.4cm	指圧→ ヨコナデ 1.8cm	ヨコナデ 1.3cm				明褐色	残存1/4
97-24 土器皿B 北地区 P 43	直口縁 II ヨコナデ 9.8cm	指圧→ ヨコナデ 1.7cm	ヨコナデ 1.2cm	底底部A			明褐色	残存1/3

参照・引用文献

- 秋山日出男・鶴千尋教1959 「豊大墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊
- 東浦1963 「轟山遺跡第2次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1961年度』
- 鶴千尋教1960 「小殿古墳」『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第3集
1961a 「御所市小殿第2号墳」『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第4集
1961b 「吐田古墳群」『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第4集
1963 「鷹都遺跡」『御所市史』
1965 「難子塚古墳」『御所市史』
- 尼子奈美枝・橋出川之1987 「第3章 口勢山古墳群」『奈良県御所市巨勢山古墳群Ⅱ』(藤田編1987)
- 天野喜来1989 「岡古墳-古市古墳群の調査研究報告」『(藤井寺市文化財報告)』第3集
- 泉森政・河上邦彦1971 「宮大墓古墳前方部北張出部の調査」『青陵』第18号、櫻原考古学研究所
- ・瀬和夫1992ほか 「古市古墳群における埴輪群の変遷」『充班』
- 伊藤勇輔1977 「鷹都波道跡-調査報告」『御所市教育委員会』
- 1979 「鷹都波道跡発掘調査概報(店立御所高等学校内)」『奈良県追跡調査概報1978年度』
- 1980 「寺山和田古墳群発掘調査概報」『奈良県追跡調査概報1979年度』
- 1981 「寺山和田古墳群第2次発掘調査概報」『奈良県追跡調査概報1980年度』
- 1985 「御所市王子 手子跡発掘調査概報」『奈良県追跡調査概報1984年度』
- 伊藤雅文・千賀久1988 「H-36号地『寺口忍海古墳群』」(吉村・千賀編1988)
- 入倉裕徳1990 「御所市「弓馬井6・7号墳」発掘調査概報」『奈良県追跡調査概報1989年度(第2分冊)』
- 上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一1962 「人和二塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21集
- 上田謙1997 「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古希記念論文集』
- 宇野博夫1984 「後半期の埴輪器」『史林』第67卷第6号
- 鬼田博1976 「石光山1号墳」『幕城石光山古墳群』(白石・河上編1976)
- 河上邦彦1988 「H-22号地『寺口忍海古墳群』」(吉村・千賀編1988)
- 川安宏1978 「円筒埴輪器論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 木下洋1990 「奈良県御所市室 中西遺跡第2次発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第9集
1991 「奈良県御所市室 中西遺跡第3次発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第10集
1992a 「奈良県御所市鷹都波1次発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第11集
1992b 「奈良県御所市前原 旗上羅子塚古墳第2次発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第14集
1995 「奈良県御所市名柄遺跡第4次発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第19集
1996 「宮山古墳の埴元とその系譜の位置」『櫻原考古学研究所紀要』考古学論叢 第20集
1998 「口勢山407・408号地「人和を織る」16(櫻原考古学研究所附属博物館)
- 木許守・鶴田和尊1986 「奈良県御所市 室宮山古墳群発掘調査報告」『御所市文化財調査報告書』第20集
- 木許守・鶴田和尊編2002 「口勢山古墳群。巨勢山74・75号墳の調査-」『御所市文化財調査報告書』第26集
- 橋本竹介1978 「御所市 狩上雄子冢古墳前方部同様発掘調査概報」『奈良県追跡調査概報1977年度』
- 久野邦雄・中井一夫1974 「人和 巨勢山古墳群(猪谷支隊)」(奈良県教育委員会)
- 御所市教委1987 「I.業面地開発に伴う巨勢山古墳群第1次、第2、第3次発掘調査現地説明会資料」
1990 「ゴルフ場開発事業に伴う第1回口勢山古墳群発掘成果の現地説明会資料」
1991 「ゴルフ場開発事業に伴う第2回巨勢山古墳群発掘成果の現地説明会資料」
- 高木・1938 「牛往形石製品の新例」『考古学雑誌』第28巻第6号
- 白石耕助1992 「陶邑古墳跡群・谷山池地区の調査-」(相模丘陵内遺跡発掘調査報告書)、
- 白石太一郎・河上邦彦編1976 「鳥城・石光山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊
- 各谷文樹1975 「新庄佐敷山古墳」、奈良県教育委員会
- 関川尚功1987 「猪吹古墳群現地説明会資料」
1989 「御所市 室大志古墳外堀」『奈良県追跡調査概報1988年度』
- 竹田政敏1988 「H-16号墳『寺口忍海古墳』」(吉村・千賀編1988)
- 岡中一義1984a 「御所市 巨勢山古墳群タケモチ子支那発掘調査概報」『奈良県追跡調査概報1983年度』
1984 b 「御所市 巨勢山古墳群調査概要」『奈良県追跡調査概報1983年度』
- 田辯昭一1966 「陶邑古墳跡群」『平安学園研究論集』第10号)

- 1981 「須恵器大成」角川書店
- 千賀久1988 「寺口忍海古墳群の位置づけ」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 千賀久・杉山秀宏 1988 「II-29号墳」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 1988 「II-30号墳」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 千賀久・田中一康 1983 「御所市・巨勢山古墳群ミノヤマ支群発掘調査概報」「奈良県遺跡調査報告1982年度」
- 堤賀二・吉谷文開・吉村雅博・吉田一良1973 「奈良県御所市櫛都波道跡出土の石戈」「考古学雑誌」第59巻第3号
- 寺沢謙編1980 「六条山道跡」(奈良県文化財調査報告書) 第34集
- 1986 「矢部遺跡」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書) 第49冊
- 寺沢義・林部均1987 「御所市王手遺跡第2次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1988年度」
- 轟岡章之1988 「御所市 櫛都波道跡第7次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1988年度」
- 奈良県1941 「南島原城都波上村柏原置屋古墳群上 烏鳥形輪」「奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報」第2輯
- 奈良県教委1988 改訂「奈良県道路地図」第3分冊
- 西弘海1978 「B 土器の時期区分と型式変化」「飛鳥・藤原宮发掘調査報告Ⅱ」(奈良岡立文化財研究所学報) 第31冊
- 花田勝広1989 「倭政と鎌治」(考古学研究) 第36巻第3号
- 土生田純之1991 「古墳における埴札の研究一木札をめぐってー」「九州文化史研究所紀要」第36号、九州大学文学部
- 林部均1988 「II-2号墳」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 坂崎編1991 「寺口忍海古墳群」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第62冊
- 1996 「古都遺跡群Ⅴ」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第68冊
- 1998 「古墳時代中期の埴輪生産をめぐって—埴輪文化の地域性、その後—」(第4回西日本文化財研究集会 中期古墳の展開と変革) 資料
- 藤田和尊編1987 「奈良県御所市「巨勢山古墳群Ⅱ」(御所市文化財調査報告書) 第6集)
- 藤田和尊1985 「奈良県御所市東 墓谷10号墳発掘調査報告」「(御所市文化財調査報告書) 第4集)
- 1987 「第1章 巨勢山323号墳」「奈良県御所市・巨勢山古墳群Ⅱ」(藤田和尊著)
- 1988 「古墳時代における武器、武具保有形態の変遷」「権原考古学研究所論集」第8、吉川弘文館
- 1991 「奈良県御所市各個遺跡」「日本考古学年報」42
- 1992a 「奈良県御所市・櫛都波12次調査」「御所市文化財調査報告」第12集
- 1992 b 「櫛都波道跡第13次調査」「御所市文化財調査報告」第13集
- 1994 「奈良県御所市・網原跡Ⅰ」「(御所市文化財調査報告書) 第17集)
- 1998 「中期における埴札の所在」「網干善教先生古墳記念 考古学論集」
- 2003 「群集墳の性格について」「関西大学考古学研究室開設50周年記念 考古学論叢」
- 藤田和尊・尼子奈美枝1987 「第2章 巨勢山321号墳」「奈良県御所市巨勢山古墳群Ⅱ」(藤田和尊編1987)
- 藤田和尊・木井守・尼子奈美枝1987 「第7章 巨勢山1243号墳」「奈良県御所市巨勢山古墳群Ⅱ」(藤田和尊編1987)
- 藤田和尊・木井守1999 「古風7号墳による宝寧山古墳出土遺物」「(御所市文化財調査報告書) 第24集)
- 松本洋明・服部伊久男1988 「十六面・豪平寺道跡」「(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書) 第54面)
- 松本洋明1988 「十六面・豪平寺遺跡の中・近世土器に関する考察」「十六面・豪平寺道跡」(松本・服部編1988)
- 南葛城地域の古墳文化研究会1986 「奈良県御所市・扯上羅子塚古墳調査報告」
- 三好美穂1996 「人和」「古代の土器4・煮炊具(近畿編)」、古代の土器研究会
- 森下忠介・立石堅志1987 「大和北部における中・近世土器の様相」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要」1986
- 安村俊史1983 「長手山9号墳」「(柏原市文化財報告1983-1)」
- 山田真一1976 「宿原古墳群と近世墓」「奈良県古墳発掘調査報告」T(奈良県文化財調査報告書) 第28集)
- 青村定次郎1939 「櫛都波神社附近の遺物について」「大和石器時代研究・大和上代分化研究会
- 吉村豊溫1988 「E-8号墳」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 1988 「E-10号墳」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 1988 「E-12号墳」「寺口忍海古墳群」(吉村・千賀編1988)
- 吉村豊溫・千賀久編1988 「寺口忍海古墳群」「(新庄町文化財調査報告書) 第1番)

第 7 章 考 察

上 田 隆

巨勢山419号墳の埴輪の特徴とその位置付け

松 尾 充 晶

巨勢山421号墳出土の杏葉について

巨勢山419号墳の埴輪の特徴とその位置付け

上田 離

1.はじめに

古墳から出土する埴輪の位置付けについては、川西宏季氏によって、Ⅰ期からⅤ期の5段階に分けた、いわゆる川西編年によって確立した（川西1979のち1988）。

しかし昨今の発掘調査の増加によって、この編年の内容とは齟齬をきたす資料が増加してきた。それでもおおまかな変遷の流れは変わらず、共通認識として浸透しているという利点から採用するものも多い。しかし、最近ではⅠ期からⅤ期の定義も危うくなってきており、さらに昨今の研究により古墳時代自身の年代観が上がる方向になりつつある現状から、年代観の見直しでも考える必要があるようになってきている。

最近では新しい埴輪編年の提示がいくつかなされており、筆者も参加している「埴輪検討会」でも発表^{〔1〕}した。その新編年を中心に述べるが、まだ、認識されておらず問題点も考えられるので、埴輪研究において現在もっとも統一認識となっている川西編年を補助的に説明に用いる。ちなみに古墳時代中期をⅢ期1段階、2段階、Ⅳ期1段階、2段階、3段階の五段階に別けた。

今回報告された巨勢山419号墳出土埴輪の位置付けについては、その情報量の少なさから、川西編年で考えるとⅡ期からⅣ期初頭までの幅広い範囲での可能性が指摘できるであろう。しかし私は以下述べる要因から川西編年Ⅲ～Ⅳ期の時期を考えた。これは南葛城地域において重要な指摘となると考えられる。

以下、これらの要因を最近の埴輪研究と照らし合わせて述べ、最後に埴輪から導きだされた事象について、南葛城地域での歴史的背景を交えて少し考えたいと思う。

2. 堀輪の位置付け

堀輪の年代を考えるには、法量規格、外側調整、形態、焼成などの特徴から導きだすのがセオリーと考える。これらを要素別にとらえ、個々の説明を加えながら419号墳出土埴輪の位置付けを考えたい。

資料に破片が多いため、法量については、口縁部、体部、底部の個々それぞれに分けて考えるしかない。また、突堤間隔や底部高は判る資料も認められない。各々大型、中型、小型に分けて考える。

底部径は20cm前後が小型、25cm前後が中型、35cm前後が大型とし、特に15cm前後以下を極小型、40cm前後以上を巨大型とする。

a. 調整の特徴

外面調整　次番を付ける前に施す一次調整と付けた後に施す二次調整がある。一次調整は主にタテハケ、二次調整はタテハケ、ヨコハケ、ナデなどが認められる。

川西編年によると二次調整のタテハケは、Ⅰ期の埴輪の特徴の一つとなっているが、実際は二次調整のタテハケはほとんど認められない。

ヨコハケ調整については川西氏がA種ヨコハケ、B種ヨコハケ、C種ヨコハケと細分しているが、その定義については曖昧な点が多く各々研究者によってとらえ方が異なる場合も考えられる。また、最近ではA種、B種、C種という名称が判りづらいという観点から、安村俊史氏は名称を記号化せず、断続、継続、回転と言い換え、A、B、Cとも異なるものとして連続ヨコハケの提唱もおこなわれている。(安村2000)

一瀬和夫氏は主に古市古墳群の大古墳の埴輪の観察からB種(=継続)ヨコハケをBa~Bd種に細分し、これが時期差を表すことを指摘されている。(一瀬1998・1992) これは中期古墳の埴輪を細分するには有意義であるが、一瀬氏が述べるようにシステムティックに変遷する地域は古市古墳群、百舌鳥古墳群を除くと少ない。逆に考えると、他地域でこの細分があてはまるところは大王陵との関連が強いということを現すのであろう。

底部に施す調整は川西編年の中で口縁部調整と同様にその編年觀から除去して考えることが示されて以来、注目されることが少ない。しかし古墳の発掘調査で円筒埴輪列を検出すると、基底部のみ残存していることが多く、底部による円筒埴輪の変遷が必要になってくる。確かに底部では外面調整が省かれるものが多くあり、体部の外面調整と同列に扱うわけにはいかないが、それに牽引することは可能で、今、底部内外面調整の変遷を考えるべき時期であろう。

たとえば、底部のヨコハケ調整率によって時期的变化が追える。

古市古墳群内での事象であるが、誉田御廟山古墳(応神陵)では底部にヨコハケを施すものとタテハケとの比率は約50:50であるのに対し、仲津山古墳(仲つ姫陵)ではヨコハケ65%、タテハケ35%とヨコハケ調整率が高い。また、市野山古墳(允恭陵)ではヨコハケ20%、タテハケ50%、タテナデ30%とヨコハケ調整率が低くなっている。(上田1997) これらは体部のヨコハケ調整率と比較するとその比率は低くなっているが、明らかに古い時期が底部のヨコハケ調整率が多く、新しくなると少なくなる傾向が認められるであろう。

川西編年では底部端に加える調整については、V期の要素として「底部調整」と提唱してきた。しかし、主にⅢ期の円筒埴輪にも底部端内外面にハケ・ナデ・ケズリ等を行って底部の自重による歪みを訂正する技法が認められる。ここではこれを川西編年V期の「底部調整」と分けるために「底部の調整」とよぶ¹²⁾。

底部の調整にはナデるもの(ア類)、ヨコハケを施すもの(イ類)、ケズリを施すもの(ウ類)などがある。特に、ア類の中で板ナデを施すものを(Ab類)、イ類の中でB種ヨコハケになってい

るものを（イ b類）とする。特に端部外面をなでるものは、全時代を通じて行なわれている。

b. 形態の特徴

形態は口縁部、底部、突帯等に分けられる。口縁部や底部の形態は川西編年ではあまり重要ポイントにはなっていない。そのためかこれらについて論じているものはあまり目立たない。口縁部の形態を細分することは最近では徐々に増加しているものの、その観察から導きだされた情報を分析されているものは少ない。その中で鳥居前古墳（福永1990）や長原一ヶ塚古墳（積山1990）出土埴輪からその特徴を述べられている。しかし、底部についてはその特徴から導き出される位置付けについてふれられているもの自体少ない。

古墳を発掘した場合、円筒埴輪列を検出しても底部だけしか残存していない例が多い。埴輪樹立後、時間経ない時期に崩壊するものが多いためか、口縁部も比較的破片として残存することが多い。わたしはこれら口縁部、底部の特徴を観察することによって、一定の情報を得、取り上げるのは今後の埴輪研究の課題の一つと考えている⁽³⁾。

突帯 形状の変化は川西編年でも取り上げられ、時期を決めるメルクマールとされている。それは成形の回数の多いほど古く、高いほど古いというものである。具体的にはその断面形が上辺が伸びる形（0類）、方形を呈するもの（1類）、台形を呈するもの（2類）、M字形を呈するもの（3類）、三角形を呈するもの（4類）などである。また、第一突帯は押仄技法で低い方形のもの（5類）になっていたり、断続ナデを施すもの（6類）、断続ナデの後押仄を加えるもの（7類）も認められる。

これに高さを加える。高さは視覚的な基準になるので、器壁厚を基準とし、それより高いもの（a類）、ほぼ同じもの（b類）、低いもの（c類）とする。また、視覚的には同じ高さでも突帯基部幅が広いほうが低く感じるため、基部幅が2cm以上（A類）、ほぼ2cm（B類）、2cmより狭い（C類）、1cm以下（D類）とする。

一般的に上辺の突出した形態の突帯はⅡ期を通じて認められる古い形態である。台形の突帯は川西Ⅱ期後半に出現し、Ⅲ期以降に盛行する。M字形は概ねⅢ期に出現し、Ⅳ期以降中心となる。なお、基部が2cmより広くなる、中期型突帯と仮称した突帯形態はⅢ期で少量認められるが、Ⅳ期以降中心になる。台形、M字形ともⅣ期でも時期が下るにつれて低くなる傾向にある。

透かし孔 形態として長方形、半円形、三角形、逆L形、巴形、円形などが認められる。前期ではⅠ期が長方形、半円形、三角形、逆L形、巴形、円形などが、Ⅱ期が長方形を中心で半円形、三角形、円形などと多様であったのが、中期のⅢ期ではほぼ円形を中心で長方形、半円形、三角形などが少量認められる程度である。また、Ⅳ期にはいるほとんどの円形に統一される方向になる。

この統一現象は百舌鳥古市古墳群では顕著であるが、他地域では大和ですら遅れる傾向にある。つまり、Ⅳ期1段階の大王陵級の古墳であるウワナベ古墳では方形や三角形の透かし孔をまだ採用している。

体部 器壁の厚さは1cmを基準に、それより薄いもの（ア）、1cm前後のもの（イ）、厚いもの（ウ）とする。一般的に器壁の薄いものは古い傾向にある。

口縁部 形状によって想定的な年代が考えられることは既に述べられている。わたしも古市古墳群の変遷を考えたおり採用した。逆L字形になっているもの（I類）。直立気味に立ち上がり端部を肥厚させるもの（II類）。外反するもの（III類）。直立するもの（IV類）。端部に突帯を付加するもの（V類）に別けられる。

I類は端部を上方につまみあげ外側に面を持たせるものが古い。II類は端部を肥厚させるだけのもの（IIa類）、端部外側に面を持たせるもの（IIb類）に細分できる。III類も外反するのみの（IIIa類）、外側に面を持つもの（IIIb）に細分できる。I類やII類、V類は突出度が高いほど古い傾向にある。

口縁部の形態は最も時期を反映するものの一つと考える。もともと特殊器台から発生した円筒埴輪の口縁部は受け口形から直立形へと変化していく。II期には逆L字形が中心だったものが、中期に入ると急速に退化していく。III類はやや形態をかえながらもIII期からIV期になっても認められる。II類は主にIII期の特徴といえるが、IV期に入っても認められる。IV類はIII期から出現するがIV期以降中心となっていく。口縁部資料の中で、IV類が主体となすものは、IV期の可能性が高い（IV期型口縁）。IIb類はI類の退化形とも理解でき、時期が下ることに徐々に突出度が低くなる傾向にある。

底部 形態は直立するもの（1類）、外側に開くもの（2類）、内窓するもの（3類）に分けられるが、外反するもの（4類）、直立もしくは内窓した後、外側に開くもの（5類）も認められる。また、端部は外内両方に粘土がはみ出で撥形になったもの（a類）、外側に粘土がはみ出たもの（b類）、内側に粘土がはみ出たもの（c類）、きれいに調整されているもの（d類）に細分できる。

また、底部端から第一段突帯上辺までの高さ（以下、底部高と呼ぶ）は同じ古墳のものであれば、底部径が異なってもほぼ同じ値を示す。また、同じ古墳出土埴輪では、数値の幅はあるものの、定説になっている大古墳の年代順に値が低くなっていることを指摘したことがある。

底部高は突帯間隔と関連すると考えられるが、円筒埴輪列を調査する際、底部しか残存していない例が多いことから、底部高の比較が有効と思われる。この事は底部高が判れば時期がある程度推定できることを示唆していると考える。これは特に二次調整の省略された、タテハケ調整のみの円筒埴輪の時期を推定するには役に立つと考える。しかし、この方法は、突帯指數計測などと同様に数量によるデータの集積が必要であるなどの問題点が見いだせる。

c. 焼成法

埴輪の焼成は野焼き焼成→窑窯焼成という流れが考えられ、それが時間的流れによって変化することが川西氏によって提示されている。それは黒斑の有無によって焼成法が異なることが示されているが、最近ではこの黒斑の有無について段階の判断材料になりにくいことが指摘されている。（川村2000）

密窓焼成の埴輪にも黒斑の認められる個体が存在するからで、逆に黒斑のないものが川西編年のIV期であると考えるほうが良いであろう。

また、この焼成法の変化が全国一齊におこるのではなく、相対的な変化である事も想定できる。最も古い段階に密窓が採用されたと考えられる普田御廟山（応神陵）古墳が造営された時に、他の古墳はまだ野焼き焼成の埴輪を採用している事が考えられる。したがって、野焼き焼成の埴輪を採用しているからといって普田御廟山（応神陵）古墳より古いことにはならないであろう。ただ、ほぼリアルタイムに密窓焼成の埴輪を採用している古墳も認められるが、これは普田御廟山古墳の陪冢やかなり深い関係のある古墳であることが推定できるであろう。

また、逆に古市古墳群の埴輪を焼成したと考えられている土師の黒遺跡内にある土師の黒古墳群内の古墳で底部調整や低い突堤を持つなど後期古墳の特徴を持つものに黒斑が付いている例が存在するのである¹⁴⁾。

3. 419号墳の埴輪の特徴

a. 調整の特徴

外面調整は4のII線部や14・21に一部ヨコハケが見られる程度でほとんどタテハケ一次調整である。タテハケのみの調整はある意味では全時期共通の調整法であるため、これだけでは年代の位置付け、主に中期古墳のヨコハケの細分にあてはまれない。このような例に古市古墳群内では岡古墳が認められる。

底部の調整を施しているものも420号墳出土のものに1点認められるものの、他は未調整のものである。

b. 形態の特徴

突堤 形態の判断できるもの12個体の内、台形が4個（15・16・22・23）、M字形が5個（11～13・18・20）、突出したものが3個（14・19・21）であるが、また、基部の幅は、2cm前後のものが6個（11～13・20～23）、2cmより細いもの6個（14～16・18・19・23）で、幅の広い中期型突堤は認められない。

高さのみで見ると2個（19・21）が高いほか、中高の7個（11・13・14・16・20・23）、低いもの3個（12・15・18）で、15・18・23のように三角形に近く低いものも認められるが、相対的に高い傾向にある。

古い要素を残しながら新しい要素である三角形に近くやや低いものが含まれていた。これは古い要素と新しい要素が併存する時期であるということであろう。

透かし孔 全体を観察できるものはない。ただ上辺が直線になっているもの（a）と弧を描くものの（b）がある。aは方形、半円、逆三角などがbは円形、円形などが考えられる。最近調査された戸勢山461号墳から出土した円筒埴輪は半円形の透かしをもち、外面タテハケ調整であるが、突

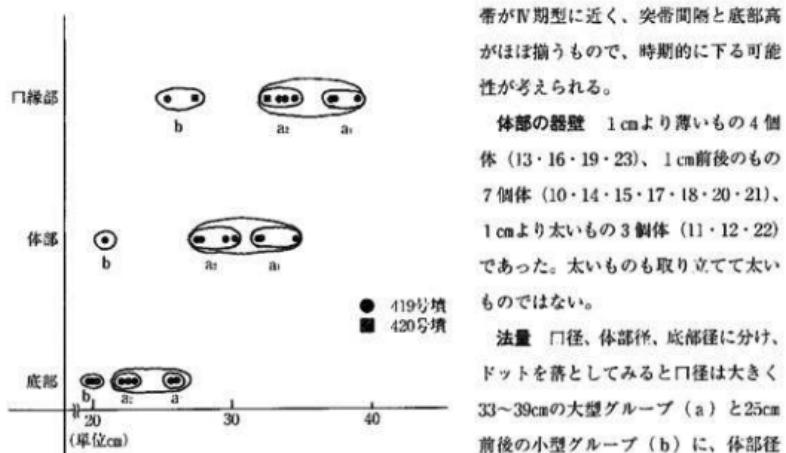


表1 岩勢川419・420号墳出土円筒埴輪部位別法量分布
また、口径の大形グループは38cm前後のa1と34cm前後のa2に、体部径の大形グループは
33cm前後のa1と29cm前後のa2に、底部径の大形グループは25cm前後のa1と22cm前後のa2に
細分できる。

これらはそれぞれ分類記号に対応すると考えられる。つまり大型品1は口径38cm前後、体部径33cm前後、底部径25cm前後のもの、大型品2は口径34cm前後、体部径29cm前後、底部径22cm前後のもの、小型品は口径25cm前後、体部径21cm前後、底部径20cm前後のもの、である。

古市古墳群の法量に比較すると大型品1は中型品、大型品2は小型品、小型品は極小品にあてはまる。しかしこの古墳内で理解すると小型品と大型品、巨大品と理解できるであろう。このような法量分化は中期になって顕著になる特徴である。

口縁部 IIb類が1、IIa類が2~4、IIIb類が5、IIIa類が6~7で、端部を肥厚させるII類と外
反させるIII類に分けられ、3のようにI類に近いものもある。

なお、1はIV類に近いが、端部内面が外反し外側に沈線を施す。この沈線によって端部外面に向
を持たせる形態を現している。

底部 形態は7個体中、直立する1類が1個体(26)、外側に開く2類が5個体(24・25・27・
28・30)、外反する4類が1個体(29)で2類が多い。最も多く2類のうちでは粘土が内側にのみ
み出すc類が3個体(27・28・30)で多く、29のように外反するが内外面を綺麗に調整するものも
認められる。底部の形態は時期にあまり左右されないが、全体的に外觀を丁寧に調整するという特

微が認められる。

今回の資料には底部高の判明しているものはないが、底部高について少し述べる。また、底部高と密接な関係にある突帯間隔が判明しているものもない。

底部高、突帯間隔はⅡ期以降、時期が下るごとに短くなっていくことは、すでにいくつかの論考で述べている。Ⅲ期以降、つまり中期になると人王の墓地である古市百舌鳥で独自の規格を持つようになる¹³⁾。具体的には次の通りである。

Ⅲ期 1段階（津堂城山古墳段階）で底部高15cm前後、突帯間隔14~13cm前後。

Ⅲ期 2段階（仲津山古墳段階）で底部高14cm前後、突帯間隔13cm前後の値に集中。

Ⅳ期 1段階古（墓山古墳段階）で底部高13cm前後、突帯間隔13~12cm前後の値に集中。

Ⅳ期 1段階新（誉田御廟山段階）で底部高12cm前後、突帯間隔12~11cm前後の値に集中。

Ⅳ期 2段階（大山古墳段階）で底部高11cm前後、突帯間隔11~10cm前後の値に集中。

このように中期初頭から突帯間隔と底部高がほぼ揃う埴輪群を古市百舌鳥型埴輪と仮称した。

（上田2001）

しかし大和では、この底部高はⅡ期ではいくつかのタイプが併存していたものが、Ⅲ期以降は低いもの（以降、A類とする）と高いもの（以降、B類とする）との2タイプが認められる。

Ⅲ期 1段階 佐紀石塚古墳はⅢ期の範疇に含まれ、突帯間隔15cm前後、底部高A類は17cm前後、B類は21cm前後、がある。鳥の山古墳は突帯間隔13cm前後、底部高A類が15cm前後、B類が18cm前後である。

Ⅲ期 2段階 ナガレ山古墳は突帯間隔13cm、底部高18cm、コナベ古墳は突帯間隔13cm前後、底部高A類が14.5cm前後、B類が16.5cm前後である。

Ⅳ期 1段階古 市庭古墳は突帯間隔13cm前後、底部高A類が14.5cm前後、B類が16.5cm前後、室宮山古墳は突帯間隔が12cm前後、A類が底部高13cm前後、B類が15cm前後である。

Ⅳ期 1段階新 ウワナベ古墳はA類が突帯間隔11.5cm~12cm、底部高12.5~13cm、B類が突帯間隔13.5cm前後、底部高16.5cm前後である。

Ⅳ期 2段階 古墳によって異なり、A類が突帯間隔12.5cm前後、底部高12.5cm前後の古墳（杉山古墳、平塚1号墳）、B類が突帯間隔11cm前後、底部高16cm前後の古墳（瓦塚1号墳）となる。

Ⅳ期 3段階 ヒシアゲ古墳は突帯間隔10cm前後、底部高10.5cm前後とはば揃ってくる傾向にある。このように中期前半に於いて大和では底部高の高いものと低いものが併存し、中期後半になると古市百舌鳥型の影響から揃うようになる。このような埴輪群を大和型埴輪と仮称した。（上田2001、河内2002）

大和型は古市百舌鳥型と比較すると年代的には半段階もしくは1段階遅れ、大和型の仲津山古墳段階のコナベ古墳は古市百舌鳥段階の墓山古墳の時期に一致し、墓山古墳段階の市庭古墳は誉田御廟山古墳併行になると思われる。このことを鑑みると、古市・百舌鳥古墳群で窖窓が本格的に採用

された時期に一部大和でも窓窓焼成の埴輪が採用されていることがわかる。

室宮山古墳は從来から中期初頭の古墳として位置付けられてきたが、突帯間隔が11~13cmと狭いこと、外側調整にB種を含め、ヨコハケを多用するなど古市古墳群では墓山古墳の様相に近く、Ⅳ期1段階にあたると考えられる¹⁶⁾。それは室宮山古墳に続く、あきらかにⅣ期まで下る掖上鍔子塚古墳出土の形象埴輪の中に野焼き焼成の可能性の高いものが認められることからも傍証できるであろう。

4.まとめ

もう一度今回の埴輪の特徴を述べると、外側はほんどうがタテハケでヨコハケが少量認められる。突帯の形状は断面形が中高の台形かM字形に近いもので、方形で高い古いタイプのものも少量認められる。口縁部は外反するか、直立ぎみに立ち上がり端部を肥厚させるタイプのものがほとんどであるが、直立に近いものも存在する。透かしは半円形や方形の可能性のあるものも認められ、器壁が薄いものが多いのも特徴であろう。

これらだけの特徴では時期を判断するのは難しいが、古い要素と新しい要素が混在しており、考古学のセオリーから考えると新しい特徴をもって時期決定できるであろう。特にこの時期、大和では先進地域の古市・百舌鳥古墳群にくらべ、古い要素を引きずるきらいがある。このことを重視するとはじめにも述べたように今回の419号墳の埴輪はⅢ期~Ⅳ期の所産と考えたい。

全て野焼き焼成であることから、Ⅲ期に当てはめる考え方もあるが、前述したように焼成法では時期区分は難しく、他の要素から考えるべきであろう。

しかし、最も時期を考えられる、突帯間隔、底部高等などの企画が不明なこと、外側調整がタテハケを中心であることから、時期の判明している埴輪とは比較しにくい。そこで、最も関連の深いと考えられる室宮山古墳の埴輪との比較を行うと、419号墳の埴輪では突帯の形状や口縁部の形状、透かしに古い要素が認められる事が上げられるが、類似する点も多いことから、時期的には同じであるが、前後関係から考えると419号墳がやや古いと考えたい¹⁷⁾。

これは巨勢山古墳群内に室宮山古墳成立前に造営された古墳が存在することを示す。

a. 墓城地域の埴輪

馬見古墳群の円筒埴輪については坂氏が詳細に検討されている（坂2002）。馬見古墳群に室宮山古墳を初めとする南葛城地域の古墳を含めておらず、今回の巨勢山古墳群419号墳も直接比較できないが、中期古墳の規格的な円筒埴輪について全国的な見地をまとめられている。それによると、馬見古墳群では器高75cm、5条突帯のものが中期初頭に認められるが、これは室宮山古墳のもの（4条突帯）や佐紀古墳群（4・6条突帯）などと異なる規格であるという。また、馬見古墳群ではこの規格をそのまま縮小しているのに対して、古市古墳群をはじめとするほかの地域では器高60cm、4条突帯の新たな規格を生み出し、これを標準形としているとされている。さらにこの種の埴輪が

時期	高城地域					大和	古市 (川辺合心)	百舌鳥	その他	
	馬見北	馬見中	馬見南	盆地帯(高城城)						
I-4						○社山 242				
I-5				盆地 137			天子山 118 弓弓須 118			
II-1						○天社神 278	松元山 130			
II-2			田代下 60			○赤谷 300 丹山 27	豊後 27			
II-3			高城出 112			○飛山 207	堀の木 55			
III-1			★高山 238			泉紀 280 白塚山 280	○津生 268 高山 268	毛の丘 135		
III-2	高の山 193		乙女山 139	★高山 290		コナベ 206	○井伊山 290		上野太田山 210 大野山 210	
400	IV-1				★高山 228	山辺 220	高山 225 ○日吉山 225	○石津山 300 ニキナツイ	吉瀬山 260	
				★高木山 200		ウツバケ 220	○日吉山 425 高山 425	イタヌケ 146 那須西東 210	TK73	
		月台 大塚 195		別所石塚 100	★越上洞 子塚 149	杉山 145	○入山 486	青葉山 286	TK216	
500	IV-2	中良山 48			★高根山 136	ヒシアゲ 219	朝里大塚 200 ○高根山 230	○日吉 219 ニキナツイ 吉瀬 206 岡富山 206	田浦大塚 226 茶臼山 200	ON46 TK208
							○高木 242 シノイ			TK23
							白雲山 115			TK47
500	V-1		川合城山 109		○★乳井 城山 146		○ゴケ山 122			
	V-2				北花内 大塚 90		○ゴケ山 122			
	V-3					鳥居木中 シノイ 130	高根山 122	○今城原 占塚 190		MT15

○は人土塁、★は高城地域の型生塙

単位はm

表2 採用埴輪から見た大王陵と高城地域の置主塙の位置付け

全国的に拡散した普通円筒埴輪の定形であったとされている。

しかし、4条突帯は佐紀古墳群や室宮山古墳では古くから認められる。

また、古市古墳群では中期初頭の大梨墳では5条突帯が中心で、中期中葉～後葉は7条突帯が中心である。中小型墳では3条突帯や4条突帯のものが認められるが、器高60cmのものはほとんど認められない⁽²⁾。坂氏が挙げられている大島塚古墳のものは古市古墳群のものの中ではイレギュラーであるが、4条突帯であるか、器高60cmであるかは不明である。

したがってこの規格が古市古墳群から始まり全国的標準になったとは今のところ考えられない⁽³⁾。

馬見古墳群を含む北葛城と南葛城を別地域として分けて考えることも多いが、古市百舌鳥古墳群との関連性から考えると、大きく一つの地域（大葛城）として位置付け、その中の区別を考えるのが良いと考える。大葛城地域では、前期の段階で別所下古墳や佐味出宝塚で鰐付き円筒埴輪が採用され、その後も巣山古墳・築山古墳で採用されている⁽⁴⁾。その後、室宮山古墳の出現を契機に鰐付き円筒埴輪が採用されなくなるとともに、B種ヨコハケを施すものが増加していく。この間、古市古墳群やその周辺の古墳で認められる中期型車形埴輪が葛城地域で採用されている。また、乙女

山古墳からは柏円型の開い型埴輪^⑩が、ナガレ山古墳では木樋型土製品が採用されているなど、造出し周辺で認められる水の祭祀を現す形象埴輪群も認められ、古市古墳群と葛城地域との関連が深いことが判る。その後、巨大古墳は南葛城に移るが、中期後半のBd種ヨコハケを採用するなど、ここでも古市古墳群との関連が考えられる。このように埴輪の様相から大葛城地域の古墳造営が古舌島古市古墳群と連動していることが判る。

b. 葛城地域の古墳と古市百舌鳥古墳群

葛城地域の古墳は一部を除くと主に中期以降に造営されている。これが古市百舌鳥古墳群の動向と一致することは既に述べた。葛城の古墳がいくつかのグループに分けられることは既に多くの研究者によって述べられているところである。また、これらのグループの長が葛城連合の代表となりその中から更に首長が輪番的に存在することも既に述べられている所である。これを古市百舌鳥の大王陵との関連から考えたのが表2である。

大葛城地域の盟主墳を並べると、新山古墳→佐味田宝塚古墳→東山→篠山→室宮山→新木山→(河合大塚^⑪)→猿上鍵子塚→新庄屋敷山古墳→狐井城山古墳という流れが認められる。古墳時代前期の新山古墳→佐味田宝塚古墳と東山古墳以降とは断絶が考えられるが、葛城地域内の小グループでその盟主墳が移動していることが判る。これはその区分は異なるが白石太一郎氏の述べる輪番制を示しているのであろう。(白石1999) 篠山古墳以降、200mを越える大古墳が築造されるのも古市百舌鳥古墳群との連動と考えられる。

つまり、馬見古墳群から盆地南部の室宮山古墳まで含んだ広い地域(大葛城)での盟主墳の移動である。中期初頭から中葉には馬見古墳群にその中心があったものが、中期中葉に室宮山古墳が出現したことによって、盆地南部(南葛城)にその中心が移っていったことが読み取れる。

これは葛城氏の中心が葦田宿禰系から玉田宿禰系に移ったとする塚口義信氏の説(塚口1984・1995)と一致する。このことは既に藤田和草氏が考古学的手法から指摘されており(藤田1997)、室宮山古墳は葛城襲津彦の奥津城である可能性を指摘されている(白石1973)。

今回、私は室宮山古墳の時期を従来の説からやや下らせたが、昨今、中期古墳の年代観が約50年遡ることから、百済本紀に認められる「沙至比雞」の年代である4世紀末から5世紀初頭とも一致してきている。

なお、塚口氏は大葛城地域の最後の盟主墳である狐井城山古墳が武烈天皇陵である可能性を述べられている(塚口1995)。さらに宮内庁が治定されているように北花内大塚古墳が飯豐陵とすれば、葛城の雄略朝以降の盟主古墳は大王もしくはそれに準ずる人の古墳であることが判る。つまり、雄略天皇によって押さえつけられ弱体化した葛城氏の本貫地に大王陵を造営していることになる。

葛城地域の古墳と古市古墳群との関わりは乙女山古墳の墳丘規格が野中宮山古墳の前方部を1/2にしたものに一致する^⑫ことや先述したように埴輪でもB種ヨコハケの多用(室宮山古墳)など一致する点が多い。ただ、最近では葛城地域の古墳と百舌鳥古墳群との関わりを考える説^⑬も認め

られ、これらの関連、つまり葛城氏と中期大工墓との関連を考えていくべきなのであろう。これらの関連は既に指摘されることが多いが、今回、葛城地域の古墳出土埴輪の様相から再認識したというわけである。

今回の論を掲載するにあたり、藤田和尊氏、木許守氏をはじめとする御所市教育委員会の方々には御苦労をおかけしました。また、埴輪検討会の仲間には色々とアドバイスを受けました。最後にお礼を申し上げたいと思います。

注

- (1) 今回の発表は筆者も中期古墳の埴輪について発表した、埴輪検討会 第1回研究集会「畿内の円筒埴輪編年」2003によるところが多い。ただ一部、Ⅳ期1段階を新古にわけるなど埴輪検討会編年とは異なる自認も今回ふくめている。
- (2) 底部の調整はⅢ期の特徴と考えたこともあったが、Ⅳ期の中高品にも認められる。ただ、ケズリなど内向の調整についてはほぼⅢ期の特徴であろう。
- (3) 繋型の分類は(上田1997・2003)による
- (4) Ⅳ期2段階の上部の里8号墳の埋葬墓主体である埴輪円筒瓶は黒底が認められる。
- (5) 成部山の差によって時期差が生じることは、(上田1998)ではじめて指摘した。
- (6) 宮山古墳の埴輪は底部高いものと低いものとが存在するという意味では大相違であるが、その数値は同時期の他の大和の古墳出土埴輪とはやや異なる独自のものである。
- (7) 透かし孔が円形に統一されていないという点を重視するとⅢ期末とする考え方もあるが、寛宮山でも円形以外の透かし孔が認めること、口縁部に沈線でのみ明示するⅡ期の最新华形が認められる点からやはり微妙である。
- (8) (河内2002)にまとめられている。なお、馬見古墳群では最近調査された篠山古墳と関係が考えられるインキ山古墳周辺の円筒瓶に使用された埴輪は、大和型Ⅲ期の特徴を示し、器高98.6cm、5条突唇のものである(前川1997)。また、栗山古墳と関連が認められる三吉2号墳からはやはり埴輪瓶を示し、器高70cm、4条突唇の円筒埴輪が認められる(十橋2003)。
- (9) 古氏の示されている器高60cm、4条突唇の規格が存在することも確かであるので、もう少し資料をととのえて再考すべきであろう。おそらく、古市古吉島古墳群の規格が時限品もしくは一品とすれば、その下位の規格として存在するのではないかだろうか。古墳の等級「その時期の最も頂点にある古墳(大王陵)との関連の深さによる格付け」による埴輪の使い分けについては以前述べたことがある(上田1997)。
- (10) 栗山古墳、篠山古墳は縁付き円筒埴輪が採用していることからⅢ期に位置付けることが多いが、これらの古墳から縁付き埴輪型埴輪が採用されていることや、Ⅲ期1段階の宇摩郡城山古墳にも突唇間隔15~16cmの縁付き円筒が出土していることから、これら馬見古墳群の古墳もⅢ期1段階以降と考えられるであろう。
- (11) (滋賀松阪市宝塚1号墳出土の柱状埴輪に類似し、牧氏が述べられている出入口(門)を表す形象埴輪であろう。
- (12) 河合大塚古墳をⅡ~Ⅲ期の寫真の盟主墳としたが、場所的に馬見丘陵から離れることから葛城には含めず、この時期の盟主墳を被上羅子塚古墳にあて、宝宮山古墳の続くものとするほうがスムーズにこの地域の歴史を理解できると考えたい。
- (13) 乙女山古墳と野中宮山古墳とは埴輪規格の類似ばかりではなく、縁付き埴輪型埴輪の類似も認められ、何らかの深い関連が考えられる。これは古市古吉島古墳群内の中小古墳と葛城地域の古墳との関連を示していると推定する。
- (14) 堺市教育委員会「河良和氏は古吉島古墳群に古市古墳群で認められるような、後期の大工跡が存在しないのは、その造営に葛城氏の影響がつよいため、葛城氏が衰退する後期大工跡が無いことを指摘されている。

参考文献

- ・斎和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」「大木川改修にともなう発掘調査概要」V 大阪府教育委員会 1988
- 斎和夫「古市古墳群における埴輪群の変遷—大型古墳を中心として—」『先班(埴輪文化財研究15周年記念論文集)』1992
- 上田勝「出土埴輪から見た古市古墳群の様相」『上田寅先生・古希記念論文集』1997
- 上田勝「底部。「応神陵出土埴輪の研究」研究紀要 第4集 墓園法人由良大和古代文化研究協会 1998のち「埴輪論叢」第2号 墓園検討会1999に私収
- 上田勝「古市古墳群を中心とした古墳時代中期前半期円筒埴輪の規格」「土手山古墳群の研究」2001。
- 上田勝「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」「埴輪論叢」第5号 墓園検討会2003
- 川西宏幸「円筒埴輪論」「考古学雑誌」64~2 1978後「古墳時代政治史序説」1988に改変転載

- 白石太一郎「大型古墳と群集墳」『考古学論叢』第2冊、奈良県立橿原考古学研究所 1973、のち『古墳と古墳群の研究』
堺吉房2000に所収。
- 白石太一郎「古墳からみた古代豪族－葛城地域の政治勢力の動向を中心として－」『考古資料と歴史学』国立歴史民族博物館
1989
- 橋山洋「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書」大阪市文化財協会 1990
- 塙口義信「葛城氏と蘇我氏」『続日本紀研究』第231・232号 1984
- 塙口義信「謎の巨大豪族・葛城氏」『香芝通字』第4号 1995
- 塙口義信「香芝－古代史の迷をさぐる1－」『香芝通字』第4号 1996
- 上條理子編『三吉2号墳・タグラシ古墳』奈良県立橿原考古学研究所 2003
- 埴輪研究会 第1回研究集会「畿内の円筒埴輪編年」「埴輪論叢第4号」「埴輪論叢第5号」2003
- 坂崎「馬見古墳群の円筒埴輪」「馬見古墳群の基礎資料」奈良県立橿原考古学研究所 2002
- 福永伸哉編「鳥居前古墳－経緯－」大阪大学文学部考古学研究報告第1冊 1990
- 藤田和尊「葛城氏と馬見古墳群－日本古代王族の最前線－」新人物往来社 1997
- 藤井和尊「東宮山古墳」「季刊考古学」第65号 雄山閣出版 1998
- 前沢部浩編「インキ山古墳第1次発掘調査報告」人和高田市教育委員会 1997
- 安村俊史「B種ヨコハケ埴考」「埴輪論叢第2号」2000

追記

脱稿後、巣山古墳の島状遺構の発掘調査及び出土した形象埴輪群が新聞発表され、その後、現地説明会も開かれた。筆者が実見したところでは、島状遺構は津堂城山古墳のものに類似する点も多いが、むしろ次の段階の松阪市宝塚1号噴のものに近く後出的である印象を持った。形象埴輪についても形態的には古い段階のものを使用しているところもあるが、全体的には新しく位置付けられる。たとえば、衣蓋形埴輪は肋木先端の飾りを表現するもので古く位置付けがちであるが、Ⅳ期2段階に相当する土師の黒埴輪窯(IIJ86-1区)2号窯からも類似したものが出土しており、その他も等の文様を線刻で現すことや立飾りが新しい技法で作られているなど後出的である。水鳥形埴輪も津堂城山古墳のものと比較すると小型で野中宮山古墳のものに近く、形態は擴上罐子塚古墳出土例や誉田御廟山古墳のものに近い。

古墳研究者の中には巣山古墳が津堂城山古墳に先行することを示す意見も認められるが、今回の発掘調査で少なくとも同時期、むしろそれ以降である可能性をあらためて指摘したい。

巨勢山421号墳出土の杏葉について

松尾充晶

大きく「三葉文心葉形杏葉」に含められてきたが、その文様構成の点で厳密には三葉文とは異なり、上下に向かい合ったバルメットが退化したものである。類例の増加に伴って、このタイプの杏葉が「狹義の三葉文」とは別の一群を形成し、独自の系譜をたどることがわかりつつある。朝鮮半島での状況も同様である。したがって名称も三葉文とは区別されるべきで「葉形文（小野山1995）」、「猪口文（山本1995）」と呼んだ例などがある。なかでも、文様の原理と変遷を明らかにした論考（李1993）にしたがい、「忍冬梢円文心葉形杏葉」の名称をあてるのが適当と思われる。

鋲打部分の処理が特徴的な、とても特殊なもので、この点については宮崎県持田56号墳例（TK43期）と非常に近い。類例は他に知られていない。鋲の間隔や位置は、持田例と共に、ほぼ同時期と捉えられるが、外形は先端の尖る心葉形により近く、やや新しい要素がうかがえる。

文様構成についてみた場合、国内での「忍冬梢円文心葉形杏葉」における文様退化の変遷上にはうまく乗らない。むしろより古いタイプの三重県井田川茶臼山古墳例、滋賀県和田11号墳例（ともにTK10期）の「忍冬梢円文梢円形杏葉」における文様表現に近い。

総合すると、①鋲の技法は国内に定着しない特殊なもので、おそらく輸入品と考えられる。②杏葉の時期の目安となる鋲の間隔、位置、外形のフォルムは、TK43新段階からTK209古段階の特徴をしめしている。③文様表現は、国内における文様退化の段階の中で見た場合、やや古い型式の杏葉と類するが、これは製作地における系譜の違いと考えられ、おそらく時期の目安にはならない。④全体として朝鮮半島にも類例のない非常に特殊なもので、その由来した地域を含め、興味深い。

参考文献

- 小野山節1995「柏円形鋲板・三葉文杏葉の将来とその模倣」「琵琶湖周辺の6世紀を探る」
山本忠尚1995「猪口形・桃形透彫考」「内谷真治先生古稀記念論文集」
李 尚律1993「二圓時代杏葉小考」「備南考古学」13

図 版



A地区 手前から巨勢山414~419号墳（北東から）



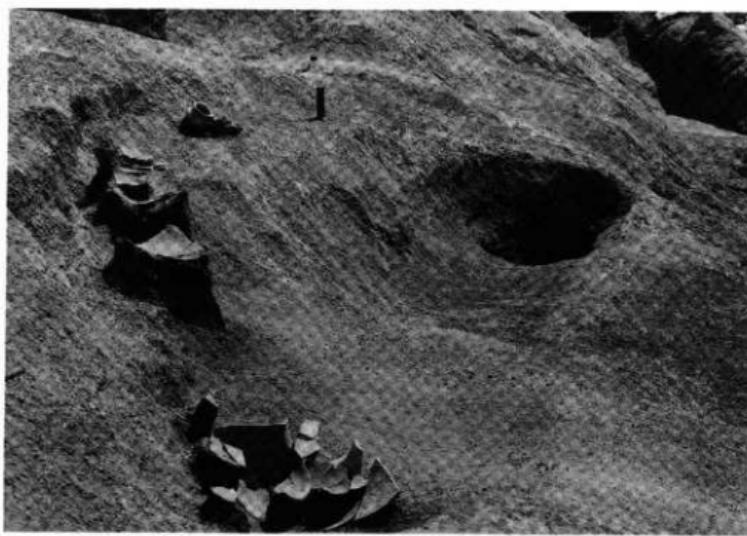
A地区 手前から巨勢山415~419号墳（東から）



A地区 手前から巨勢山416~419号墳（真上から）



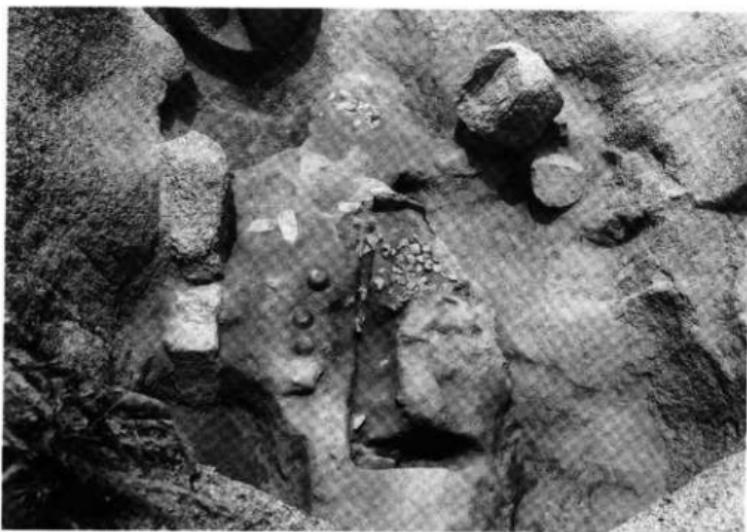
巨勢山414号墳 主体部（北から）



巨勢山415号墳 墓丘下の墓道・柱穴・土坑（西から）



巨勢山415号墳　主体部（北から）



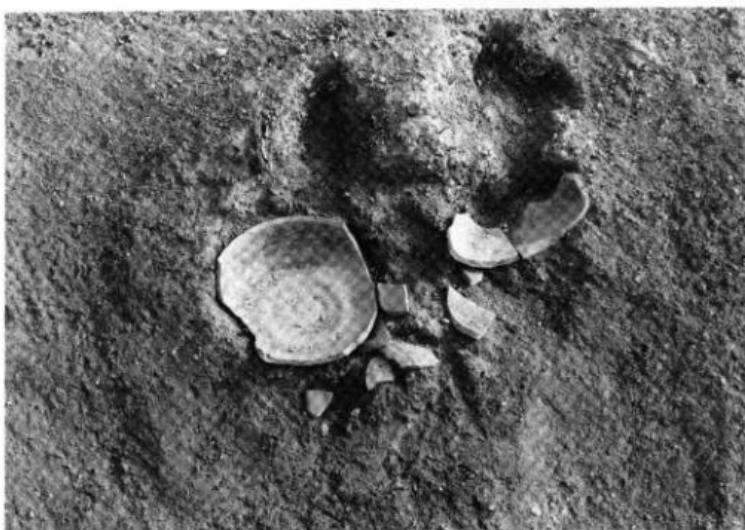
巨勢山415号墳 主体部（北から）



巨勢山415号墳 主体部（南から）



巨勢山415号墳 主体部石材据え付けの状況（南から）



巨勢山770号墳に伴う415号墳の墳丘内の須恵器



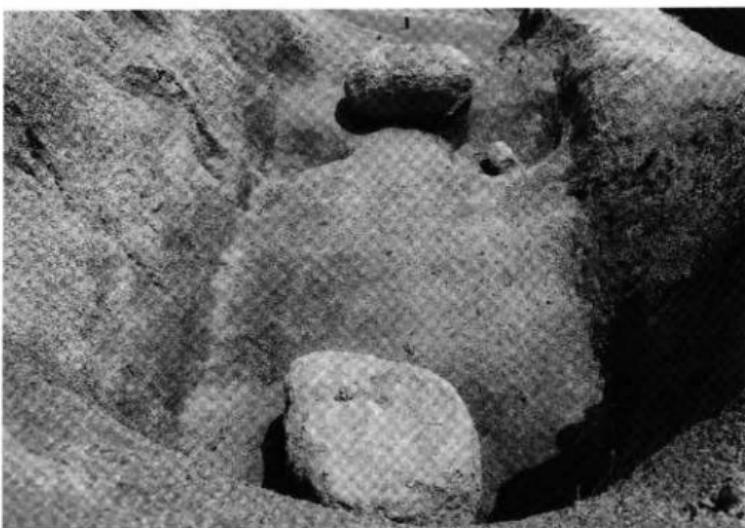
巨勢山416号墳 主体部（南から）



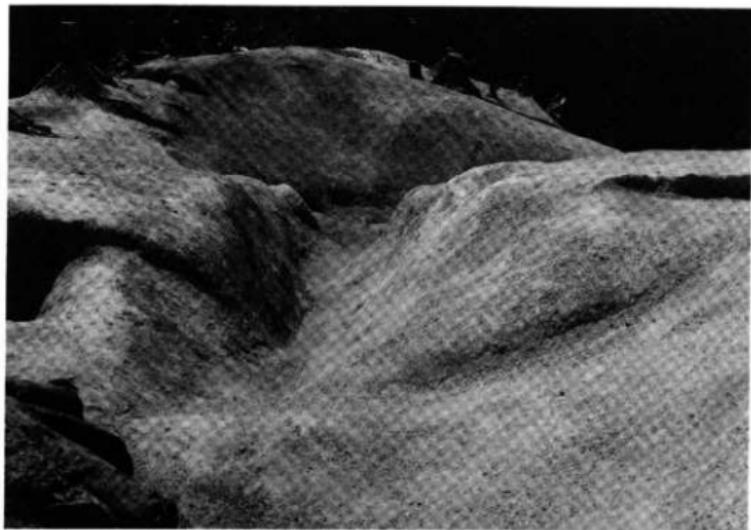
巨勢山416号墳 主体部（北から）



巨勢山417号墳 主体部（南から）



巨勢山417号墳 主体部（北から）



墓道 1 (416号墳北側から西を望む)



墓道 1 (419号墳東側から東を望む)



墓道1 (418号墳南側から南を望む)



墓道1と418号墳 (418号墳南側から北西を望む)



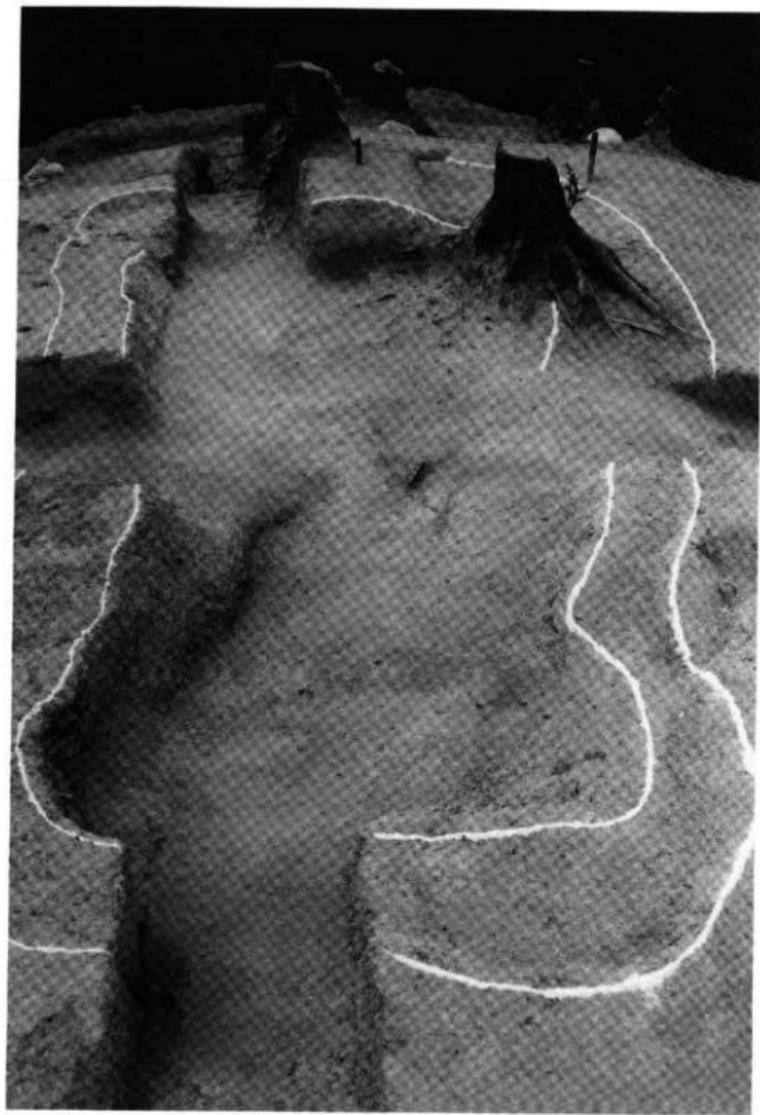
墓道1（右）と418号墳（左）（西から）



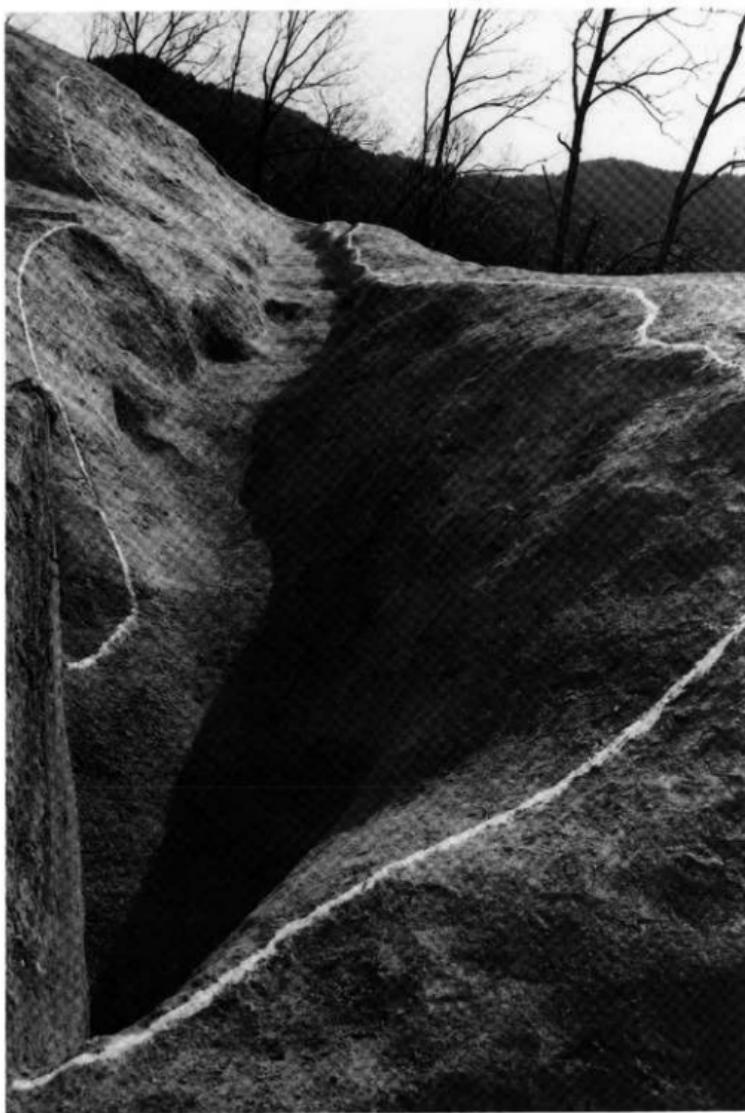
巨勢山418号墳 石室残存部（北から）



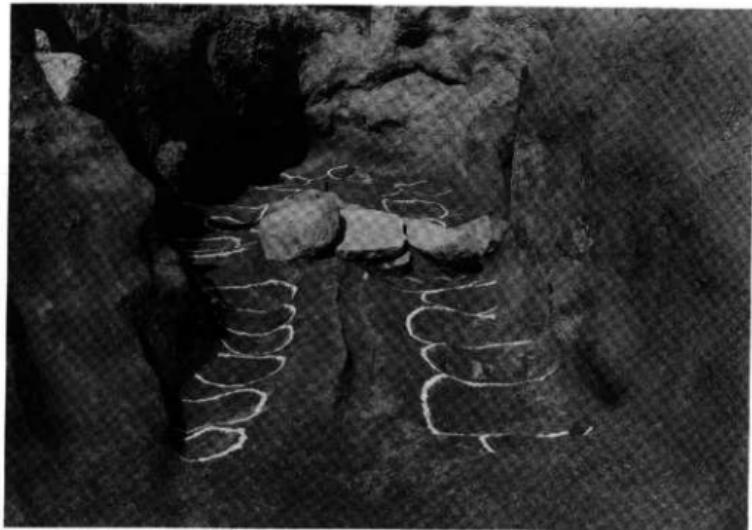
A地区 手前から巨勢山419・420・421号墳



巨勢山419号墳 主体部（東から）



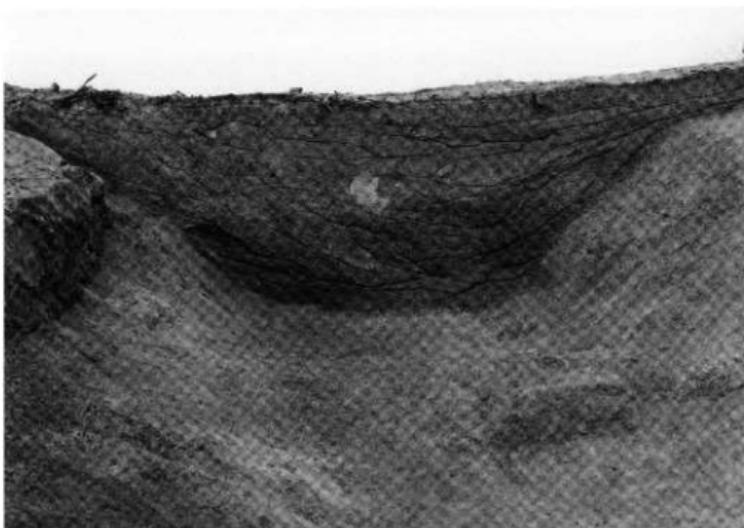
墓道3（北から）



巨勢山420号墳 主体部（南から）



墓道2（北端から）



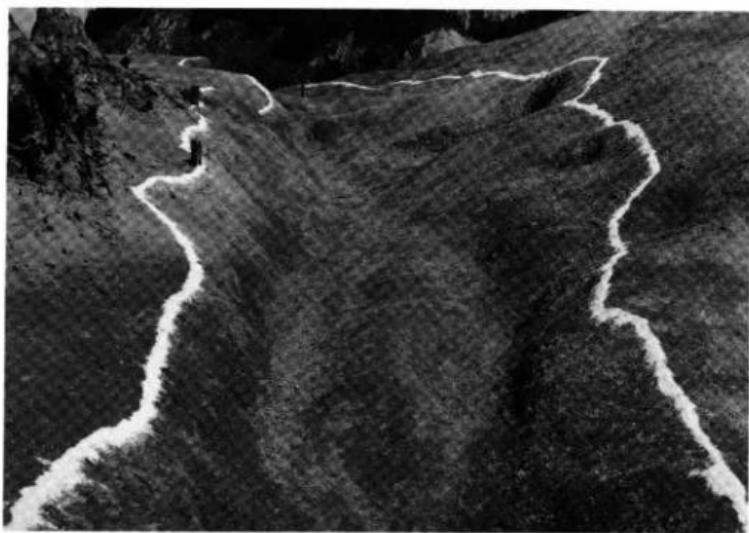
墓道 4 堆積状況（南から）



墓道 4 須恵器出土状態



墓道 4 (南から)



墓道 4 (北から)



巨勢山421号墳（南から）



巨勢山421号墳 主体部（南から）



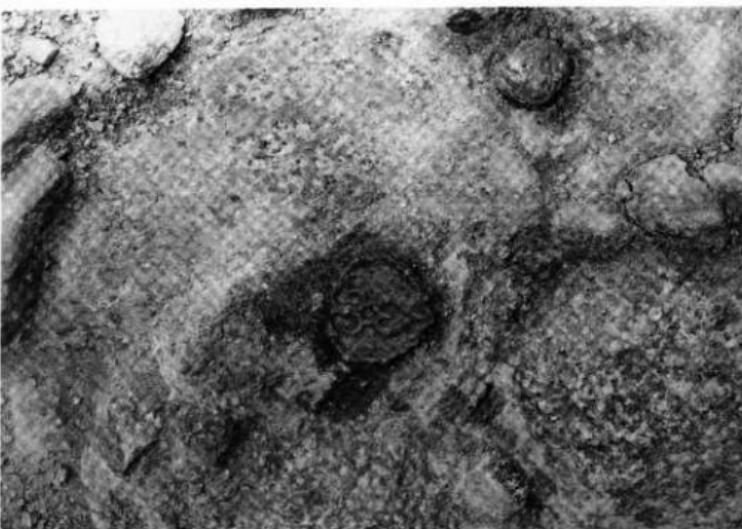
巨勢山421号墳 主体部追葬面（南から）



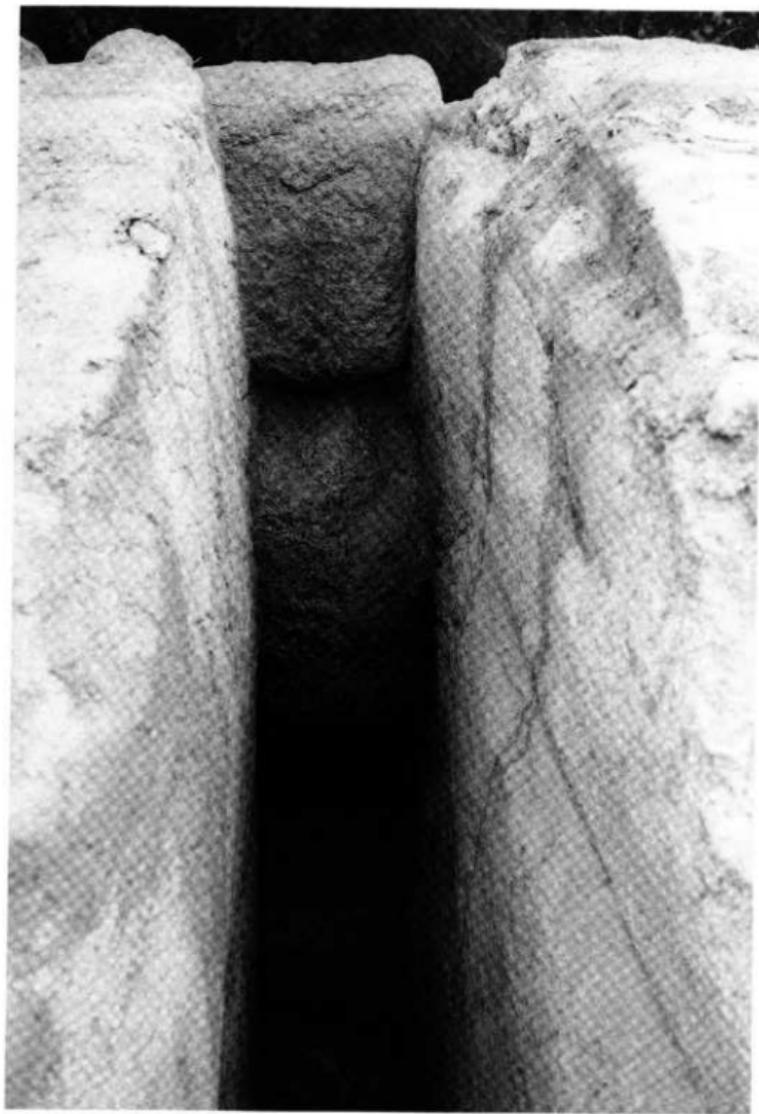
巨勢山421号墳 主体部追葬面 奥壁部遺物出土状態（南から）



巨勢山421号墳 主体部追葬面 奥壁部遺物出土状態（一部取り上げ後）



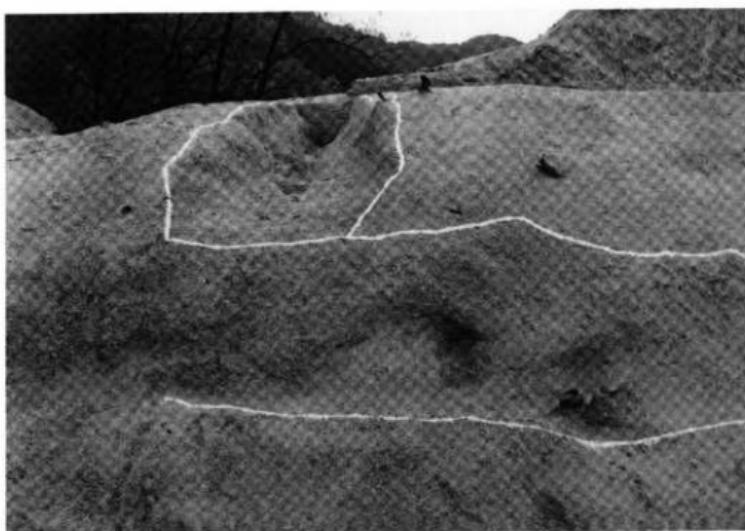
巨勢山421号墳 主体部追葬面 杏葉出土状態（南から）



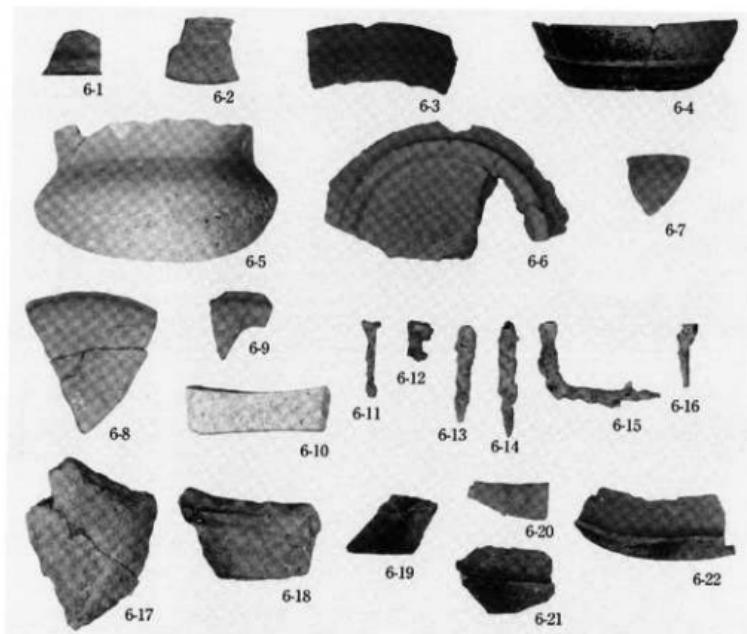
巨勢山421号墳 墳丘北側トレンチ（北から）



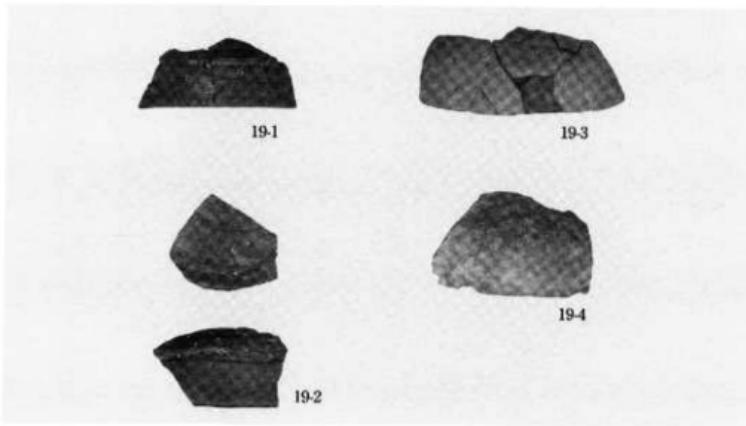
巨勢山421号墳 東側墳丘盛土状況（南から）



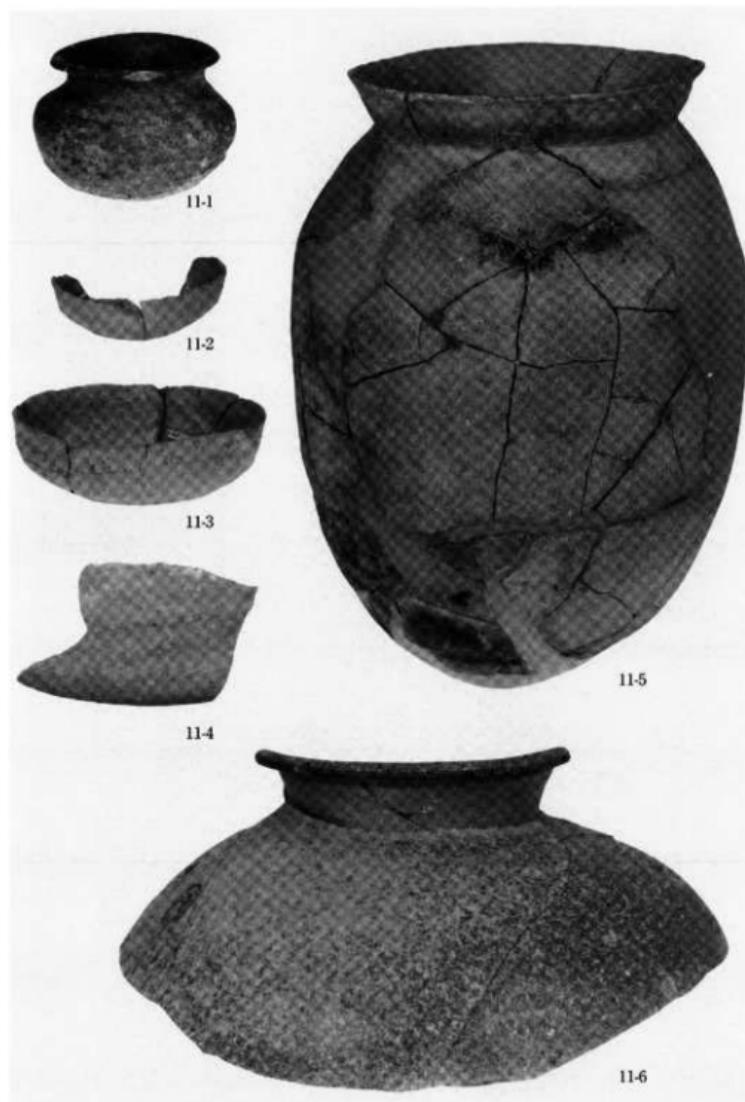
巨勢山771号墳に伴う溝4と溝5（北から）



巨勢山414号墳 出土遺物 (S. ≈ 1/3)



墓道1 出土遺物 (S. ≈ 1/3)



巨勢山415号墳 墳丘下墓道ならびに墳丘下土坑出土土器 (S. ≈ 1/3)



13-1



13-2



13-3



13-4



13-5



13-6



13-7



13-8



13-9



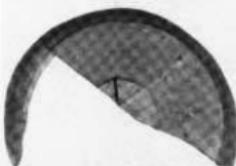
13-10



13-11



13-12



13-13



13-14



13-15

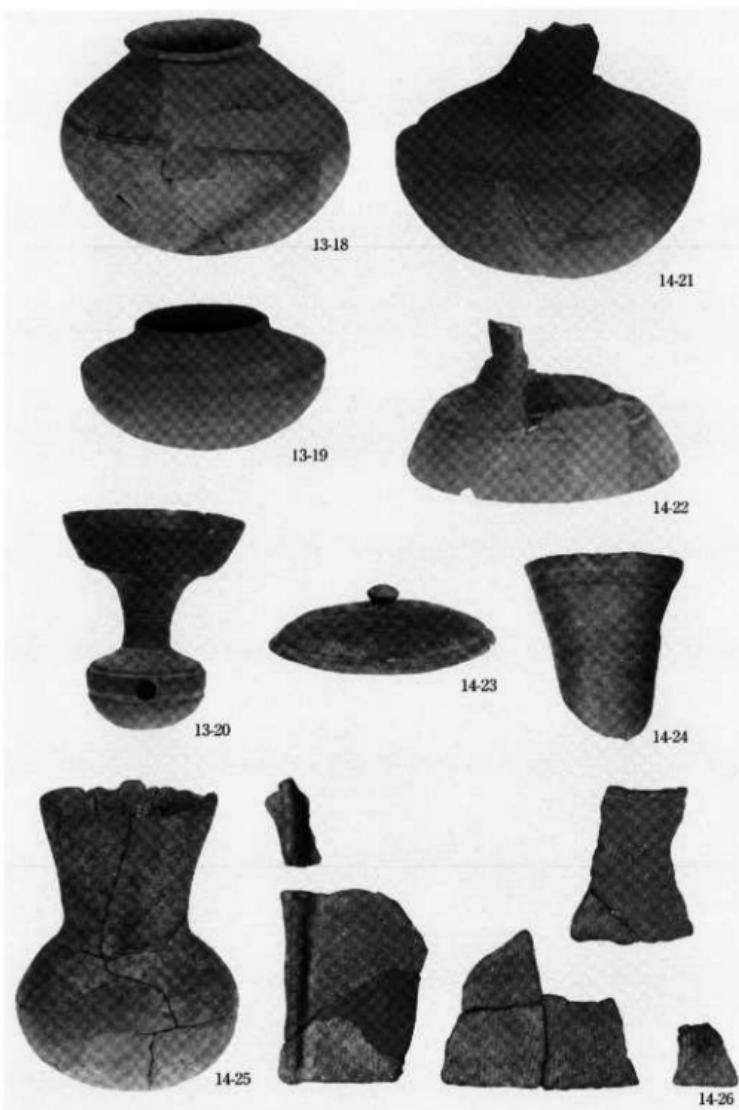


13-16

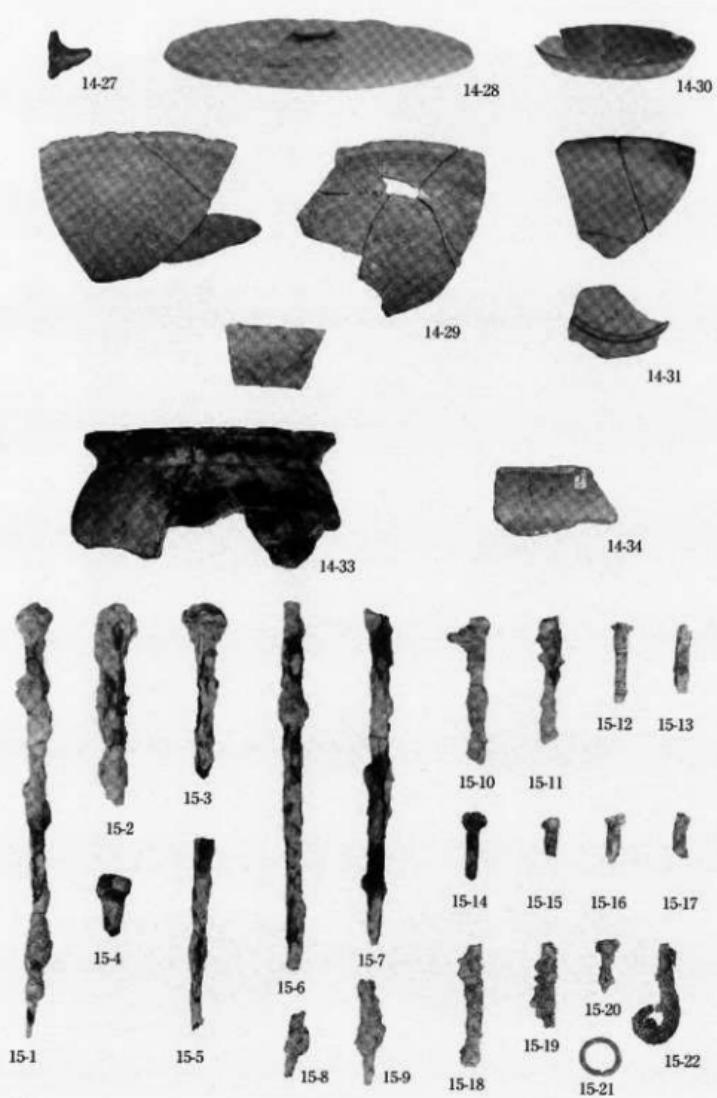


13-17

巨勢山415号墳 出土遺物 その1 (S. 1/3)



巨勢山1415号墳 出土遺物 その2 (S. ≈ 1/3)



巨勢山415号墳 出土遺物 その3 (S. #1/3)



17-1



17-2



17-3



17-4



17-5



17-6



17-7



17-8



17-9



17-10



17-11

巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物 その1 (S.≈1/3)



17-12



17-13



17-14



17-15



17-16



17-17



17-18



17-19



17-20

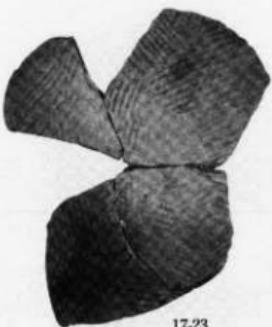


17-21



17-22

巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物 その2 (S. ≈ 1/3)



17-23



17-24

巨勢山770号墳に伴うとみられる415号墳の墳丘下出土遺物 その3 (S. ≈ 1/3)



22-1



22-2

巨勢山416号墳出土 鉤 (S. ≈ 1/3)



24-1



24-2

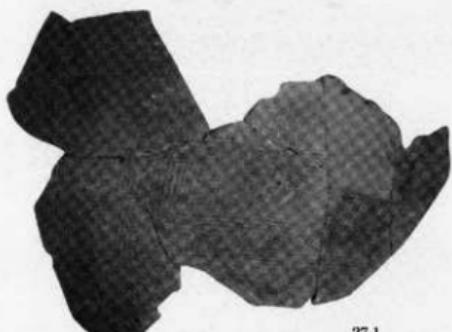


24-3

巨勢山417号墳 出土遺物 (S. ≈ 1/3)



27-2



27-1

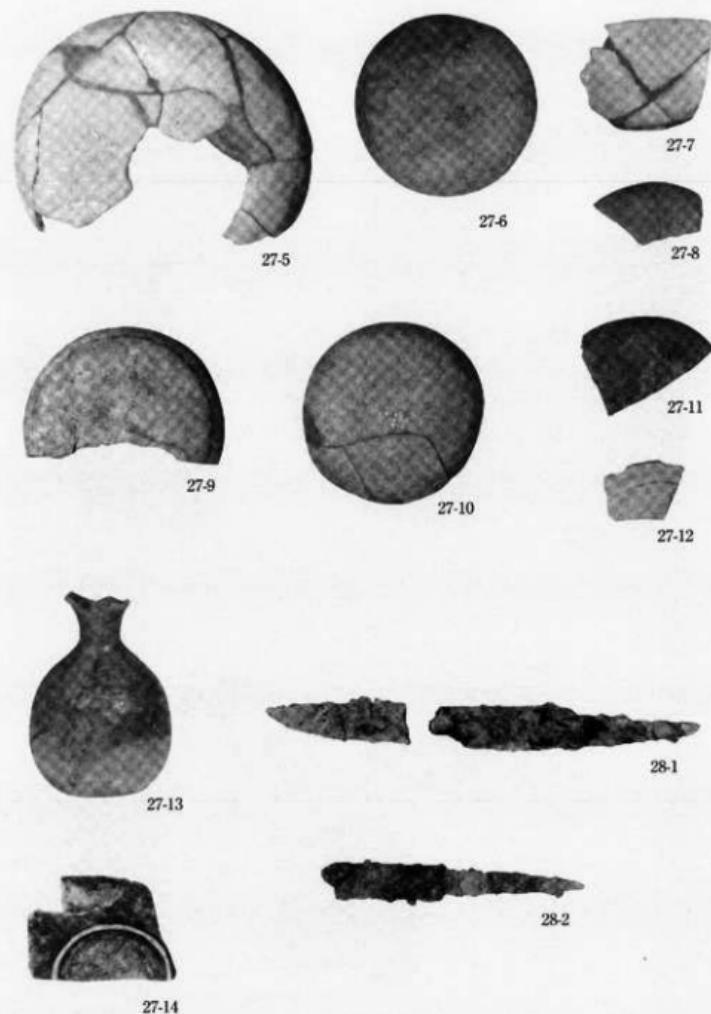


27-4



27-3

巨勢山418号墳 出土遺物 その1 (S.≈1/3)



巨勢山418号墳 出土遺物 その2 (S. ≈ 1/3)



33-1



33-1



33-2



33-3



33-4



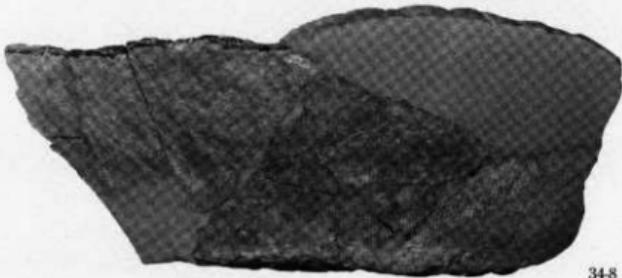
33-5



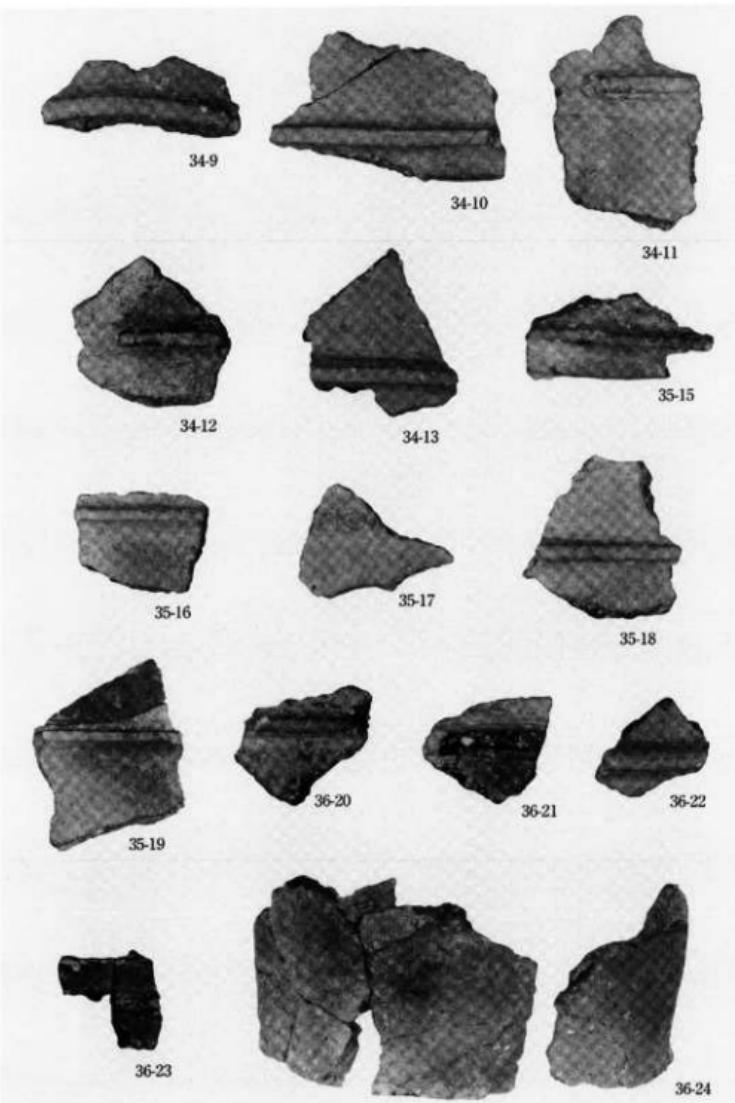
33-6



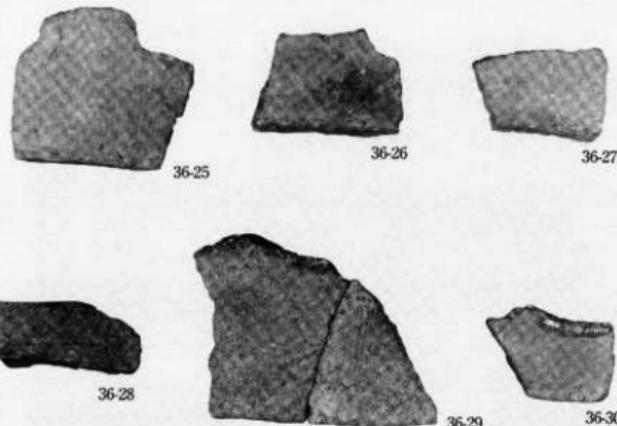
33-7



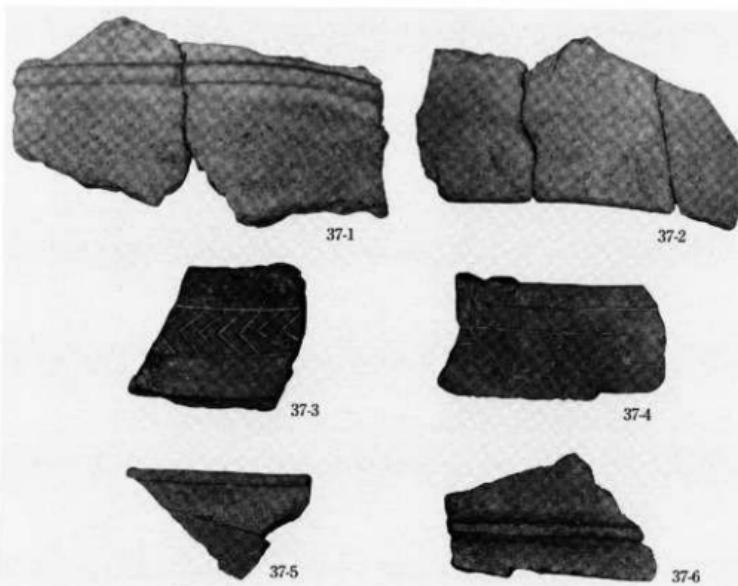
34-8



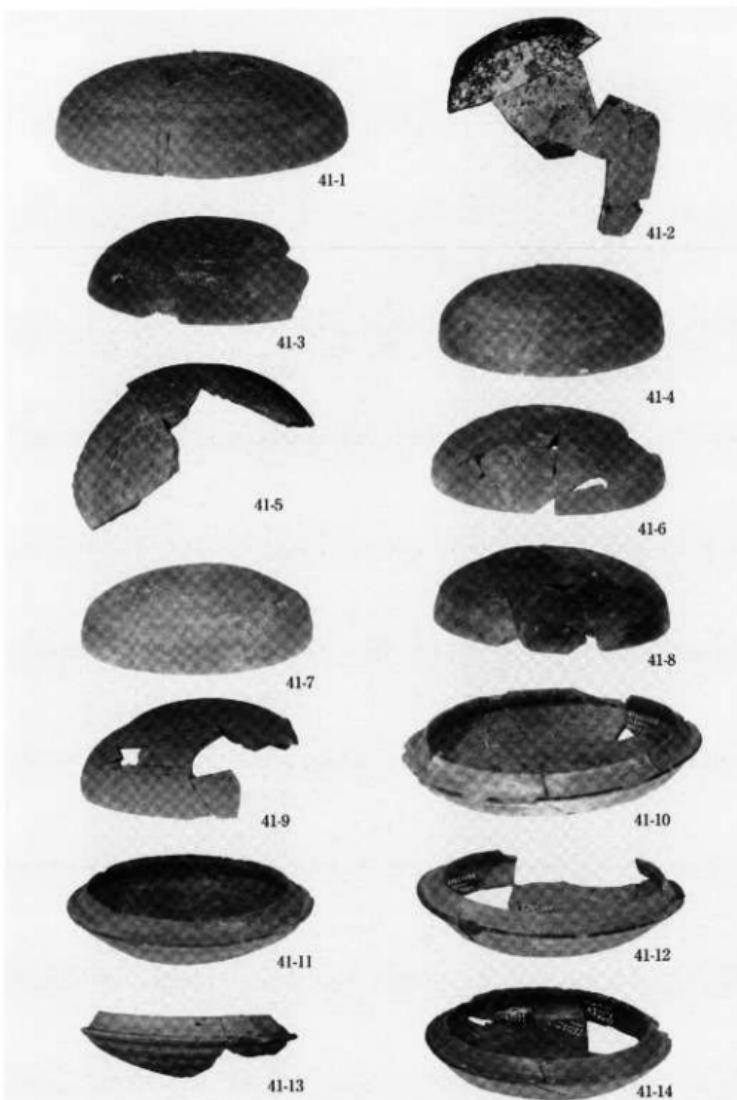
巨勢山419号墳 出土遺物 その2 (S. ≈ 1/3)



巨勢山419号墳 出土遺物 その3 (S. ≈ 1/3)



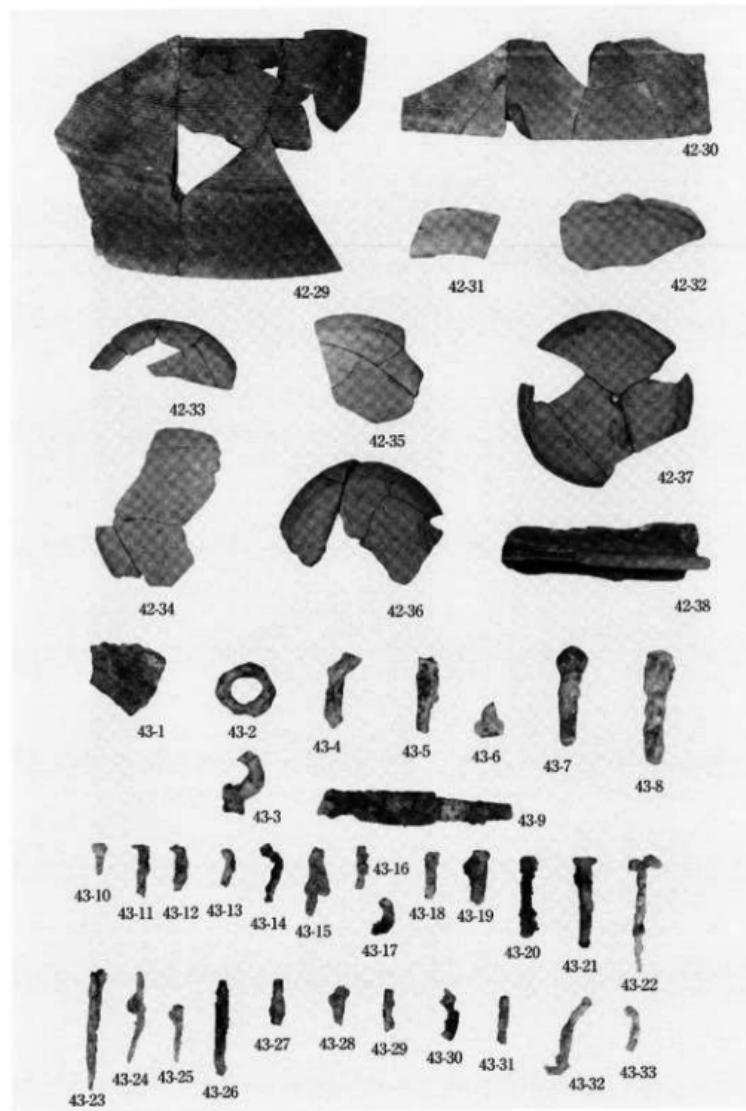
巨勢山419号墳に伴ったとみられる各所出土の埴輪 (S. ≈ 1/3)



巨勢山420号墳 出土遺物 その1 (S. ≈ 1/3)



42-26



巨勢山420号墳 出上遺物 その3 (S. 1/3)



45-1



45-4



45-2



45-5



45-6



45-3



45-7

墓道4 出土土器 その1 (S. 1/3)



45-8



45-9



45-10



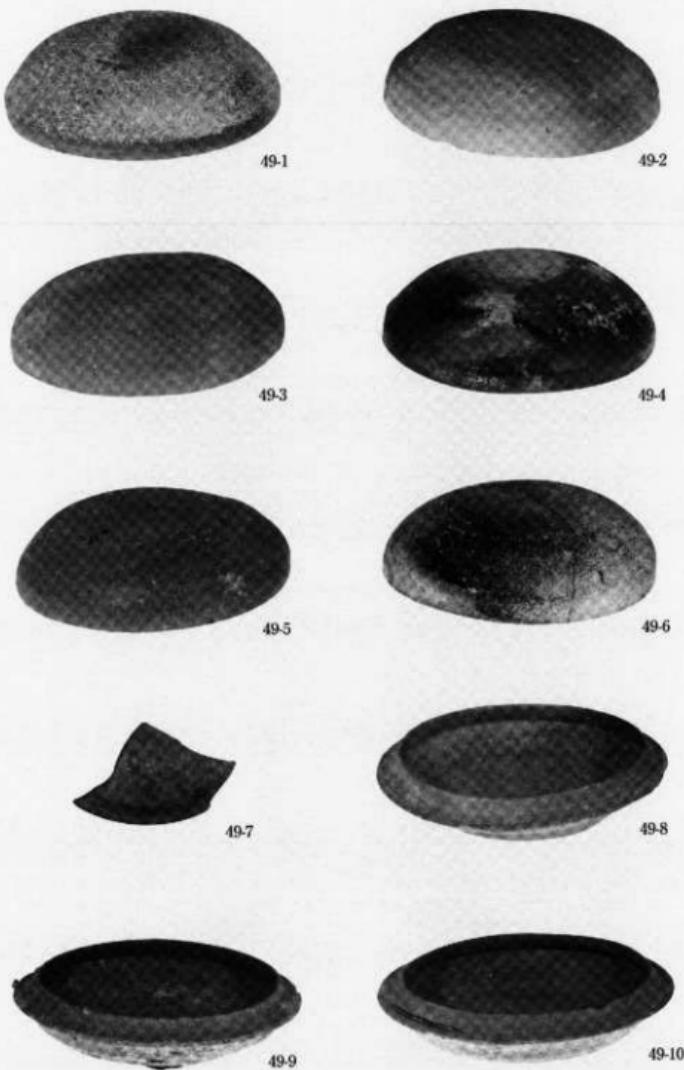
45-11

墓道4 出土土器 その2 (S.×1/3)



45-12

墓道4 出土土器 その3 (S. 4 1/3)



巨勢山421号墳 奥壁部出土土器 その1 (S. × 1/3)

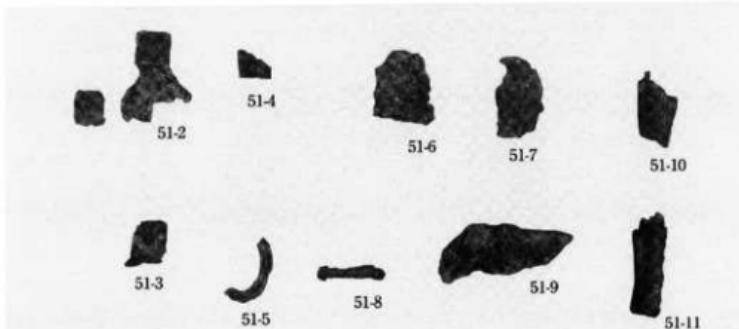


49-14

巨勢山421号墳 奥壁部出土土器 その3 (S. ≈ 1/3)



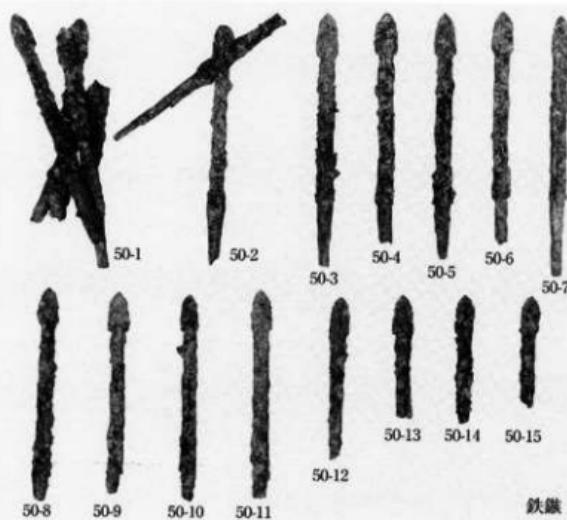
巨勢山421号墳 奥壁部出土土器 その2 (S.×1/3)



巨勢山421号墳 追葬面出土 馬具および鉄製品 (S.×1/3)

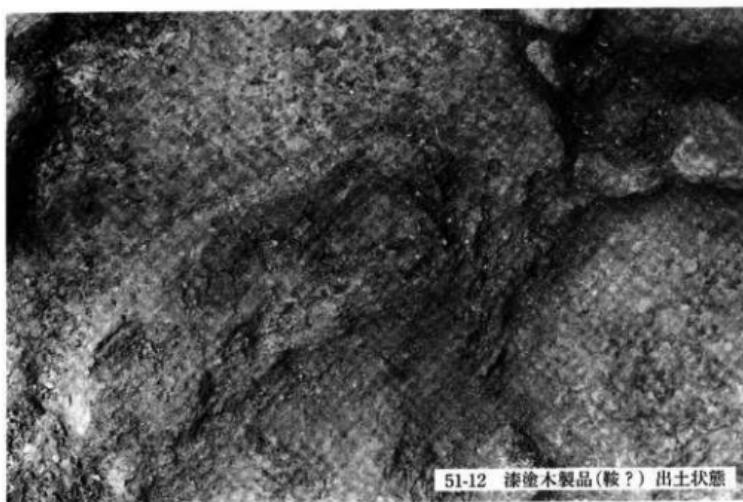
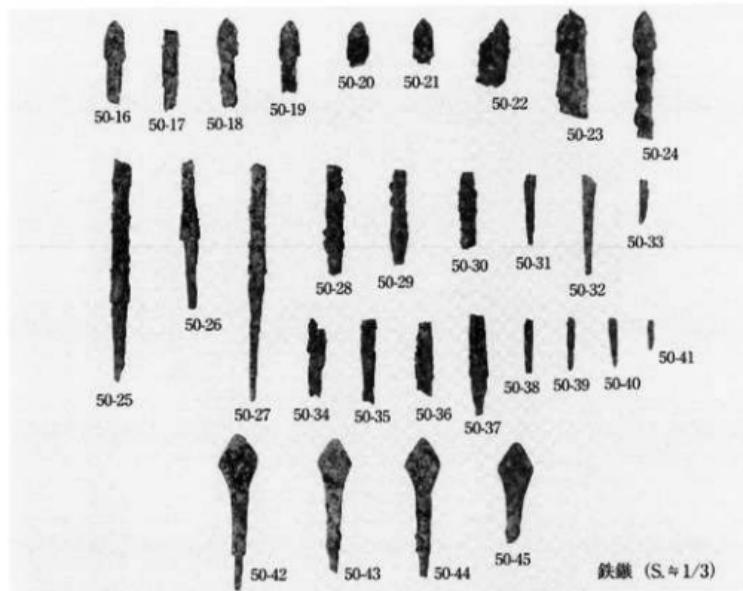


杏葉 (51-1) S. ≈ 1/1



鉄鏡 (S. ≈ 1/3)

巨勢山421号墳 追葬面出土 馬具および鉄鏡



51-12 漆塗木製品(鞍?)出土状態

巨勢山421号墳 追葬面出土 鉄鏡および漆塗木製品



52-1



52-2



52-3



52-4



52-5



52-6



52-7



52-8



52-9

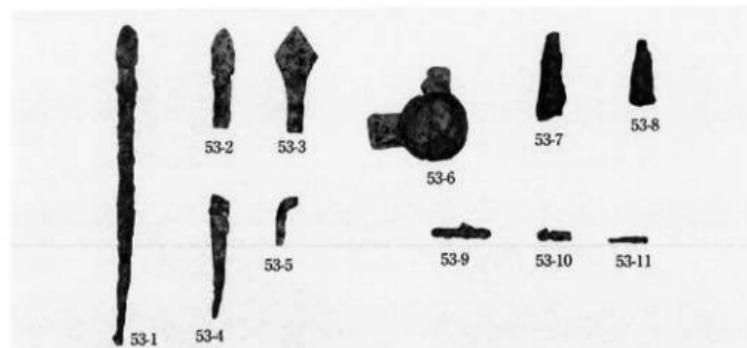


52-10

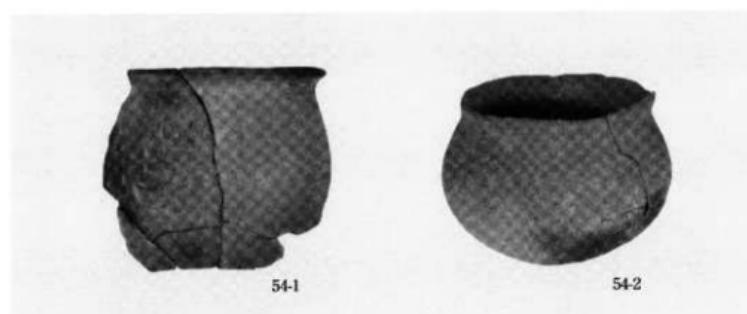


52-11

巨勢山421号墳 石室攪亂土中出土土器 (S. ≈ 1/3)



巨勢山421号墳 初幕面出土 馬具・鉄製品 (S. ≈ 1/3)



溝5 出土土器 (S. ≈ 1/3)



巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その1 (S. ≈ 1/3)



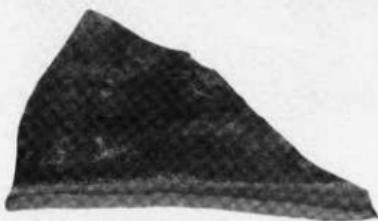
54-3



54-5

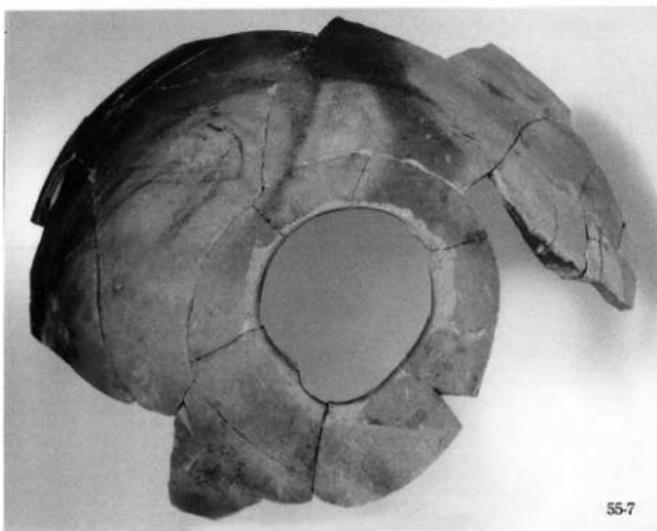


54-4

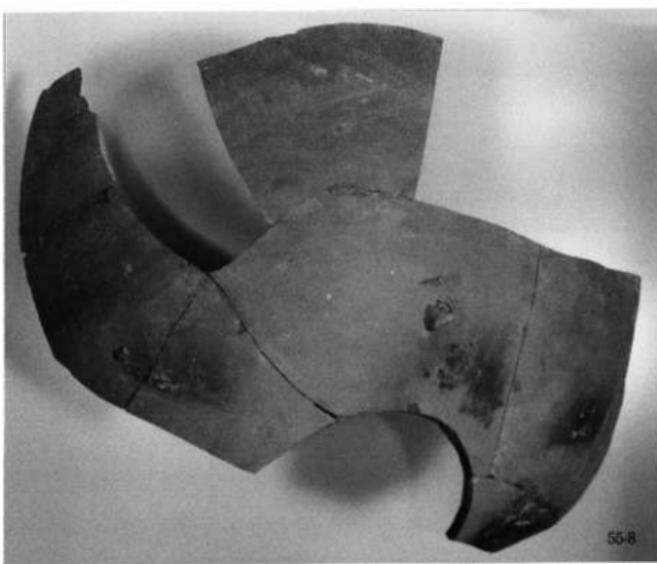


55-6

巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その2 (S. 1/3)



55-7



55-8

巨勢山771号墳に伴うとみられる421号墳の墳丘下出土土器 その3 (S. ≈ 1/3)



49.8



49.9



49.10



49.11



49.13



52.7

巨勢山421号墳出土須恵器杯身の自然釉（いずれも底部から）



巨勢山421号墳 鉄鎌基部の「下巻き」



A地区東半墳丘除去後（先端は419地点）（東から）



419地点の弥生時代の遺構



58-1



58-4



58-2



58-3



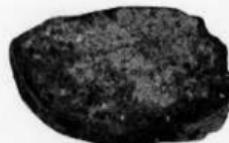
58-5



58-6



58-7



58-8



58-9



58-10



58-11

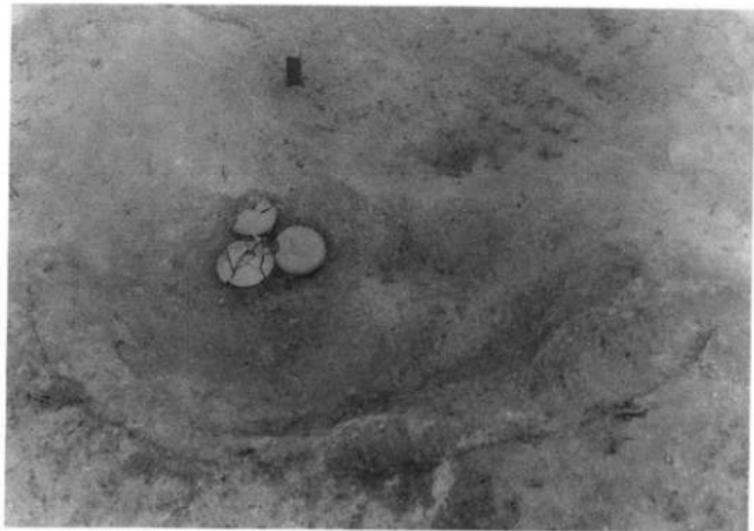


58-12



58-13

A地区出土の弥生時代の遺物 (S. ≈ 1/2)



土坑 1 (東から)



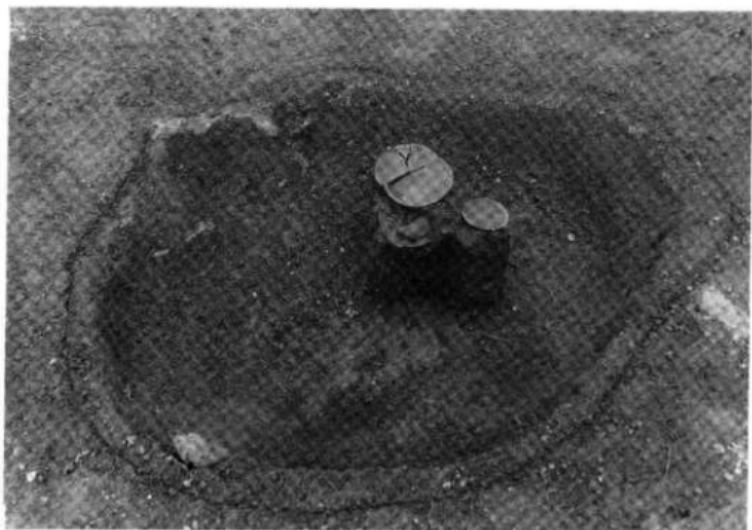
土坑 2 (北から)



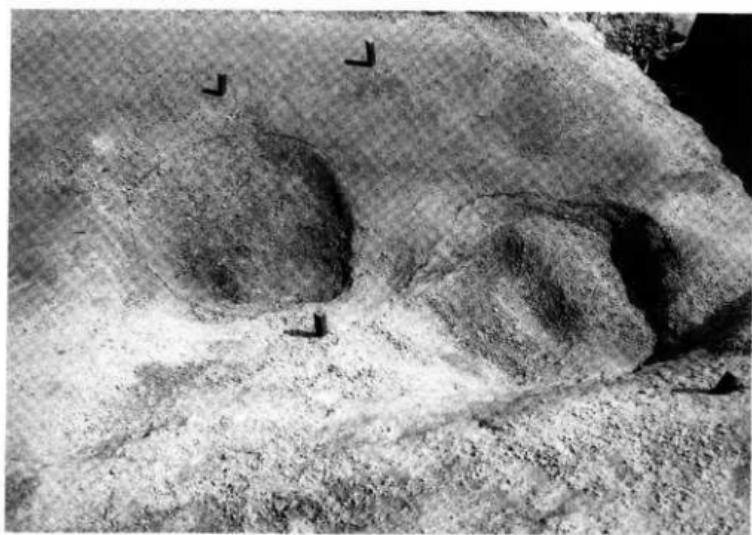
土坑 3（北から）



土坑 4（北から）



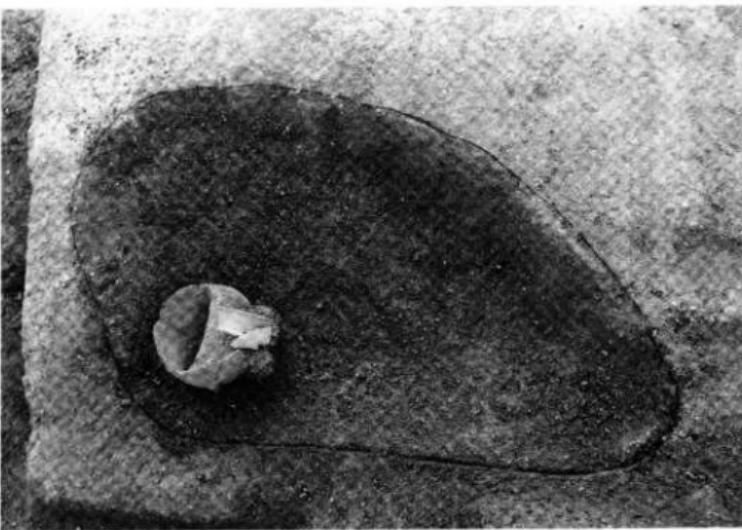
土坑 5 (南から)



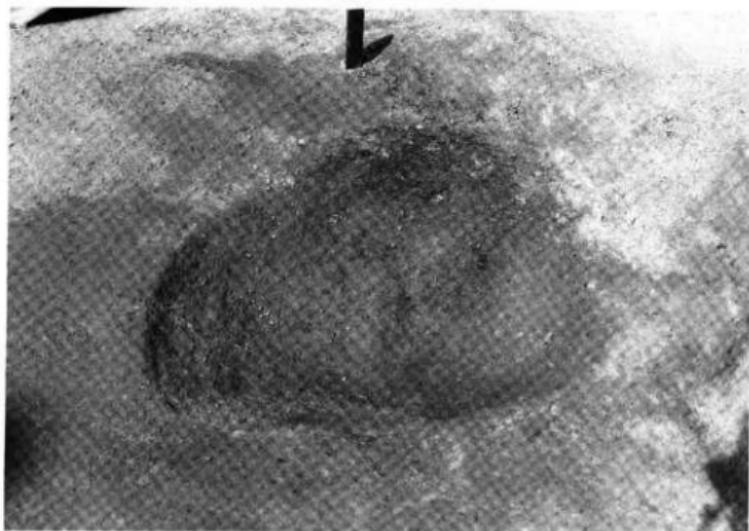
土坑 6 (右) 土坑 7 (左) (南から)



土坑 8 (南から)



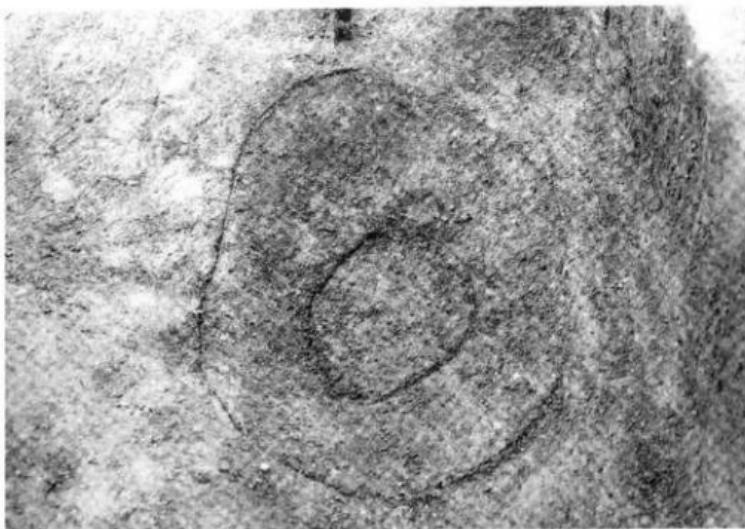
土坑 9 (南から)



土坑10（南から）



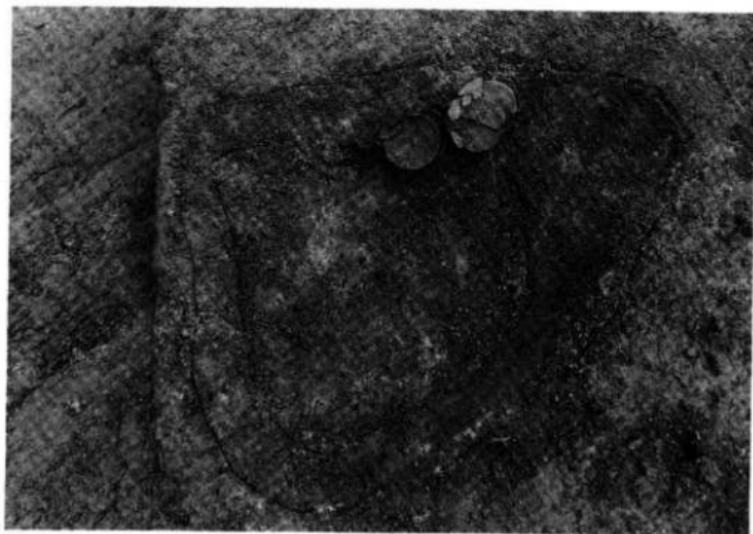
土坑11（東から）



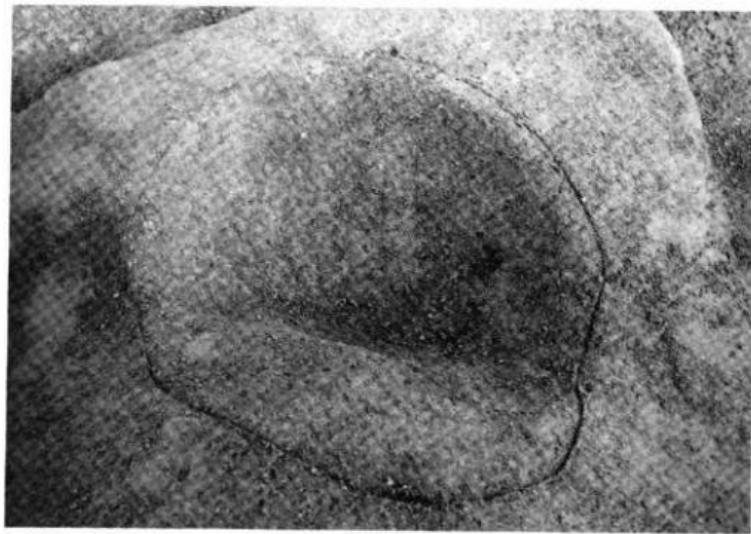
土坑12（東から）



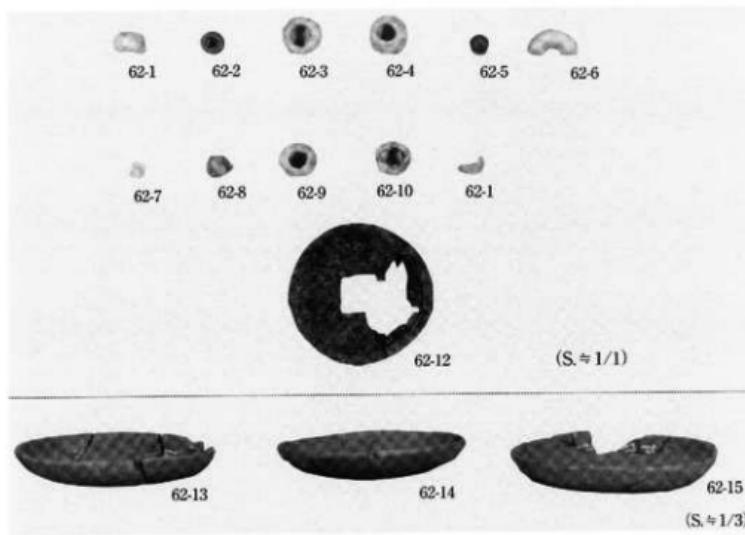
土坑13（北から）



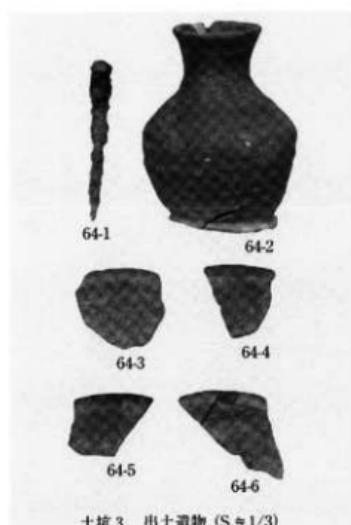
土坑14（南から）



土坑15（西から）



土坑 1 出土遺物

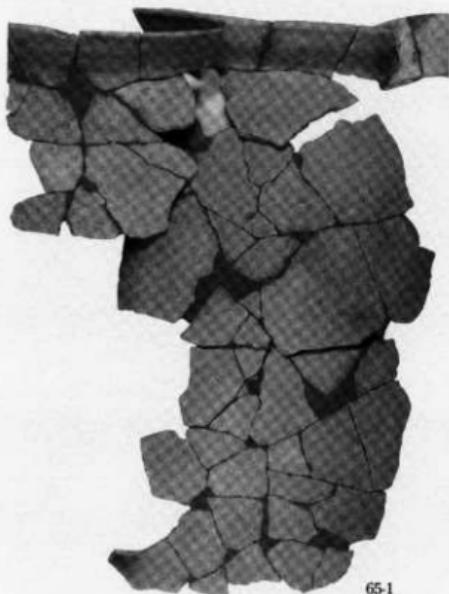


土坑 3 出土遺物 (S. ≈ 1/3)

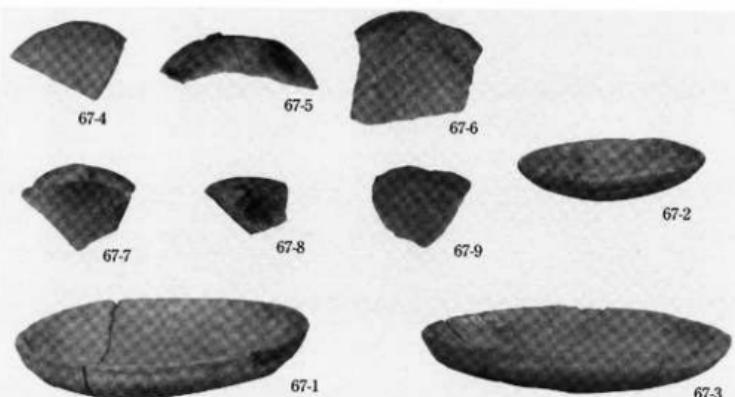
土坑出土遺物 その 1



土坑 9 出土遺物 (S. ≈ 1/3)

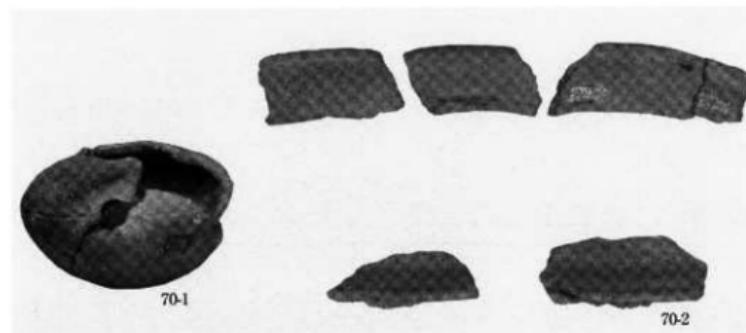


土坑4 出土遺物 (S. ≈ 1/4)

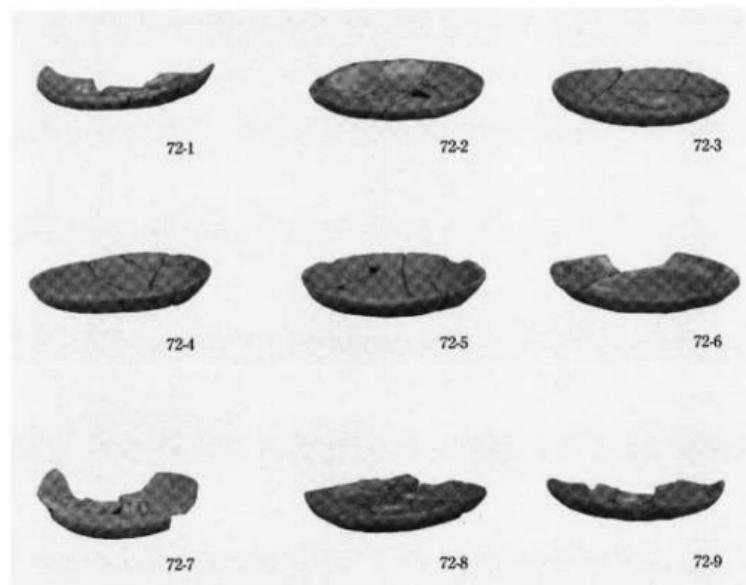


土坑4 出土遺物 (S. ≈ 1/3)

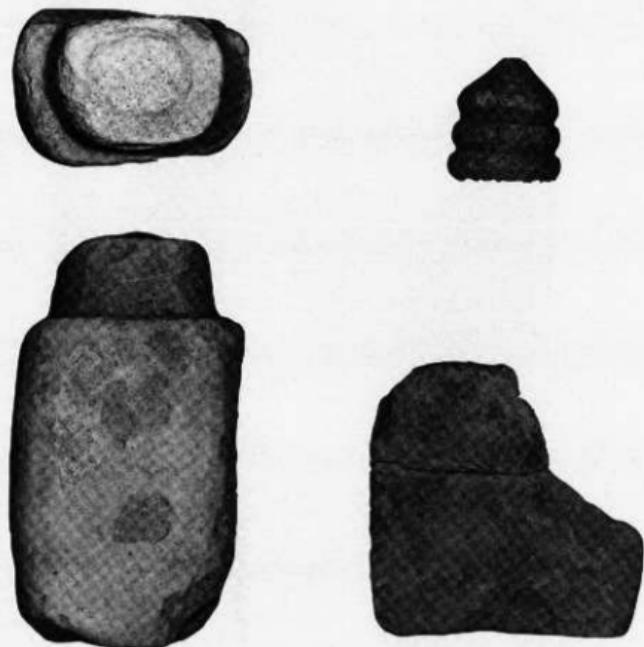
土坑出土遺物 その2



土坑13 出土遺物 (S. ≈ 1/3)



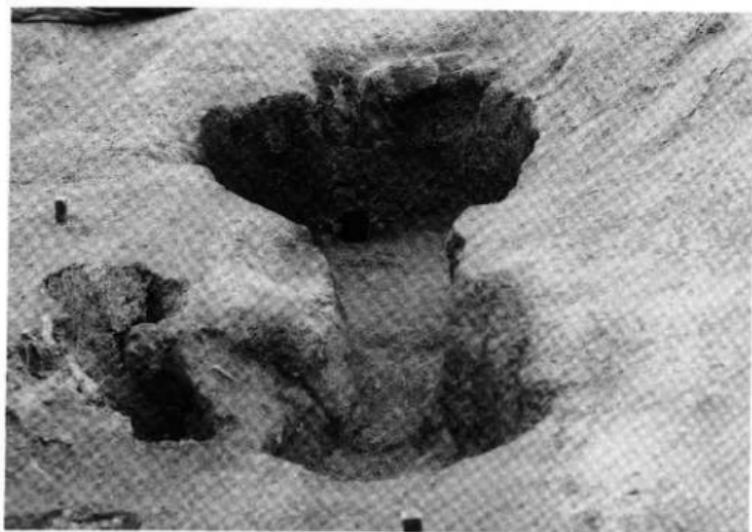
土坑14 出土遺物 (S. ≈ 1/3)



土抗13 宝塔



炭焼窯A・B 全景（南から）



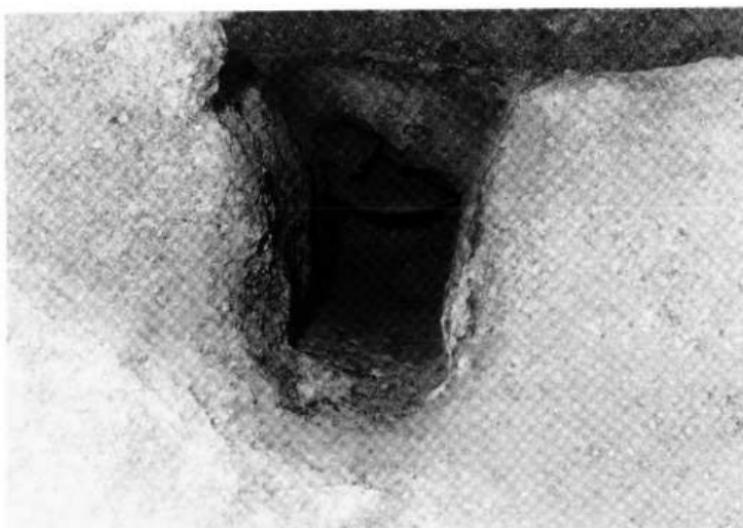
炭焼窯A 全景（南から）



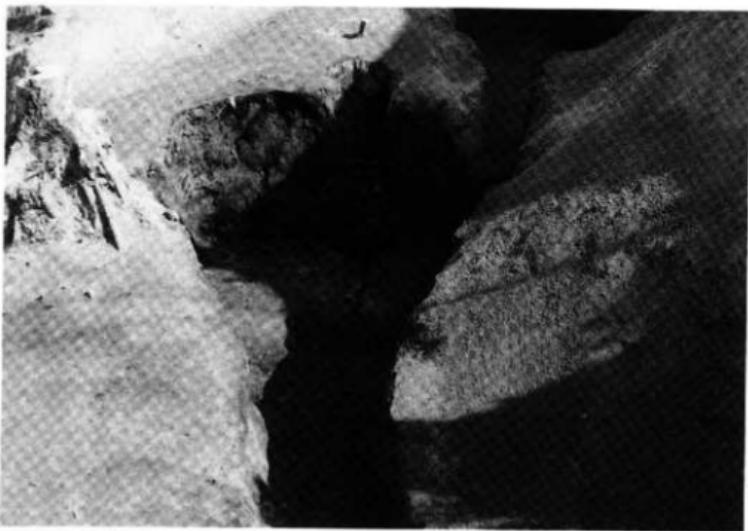
炭焼窯A 煙道部（南から）



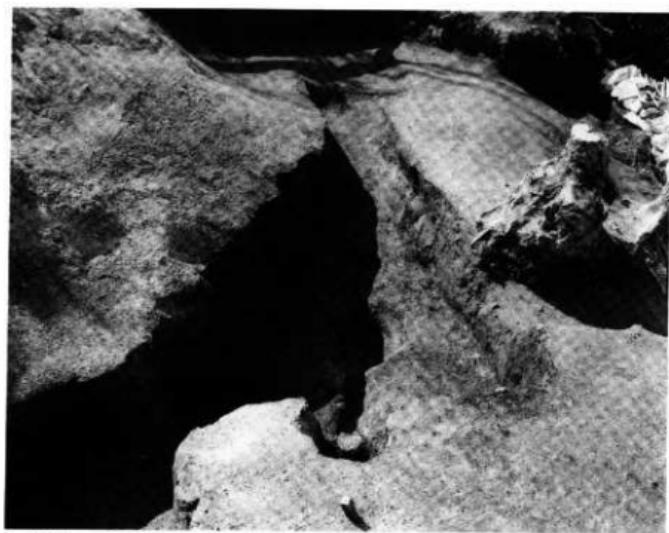
炭焼窯A 煙道部 被覆土除去後（南から）



炭焼窯A 煙道部（上から）



炭焼窯B 全景（南から）



炭焼窯B 全景（北から）



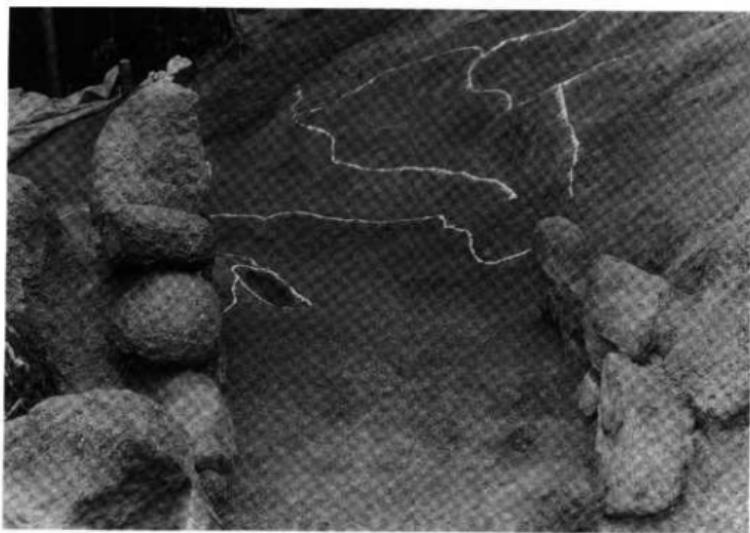
炭焼窯B 煙道部 被覆土除去後（南から）



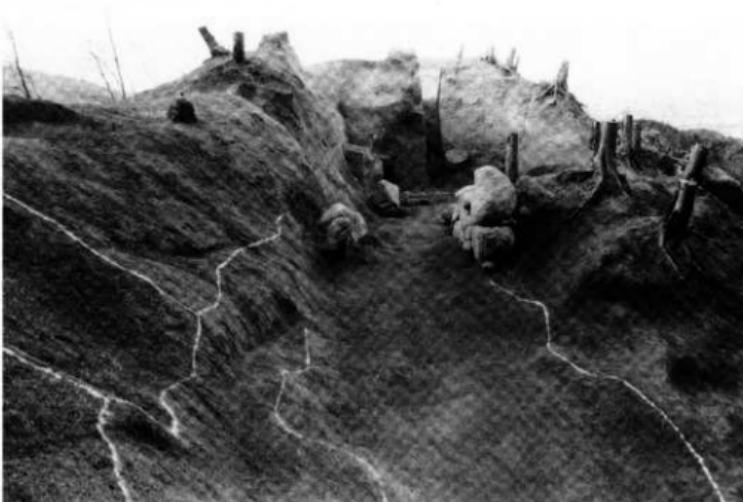
炭焼窯B 煙道部（上から）



巨勢山374号墳 墓道等検出状況（東から）



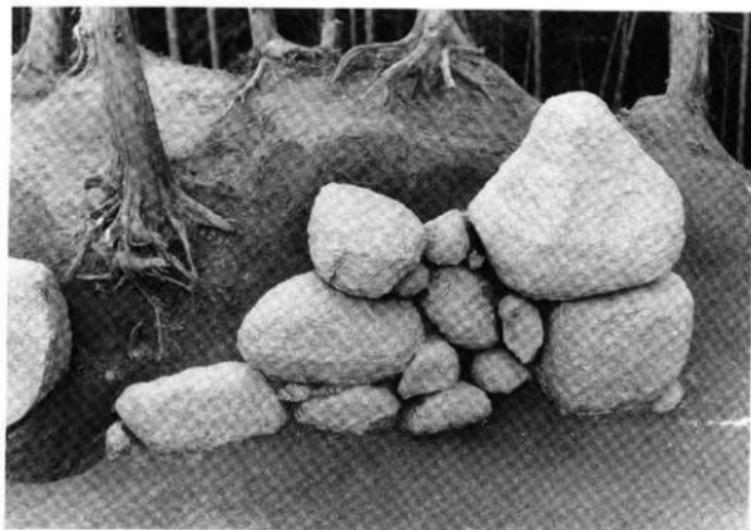
巨勢山374号墳 開口部と墓道（北から）



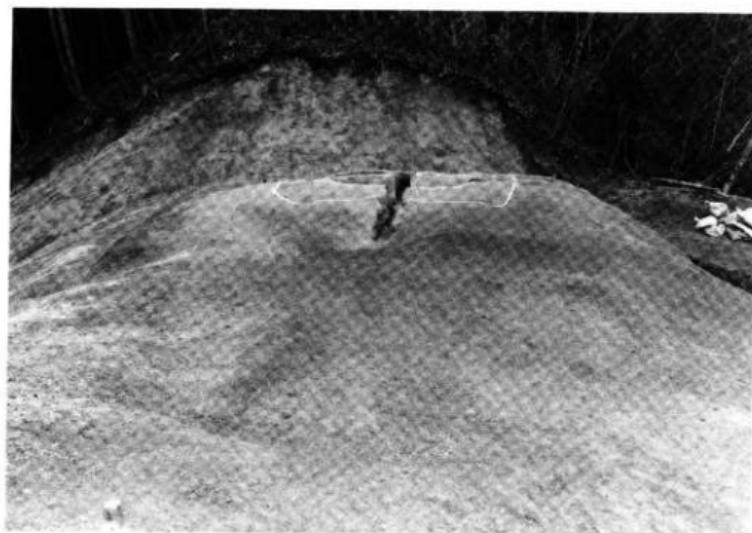
巨勢山374号墳（南から）



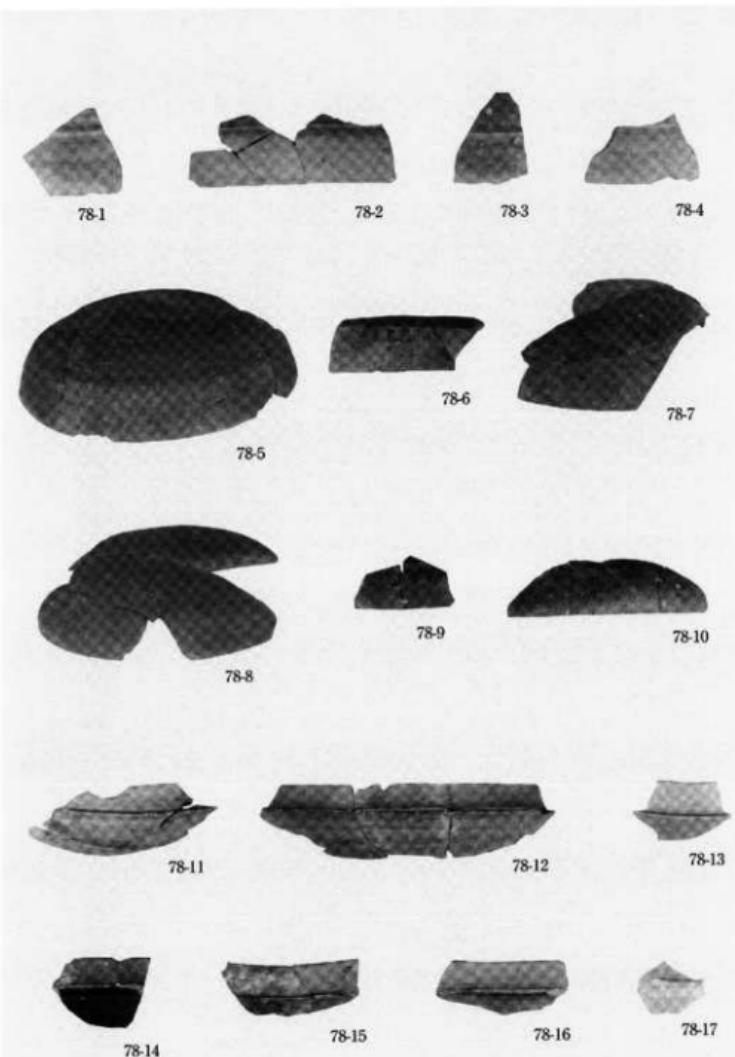
巨勢山374号墳 玄室敷石（北から）



巨勢山374号墳 石室残存部（東から）



巨勢山373号墳（北から）



巨勢山374号墳 出土土器 その1 (S. ≈ 1/3)



78-18



78-19



78-20



78-21



78-22



79-23



79-24



79-25



79-26



79-27



79-28



79-29

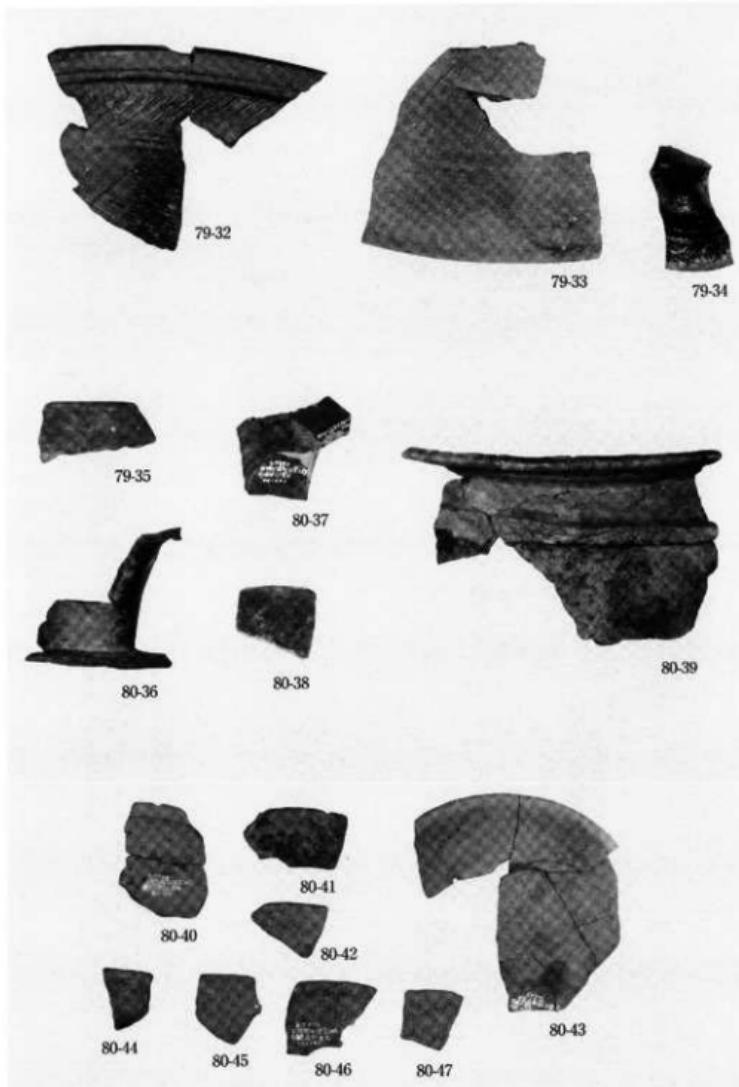


79-30

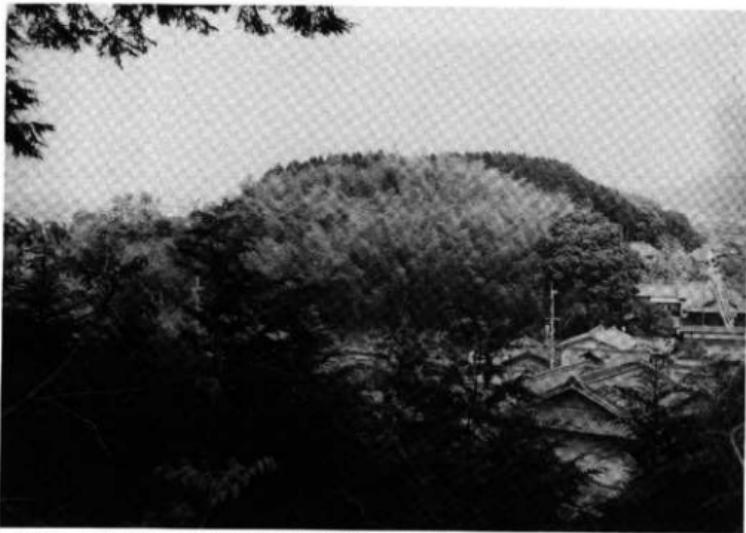


79-31

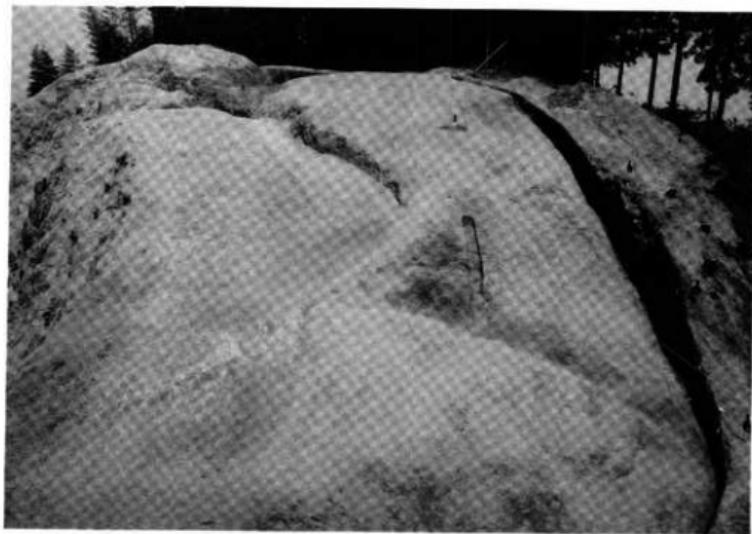
巨勢山374号墳 出土土器 その2 (S. ≈ 1/3)



巨勢山374号墳 出土土器 その3 (S. ≈ 1/3)



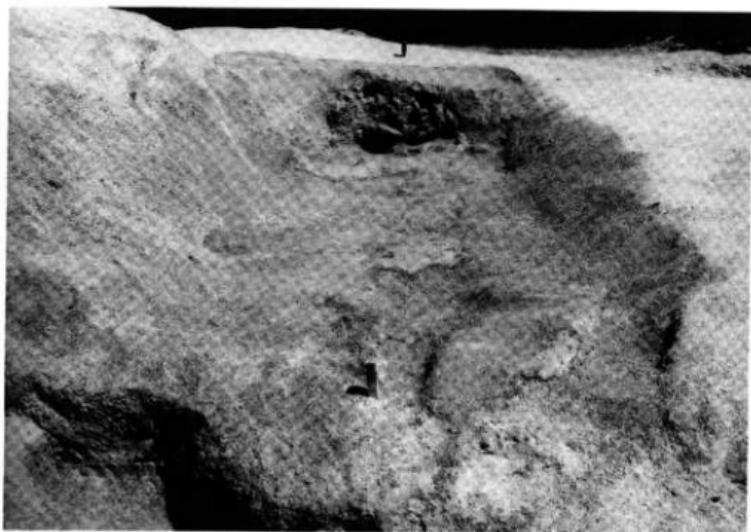
巨勢山1449号墳から室宮山古墳前方部を望む（西から）



巨勢山1449号墳（南から）



巨勢山449号墳 主体部粘土櫛（南から）



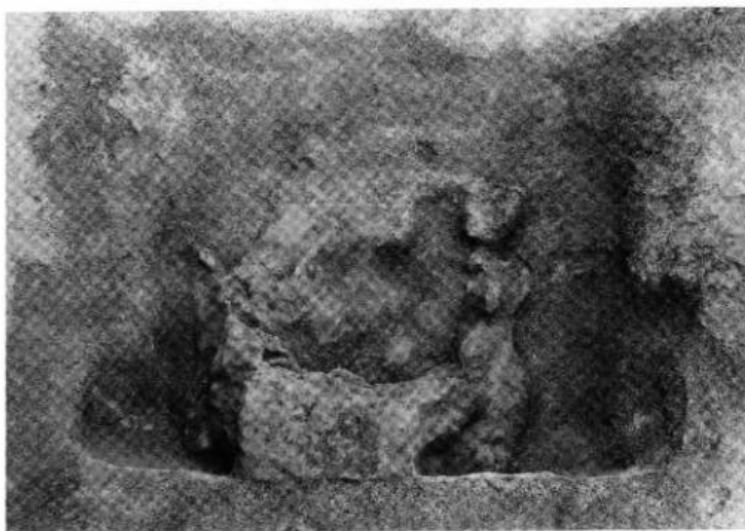
巨勢山449号墳 主体部粘土櫛（南から）



巨勢山449号墳 主体部粘土櫛（北から）



巨勢山449号墳 主体部粘土櫛残存部（南から）



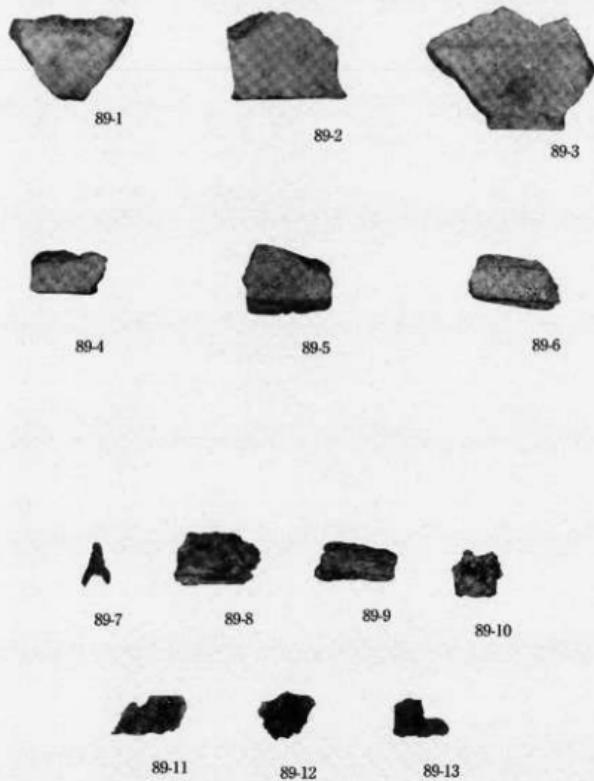
巨勢山449号墳 主体部粘土櫛残存部（北から）



巨勢山449号墳 主体部粘土櫛残存部（西から）



巨勢山1449号墳　主体部粘土壺残存部（東から）



巨勢山1449号墳 出土遺物 (S. ≈ 1/3)



D地区航空写真（上が北）



428 地点 炭焼窯（南東から）



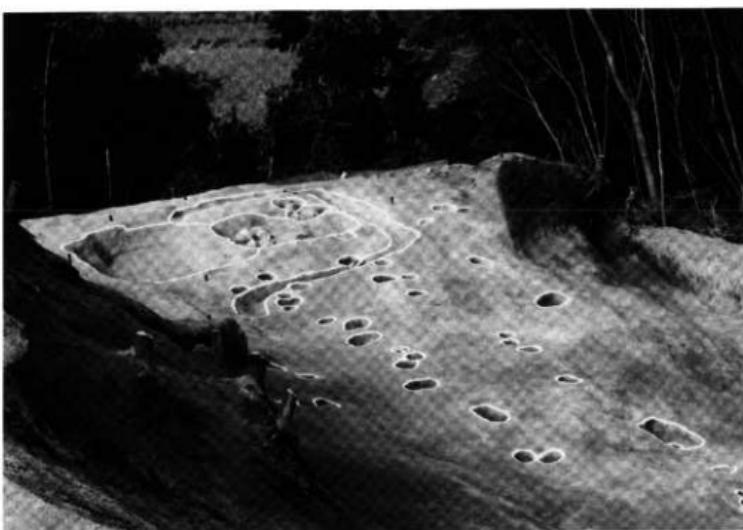
煙道の状況



同 被覆土除去後



北地区（430地点含む）の遺構（南東から）



430地点付近の遺構



96-1



96-2



96-3



96-5 (外面)



96-5 (内面)



97-4 (外面)



97-4 (内面)



96-6 (外面)



96-6 (内面)



96-7 (外面)



96-7 (内面)



96-9 (外面)



96-8 (外面)

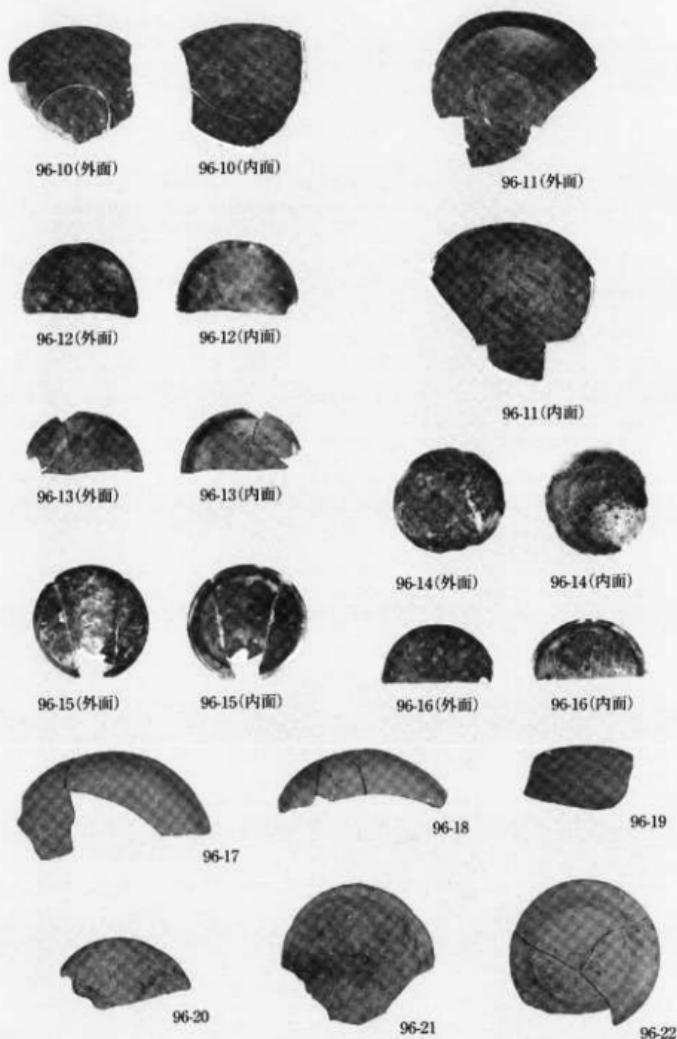


96-8 (内面)



96-9 (内面)

D地区 北地区（430地点含む）の包含層出土遺物 その1 (S. × 1/4)



D地区 北地区（430地点含む）の包層出土遺物 その2 (S.×1/4)



D地区 北地区（430地点含む）各遺構の出土遺物 (S. 4/1/4)

報告書抄録

ふりがな	ならけんごせし こせやまこふんぐん 3
書名	奈良県御所市 日向勢山古墳群Ⅲ
著者名	
巻次	
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第25集
編著者名	藤田 和尊・志谷 依子・相見 桜・上田 雄・松尾 充晶
編集機関	御所市教育委員会
所在地	〒639-2298 奈良県御所市 1-3 TEL 0745-62-3001
発行年月日	2002年(平成14年)3月31日

ふりがな 所取造跡名	所在地 市町村 通称番号	コード 北緯 東経	測定時間	測定面積 (m ²)	測定原因
日向勢山414~421	奈良県御所市 29208	34度 26分 10秒	135度 43分 37秒	19960424~ 19960905 19961125~ 19970331	5000 (古墳10基 ほか)
日向勢山373・374	奈良県御所市	34度 26分 07秒	135度 43分 49秒	19951205~ 19960131	1200 (古墳2基)
日向勢山449	奈良県御所市	34度 26分 27秒	135度 43分 55秒	19900419~ 19900428	500 (古墳1基)
日向勢山428~430	奈良県御所市	34度 26分 11秒	135度 43分 41秒	19990823~ 19991013	1800
地点(D地区)	大字西守田				
所取造跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日向勢山414号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	鍵津、須恵器	A地区として報告。中期古墳2基は後期古墳によって破壊されている。
日向勢山415号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	馬具、鏡、環、鍵津、 釘、須恵器、土師器	
日向勢山416号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	鍵津、刀子、須恵器	
日向勢山417号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	鍵津、刀子、須恵器	
巨勢山418号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	鍵津、刀子、須恵器	
日向勢山419号墳	古墳	古墳時代前期	埋葬施設(木棺直葬)	鍵津、刀子、須恵器	
日向勢山420号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	鍵津、馬具、須恵器	
巨勢山421号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	馬具、鍵津、鑿、刀、 釘、須恵器、土師器	
日向勢山477号墳	古墳	古墳時代中期	横	鍵津、刀子、須恵器、 七輪器	
日向勢山477号墳	古墳	古墳時代中期	横	須恵器、土師器	
墓道1~4	道	古墳時代後期		須恵器、土師器	
日向勢山塙谷遺跡	集落	弥生時代後期	上坑・ピット	弥生土器、石器	日向勢山塙谷遺跡は弥生時代 の高地性集落。
土坑1~14	墓	歴史時代		ガラス玉、網鉄・宝塔・ 須恵器、土師器	
炭焼窯A・B	窯	近代	炭焼窯		
日向勢山373号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(木棺直葬)	B地区として報告。鍵津出土。	
日向勢山374号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)	鍵津、馬具、須恵器	
日向勢山449号墳	古墳	古墳時代中期	埋葬施設(粘土部)	甲冑、劍、埴輪(いす れも小威片)	
429地点	窯	近代	炭焼窯	D地区として報告。古墳を 破壊して中世窯址。	
430地点・北地区	集落	中世	ピット・土坑・横	瓦器、土師器	

奈良県御所市

巨勢山古墳群Ⅲ

御所市文化財調査報告書 第25集

平成14年(2002年)3月31日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市1番地の3

印 刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3丁目464番地

御所市文化財調査報告書 第25集

奈良県御所市

巨勢山古墳群Ⅲ

別添図

巨勢山古墳群分布図

S. = 1/5,000

御所市教育委員会



『巨勢山古墳群III』 別添図 巨勢山古墳群分布図 S.=1/5,000